

神 樓

研 究 紀 要

第 5 6 号

昭 和 5 9 年 3 月

身 延 山 短 期 大 学 学 園

神 按

研 究 紀 要

第 5 6 号

昭 和 5 9 年 3 月

身 延 山 短 期 大 学 学 園

棲 神 第五十六号 目次

身延山晩年の日蓮聖人……………	上 田 本 昌 (1)
——弘安四年十二月から五年三月まで——	
朝師御書見聞の一考察……………	中 條 暁 秀 (19)
——安国論私抄について(一)——	
日蓮聖人における時機観……………	町 田 是 正 (29)
「本ト願を立ッ」考……………	望 月 海 淑 (45)
破和合僧について……………	望 月 海 英 (69)
西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經	若 杉 見 龍 (79)
ハリテイとパンティイカ像の背景……………	高 橋 堯 昭 (101)
信 教 の 自 由……………	中 里 悠 光 (113)
合衆国における教育事情……………	奥 野 本 洋 (123)
〔資料〕	
身延山諸堂記・身延山再建諸堂記・身延山再々建諸堂記……………校註	北 沢 光 昭 (131)
言 語 小 論 ⑦……………	大 森 孝 (1)
身延山における日蓮聖人……………	上 田 本 昌 (15)
誓 願 と 靈 性……………	町 田 是 正 (25)
学園彙報……………	(215)
後 記……………	

身延山晩年の日蓮聖人

——弘安四年十二月から五年三月まで——

上 田 本 昌

弘安四年十二月

世に「弘安の役」として、語り伝えられた国難のあった年も、ようやく暮れようとしていた十二月八日に、上野殿母尼御前から、米一駄と清酒一筒、それに菴香^{かぐき}一衣等の食糧品が届けられた。その礼状が記されているが、聖人の病状は相当に進み、なかなか返書を出すにも容易な事ではなかった。この御書は現在、富士の大石寺に在り、重要文化財の指定を受けている。病身の筆にしては、しっかりした筆跡で、六紙共筆勢に衰えは見せていない。この母尼とは、前にも出てきたが、南条時光の母尼であり、送られてきた品々に対するお礼と、先に世を去った七郎五郎のことを追憶して、この母尼を慰さめたのである。

「このところのやうせんく⁽¹⁾に申ふり候ぬ。」とあるので、身延山の様子は、先便にてしばしば伝えられていることがわかる。またそれだけ書簡も多く賜っていたことが知れるが、これは同時に南条家からの供養も、多かったことを物語っているともいえよう。今回送ってきた中の菴香は、薬草の一種であるから、母尼が聖人の病状を気遣って、添えられたものといえる。当時とすれば不便な山中の生活であっただけに、極めて貴重な薬品であつたらう。

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

「去文永十一年六月十七日この山に入候て今年十二月八日にいたるまで、此の山出事一步も候はず。」

身延山の西谷に建立された草庵に入られた月日が明示されているが、爾来一步も山外には足を運んでいないことも明らかにしている。古来、この一文から、聖人は全く一步も西谷から外へは出ておられないとする説を立てている者もいるが、しかし「此の山」というのは、文字通り「身延山」を指すのであって、「西谷」のみを限定して考えることは、当を得たものではない。西谷を含む身延全山を「此の山」と称していることは明らかであるとしたら、在山中の行動範囲も、西谷の草庵附近と限定して考えた場合より、遙かに広いものとなってこよう。

當時はどの辺までを身延山と称していたか、限界はさだかでないが、凡そ聖人の数多い在山中執筆の御書から推して、西は七面山・東は天子嶽・南は鷹取山といった山々に囲まれた中の、北側に身延山があったことになり、「中に四の河あり。所謂、富士河・早河・大白河・身延河也。」^②というのであるから、東西南北にそれぞれ天子嶽・七面山・鷹取山を置いて限界とし、「中に四の河」を有するという相当な範囲を持った「身延山」の存在を指しているものと考えられてくる。現在の感覚で身延山といった場合の範囲とは、大部異り、広さや深さの面でも、かなりの広範囲を指していたと推察できる。実際に身延山の麓を、どのあたりまでに決めるか、その決め方によっても「身延山」と称する全山の範囲が異ってこよう。

勿論、南部六郎実長が、寄進した身延山については、「方十三里」といわれているごとく、その当時であっても面積や限界が、ある程度はつきりしていたのであろうことは推察できる。^③しかし聖人がここで「此の山」といわれた身延山は、必ずしもそうした意味での厳密な一山に限定するものではなく、もっと広範囲な、麓の辺も含めた四河の中に有する範囲の「此の山」であつたらうと考えられてくるのである。

たとえば、入山以来、九年間も西谷から一步も外へ出られなかったと、狹義に解するならば、かえって不自然であり、「峯に上^りてわかめや生いたると見候へば、さにてはなくしてわらびのみ竝^り立たり。谷に下^りてあまのりやをいたると尋^ねれば、あやまりてやみるらん、芹のみしげりふしたり。」⁽⁴⁾という山中の生活状況から推して、時には身延の峯に登り、また或る時は谷深く下^りつて芹を摘むといった、大自然との交わりを通して、心しずかに法華經行者の晩年を、読誦三昧・唱題三昧等にすごされたこともあつたであらうとする方が、より自然な見方といえよう。

したがって、九年在山中には、たまに波木井の里、或いは近辺麓の人々を尋ねては、話を交わすことも当然ながらあつたことと考えられる。「このはきぬは法にすぎてかんじ候。ふるきをきなどもとひ候へば、八十・九十・一百になる者の物語候は、すべていにしへこれほどさむき事候はず。」⁽⁵⁾と語っているところからみても、首肯できよう。こうした点から、「此の山出事一步も候はず」という「此の山」は、また後で触れることになるが、広範囲なものであつて、決して西谷の草庵近辺を限定すべきものでないといえよう。さて、つぎに、

「ただし八年が間やせやまいと申、齡と申、とし／＼に身ゆわく、心をぼれ候つるほどに、今年は春よりこのやまいをこりて、秋すぎ冬に至るまで、日々におとろへ、夜々にまさり候つるが、この十余日はすでに食もほとをどとどまりて候上、雪はかさなり、寒はせめ候。身のひゆる事石のごとし。胸のつめたき事氷のごとし。」

とあるので、この頃の聖人が、どの程度の病状であつたかを知ることができる。この年は正月以来、「やせやまい」に悩まされ、二月頃は檀信徒へ手紙の返事を書くさえ思うようにできず、一時は病状も重かつたが、⁽⁶⁾春三月頃、陽気のよくなったのと同時に、やや小康をえたが、七月から再び食欲不振となり、はつきりしない状態であつた。門下の人々はこうした聖人の病状から察して、草庵の大改修を行い、来るべき嚴冬への備えとしたのであつた。瘠せ病とい

うのは、前述したが、消化器の疾患で、下痢を伴う腹部の病であり、慢性化していたものと考えられる。この病疾に加えて老齢による衰退した体力が、一層健康を害していたのであろう。「夜々にまさり候」というので、寒さと共に病状がまた悪化を増してきていたことがわかる。西谷の草庵があつた近辺の冬は、日照時間も短かく一旦降った雪は、なかなか解けないため、病人には不向きな場所であり、石や氷のような冷えの病身であつたことは、想像にかたくないところである。

「しかるにこの酒、はたたかにさしわかして、かつこうをはたときい切て、一度のみて候へば、火を胸にたくがごとし、ゆに入ににたり。」⁽⁷⁾

聖人は酒をこのように「薬酒」として用いられたものであり、冷えた身をあたためるための薬として服用されていたことがわかる。この文のあと、去年九月五日に逝去した故五郎殿のことにふれ、母尼を慰めている。末文には、「日蓮は所労のゆへに人々の御文の御返事も申す候つるが、この事はあまりになげかしう候へば、ふでをとりて候ぞ。」とあるので、聖人の病状がいかに重くなつて来ていたかがわかる。また同時に、各地の門下より、聖人を見舞うつもの御供養や、書状等も多くあつて、一つ一つに返信を書くことが、病身にとっては難儀なことであつたにちがいない。筆まめの聖人が、筆のとれぬ程に健康を書していたことがわかる。しかし五郎殿を失つた母尼の身の上を思うとき、あわれで筆をとらずにはおれなかつた聖人の檀越を思う心情の深さが、文底に溢れているといえよう。さらに、「これもよもひさしくもこのように候はじ。一定五郎殿にゆきあいぬとをばへ候。母よりさきに見参し候わば、母のなげき申つたへ候はん。」

とあるので、聖人はこの世に、もう長いことはおられぬであらうことを、この頃すでに悟つていたことがわかる。聖

人は子に先立たれた母に対し、病身を押して、敢て筆をとり、母であるあなたより先に、靈山浄土へ出かけて行った場合には、五郎殿に必ず行き合つて、母のなげきを伝えてあげようと約束しているのである。聖人からこうした厚い心情のこもった手紙を手にした上野母御前は、どんなにか心が慰められたことであろう。恐らく筆を執った聖人も、また与えられた母御前も、共に涙ながらの一文であつたと推察させられる。

この書簡を記された三日後の十一日には、武蔵の池上宗仲から、「聖人^{すまが}一つ、味文字^{みそ}一をけ、生和布^{なまわふ}一⁽⁸⁾」が送られてきた。病状を案じてのお見舞いをかねたご供養であつたのである。聖人は短文ながら感謝の心をこめた礼状一文を草している。真蹟は伝っていないが、本満寺本の写本が伝っている。『録外考文』によると、「或云弘安二年、或本云三十月、重師写本曰依三日住御所望⁽⁹⁾以三上総伊北狩野大炊助御自筆謹写畢、日真私曰御真筆者平仮名也。此一通者自日能⁽⁹⁾日真書之」とあるので、一説には弘安二年とし、また十月に配しているようである。また真蹟も上総伊北狩野大炊助のもとにあつたことになる。本文についても、「聖人ハ清酒ナリ、味文字ハ味噌ナリ、和布ハワカメ即海草ナリ。」と解説している。生和布を飛脚便で届けて来た宗仲の聖人を氣遣う気持ち、敢て病身に筆を執らせることとなつたのであろう。

「心ざし大海よりふかく、善根は大地よりも厚し。幸甚幸甚」という一文の中に、聖人のこの上ない感謝の心がこもつたものが感じとれる。言うまでもなく、聖人のこうした感謝の意は、供養してきた品々に対するお礼の意味もさることながら、供養しようとする「心ざし」が大事であつて、人々はこの「心ざし」によって善根を積み、「心ざし」によって仏に成れるとするのである。清酒・味噌・和布といった品々を通して、供養してきた人の「心ざし」を賞し、感謝しているのである。⁽¹⁰⁾「貧者の一灯」によって代表されるように、形や数による供養ではなく、「心ざし」が重要

となつてくるのである。

この事はまた下旬の二十七日に、窪尼御前から届けられた御供養品に対する礼状にも記されている。即ち、

「しなじなものをくり給て候。善根と申は^ス大なるによらず、又ちいさきにもよらず、国により、人により、時により、やうやうにかわりて候^{（註）}。」

というのである。恐らく正月を間近に控えた西谷へ、正月用の品々を御供養してきたものと考えられる。善根功德は品の大小によるものではないことを明らかにしている。この文に続きインドにおける須達長者の例をあげ、まことの善根のあり方を教示されている。即ち月氏第一の須達長者は、祇園精舎を建立して、仏に寄進をしたけれども、火災にあつてあとかたもなくなつてしまった。この長者は魚をころして商売をし、長者となつたので、この人の建立した寺も、ついには焼失してしまつたのであるとし、「今の人々の善根も又かくのごとく」であると記している。戦乱を起し多くの人々を犠牲にして得た所領や、わけもなく民をわづらはして得た財産などで、善根を積むようなことをしてみても、「此等は大なる仏事とみゆれども、仏にもならざる上、其人々あともなくなる事なり。」と説いて、形の上だけの善根が、はかないものであることを示している。また、もう一つ大事なことは、いくら心のこもつた善根であっても、「供養せらるる人だにもあしければ功德とならず、かへりて惡道におつる事候」と述べ、供養を受ける人によつても、大きな差を生じ、逆の効果となるであろうことが示されているのである。

「此は日蓮を御くやうは候はず、法華經の御くやうなれば、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏に此功德はまかせまいらせ候。」

短文ながらこの一文の意味するところは、相當に深いものがある。「日蓮を供養しているようにみえるが、実は法華

經へのご供養である」ことを第一にし、次に「法華經へのご供養なので、三仏に功德をまかせろ」というのである。つまり、「日蓮↓法華經↓三仏」という功德が得られることになり、最善の供養につながることになる。善根功德の積み方について、真のあり方を説き示した一書として特に注目しに価する御書といえる。真蹟は伝っていないが、日興の写本が富士大石寺にある。

なお、この暮は寒さも厳しく、降雪もおびただしいものであったことが、末文から読みとることができる。病身にとっては耐え難い寒波であつたろうと推察できよう。

さて、弘安四年もこうした状況の中で、暮て行くのであるが、この年の御書としてみなされているものに、次の各書がある。その一つは『大白牛車御消息』で、真蹟は伝っていないが、『録外考文』によると、「延山親書無三姓名、彼賜三南部氏二歟、南部氏送菜之復書也」としている。法華經の大白牛車についての解説があり、「法華經の行者の乗べき車」であるとし、「我より後に来り給はん人々は、此車にめされて靈山へ御出有べく候。日蓮も同じ車に乗て御迎にまかり向ふべく候。」と結んでいる。

その二は『西山殿後家尼御前御返事』である。真蹟はなく日興の写本が大石寺に伝っている。「あまざけ一をけ、やまのいも、野老せうせう給了。」とあるので、富士の大内安清後家尼から供養を受けた礼状であることがわかる。西山殿については『録外考文』によると、「仕鎌倉三三郎」とあり、日興の教化を受けて改宗し、南部氏も大内氏の導きにより入信したものとしている。

梵網經や大論を引用して、供養の功德を述べているが、「をとこ(夫)にもすぎわかれ、たのむかたもなき尼の、

駿河の国西山と申^スところより、甲斐国波木井の山中にをくられたり。」というので、施主の西山殿後家尼の所在が或る程度、はつきりするが、この尼がどのような人物であったかは、詳細がつまびらかではない。なお「日蓮はわるき者にて候へども、法華経はいかでおろかにおはすべき。ふくろはくさけれどもつつめる金^{かね}はきよし。池はきたなけれどもはちすは清浄也。」と述べ、法華経の金^{かね}をとるためには、ふくろを捨てるようなことをしてはならないとしている。「臨終わるくば法華経の名をりなん。」と述べ、臨終をはのめかしている点から、すでにその機^きの近づいていることを悟られたものともいえる。

次にもう一書『妙法尼御前御返事』がある。これも真蹟は伝っていないが、本満寺本の写本がある。「明衣^{めいぎ}一給^く畢^す」とあるので、明衣が送られてきた礼状であることがわかる。妙法尼も出生等の詳しい事はわかっていないが、駿河の岡宮に住み、すでに夫や身内の者とも死別した不幸の身の上であった。「男にもをくれ、親類をもはなれ、二人ある娘もはかばかしからず便りなき上、法門の故に人にもあだまされ給ふ女人、さながら不輕菩薩の如し。」とあるので、凡その身の上が推察できる。しかし、信仰の念は篤く、法門のため他人にあだまれても退転せず、不輕の如くだと評されている点、檀越の中でも女人ながら範とするに足りる存在であったようである。本文では、摩訶波闍波提比丘尼の例をあげ、女人・二乗の成仏を説いている。

「今末代悪世の女人と生れさせ給て、かかるものおぼえぬ島のえびす（夷）に、のられ、打れ、責^しをしのび、法華経を弘めさせ給。彼比丘尼には雲泥勝^{うんねいしょう}でありと仏は靈山にて御覽あるらん。彼比丘尼の御名を一切衆生喜見仏と申^{まを}は別の事にあらず。今の妙法尼御前の名にて候べし。」

とあるごとく、この尼は妙法を弘めるための精進を行っていたことがわかるし、意志の強固な女性であったといえる。

この頃の曼荼羅本尊授与についてみると、十一月の書写は伝っておらず、十二月に一幅ある。病状があまりかばしくなかった事もあってか、数も減少してきている。その一幅というのは「優婆夷一妙」に授与されたものである。一妙がどのような人物であったか、詳細はわからないが、右梵字の隅に「遠江サカラノ小尼給本尊也」との日興添書が見られるので、日興の関係者であったろうと考えられる。

弘安五年の春

翌弘安五年の正月は、聖人にとって今世における最後の正月となった。六十一歳の還暦を迎えられた聖人は、病身ながらもいささか元気をえて、新年の初詣に登詣して来た僧俗の応待をし、曼荼羅の図頭も行って、現存するだけでも三幅が数えられている。即ち、茂原市鷺巢の鷺山寺に伝っている三枚継ぎの曼荼羅と、静岡県天城湯ヶ島の妙本寺に所蔵されている「俗安妙」に授与されたもの。及び沼津市妙海寺にある「俗日伝」に与えられたものである。先の一妙宛の御本尊と比較して、筆勢は共に秀れており、病身を感じさせない。この頃の代表的曼荼羅といえる。

弘安五年というとき、春に一遍が鎌倉入りを志し、小袋坂に止められたり、北条時宗は円覚寺を創建して、戦没者の霊を弔い、無学祖元を開山とする一方、香取神宮に異敵降伏のための懸仏四体を鑄造せしめるなど、統一に欠けた混乱たる中に月日が流れて行ったのである。¹⁷⁾時宗は結局、聖人の諫暁を聞き入れることなく、聖人入滅の二年後、即ち弘安七年の春、三十四歳で世を去ることになった。

聖人は弘安五年の新春を西谷で、静かに迎えられたが、七草の日に四条金吾から、「満月のごとくなる餅二十・甘露のごとくなる清酒一つ」¹⁸⁾が、正月用として届けられた。その礼状が記されているが、真蹟は断片二行ながら、高

知の要法寺に伝っている。「春のはじめの御悦は月のみつるがごとく、潮のさすがごとく、草のかこむが如く、雨のふるが如しと思食べし。」と年賀状の意味も兼ね、さらに八日は釈尊の誕生日に當っていて三十二の吉瑞があり、最も縁起のよい日であることを述べている。「日本国皆釈迦仏を捨_すせ給_{たま}へ候に、いかなる過去の善根にてや法華經と釈迦仏とを御信心ありて、各々あつまらせ給_{たま}へ八日をくやう申させ給_{たま}へのみならず、山中の日蓮に華香ををくらせ候やらん。たうとし、たうとし。」という一文から見ても、金吾が八日講の供養を行うことを讀えていると同時に、「法華經と釈迦仏」とを、全く同等に扱っていることがわかる。聖人にとって「法華經」と「釈迦仏」とは別のものではなく、同体としてみなされていたように考えられるのである。すでに見てきた御書の中にも、幾回となく「法華經と釈迦仏のご宝前」といった表現が、よく出ていた事から推しても、首肯できるところである。宛名は「人々御返事」となっているので、金吾を始めとする八日講の人々に対して出された御返事であるといえる。『録外考文』⁽¹⁹⁾及び『録外微考』⁽²⁰⁾等では「八日講御書」となっている。尚『微考』によると、この御書の初めの一行から三行目までの正筆を、伊豆菰山の代官江川太郎左衛門が所持していて、拝見した旨が記されている。

さて、正月十四日の小正月を迎えるに当り、内記左近入道から使者が到着したのである。この人がいかなる人物かは不明であるが、文中に「越後公御房の御ふみに申候_{たま}敷_き」⁽²¹⁾とか、追信に「御器の事は越後公御房申_{たま}候べし。御心ざしのふかき由、内房へ申_{たま}せ給_{たま}へ。」等とあるので、「越後公御房」や、「内房」といった人々と関係のあった人であることがわかる。ここに登場する越後公御房とは、田村芳朗博士の説によると、富士の熱原滝泉寺にいた天台僧で、日興によって聖人の弟子となった日弁のことであるといわれており、内房についても先の弘安三年に記された『内房女房御返事』に出てくる内房のことであろうといわれている。⁽²²⁾もしそうだとすると駿河国庵原郡内房村に住んでいた

檀越の一人ということになる。この御書は近年に発見された御書であつて、真蹟は三紙だが、堺の妙国寺と日暮里の本行寺に分蔵されている。

内容は「春の始の御悦、自他申籠候了。」

といった年賀状の形をとっているが、

「抑去年の来臨は疊華の如し。将又夢歟幻歟。疑いまだ晴す候処に、今年の始深山の栖、雪中の室え、経_ニ於_ニ多国_一、御使、山路ふみわけられて候にこそ、去年の事はまことなりけるや／＼とおどろき覚へ候へ。」

とあるので、去年聖人を訪問していることがわかる。思いもかけぬ人が尋ねて来て、夢か幻かのごとくに感じていた様子がわかる。しかし「経_ニ於_ニ多国_一御使」とあるところを見ると、駿河国の住人ではなく、遙か遠方の地からの使者といった感もしないわけではない。なお、本書の系年については、鈴木一成教授が、御書の中に「他行之子細」とある一文から、先の弘安四年十二月八日の『上野殿母尼御前御返事』の「此の山出事_ニ一步も候はず」という一文と照合して、弘安五年に配したとしている。この「他行」についても、前述のごとく、たまたま聖人が山の麓・近辺の里へ行かれた留守中とみることもできよう。病身であつた事を考慮に入れると、遙か遠方まで歩を伸すことは無理であつたろうともいえる。

次に、二十日正月を祝うに当って、上野殿から「八木一俵・白鹽一俵・十字三十枚・いも一俵」等が送られて来た。「春の初の御悦、木に花のさくのごとく、山に草の生出_ニのごとし、と我も人も悦_ニ入_ニ候_一」とあるごとく、この場合も年賀状を兼ねた礼状となっている。この御書は本満寺本の写本が伝っているが、「深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につきもり、谷は峯となり、みねは天にはし（梯）かけたり。」という状態で、大雪に包まれた大坊・小坊のさまが

想像されてくる。

「衣はうすし食はたえたり。夜は寒苦鳥にことならず。昼は里へいでおもふ心ひまなし。」

雪害により訪問者もとだえた西谷は、寒苦に耐える以外に越冬の方法はなかった。「昼は里へいでおもふ心ひまなし」という一文に聖人の素直な心情が窺える。日照時間の少ない西谷から、日当りのよい山里へ、歩を延ばそうと考えておられたことも、決して少なくなかったことであろう。

この御書の外にもう一書の年賀状が伝っている。「春の始の御悦、花のごとくひらけ、月のごとくあきらかにわたらせ給^{（25）}べし」という断片で、真蹟は東京の松平家に伝っている。きっと檀越からの音信があり、そのご返事の一節であらうと考えられる。こうして、さすがに正月らしく、各地の檀越から年賀のご供養や書状等が飛来し、山中の雪深き日々とはいえ、幾分の正月らしさがあつた。

越えて二月に入ると下旬の二十五日に、伯耆公日興へ宛た一書がある。これは日朗が代筆したもので、富士大石寺に正本が所蔵されている。日付の下に「日朗 花押」があり、聖人に代つての執筆であることがわかる。「御布施御馬一疋^{（26）} 馬毛^{（27）} 令^{（28）}入^{（29）}ニ御見参^{（30）}候^{（31）}了」とあるので、馬一疋が布施として届けられたことになる。これは南条七郎次郎時光の当病平癒を祈願していただきたい為の布施であつた。聖人は病身のため筆を執ることができず、日朗に代筆させたものと考えられる。薬王品の「此経則為閻浮提人病之良薬、若人有病得聞是経、病即消滅不老不死」の二十八字を書写し、これを灰にした上で、「しやうじがはの水とりよせ」この水で服用すべきことを教示している。聖人自身が、かつて生母の病をこの御符により、平癒せしめた上、さらに寿命を延ばされた前例に習うよう勸めているのである。「時光は身はちいさきものなれども、日蓮に御ころざしふかきもの也。」といわれるだけに、時光の聖人に対する

「こころざし」は、他の範とするに足るものであった。南条家からの御供養も、頻度・量共に抜きこめるものがあった。

この頃聖人は、筆を執ることができぬ程に、病状が篤いものであったことがわかる。前書の正月二十日頃は、「昼は里へいでおもふ心」があり、このあとの二月二十八日には、自身で筆を執り、九紙からの『法華証明鈔』を記されているのである。心中では里へ出てみようとする意志を持ちながらも、実際は筆をとることも思うにまかせぬといった状態であったものか。したがって、上野殿へ出された前書の文面から、聖人の健康を気づかした時光、及び日興らが、敢て馬一疋を布施として届けられたものとも考えられるのである。

つまり、雪の深い西谷から、「昼は里へいでおもふ」につけても、病身では思うにまかせないわけである。せめて馬一頭を贈ることにより、たまには山里へ行かれることも可能であると察してのことであった、といえるのではないだろうか。

なお、聖人が日興を通じて、南条時光に与えられた御符は、その後、日蓮門下の各寺院でも、「妙符」「秘妙符」或いは「おご符」と称して、当病平癒の祈願をこめ、一般檀信徒らに頒ち与えられている。

次に、『法華証明鈔』であるが、真蹟は西山本門寺他二か寺に散在している。第一紙に「法華經の行者日蓮 花押」とあり、筆勢もしっかりしている。文意は上野の七郎次郎は法華經の信者であるので、「すでに仏になるべしと見へ候へば、天魔外道が疾をつけてをどさんと心み候か。命はかぎりある事なり。すこしもをどろく事なかれ。」と励ましている。法華經の行者を悩ます鬼神を諫めつつ、病者を元氣付ける一書であった。宛名は「下伯耆房」となっているが、内容はほとんどが南条七郎次郎の病疾に関し、治病を祈るものとなっている。したがって、『三宝寺御書』や

『本満寺御書』等では、この一書のことを『除病延命抄』と異称している。

さて、三月に入ると、問題の『蓮三枚御書』がある。真蹟は四紙で、断簡となり中途でと切れ、全文完結していない。富士大石寺に所蔵されているのは初めの部分四紙のみであるが、重要文化財に指定されている。執筆は三月五日以後上旬に行われたものと考えられる。南条氏から「蓮三枚・生和布一籠」が届けられた御礼状である。

「抑[＊]三月一日より四日にいたるまでの御あそびに、心なぐさみてやせやまいもなをり、虎とるばかりをばへ候上、此御わかめ給^レて師子にのりぬべくをばへ候^也。」

とあるところから見て、三月一日から四日まで、南条家へ訪問していたことになるのである。そこで問題なのは、すでに宮崎英修博士も指摘している通り、この御書が、もしも南条氏宛のものであったとしたら、聖人や南条氏の病状からみても、また前後の御書の関連からいって、この年の三月一日から四日までの「御あそび」は、時間的にも無理があるということになってこよう。

前書の『法華証明鈔』は二月廿八日に記されている。すでに述べたようにこの御書は南条氏の病気を心配した聖人が、敢て病身を押して自筆されたものである。その見舞状が伯耆房から南条氏に着くか否かの中に、一日おいて翌三月一日には、もう聖人が南条家を訪問し、快癒祝いの「御あそび」で「やせやまいもなをり」元気になったというのは、辻褄が合わないことになる。南条殿としても「たとい定業なりとも今度ばかりえんまわうたすけさせ給へ」という程の重病であったのであるから、いくら早く回癒したとしても、三月一日というのは、不自然なことで聖人を招待するにしても、時間的にもう少しゆとりを持って、行うことが当然考えられてくる。

となると、この『蓮三枚御書』は、弘安五年の三月ではなく、もっと前に系年をもって行くのが妥当ではないだろ

うか。前掲の宮崎説によると、前年の弘安四年三月に当て、聖人の南条家訪問もその頃に行なわれたものとみなしている。そこで又問題となるのは、弘安四年十二月八日付の『上野殿母尼御前御返事』である。前掲の「去文永十一年六月十七日この山に入候て今年十二月八日にいたるまで、此の山出^だ事一步も候はず。」という一文と相異することになる。前述した通り、「此の山」という範圍も拡大して解釈すると、相当の範圍となろうが、ここで「出づる事一步も候ず」といわれたのは、「公式の出山という意味であつて内々の出遊のあつたことは前掲内記左近書、老病書によつて証せられる⁽³⁰⁾」という宮崎説が妥当となつてくるであらう。

「此身延山には石は多けれども餅なし。昔は多けれどもうちしく物候はず。木の皮をはいでしき物とす。薙いかでか財とならざるべき。」

とあつて、薙三枚は敷物などに使用されたものといえる。弘安五年三月とすると、すでに大坊・小坊・馬舎をもつた伽藍も完成し、鎌倉では一千貫もの費用を要する程の建築であつたというから、敷物等についても、木の皮をはいで使用するといった時点ではすでに考えられてくる。やはり木皮の敷物を薙にかえるといったのは、少なくとも大改修の前、木のもとに木の葉うち敷きたるようなる住かという草庵時代のこととしてみた方が、納得のいくものである。さらに検討を加えてみる必要があると考えられる。

弘安五年の春は、ともかく病状のはかばかしくなく中に暮れようとしていたことは事実であつたといえる。

[註]

- (1) 上野殿母尼御前御返事 定遺一八九六頁
(2) 種々御振舞御書 同 九八六頁

身延山晩年の日蓮聖人(上田)

身延山晩年の日蓮聖人（上田）

- (3) 『身延山史』によれば、波木井氏の『寄附状』を引用している。「在故十三里立、四方界、今日蓮聖人寄附之、自今以後吾家、雖身延事不可存、銘路、云云」の一文から推して、波木井氏が聖人へ進獻した地は、「則ち方十三里にして、東は下山、西は船原、北は赤沢、南は梅平川を界せり。」（八頁）としている。しかし、この限界は一応の界であって、聖人が近辺を遊歩される場合、必ずやこの界に従っていたか否かは断定できない。

- (4) 新尼御前御返事 定遺 八六五頁
 (5) 兵衛志殿御返事 同 一六〇五頁
 (6) 浅敷女房御返事 同 一八六〇頁
 (7) 上野殿母尼御前御返事 同 一八九七頁
 (8) 大夫志殿御返事 同 一八九八頁
 (9) 『録外考文』 四一一
 (10) 『日蓮聖人における法華仏教の展開』（拙著）第一編第三章参照、四八頁
 (11) 窪尼御前御返事 定遺一八九九頁
 (12) 『録外考文』 八一三七
 (13) 大白牛車御消息 定遺一九〇一頁
 (14) 西山殿御家尼御前返事 同 一九〇二頁
 (15) 『録外考文』 二一五
 (16) 妙法尼御前御返事 定遺一九〇三頁
 (17) 『仏教史年表』 二〇二頁
 (18) 四糸金吾殿御返事 定遺一九〇六頁
 (19) 『録外考文』 四二九
 (20) 『録外徴考』 上一四九
 (21) 内記左近入道御返事 定遺一九〇七頁
 (22) 『日蓮聖人真蹟集成』 一一二八七頁
 (23) 『日蓮聖人遺文の文献学的研究』（鈴木一成著）四九〇頁

(24)	春初御消息	定遺一九〇八頁
(25)	春の始御書	同 一九〇九頁
(26)	伯耆公御房消息	同 一九〇九頁
(27)	法華証明鈔	同 一九一二頁
(28)	筵三枚御書	同 一九一三頁
(29)	「大崎學報」第一〇三號	七頁
(30)	同	八頁
(31)	地引御書	定遺一八九五頁

朝師御書見聞の一考察

——安国論私抄について(一)——

中 條 暁 秀

(一) はじめに

行学日朝(一四二二—一五〇〇)は四十一歳の寛正三(一四六二)年身延山十一世の法灯を継承し、境内及び伽藍の大整備を行う傍、祖書の蒐集謄写とその注釈事業等に全精魂を傾け、約六十部七百五十余巻という龐大な著作を遺し、延山中興と仰がれている。

周知のように、『朝師御書見聞』は『朝師見聞』・『朝抄』・『御書見聞』などと古来から呼ばれ、宗祖の遺文に注釈を施したもので、その部立ては「安国論私抄」(五巻)・「開目抄私見聞」(四巻)・「本尊抄私記・見聞」(八巻)を軸として、現在二十六篇四十四巻が存し、『日蓮宗々学全書』においては、二十三篇四十巻が収録されている。ただし、当初の篇巻数は明らかではない。しかし、このような大部に亘る遺文の注釈書として登場してきたものは、この『朝師御書見聞』を以て嚆矢とするというべきであろう。以下『宗全』にしたがって整理すると、身延山所蔵に係る正本が二十八、写本が三、他は藻原寺・越後蓮昌寺・立正大学図書館等々に正・写本が散在し、その大半の執筆は文明八(一四七六)年から十三(一四八一)年の間で、一部例外はあるものの、執筆場所は身延山行学院において

朝師御書見聞の一考察（中條）

であるとして差し支えない。

そして、『朝師御書見聞』述作の意趣は、(1)身延山を布教興学の中心地たらしめようと念願された。(2)それぞれの著述の奥書に明記されるように、「広宣流布」であり、「師父母」等の追善及び法界群生の利益である。つまり日朝は著述・解説することによって、報恩に擬されたものと思われるのである。このことは日朝の著作の凡てに共通することであると言うまでもない。加えて、文明十三年は宗祖の正當二百遠忌という一つの大きな節目に、祖山の貫首として値遇するがゆえの報謝の発露であったことであらう。

ところで、拙稿は文明十（一四七八）年十月中旬起稿、翌十一年二月脱稿になり、身延山久遠寺に蔵され、第一・第二・第三・第五の四巻は日朝の直筆本が、第四は円教日意の写本がそれぞれ存する『御書見聞』所収の「安国論私抄」について、少しく思うところを述べるものである。

なお既に、

(a)日朝は充分に吟味された経論釈等を援引して注釈を施しており、かつまた、その資料の豊富さには驚嘆させられる。

(b)日朝は『立正安国論』広本を建治の再治本と称し、当時流布していた略本草稿本説に疑問を抱いていた。

(c)日朝は「或記」として、「念仏者追放宣旨」九篇を掲げているが、その配列・省略の仕方から見て、『金綱集』がその出典と思われる。

の考察を本誌第五十五号において試みたので、今は(1)法然の念仏義について、(2)善神捨国について、(3)社参問題について、の三点について吟味しようとするものである。

(一) 安国論私抄の検討

——法然の念仏義について——

『立正安国論』の破邪の対象が念仏にあることは周知の通りであるが、その破邪の理由は大きく言つて、次の三点に集約されよう。

(1) 当時の日本全土を風靡する大流行の信仰は法然浄土宗であると、宗祖の眼には映じていたこと。⁽²⁾
(2) 宗祖の信仰の出発点たる天台宗の既成仏教に対して、法然浄土宗は新興仏教であり、伝統ある天台念仏とも異なつた新義を布教していたこと。⁽³⁾

(3) 浄土宗は朝廷及び幕府から追放・禁止された、未公認の宗教であつたこと。⁽⁴⁾
これら三点の理由によって、宗祖は「念仏破」を展開していったものと思われる。⁽⁵⁾

そして、日朝もほぼ宗祖と同様の見解を踏まえ、安国論に注釈を施している。以下理由三点に添いながら、日朝の意見を探るものとする。

まず理由(1)に該当するものは、例えば「安国論私抄」第三へ「悲哉数十年之間等事」の項に、「私云法然……四十二初黒谷出吉水住、自爾以来偏興三念仏、見ヘタリ、……法然盛弘三浄土門、以来、多人仏教迷惑捨実就權」とあるによって、また、理由(3)には、「私抄」第四の「念仏者追放事」の項に、「追放宣旨」九篇が掲げられているのを見ても明瞭であらう。⁽⁷⁾

そして、最も問題となるものが理由(2)である。すなわち、日朝の法然観は「私抄」第三の「八段下」の十八の項目に

亘つて述べられている。今その代表的なものを示せば、例えば「准之思之事」の項に、「私云此一段載『安樂集』文、法然、私評判下、……准之思之者法然、愚慮也、……道綽所立法華真言イタハテ直不レ入聖道門、歟、然法然彼道綽、釈得三潤色、法華真言、屬聖道門、對淨土門、捨レ之ベキ様書ト見タリ、依レ之元祖十六段無量謗法、言說只此、准之思之四字、為三根源、之由被レ仰⁹」と述べられるのである。つまり日朝は、道綽等の淨土三師が法華真言を捨閉闕拋の對象から除外したにもかかわらず、法然は「准之思之」として、法華真言をも難・聖・雜の中に含めて判じたところに謗法の根源ありと論じ、宗祖に依拠した遺文注釈態度であることを知るのである。¹⁰

加えて、日朝の念仏破の決定打ともいべきものは、〈就之見之引曇鸞道綽善導之謬釈等事〉中に『選択集』の冒頭に援引される道綽の『安樂集』の吟味をめぐっての問答往復中に見られる。すなわち、「安樂集上云……是故大集月藏經云我末法時中億億衆生、起行修道未有一人得者、当今末法是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路也¹¹」と、『安樂集』が『大集經（月藏分）』の文を援引するのに対し、日朝はかかる經文を吟味して、「大集月藏經今文無レ之、憶說也¹²」と、断を下すによって明瞭であらう。現に『大正新脩大藏經』を繙く時、かかる一文は見当らない¹³。ところで、周知のように法然淨土教では「厭離穢土欣求淨土」が基本的教理である。したがって、淨土教批判を展開され、「立正安國」を主張する宗祖にとって、この娑婆復権の課題を法華經に基づいて解決することが、重要な使命であつたはずである。とすると、日朝が「安國論私抄」を著すに当って、かかる件が一つの大きなテーマでなければならぬのに、「私抄」を検討した範圍内においては、何らの言及も見られない¹⁴。

——善神捨國について——

日朝は「安國論私抄」第五〈神聖去辭災難並起等事〉中に、「私云此御書」（『立正安國論』のこと）始終此義（善

神捨国のこと成シ玉ヘリ、能能可レ得心事也⁽¹⁶⁾とあるによつて、善神捨国の義の重視が窺える。通常、善神捨国をいう場合、『立正安国論』の「世皆背レ正人悉婦レ惡。故善神捨国而相去聖人辭レ所而不レ還。」・「夫四經、文朗、万人誰疑。而盲瞽之輩迷惑之人妄信邪說、不レ弁正教。」故天下世上於諸仏衆經一生捨離之心、無擁護之志。仍善神聖人捨国去レ所。是以惡鬼外道成災致難矣。」の文が、基調となつてゐることは周知の通りである。したがつて、日朝の善神捨国観も、例えば「災難之起事」中に、「法然房等邪師世出執權謗実、失犯故、仏教雖有之、法味失了、依之仏神失威、不レ加擁護、故災難競起者也」と述べ、宗祖の説に準拠し、かつ、かなりの紙面を割いて注釈を施してゐることを知るのである。

そして、日朝は前述の「神聖去辭災難並起等事」中に、「日域神国也、殊更神慮、可レ得心也、抑就神幾、不同有之耶、……一法性神二有覺神三邪横神」と、神に三品の差別のあることを述べて、それぞれの神の性質と、去來の義とを説述するのであるが、紙巾の都合で今は差し控える。なおかかる法性・有覺・邪横の三種神については、『日蓮宗事典』が「修法」部門に掲げ、身延山に藏される宝聚日伝の『神道口伝』にも往見され、永正年間に円明日澄によつて著わされたといわれる『法華神道秘訣』にも論じられてゐるところである。ということとは、もうこの時代には法華神道が確固たる地位を得たという一つの証左でもあらうか。

ところで、宗祖が善神捨国という場合、捨国という一面性のみの主張ではなく、『法門可申抄』・『諫曉八幡抄』等々を援引して、擁護面を力説されることは周知の通りである。日朝もまたかかる説に立脚して、例えば「日本諸神以法華為本意、玉フ事」の冒頭に、「私云此御書、（『立正安国論』のこと）大綱ハ日本諸仏諸神崇云ヘドモ、當時誹謗法華、失畏テ捨国玉ヘリ、若天下一同帰法華、諸神等還住此国、擁護玉フナラバ国家安全ナルベシト云御事也」

と述べるを見ても、擁護来下の主張が看取出来るのである。

——社参問題について——

白蓮日興（一二四六～一三三三）の身延離山は、祖滅最初の教団分裂の仕儀となったが、その引き金となったものに、波木井実長の三箇の謗法と称されるものがあり、その一つに三島社参問題がある。すなわち、弘安九・十（一二八六・一二八七）年頃身延山では民部日向（一二五三～一三一四）の二長老が身延に住し、実長の教化指導をめぐって対立するようになり、あたかも一触即発の情勢にあった。しかるに、弘安十一年の半ば頃であろうか、実長が三島大社に参詣を企てているとの報を得た日興は、弟子の越後房を遣わして止めさせようとした。そこで実長はその当否を日向に糺した。これに対し日向は、「守護の善神此国を去と申事は安国論の一篇にて候へども、白蓮阿闍梨外典読に片方を読んで至極を不知者にて候、法華持者参詣せば、諸神も彼社壇可来会、尤可参詣と教えた⁽²⁰⁾。恐らく鶴ヶ岡八幡宮の炎上事件⁽³⁰⁾に関連して述作された、『諫曉八幡抄』の「此大菩薩は宝殿をやきて天にのぼり給とも、法華經の行者日本国に有らば其所に栖給べし⁽³¹⁾」との旨を以て、実長の行為を認めたものと思われる。しかし、この事件が教団分裂の大きな要因の一つであったことは周知の通りである。なお実長三箇の謗法行為については、立正大学名誉教授宮崎英修博士の『不受不施派の源流と展開⁽³²⁾』に詳述されているところである。

しかば、かかる問題を一つの手懸りとして、日朝の社参問題を検討することにする。

まず日朝は、『安国論私抄』第五中に、^レ他宗安置、神社仏閣可^レ有^レ参詣^二否事^一・^レ日本諸神以^三法華^一、為^三本意玉事^一の二項を設け、『宗全』の頁数でいえば約十頁を費やして、他寺社不参詣の義を力説するのである。しかるに、かかる義を力説するにもかかわらず、その当時、他寺社参詣を肯定する人々も存していたらしく、例えば「或抄云謗法人

參詣セン時ハ仏神不_レ御坐ニ云トモ、信者參詣シテ財施法施、捧ルナラバ尤可_レ有_二納受ニ云、設_ヒ他人安置_二堂社也トモ可_レ參詣_一申_二類有_レ之_一⁽³⁴⁾と記している。しかし、日朝はこれを強く否定して、「此義不_レ可_レ然、加樣申テハ安國論等、御勸文違スベシ、サレバ重意趣有_レ之、當時通同義ハ本化門人不_レ可_二參詣申也_一⁽³⁵⁾」と示し、さらに「或余法求或諸寺諸社ニ物詣求_二利生_一、併元祖御意疑ヒ法華不_レ信人也⁽³⁶⁾」と、また、「法華道場何ナル仏何ナル神ガ漏_レ玉フベキヤ、若爾法華道場ニ安坐シナガラ、何勞_二シク余所_一仏神求ムベキヤ⁽³⁷⁾」と、他宗寺社參詣を厳しく誡めていることを知るのである。なお日朝のかかる厳格なる姿勢を採るに至らしめた根底にあるものは、折伏主義を貫き、永亨法難を惹起した、師の一乗坊日出の折伏的訓育をも忘れてはならぬものであらう。

ところで、日朝より十五歳年長で不惜身命・強義折伏の人、久遠成日親（一四〇七～一四八八）は実長の三島社參を問題視して、『伝灯抄』に前述の日向・日興双方の社參問題の見解の相違を提示したのち、「二百年程ノ事タル上代ノ事ト云ヒ、ゲニハ高祖御付弟ノ人数ニ入ラセ玉フ程ノ御人体ノ御事ヲ誤リアリナンドハ、且ハ恐モアリ且ハ不ニ相似_二様ニ侍レドモ、日興聖人ノ消息ノ如ナラバ、・・・・日興聖人ノ御法理正義ナルベシト不_レ存_一⁽³⁸⁾」と裁量しているのである。これに対して日朝は、当然かかる件を承知していたはずと思われるのであるが、如何なる理由に基づくのか、実長の社參問題について一言も触れてはいない。察するに、これは宗祖六上足の第四位に列し、同門論義第一の称があり、宗祖なきあとの日蓮教団護持に腐心し、身延二世の法灯を継承し、草創期の身延山経営に尽力した日向の立場を顧慮したからであらうと、思われるのである。

周知のように、謗法の諸宗によって祀られる神社に詣でるのは安國論の制するところであるが、氏神のように諸宗の宗々に関係のない神ならば、參詣しても差し支えないというのが『三沢抄』の義である。日朝も『三沢抄』を抄引

して氏神の参詣を認めるが、宗祖がそうであったように、日朝もまた内房の尼の行為、すなわち、(1)主君たる仏と所従たる神との秩序を乱した。(2)尼の身でありながら仏及び、法華經を本とせずして神を本とした。の二点に注視して、例えば「本地、諸仏以^レ法華^ヲ為^ス本意^ト見^ヘタリ、垂迹^ノ諸神、本意^ハ豈^ニ別耶^{ナラシム}」と述べて、仏主神従・法華至上主義を堅持していることを知るのである。

(三) むすび

以上、極めて荒い論となつてしまつたが、へくくりとして拙論の要点を述べるならば、

(a)日朝は道緯等の浄土三師が、法華・真言を捨閉闕抛の対象から除外したにもかかわらず、法然が「准之思之」として、法華・真言をも難・聖・雑の中に含めて判じたところに謗法の根源ありとして、宗祖と同様の見解を踏んでいる。加えて、日朝の念仏破の決定打ともいうべきものは、『選択集』の冒頭に援引される『安樂集』中の大集經（月藏分）の經文を吟味して、「今^レ文無^レ之、憶説也」と断ずる点にあらう。

(b)日朝の善神捨国観は、宗祖の説に準拠して論の展開を試みている。そして、そこには法華神道の影響を看取することが出来る。

(c)日朝は他寺社不参詣の義を力説している。にもかかわらず、実長三島社参問題について、彼のなべかわり日親が問題視して、白蓮日興を是とし、民部日向を非と裁量するのに対し、日朝は何ら言及されていない。恐らく教団の護持及び、草創期の身延山経営に尽力した、日向の立場を顧慮したからであらうか。

の三点が挙げられると思うのである。

- (1) 一九三四
- (2) 『守護国家論』(定遺八九)・『立正安国論』(定遺二一六七)等を参照されたい。
- (3) 『守護国家論』(定遺一〇四・一一八)・『念仏無間地獄抄』(定遺三九)を参照されたい。
- (4) 『立正安国論』(定遺二一九)・『念仏無間地獄抄』(定遺三九・四二)・『善無畏三蔵抄』(定遺四六五)・『念仏者追放宣状事』(定遺二五八・二七二)を参照されたい。
- (5) 浅井円道氏『法然房源空と宗祖日蓮』(九九『法華文化研究』第三号所収)を参照されたい。
- (6) 宗全一五卷九五・九六
- (7) 宗全一五卷二二・二七、拙稿「朝師御書見聞の一考察」(二九・三一『棲神』第五号所収)を参照されたい。
- (8) 宗全一五卷七五・八八
- (9) 宗全一五卷七六、なお同様の趣旨に「妄語之至悪口之科事」(宗全一五卷一〇六・一〇七)がある。
- (10) 浅井円道氏前掲著(二〇一・一〇二)を参照されたい。
- (11) 宗全一五卷八六
- (12) 宗全一五卷八六
- (13) 前掲拙稿(二七)を参照されたい。
- (14) かかる件については、後日に譲るものとする。
- (15) 宗全一五卷一六七
- (16) 定遺二〇九・二一〇
- (17) 定遺二一三
- (18) 宗全一五卷一六三
- (19) 宗全一五卷一五八・一八〇
- (20) 宗全一五卷一六七・一六八
- (21) 宗全一五卷一六八・一六九
- (22) 九一七
- (23) 『本尊論資料』(一八九・一九〇)

朝師御書見聞の一考察(中條)

朝師御書見聞の一考察（中條）

- (24) 一紙左へ三紙右、鈴木常耀氏「法華神道秘訣の著者に就いて」（二三三～二三七『大崎学報』第八四号所収）を参照されたい。なお鈴木氏は、文中に円明日澄（一四四一～一五一〇）没後四十八年に当たる永禄元（一五五八）年の文があることを指摘して、日澄の著とすることに疑問を抱いている。

(25) 定遺四五五

(26) 定遺一八四九

(27) 宮崎英修氏『日蓮宗の守護神』（八九～九〇）・『不受不施派の源流と展開』（九六～九七）を参照されたい。

(28) 宗全一五卷一七七

(29) 宗全二卷一七一

(30) 『史料綜覧』（二五三）に「弘安三年十一月十四日社殿焼失」とある。

(31) 定遺一八四九

(32) 九四～一〇三

(33) 宗全一五卷一七一～一八〇

(34) 宗全一五卷一七一

(35) 宗全一五卷一七一

(36) 宗全一五卷一七四

(37) 宗全一五卷一七六

(38) 宗全一八卷二三

(39) 宗全一五卷一七七、及び、宗全一五卷一七二・一七四も参照されたい。

なお『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、とそれぞれ略称した。

日蓮聖人における時機観

町 田 是 正

一 問題の視点

日蓮聖人に於ける「時」⁽¹⁾と「機」⁽²⁾の認識の特色は、その所依とした『法華経』の受持信行という、宗教的実践との関わりのなかで、展開されていることである。即ち信行の所依とした『法華経』をして「未来記」⁽³⁾と受けとめ、その滅後の弘通を勧奨した説示に触発をされ、忍難色説を媒体として、「時」と「機」を確めていったことにある。

周知のごとく、日蓮聖人の生涯の評価については、「法華経の行者」⁽⁴⁾とか「殉教の如来使」⁽⁵⁾という呼称をもって、特徴的に表現をされ、また云い慣わされてきている。事実、日蓮聖人の遺文を鑽仰すれば、

勸持品云有「諸無智人」惡口罵詈等云云。日蓮当「此経文」⁽⁶⁾。及加刀杖者等云云。日蓮説「此経文」⁽⁷⁾（「寺泊御書」定遺五一四）

日蓮なくば此一偈の未来記は妄語となりぬ（「開目鈔」定遺五五九）
等と、法華経を忍難色説した自覚が宣明されている。

また、日蓮聖人の時機観を主題として、特に仏教哲学との関わりに於て問題とした場合、実は日蓮遺文の全編を渉猟しても、「時」と「機」に関する体系的な思索書が見当らない事である。たとえば『撰時抄』⁽⁸⁾という「時機」に関

日蓮聖人における時機観（町田）

日蓮聖人における時機観（町田）

する主著があったとしても、本抄の主題は、「未来記」に予見された「滅後の流通の時」とは、末法の法華經行者によって選び択られた「時」であるとする。法華經行者の主体的行動と、未来記の流布の必然性を説き明かし、不惜身命の弘經を門下に囑望したものである。

このことは、道元禪師の『正法眼蔵』（「有時ノ卷」[㊦]）に見られる如く、恰もハイデガーの「存在と時間」を想起させるような、精緻にして壮大な仏教哲学の論著と比較した場合、日蓮聖人は、「時の量とか、時の諸相とか、或は時の性質について、哲学的思索をなした宗教者ではなく、迫害多難の生涯が如実に語る如く、「未来記」の受持信行にこそ特色があったのである。

以上のことから、日蓮聖人に於ける時機観の問題は、「未来記」の忍難色説を媒体として、未来記たる『法華經』の流布される「時」を見定め、また滅後末法時に下種結縁にあずかるべき「機」を見極めていった所にある。

二 「時」と「機」の認識

日蓮聖人の「時」と「機」に対する宗教的認識は、伊豆流罪を契機として深まりを示すのである。即ち流罪の翌年（弘長元（一二六）年四十歳）に配所の伊豆に於て、『教機時国鈔』と『顯謗法鈔』の二著を作して、所謂、教・機・時・国・師（序）という「五綱教判」を創唱して、自己の宗教思想の輪廓と行動の原理を明かにしたのである。

この「五綱教判」は、五つの範疇（綱）により構成され、五綱が相対的に関連している。即ち「時」と「教」、「機」と「教」、「時」と「国」、「機」と「時」という相関に於て論じられ、その中で「時」と「機」の認識が深められているのである。

たとえば、『教機時国鈔』の中で、「時」について次のように論じている。

弘^ニ三^ハ仏教^ニ人必可^レ知^ル時^ニ…不^レ知^ル時^ニ弘^ニ法^ニ無^レ益^ニ上^ニ還^ニ墮^ニ惡道^ニ也……縦有^レ機^ニ無^レ時^ニ故^ニ四十余年不^レ說^ニ此^ニ經^ニ。故^ニ經^ニ云^ニ說^ニ時^ニ未^レ至^ニ故^ニ等^ニ云^ニ云^ニ…当^ニ世^ニ入^ニ末^ニ法^ニ二百一十余年也。権^ニ經^ニ念^ニ仏^ニ等^ニ時^ニ歟。法^ニ華^ニ經^ニ時^ニ歟。能^ニ能^ニ可^レ勘^ル時^ニ刻^ニ也^ハ（『教機時国鈔』定遺二四二—二四三）

右の遺文のなかで、「能^ニ能^ニ可^レ勘^ル時^ニ刻^ニ也^ハ」と強調する意味は、如来滅後の末法に入つて、いまだ法華正法^{（教）}の開法の縁に結ばれない本末有善の「機」を見極めよ、と喚起する所であり、同時に日蓮自身が末法の現実に生きて在ることの確かめでもある。

日蓮聖人にとって、本末有善の「機」に対する記別の問題は、法華經行者の実践の成否に関わる大事であり、同時に下種結縁の構索を設けることが課題であつたのである。『曾谷入道殿許御書』の冒頭に於て、

夫以療^ニ治^ニ重病^ニ構^ニ索^ニ良藥^ニ救^ニ助^ニ逆^ニ法^ニ不^レ如^ニ要^ニ法^ニ所謂^ニ論^ニ時^ニ正^ニ像^ニ末^ニ…（定遺八九五）
と云い、また『報恩抄』に於ても

世末になれば人の智はあさく、仏教はふかくなる事なり。例せば輕病は凡藥、重病には仙藥、弱人には強きかたうと有て扶^リこれなり。（定遺二二四八）

と強調する如く、末法劣機のためには「要法」を構索しなければならない、としている。前の両書の中で、「良藥」とか「要法」と云い、「仙藥」と云っているのは、云うまでもなく、法華經本門の「妙法五字」の教法のことである。この「妙法五字」をもって、下種結縁の構索の要法とするに當つては、「五重相對」（開目鈔）と「四種三段」^{（代三段・經三段・心本尊抄）}の重要教判を論拠として、選択されていることは云うまでもない。

日蓮聖人における時機觀（町田）

日蓮聖人における時機觀（町田）

ちなみに、下種結縁の「要法」の内容について、次の如く示している。

於三末法者大小權実、顯密共有、教無得道、一閻浮提皆為謗法了。為逆縁、但限三妙法蓮華經五字耳。例如三不輕品、（「法華取要抄」定遺八一六）

地涌千界末法、始必可出現、今遣使還告地涌也。是好良藥、壽量品肝要名体宗用教、南無妙法蓮華經是也（「觀心本尊抄」七一七）

末法の本末有善の「機」に対する下種のための要法は、壽量品に説示される「遣使還告」の譬説と、「是好良藥・今留在此」の末法結縁の要文に基づき、（教判「四種三段」中の本法三段に基づき、末法下種の要法は文底に沈めた題目五字を正宗となす）壽量品の肝要たる妙法五字を以って当てるとする。

而して、日蓮聖人にとって、末法の逆縁謗法者に対する下種結縁の方途を構築することが、仏の予見に叶うか否かに関わる大事と受けとめたのである。その下種化導の立場について、『開目鈔』のなかで、

無智惡人の国土に充滿の時は摂受を前とす。安樂行品のごとし。邪智謗法の者多き時は折伏を前とす。常不輕のごとし（定遺六〇六）

と示し、また『佐渡御書』に於ても、

仏法は摂受折伏時によるべし。譬えば世間の文武の如し（定遺六一一）

と云うごとく、逆縁謗法の「機」に対する結縁下種に当って、「無智惡人」と「邪智謗法」の二種に分かつて、前者に対しては摂受の教化と為し、後者には折伏逆化の要を強調されている。実は、この摂受と折伏の化導法の選択は、日蓮聖人の法華経行者の岐路にも関わる大事であったのである。此処に、自己の化導の立場を明確にするのである。

今既入三末法、在世結縁者漸々衰微權実、二機皆悉尽。彼不輕菩薩出現於末世、令擊毒鼓之時也・今時學者迷三

惑於時機……以三題目之五字、可^レ為^レ三種之由來、不知歟（「曾谷入道殿許御書」定遺八九五）

すなわち、末法逆縁、謗法の機に対する化導は、「昔は聞く不輕菩薩の杖木等」・「彼の不輕菩薩の杖木の難に値しにもすぐれ」などの不輕菩薩の但行礼拝の故事に徴して、忍難の菩薩行でなければならぬと、勧奨するところである。

以上のごとく、法華經行者の殉教忍難の軌跡を踏まえて、日蓮聖人の時機觀を問うてみれば、それは理論としての時機觀、思索の対象としての時機、哲學する為の時機を問題としたのではない。自ら忍辱の鎧を身にまとい、法華經の受持信行を媒体として、「時」を選びとり、「機」を見極めていったのである。

正法を修して仏になる行は時によるべし（「日妙聖人御書」定遺六四五）

仏法は時によるべし（「開目鈔」定遺六〇九）

夫、仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし（「撰時抄」定遺一〇〇三）

等々の一連の教示は、日蓮聖人の時機の認識・時機の相関について簡潔に示していよう。簡潔だと云う事は、その裏付に血潮が涸れ、骨の碎ける忍難色説のあった事に、思いをいたさねばならない。

次に、日蓮聖人における時機觀を論するとき、もう一つ喚起される事がある。それは、遺文の処々に於て次のような字句がみられることである。

是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず。時のしからしむ耳（「報恩抄」定遺一二四九）

身の智分をば且く置ぬ。法華經の方人として難を忍び疵を蒙る事は漢土の天台大師にも超へ日域の伝教大師にも勝れたり。是は時の然らしむる故なり（「四条金吾殿返事」定遺一八〇〇）

日蓮聖人における時機觀（町田）

仏眼を以て一切衆生の心根を御覽する（「聖愚問答鈔」定遺三六〇）

如^二是經文^一、仏眼以照^二見末法始^一」（「波木井三郎殿御返事」定遺七四六）

即ち、「智分は置く」・「智のかしこきに非ず」とか、「仏眼をもって」、「時の然らしむる」と云う表現がみられる事である。この事は端的に云えば、対象の認識に当って、主観的判断とか、自己の知性的判断を否定する立場の表明ではなからうか。「時」と「機」の認識に当って、思索的判断とか、智性的判断の領域を超えて、「信」の世界を基調とした認識の主張であり、仏眼に教示されて認識することである。

日蓮聖人が、学の道を志して、天台宗の名刹・清澄寺に入門し、「いささかの事ありて、此事を疑ひし故に一の願をおこす⁽¹⁰⁾」と云い、「日蓮が愚案晴れがたし。一つの願を立つ⁽¹¹⁾」と為し、「日本第一の智者となし給え⁽¹²⁾」と、虚空蔵菩薩に対して、智者誓願を立て、鎌倉・高野・三井・京都・比叡山など処々をめぐる修学であったが、いま、日蓮聖人が若き修学期の「智者誓願」を懐古して云う「智者」とは、所謂、知識者とか智慧者となる為の発願ではなく、仏の智慧（仏眼^{ほとけのまなこ}）の信解を欲した誓願であった事は、論ずるまでもなからう。

こうした認識の基調に立って、「時機」を論ずるに当って、必ず「經ニ云ク」とか「仏記シテ云ク」の如く、仏説に徴して論を展開されるのである。謂うまでもなく、仏眼とは、仏の智慧・悟りを開いた識見の事である。その仏眼を以て、時機を見定めよと喚起するのである。

何に況んや、仏教を修行せんに時を糾ざるべしや。機の熟不熟はさておきぬ。時の至れる故なり。經云今正是其時決定說^{サシメテ}大乘^二等……問云いかなる時に小乗權經をとき、いかなる時に法華經を説べきや……答云仏眼をかつて時機をかえよ（「撰時抄」定遺一〇〇五）

と論じているが、これは明らかに主観的判断を否定した認識の主張であり、仏眼に基づく認識の強調である。「仏眼をかつて時機を勘えよ」とは、仏の予見に映じ、仏の智慧によって照し出された教えを、基調とせよと云うのである。

すでに見た如く、伊豆流罪を契機として、法華經色読の自覚を深め、弘經との関わりに於て、「時機」の認識を強めてゆくのである。

弘^ム仏教、人必可^レ知^ニ機根、……弘^ム仏教、人必可^レ知^ニ時、……当世入^ニ末法、二百一十余年也。權經念仏等、時歟・法華經、時歟。能^レ可^レ勘^ニ時刻、也（『教機時国鈔』定遺二四二）

右の『教機時国鈔』に於て、「權經等時歟・法華經時歟・能^レ可^レ勘^ニ時刻」と喚起するのは、『法華經』の弘經実践による「未來記」の体现を意味しているが、その場合、特に「能^レ可^レ勘^ニ時刻」とは、『法華經』の流布の「時」の見定への喚起である。そして「勘う」（思考する）というのは、「未來記」の流布の「時」の見極めと、その弘經者としての日蓮自身の確かめを意味している。その「未來記」の流布の「時」について、『妙一女御返事』の中で、

法華經の弘まらせ給^レべき時有三度所謂在世与^ニ末法也……日蓮は今時を得たり。豈此所囑の本門を弘めざらんや……天親龍樹内鑑冷然等云云……伝教大師云、正像末稍過已、末法太有^レ近^ニ法華一乘機、今正是其時、何以得^レ知。安樂行品云、末世法滅時、云云（定遺一七九八）

と論じ、また『撰時抄』（定遺一〇〇八）に於ても、同文同意の形で論じられている。そして、方便品の「所以未曾説・説時未至故・今正是其時・決定説大乘」⁽¹⁴⁾との教示、また宝塔品の「能^レ於此娑婆国土・広説妙法華經・今正是時」⁽¹⁵⁾の仏記を所依として、自ら「日蓮は今時を得たり」⁽¹⁶⁾と為し、「今既に時来れり」⁽¹⁷⁾と、末法の当今を受けとめてい

るのである。

三 「時」を超える

日蓮聖人における「時」の認識には、自己が生かされている現実（末法）の中で、「未来記」を弘経するという、歴史的時
間と関わる認識と、もう一つは、宗教者として歴史的時を超えて、純粹絶対の時間（宗教的時間）にも思索を深め
ているのである。

日蓮聖人が、「（「妙一女御返事」）（二七九八）「今時を得たり」とか、「（「法華行者値難事」）（七九九）「今既に時来れり」と、

末法当今の現実を受けとめる意識には、むしろ、末
法の歴史的現実と対決して、能動的に現実を超える理念を確立したいとする意識が、つよく作用しているように思え
る。

日蓮聖人が末法当今の現実を超えると云う意識は、時間の物理的長短とか、時間の物理的流れを否定しないと成り
立たない論理である。つまり、「仏の在世」と「末法当今」の二つの次元を対比して、むしろ、「末法当今」の時に
ついて、宗教的意義を見い出そうとする事である。

聖人が自ら「此事日蓮当身大事也」（18）と称した。『観心本尊抄』の中で、法華経の本迹二門にみえる時機観を基調と
して、次のように論じている。

迹門十四品、正宗八品、一往見之、以三乗為正、以菩薩凡夫為傍。再往勘之、以凡夫正像末為正。正像末三時之
中、以末法始為正中、正。問曰、其証如何。答曰、法師品云、而此經者、如来現在猶多怨嫉、況滅度後。宝塔品云、令三法久
住、乃至所来化仏、當知此意等。勸持安樂等可見之。迹門如是。以三本門論之、一向以末法之初、為三正機。

所謂一往見之^レ時以^二久種^一、為^二下種^一、大通前四味迹門、為^レ熟至^二本門^一、令^レ登^二等妙^一。再往見^レ之、不^レ以^二迹門^一。本門序
正流通俱以^二末法之始^一、為^レ證。在世、本門、末法之初、一同純円也（「観心本尊抄」定遺七一四—七二五）

即ち法華經の本迹二門に於て、教示されていると受けとめた、「末法為正論」を基調とされて、自己の末法為正論を主張した条りである。すなわち、迹門の「為正論」について「一往之ヲ見」「再往之ヲ勘」の二つの観方を示し、本門の「為正論」について「一往之ヲ見」「再往之ヲ勘」との二つの観方を示すのである。先ず「機」について云えば、末法の我等は二乗や菩薩ではなく、凡夫なりと規定し、「時」について云えば、我等は仏在世の衆生ではなく、滅後の衆生であることを明確にして、迹門の正宗分は「一往之ヲ文上カラ見レバ」在世衆生の得脱の如くであるが、然し迹門の流通分から「再往之ヲ文底カラ勘ウレバ」実は迹門正宗分は、滅後の衆生を得脱せんが為に遣し置かれた大良薬であると、解されているのである。

繰り返して云えば、在世得脱の為の迹門正宗分は、実は流通分から逆次に読んでみると、滅後の凡夫の得脱下種の為に遣しおかれた「教」（仏記）と解し、此処に迹門の「末法為正論」を提示するのである。

尚、『法華經』の迹門を逆読する論理については、『法華取要抄』の中で具体的に次のように示している。

問曰、法華經為^二誰人^一說^レ之乎。答曰、自^二方便品^一至^二千人記品^一八品有^二三意^一。自^レ上向^二下次第說^一之、第一、菩薩第二、二乘第三、凡夫也。自^二安樂行^一勸持提婆宝塔法師、逆次說^レ之、以^二滅後衆生^一為^レ本。在世衆生傍也。以^二滅後論^一之正法一千年像一千年傍也。以^二末法^一為^レ正。末法中以^二日蓮^一為^レ正也（「法華取要抄」定遺八一三）

此処でも迹門の時機観について、二つの観方を提示している。その一は、『法華經』迹門の章節に随って、上から下へと順次に読む「順說法華」と、その二は、章節を下から上へと逆次に読む「逆說法華」である。先の「観心本尊

抄』に依れば、「順読法華」とは、文上の説相と示され、「逆読法華」に就ては、「再往之ヲ勘ウレバ」と約し、文底に秘し沈めた仏の心に依る説相としている。

日蓮聖人は、自己の忍難色説を踏まえて、殊に「逆読法華」の立場を強調するのであるが、その「逆読」とは、如来滅後の立場から読むこと、流通分の立場で読むこと、末法当今の日蓮聖人の立場から読むことを意味している。即ち、「逆読法華」とは、末法の日蓮聖人の立場からすれば、『法華経』迹門の流通分は、まさに「以、滅後衆生、為、本」ためであり、「以、末法、為、正」ことであつたのである。日蓮聖人の独特の法華経観の展開である。

次に、『法華経』本門の正宗分に於ける時機観について、『法華取要抄』に於て、「略開近」と「広開近」といふ、二つの説相から論じている。

本門有三心、一涌出品、略開近、遠前四味並迹門諸衆、為令脱也。二涌出品、動執生疑、一半並寿量品分別功德品、半品已上一品二半名、広開近、遠。一向為滅後也……法華経、本門、来三至略開近、遠。自華嚴大菩薩二乘大梵天帝釈日月四天龍王等位隣、妙覺又入二妙覺位也……為誰人、演説、広開近、遠、寿量品乎。答曰、寿量品、一品二半、自、始至三千終、正為滅後衆生。滅後之中、末法今時、日蓮等為也（『法華取要抄』定遺八一三）

即ち「略開近、遠」段は、釈尊在世の「現在」に立たれた説示であるが、その釈尊の在世の「現在」は、『法華経』の文底に秘した「広開近、遠」からすれば、永遠の未来を含む「現在」と解するのである。そして「略開近、遠」段は、在世得脱の為となし、「広開近、遠」段は滅後末法の得脱の為となし、「略開近」と「広開近」の説相を対比して、末法当今を以て、「正時」となし、「正為」とするのである。この時機観を、端的に「末法為正」の四文字で象徴的に示すのである。

以上の時観を踏まえて、日蓮聖人は語調を整えて次のように云うのである。

在世^セ本門^{ホンモン}末法之初^{ハツ}一同純円也（「観心本尊抄」定遺七一五）

在世は今に在り。今は在世なり（「種種御振舞御書」定遺九七一）

而して、右に示した「仏の在世は末法の今」・「末法の今は仏の在世」という論理が成り立つ為には、時間倒錯の論理思考が必要ではなからうか。日蓮聖人は、「仏在世」と「末法当今」という次元の異なる概念を同質となす為に、即ち時間を超克して次元の壁を超えるために、法華経を逆次に読む受持信行を媒体として、本門寿量の本仏の生命を開顯して、「仏在世の今」を、「末法の今」へとたぐり寄せ、「在世は今・今は在世」と主張するのである。

繰返して云えば、「末法為正」と主張するのは、法華経の色説を媒体として、寿量本仏の世界に生かされているとの「信」の発露である。

日蓮聖人は、寿量品で開顯された無始無終・久遠本仏の世界のことを、特に「本時」と呼称している。その久遠本仏の性格について、『観心本尊抄』の中で、

我等己心^{ミコ}釈尊^{シヤクソン}五百座点乃至所顯^{ニシツク}三身無始古仏也（定遺七一）

と説明している。「無始古仏」の「無始」とは、古仏が無始と云うことであって、伽耶始成の釈迦が無始だと云う

のではない。若しも、古仏が時間的に「無始」であるならば、未来も「無終」でなければならない。日蓮聖人が単に「無始古仏」と云わないで、先の『本尊抄』の中で、寿量品の五百座点劫という天文学的数量を藉りて、而も、「乃至所顯」と形容語句を付して表現する意味は、伽耶始成の歴史的釈尊の寿命が永遠だと云うのではなく、仏陀となられた其の寿命が久遠だと云うのである。歴史的時間を超えた無始・無終の常住不滅の存在、久遠本仏を開顯し、その

日蓮聖人における時機観（町田）

本仏の生命である「本時」の中に生きたいとされたのである。

日蓮聖人が、本仏の壽命である「本時」について、端的に言及しているのは、『観心本尊抄』の中の所謂、「四十五字法体段」の条りである。

今本時、娑婆世界離三災、出四劫、常住淨土。仏既過去不滅未來不レ生。所化以同体。此即已心、三千具足三種世間也（「観心本尊抄」定遺七一二）

この四十五文字の法体段については、わが日蓮教団では、仏陀釈尊の久遠常住を開顯した法体段として格別に重要としている。

さて、時機観との関わりで、特に問題とする所は、冒頭の「今本時」の三文字の解釈であろう。日蓮聖人が示されるように、若し「本時」が、無始無終の絶対時間を意味しているならば、その冠頭の「今」は、一体なにを意味するのであろうか。

「今本時」の読み方について、若し「今がそのまま（即）本時」と読み、また「本時がそのまま（即）今」と読むことが許されるならば、我々の立つて居る現在（²⁰）が其のまま本時であり、又、本時がそのまま現在だと、読めるのではないか。筆者はこの読み方が許されてよいと思っている。それは、「今本時」の三文字の直後に、続けて「娑婆世界離三災、出四劫、常住淨土」と示し、更に「仏既過去不滅未來不レ生」と云い、寿命品の「而実不滅度・常住此說法」・「我常在此娑婆世界」・「大火所燒時・我此土安穩」等（¹⁹）を典拠として、寂光淨土（絶対空間）の思想を生み出し、また「我成仏已來・甚大久遠・壽命無量・阿僧祇劫・常住不滅」など（²⁰）を依拠として、久遠本時（絶対時間）の思想が生みだされているからである。

以上の事から、「今本時」とは、久遠本仏の生命に包みこまれた今、と云う事になる。随って、「今本時」の「今」は、久遠の過去から永遠の未来に関わる、永遠の相下に観られた「今」である。そして、この「今」が「本時」と云われるのは、「今」の永遠の相を示したに他ならないのである。

日蓮聖人における「時」を超える意味は、娑婆の現実をそのまま、「本時」と為すことである。つまり本仏の「本時」と感応道交する、法悦の「信」の世界に在ることであった。いかに厳しい忍難色説であらうとも、「本時」と感応道交する一瞬、法悦の一瞬の軌跡であったならば、当に「今本時」の中に生かされていたのである。

四 結 語

日蓮聖人は、所依とした『法華経』の「逆説法華」の帰結として、末法為正と論じ、「本時」の世界と感応道交する「今」に生きる法悦をかみしめたのである。

日蓮聖人の高弟・日興は、次の如く釈している。

時者感応末法時也……時者本時娑婆世界時也……時者末法第五時時也……今日蓮等之類奉^レ唱^レ南無妙法蓮華經^一者、住所説也（『御義口伝卷下』定遺二六八所収）

日蓮聖人に於ける時機観とは、自己が「本時」の中に生かされているとの「信」の確かめであった。即ち、時間と空間を超えた本有の世界の内に、自己が同時同居している事の「信」の自覚でもあった。このことを、『観心本尊抄』の「四十五字法体段」で明確にされたのである。

日蓮聖人は、末法という歴史的時間の中で、逆説法華の受持信行という実践を媒体として、実存する自己を、本仏

日蓮聖人における時機観（町田）

の生命たる「本時」と感應道交すること、
「末法即在世」（今本時・娑婆即寂光）という宗教的時間を體現していったのである。

〔註〕

（1）「時」：日蓮聖人の遺文（『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻・以下「定遺」と略す）に出自する「時」について、「じ」と音読みする出自が七回、「とき」と訓読みが二十四ヶ所である（遺文索引「宗義」の「じ」「とき」の項参）。この読みの違いは文章体裁と調子に依るもので、「時」に対する認識の違いではない。

（2）「機」：「機根」のことで、英語の「human nature・inborn capacity」のニ・アンスに当る。衆生が内に秘めている可能性・本来的能力の意である。日蓮聖人が問題とする「機」もそうした意味合いで捉えているが、特にその「機」は、個としての「機」ではなく、「一切衆生」という「通機」を対象としている。

（3）「未来記」：日蓮聖人にとって「未来記」とは、例えば「開目鈔」の中で「日蓮なくば此一偈の未来記は妄語となりぬ」（定遺五九九）と表現される事で明に『法華経』を指している。就中、滅後の弘経を勧奨した次の要文を未来記と受けとめている。法師品「而此経者・如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」。安樂行品「此法華経・能令衆生至一切知・一切世間・多怨難信」。勸持品「有諸無智人・惡口罵詈等・及加刀杖者……教数見損出・遠離於塔寺……」等の二十行偈文。常不輕菩薩品「而作是言・我深敬汝等・不敢輕慢・所以者何・汝等皆行菩薩道・当得作仏」。藥王菩薩品「囑累於汝我滅度後・後百歳中・広宣流布於閻浮提無令断絶」（大正藏経第九卷（一）ノ三六・三九・五〇・五四）即ち、日蓮聖人の忍難色説と関わる要文のことである。

（4）「法華経行者」の呼称については、日蓮聖人の遺文の随所に於て「日蓮は日本第一の法華経行者也」（南条兵衛七郎殿御書・定遺三二七）。「日蓮は日本第一の法華経の行者なる事あえて疑ひなし」（撰時抄・定遺一〇四八）と自覚の宣明に基づく所であり、その意味は、法師品以下で説示される「菩薩行者」のことである。この呼称が世に喧伝されるに至ったのは、姉崎正治博士の名著『法華経の行者日蓮』に依る所が多い。

（5）「殉教の如来使」とは、法華経の忍難色説者「日蓮聖人」のことで、その如来使の文証は、從地涌出品「是四菩薩・於其衆中・最為上首・唱導之師……」の上行等の涌现、如来神力品「爾時仏告・上行等菩薩大衆……」の妙法結要別付囑の勸奨文に求め、その内証は『開目鈔』（定遺六〇一）。「法華取要抄」（定遺八二一八・一五）。「曾谷入道殿許御書」（定遺九〇〇）。「顯仏未来記」（定遺七三九）。「法華行者値難事」（定遺七九八）等に示される。田村芳朗教授の『日蓮・殉教の如来使』

(NHKブックス)にも副題として用いられているが、筆者が特に「殉教」の意味を強調したいのは、イエスの十字架上の犠牲、使徒達の殉教と対比して、日蓮聖人の忍難慈勝の信に生きた色説の軌跡を讃仰せんが為である。

(6) 撰時抄・定遺一〇〇三—一〇〇五。

(7) 大正藏經第八二卷統諸宗部十三ノ一。拙著『道元の時間論』「楔神」五一号所収)

(8) 清澄寺大衆中・定遺一一三四。

(9) 撰時抄・定遺一〇四七・一〇六〇。

(10) 妙法比丘尼御返事・定遺一五五三。

(11) 報恩抄・定遺一一九四。

(12) 善無畏三藏鈔・定遺四七三〇。破良觀等御書・定遺一二八三。

(13) 妙法比丘尼御返事・定遺一五五三。

(14) 方便品(大正藏經第九卷法華部全・一八。

(15) 宝塔品註(14)の三三頁。

(16) 妙一女御返事・定遺一七九八。日蓮聖人が法華經流布の「時」を見定め、論じるとき、必ずと云つてよい程に、伝教大師の『守護国界鈔』中の「正像稍過已末法太有近・法華一乘機今正是其時……」(大正藏經第七四卷説諸宗部四ノ一二)を参借

し、方便品の「今正是其時」、宝塔品の「今正是時」の予見、仏記を所依とするのである。

(17) 法華行者值難事・定遺七九九。

(18) 観心本尊抄副状・定遺七一二。

(19) 大正藏經第九卷法華部全(一)ノ四二、四三。

(20) 註(19)参。「久遠」の時間とは、日常的時間、歴史的時間、物理的に測られる時間を超克した宗教的時間であり、それを

実感として捉えることは、自己が「本時」の世界と感応道交による信解があるのみであろう。「久遠」と云われる時間のニュアンスとしては、寿量品中に示される「是諸世界・無量無辺・非算数所知・亦非心力所及」の世界ではなからうか。即ち「非算数所」(計測する能力を超えた世界)であり、「亦非心力所及」(智慧思惟の能力を超えた世界)ではないか。然し日蓮は思索としての本仏の「本時」を対象としたのではない。あくまでも宗教的実践を媒体として、「久遠本時」と感応道交したのである。

日蓮聖人における時機観(町田)

「本願を立ッ」考

望 月 海 淑

1

『開目鈔』は三大誓願の表明に先立って、

詮するところは天もすて給、諸難にもあえ、身命を期とせん。……善に付け惡につけ法華經をすつる、地獄の業なるべし。本願を立ッ^①。

とのべている。このお言葉は日蓮聖人の法華經信仰へのあり方を明示したものであるが、善惡につけ法華經信仰をすることが墮地獄の業であるとする時、「本願を立ッ」というお言葉を理解するためには、日蓮聖人が法華經とどうかかわりあっていたのか、ということを明白にしておく必要があると思われる。

たとえば、この「本願を立ッ」のお言葉についてふれた二、三の書物を見ると、そこには法華經方便品の「我本立誓願」の言葉を主として引用して説明しているのを知りうる。^②この語句が引用せられるのは本誓願を本（誓）願と読もうとするためであろうと思われるが、しかしこれは、釈尊が一仏乗を説示したことにより、これを説こうとした本誓願が満足せられ、一切衆生を仏道に入らしめたことを表明したものであるから、日蓮聖人の本願を立ッとし法華經弘通の覚悟を表明したのとは質を異にするように思われる。

その手がかりをどこに求めようとするのが、本試論の目的といえよう。

「本願を立ッ」考（望月）

山川智応博士は『開目鈔講話』の中で、「本願を立てよう」と文釈し、更に、「立宗開教のはじめの叫びであった清澄山最初説法の前、おそらくは建長五年の春、叡山から下りたまうた時に、決定せられた御誓願であらうとおもはれる」とした上で、「此の本願がましましたればこそ、三十年の大迫難の中を一步も退き⁽⁴⁾たまはず」すすまれたのだと義釈している。このように「大願を立てよう」との文釈の理解は他の諸師にも見られる。これは室住一妙教授も同様で『開目鈔に聞く』の中で、「そこで私は、二十年前、願を立てたのです」「不滅の大願であります」として、大願とした上で、山川博士のように、この大願が建長五年に立てられたことをも示している。

この「本願を立て」を大願と見るのは、『録内啓蒙』にも見られる。すなわち、「大願を立ン等」とした上で、「次の御文体即大願ノ体ナリ、板本ニ立シニトアリ、ニノ仮名非ナリ、又一本ニ立ヨト点シテ、下知ノ言ニ用タル、亦非ナリ、御自身ノ願ヲ拳玉ヒ、下ノ用ヒジトナリト云句ニテ、先死身ノ願ヲ結シ玉ヒ、我レ日本国ノ柱トナラント云ヘル下ニテ、弘法ノ願ヲ述玉ヘリ、大願ノ大ノ字、本ノ字ニ作レルヲ語式ニ正トセリ、サレトモ大ノ字還テ穩ナル歟⁽⁶⁾」として、大願であり、死身ノ願トシ、日蓮聖人の弘法の大願を示したものだとなっている。

清水竜山教授は、見宝塔品の六難九易中「の此為難事宜発大願」とある文に応じて「大願を立てん乃至種々の大難出来ずとも乃至其外の大難風の前の座なるべし乃至誓ひし願破るべからず」となったのであり、更に『阿仏房御書』『上野殿御返事』等の御書を挙げて、本願ではなく大願であり、「御真跡に万に一つ「本願」とあったとしても、恐らくは御筆誤でもあって、須く「大願」であるべきである」と、「本願を立て」は「大願を立て」と読まなければなら

ないことを明示している。そして更に、『破良観等御書』に「本よりの願」云々の句が見え、これが「本願」に似ているように思われるが、これは日蓮聖人が「清澄入山して虚空藏菩薩の宝前に立願せられた時の述懐で、「本よりの願」とは、「其時已來の願」のことで」あり、「経祖典には絶えて「本願」といふ名詞はない」として、「本願」となしているのは真意に心付かなかったからであらうとなしている。

このように「本ト願を立ッ」なのか「大願を立つ」なのかは議論のあるところであるが、御真跡のない今は、小川泰堂居士の行跡は一つの手がかりになる。

すなわち「大願を立てよう」と文釈された山川智応博士も、「御真跡は、もと本願とありしが如し。泰堂居士の『遺文録』稿本みな本願となり居れり。居士は、不審の字は、御真跡に对照したりとあればなり。但し正本対校せりといふ乾師の本に基づける稲田師の『全集』には、『大願』とあり。今は大願に従ふも、泰堂居士の『本願』の方、真なりしにあらざやと考ふるなり」とのべている。博士が「此の本願がましましたれば」というのはそのためであらう。

これをうけて田中芳谷師は、この間の事情について、この言葉は、古来、多くの刊本において「大願を立てん」となされていたことが知られている。しかし、小川泰堂居士が明治五年、身延山の宝蔵に入り、御真跡と对照せられ、「大願」は「本願」と記るされていたので、「本」と朱正されていた。その稿訂本が出版せられたのは、居士の没後で縁故の離れた方面で手がけられたため、この朱正はとり入れられず、従前通り「大」となされたのであり、それが昭和定本編纂にあたり、本来の真筆の型にあらためられ「本ト願を立ッ」という文にもとされた、⁽⁸⁾といういきさつを示している。

すなわち「本」であったのか「大」であったのか意見のわかれるところであるが、これの如何は小川泰堂居士の朱

「本願を立ッ」考（望月）

正の件にかかわることであり、他方、清水電山教授のように、「本」であつたとしても誤筆だとする意見もあることを知りうる。

ところが、茂田井教亨教授は『開目抄講讀』の中で、「本願を立ッ」について、昔は「本願を立つ」を「大願を立てん」とありましたが、「大願を立てん」とこれから立てるのではないのです。もと願をたてたのですから、三十二才の時にお立てになつた願だと思ひます、と、山川博士、室住教授と同じ意見をのべながらも、「普通の解釈ですと日蓮聖人の自覺的主体者としての立場から発願、立願されているのだ、とこう見るのでありますけれども、これは宗祖自ら柱とか、眼目とか、大船という事をおっしゃるには、その中に法華經がなければならぬ」とし、「『本尊鈔』式に言うならば、釈尊の因行果徳の二法が譲与されている日蓮という私が」ということで、「我の中には法華經の自己實現がある。すなわちこの法華經が末法という時を選んでゐるのです。法華經が末法とかかわりをもつのです」としながら、「その世界で発願され立願され」たもので、この我は「法華經の行者日蓮で」、「單なる安州の日蓮という個我ではなくて、日蓮法師と言われる歴史的な存在となつてゐる。これは歴史的な世界になります。歴史的な世界におけるわたくし」として、とらえて、それ故にこそ「本願を立ッ」と書かれたのだとしてゐる。⁽¹⁰⁾

すなわち、この茂田井教授のご理解は、写實的には日蓮聖人のご生涯の事実としてとらえながらも、法華經と日蓮聖人の間に、いわゆる射影と照射との關係が見られ、それ故にこそ、時間を超えた宗教的な「本願」としてとらえる昇華が見られることを知りうる。そして、このような茂田井教授のとらえ方は、実に重要な要素を含んでゐるように思われる。

誓願（本願）というのは *prañihāna* を訳したものであることは知られている。これは *pra* 前に、先に、曾ての意をもつ前置詞に *nidhāna* 保存、貯蔵、宝、願などの意をもつ名詞がつけ加えられたもので、瞑想、誓願などの意をもち、誓願、本願などと漢訳されている。そこでこの語は次のように使われている。

so 'pi Śariputra Padmaprabhas-tathāgato 'rhan-samyak-sambuddhas triṇy eva yānāny ārabhya dharmam deśayisyati | kim cāpi Śariputra sa tathāgato na kalpa-kaṣṭha utpatsyate | api tu prañihāna-vaśena dharmam deśayisyati ||⁽¹¹⁾

（舍利弗よ、かの尊い等正覚の華光如来は、三乗に関して法を説くであろう。舍利弗よ、かの如来は劫濁には出現しないであろう。しかし、本願の力によって法を説くであろう。）

すなわち、舍利弗が将来なるであろう華光如来も、釈尊と同じように一仏乗を三乗に分別した法を説くが、劫濁の時には出現しないが、華光如来が持つ本願力によって法を説くであろうとしており、本願 *prañihāna* の力が説示に強いかかわっていることを示している。妙法華経はこのところを、

華光如来亦以三乗一教化衆生。舍利弗。彼仏出時雖非惡世⁽¹²⁾。以本願⁽¹³⁾故說三乘法。

とし、正法華経は、

蓮華光正覚亦当承統說三乘法⁽¹³⁾。而仏説法具足一劫。所可演經示奇特願。

としている。かの仏が劫濁には出現しないという梵文法華経の表現が、妙法華経では惡世に非ずと雖も出現すとなさ

「本願を立ッ」考（望月）

「本願を立つ」考（望月）

れ、正法華經では説法具足すること一劫となされ相異をしているけれども、*prāṇidhāna* を本願と訳し、奇特願と訳していることは明白である。⁽¹⁴⁾ 奇特の願というのは、普通ではない願ということを示すが、本願 *prāṇidhāna* が単なる願ではなく、仏の深い心から生ずるものであるためであろう。

そして更に舍利弗への授記に先立って、この本願について、われは昔、曾て二万億の仏の所において汝を教化し、とした上で釈尊は、

汝亦長夜随_レ我受_レ学。我以_三方便_二引_三導汝故。生_三我法中_一。舍利弗。我昔教_三汝志_二願_一仏道_一。汝今悉忘。而便自謂_三已得_二減度_一。我今還欲_レ令_三汝憶_二念本願所行道_一故。⁽¹⁵⁾

妙法蓮華教菩薩法仏所護念の法華經を説くのだと語っている。ここでいう本願所行道の本願は、仏の本願ではなく、舍利弗の本願であることは明白だが、梵文法華經は、

mama ca tvaṃ Śāriputra dīrgharātram anusikṣito 'bhūt | sa tvaṃ Śāriputra bodhisattva-saṃmantritena bodhisattva-rahasyenēha mama pravacana upapannah | sa tvaṃ Śāriputra bodhisattvādhiṣṭhānena tat paurvakaṃ caryā-prāṇidhānaṃ bodhisattva-saṃmantritāṃ bodhisattva-rahasyaṃ na samanusmarasi | nirvṛto 'smīti manyase | so 'haṃ tvaṃ Śāriputra pūrva-caryā-prāṇidhāna-jñānānubodham anusmārayi-tu-kāma……⁽¹⁶⁾

（舍利弗よ、汝は長夜に私に学んだ。舍利弗よ、汝はかの菩薩の計画、菩薩の神秘によって、この世で私の教えの中に生まれた。舍利弗よ、汝はかの菩薩の立場によって、前世の所行と本願を、菩薩の計画と菩薩の神秘を思いおこさないで、私は減度したと考えている。舍利弗よ、汝に私は前世の所行と本願と智慧の回想を思いおこさせよう

と欲して……)

となして法華經を説いたとしている。舍利弗が昔、仏にしたがって仏道を志願したというのは、*purvakan caryā-praṇidhānam* を訳したもので、志願とは *praṇidhāna* のことで、舍利弗が前世におこしたものであり、本願所行の道を憶念せしめんと欲してというのも、*purva-caryā-praṇidhāna-jñānubodham* を訳したもので、本願とは *pr-aidhāna* のことで、舍利弗が前世におこしたものであることがわかる。すなわち妙法華經により志願と訳し本願と訳されているものは、ともに同一の言葉であり、それは前世において長夜に仏の御許で学びそこで立てた願であり、法華經はそのことを忘却しているので、思いおこさせるために説かれるのであるということ、更には、この本願は菩薩の立場によってなされたものであることを示すから、舍利弗がそれを想起しなかったのは、前世での所行と本願とを忘却し、自ら声聞としての立場に立っていたことに起因していることには、注意を払わなければならない。⁽¹⁷⁾

したがって、本願というのは、前世において仏に教導をうけるというかわりを持つこと、その前世で仏に対して立てたものであること、それ故にこそ、今世において自己と仏とのかかわり合った本願を思いおこすことが肝要なことと思われる。

4

本願(誓願) *praṇidhāna* のこのような基本的な使われかたをふまえたところで、法華經の中において使われている本願(誓願)の種々相を次に見ていくことにする。

方便品において一仏乗を説示した仏は、諸仏如来は但、菩薩のみを教化したまうことを不聞不知の者は仏弟子に非

「本願を立ッ」考(望月)

「本願を立ツ」考（望月）

ずとした上で、比丘比丘尼で、

自謂_下已得阿羅漢_二是最後身究竟涅槃_一。便不_二復志求阿耨多羅三藐三菩提_一（¹⁸）

このような人は増上慢 *abhināṇika* の人であるとしているが、この志求について梵文法華経は、*bhikṣuḥ* *vā* *bhikṣuṇī* *vā* *ṛhattvaṃ* *pratilāṇyād* *anuttarāyaṃ* *sanyak-saṃbodhaṃ* *prañidhanam* *aparigṛhyācchinno* *smi* *buddha-yaṇād* *iti...*（¹⁹）

（比丘比丘尼が阿羅漢に達したとして、無上等正覚を得たいとの本願をもたないで、私は仏乗には縁がないと…）として、志求が本願（誓願）*prañidhāna* であることを示している。ここでは仏の願いは但教化菩薩であるから、仏乗を求めようとしないう者、そのような本願に生きようとしないう者は増上慢だということになることを示している。そして偈の中において、

我本立_二誓願_一 欲_レ令_二一切衆_一 如_レ我等無_レ異 如_二我昔所願_一 今者已満足_{（20）}
が語られ、一切衆生を仏道に入らしめたとしているが、梵文法華経は、

yathā *ca* *paśyāmi* *yathā* *ca* *cintaye* *yathā* *ca* *saṃkalpa* *mam* *āsi* *pūrvam* | *paripūrvam* *etat* *prañidhāna* *mahyaṃ* *buddhā* *ca* *bodhiṃ* *ca* *prakāśayāmi*（²¹）

（曾て私が見、考え、決意したように、私の本願は完全に満たされた。仏として悟りを私は説く）

として、所願が本願 *prañidhāna* の訳であり、我本立誓願は意識であることを示している。そしてここでの本願は、仏が昔から抱いている願であることは明白である。

方便品においてはもう一箇所、

諸仏本誓願 我所行仏道 普欲^レ令^ニ衆生 亦同得^ニ此道^一 ⁽²²⁾

の語が見られる。梵文法華経は、

eko 'pi sativo na kada-ci teṣāṃ śrūtvāna dharmam na bhaveya buddhaḥ | prañidhānam etad dhi tat-
hagatānāṃ caritva bodhāya carāpayeyam || ⁽²³⁾

(法を聞いて仏とならないものは一人もない。悟りのために行じ、人をしても行じさせる。これが如来たちの本願である)

として、諸仏の本願は一切の衆生を仏とさせることであることを示して、妙梵同様である。したがって、ここでは仏の本願の何たるかを示しているといえよう。

そして譬喩品では、前掲の引用文に引き続いて、舍利弗に記前を与え、仏は悪世 kalpa-kāṣṭha には出現しないとしながら、

以⁽²⁴⁾本願^一故説^ニ三乘法^一

としており、梵文法華経も、

api tu prañidhāna-vaśena dharmam deśayisyati ⁽²⁵⁾

(しかし、本願の力によって法を説くであろう。)

として、三乗には言及しないが、仏は本願力による説示を展開することを示している。すなわち、仏の説法も本願によってなされることを意味する。

五百弟子受記品の中には、富楼那が諸大弟子に仏が記前をしたことをたたえ、考えたことをのべ、仏がそれをうけ

「本願を立ッ」考(望月)

「本願を立つ」考（望月）

て富樓那について語り、千二百の阿羅漢の所念を知った仏は迦葉にむかい彼等にも記別を与えることをつげ、更に五百の阿羅漢にも記別を与えたことが示されている。この五百の阿羅漢は喜び衣裏繫珠の喩を語り、仏は菩薩たりし時にわれ等を教化せられたが、私達は知らず覺らず、阿羅漢という小さな悟りで満足し、貧乏な暮らしをしていた。しかし、

一切智願猶在不_レ失₍₂₆₎

と語っている。梵文法華経は、

sarvajña-jñāna-praṇidhānena sadā 'vinaśjena te vayan bhagavans tathāgatena sambodhīyamānāḥ₍₂₇₎

（一切智者の知への本願が常に失なわれなかったので、世尊よ如来によって我々は悟られました。）

としているから、妙法華経が説く願は本願のことであり、以前（前世）から本願があったのにそれに気づかないでいた。今初めて気づいたのだが、それが失なわれずに来たために記別を得ることが出来たことを示している。

授学無学人記品では、阿難に記別を与えた仏が、釈尊と阿難とはともに空王如来 Dharmagaganābhīudgatarājaのもとで無上等正覚への心を発し、釈尊は勇気を出して精進したが、阿難は絶えず教えの多聞をねがった。このちがいで釈尊は非常に早く仏となり得たが、阿難は再びその釈尊のもとで教えを護持し法蔵を護るものとなった。そして、記別を与えたことを示しているが、妙法華経はそのところを、

阿難護_二持我法_一。亦護_二将来諸仏法蔵_一。教_二化成_三就諸菩薩衆_一。其本願如_レ是₍₂₈₎

と述べている。梵文法華経は、

punar ānanda-bhadro buddhānāṃ bhagavatāṃ saddharma-kośa-dhara eva bhavati sma | yad uta bod-

hisattvānāṃ parinispattī-heṭoḥ prañidhānam etat kula-putrā asya kula-putrasyēti⁽⁸⁷⁾

(又、阿難尊者は諸仏・世尊たちの妙法の蔵の護持者であった。又、善男子よ、菩薩たちを完成させるため、これがこの善男子の本願であった。)

とのべて、阿難が空王如来のもとでたてた本願、それは妙法を護持し、後の菩薩たちを導くためのものであったことを示している。この本願の故にこそ阿難は記別をうけ得たと見ることが出来る。ただ、阿難自身は空王如来のもとで自分がたてた本願を忘失していたらしい。それ故、妙法華経は、記別をうけた阿難が喜び未曾有なることを得たとし

て、
亦識二本願⁽⁸⁸⁾

としているが、梵文法華経は、阿難が記別を得、仏国土の名号を聞いて、

pūrva-praṇidhāna-caryāṃ ca śrūtvā tuṣṭa udagra āta-manaskāḥ pramuditāḥ prīti-saumanasya-jāto
'bhūt | tasmīnś ca samaye bahūnāṃ buddha-koiṭi-nayuta-śata-sahasrāṇāṃ saddharmam anusmarati
sm' ātmanaś ca pūrva-praṇidhānam |⁽⁸⁹⁾

(前世の本願と修行とを聞いて、満足し、勇躍し、大歡喜し、喜び、深く悦意を生じた。そして、その時に、彼は無量百千万億那由他の仏たちの妙法と自身の前世の本願とを思いおこした。)

前世で自らがたてた本願を思いおこしたことを、詳しくのべていることを知りうる。すなわち、識本願というのは、ただ識ることではなくて、前世での自らのあり方を明白に思いおこすことを意味しており、それあるが故に記別が与えられているということを明白に確認しておくことが大切であるといえよう。

「本願を立ッ」考(望月)

「本願を立つ」考（望月）

法師品からはじまる第二期成立の法華経は、第一期成立の法華経をうけて弘経の道が説かれるのであるが、法師品は、本願に対するこのようなあり方をうけて、更にそれをすすめて、次のように説示している。

薬王菩薩に因せて八万の菩薩たちに、妙法華経の一偈一句を聞いて一念随喜する者には記別を与えとし、更に、如来の滅後に法華経の一偈一句を聞いて一念随喜する者には無上正覚の記別を与えとし、法華経の一偈を受持・読・誦・解説・書写し、この経巻を敬い視ること仏の如くにし、種々な供養の事をなす者は、

已曾供養十萬億仏⁽³²⁾。於諸仏所成就大願。愍衆生故生此人間。

のである、と。これに対し梵文法華経は、如来の滅後 *parinirvāta* に法を聞いて一偈を聞いただけでも、随喜するだけでも無上正覚に達するであろうとした上で、

paripūrṇa-buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-pariyupāsītāvinas te Bhaisajyarāja kulaputrā vā kuladhitaro vā bhaviṣyanti | buddha-koṭi-nayuta-śata-sahasra-kṛta-praṇidhānās te Bhaisajyarāja kulaputrā vā kuladhitaro vā bhaviṣyanti | sattvānām anukampā 'rtham asmiṃ Jambudvīpe manuṣyeṣu pratyājātā veditavyāḥ |⁽³³⁾

（薬王よ、かの善男子善女人等は、百千万億那由佗にみちる仏たちに仕えるものとなるであろう。薬王よ、かの善男子善女人等は、百千万億那由佗の仏のもので本願をたてたものとなるであろう。（彼等は）衆生たちへの恵みのためにこの閻浮提において人間達の間に再生したと、知るべきである。）

としている。すなわち、妙法華経と梵文法華経の表現とに大差はなく、ともに法華経を聞いて一念随喜する者は、無量の仏に仕え、その仏たちのもので本願をたてたもので、衆生を恵むために人間として再生したものであることを示

している。そして妙法華經が大願としたのは本願 *prañihana* であることは当然のことであり、本願であるが故に前世で諸仏に仕え、そこでたてたものであることを示している。又、本願なるが故に衆生を愍み再生したといわれることは、本願の本旨を示すものであろう。それ故に法師品はこの説示を引きついで更に、法華經を受持・読・誦・解説・書写する者は、大菩薩であり、無上等正覺を成就したけれども、

哀³⁴三愍衆生二願生三此間一。

として、生³⁵此間一のは願³⁶つての上であることを示している。梵文法華經もこの願が、前生における本願力によるものだとし、

lokasya hitānukampakaṃ prañihāna-vaśenōpapanno 'smiṃ Jambudvīpe manuṣyeṣv asya dharmā-par-yāyasya saṃprakāśanātāyai | ⁽³⁷⁾

(世間を愍むために本願の力によって、この閻浮提の人間たちの中に、法門を説示するために出現をした。)

として、願³⁸つてというのは、本願の力 *prañihāna-vaśa* によるものであり、世間を愍み、衆生に法門を説くために生まれ出たものであることを再説している。そしてそれは、大菩薩である *tathāgata-dāsiṃ* (如来と見なす) といわれるが、梵文法華經は、如来の使 *tathāgata-dūta* (如来の使者) について、人間世界に再生したこれらの人々は、仏国土へ誕生するのをかえりみずになされた人々であることを明示しているから、この世に再生した人々——仏滅後に法華經を受持・読・誦・解説・書写する人々——に対して、法華經が払っている重要性には着目しておかなければならない。

それ故に、法師品は更に如来の現在にすら猶、怨嫉多し、況んや滅度の後をや、という法華經を仏滅後に人々に説

「本ト願を立ツ」考(望月)

「本願を立ツ」考（望月）

き聞かせようとする人々は、諸仏に護念せられることを得るとし、その理由は、

是人有三大信力及志願力諸善根力⁽³⁶⁾

によるのだとしている。梵文法華經も同じ表現をしているが、右の文に対して、

pratyātmikam ca teṣāṃ śraddhā-balaṃ bhaviṣyati kuśala-mūla-balaṃ ca prañidhāna-balaṃ ca⁽³⁷⁾

（彼等にはそれぞれに信力、善根力、本願力とがある。）

として、順序を異にするだけで、同じ内容を示しており、それは、

在所三存立三已身還聞。諸信力也。善本力。志願力。⁽³⁸⁾

とする正法華經の表現と同一である。そしてこの法華經三本はともに、信力、善根力、本願力を有する人は、如来と

共に宿るなり。⁽³⁹⁾としているから、仏滅後に法華經を説くという人は、前世において仏のもとでおこした本願力を思い

おこし、仏の言葉をそのままに信⁽⁴⁰⁾ śraddhā じ、説示を展開していくことが強調されていることを知ることが出来る。

しかして見宝塔品を見ると、空中⁽⁴¹⁾ antarikṣa に住在した多宝如来について、妙法華經は、

其仏行三菩薩道二時。作三大誓願⁽⁴²⁾。

となしており、梵文法華經は、

tasyātaḍ bhagavataḥ pūrva-prañidhānam abhūt⁽⁴³⁾

（かの世尊は前世にこの本願があった。）

としている。本願は前世において仏のもとでたてたものであることは、既説したところであるが、多宝如来が菩薩の道を行じた時にたてた大誓願という妙法華經の言葉は、それを裏づけるものであり、梵文法華經も、前世の本願

pūrva-praṇidhāna となつて後、⁽⁴²⁾ ahaṃ khalu pūrve bodhisattva-caryāṃ caramāṇo (実は私は前世において法薩の修行を行っていた。)としているから、多宝如来の行菩薩道というのは、やはり前世における行であることを明白に示している。

本願の本質がここにある故に、仏は多宝如来が法華經の会座に出現したのは、⁽⁴³⁾ 是多宝仏有深重願。

として、深重の願のために出現したことを示している。この深重の願は、梵文法華經によると、

bhagavataḥ Prabhūtaratasya tatāgatasāhataḥ samyak-saṃbuddhasya praṇidhānaṃ gurukam abh-
ūt | etad asya praṇidhānaṃ |⁽⁴⁴⁾

(等正覺の尊い世尊、多宝如来には重要な本願があった。その本願はこういうことである。)

であり、法華經が説かれることがあれば、法華經を聞くために出現するのだ、となされている。すなわち、仏もまた前世の本願によって行動をおこしていることを知りうる。このことは、見宝塔品の場合においても、

彼仏本願 我滅度後 在所_レ往 常為_レ聽_レ法⁽⁴⁵⁾

praṇidhānaṃ etasya vināyakasya niṣevitaṃ pūrva-bhave yad āsit | parinirvṛto pi imu sarva-lokaṃ
paryeṣati sarva-daśa-dīśāsu |⁽⁴⁶⁾

(前世の世において修めたこの指導者の本願は、彼が完全な涅槃に入った後でも十方のあらゆる世間に求められる(ということである))

とのべられているから、多宝如来の本願も前世にたてたもので、その本願の故に法華經の会座に出現したことは明白

「本願を立ッ」考(望月)

「本願を立つ」考（望月）

である。

そして勅持品を見ると、摩訶波闍波提、耶輸陀羅比丘尼に記前を与えた仏に対し、八十万億那由他の菩薩たちは如何にすべきであるか、と考へて、仏前で仏滅後に法華経を説きましようとする誓の言葉をのべるが、そのところで、この菩薩たちの心にふれて、

欲_三自_三滿_三本願_一。便於_三仏前_二作_三師子吼_一。而_レ發_レ誓言。⁽⁴⁷⁾

と表現している。これに対する梵文法華経の表現は、

ātmanas ca pūva-caryā-prañihānena bhagavato "bhīmukhaṃ siṃha-nādaṃ nadante sma⁽⁴⁸⁾

（自身の前世での修行と本願とによって、世尊にむかって獅子吼をなした。）

とある。妙法華経が欲自本願となした中の自本願は、菩薩たち自らが前世においてたてたものであること、そしてそれが修行につながっていることを明白に示している。

5

以上のことについて整理をしてみると、次のようになる。

品 名	方 便 品			本 願 主
	妙法華経訳	正法華経訳		
志	求	志	比丘	比丘尼
誓願	願	願	願	
本誓願	本所願	仏		

「本願を立ッ」考（望月）

であり、この *prañdhana* を立てたものは、仏から菩薩、比丘等の声聞・阿羅漢にまで及んでいることがわかる。すなわち、本願 *prañdhana* を立てるということは、それがどのような立場、身分の人であろうとも、それは仏のかかわりの中において立てられるべきものであることを示しているであろう。

しかし、妙法華經によると、前述の箇所以外においても、本願、大願等の訳出になるところを見ることが出来る。たとえば、五百弟子受記品の冒頭では、富樓那が仏の説示、声聞への授記、宿世の因縁の事を聞いて、仏を見つめて、世尊は甚だ奇特なりとして考えたことが述べられているが、その思念の中に、

唯仏世尊。能知我等深心本願⁽⁴⁹⁾。

という一語が示されている。これに対する梵文法華經は、

tathāgata evāsmākaṃ jñāta āśayaṃ pūrva-yoga-caryāṃ ca ⁽⁵⁰⁾

（如来こそ我々の意向と前世の瞑想による行を知っておられた。）

であって、本願 *prañdhana* の語は使用されておらないが、意向 *āśaya* の語を使い、それらが前世 *pūrva* にかかわっていることを示している。このことは如来は意向という我々の心のあり方が、前世とのかかわりの中においてあることを明白に示しているであろう。

しかしして見宝塔品末の偈は、如上の多宝如来は前世において立てた本願 *prañdhana* の故に入滅した後でも法華經が説かれる在々所往に出現する説示をうけて、

其多宝仏 雖三久滅度^一 以三大誓願^一 而師子吼

とし、多宝如来と釈尊と諸の化仏とはその意を知るべし、

諸仏子等 誰能護法 當_レ發大願_一 令_レ得_二久住_一⁽⁶¹⁾
と述べている。

これに対する梵文法華經は、

pāṇinīryto hi saṃbuddhaḥ Prabhūtaratano munih |
siṃha-nādaṃ śruṇe tasya vyavasāyam karoti yāh ||
aḥam dvītyo bahavo ime ca ye koṭīyo āgata nāyakanām |
vyavasāya śroṣyāmi jinasya putrāt yo utsa-
hed dharmam imam prakāśitum ||⁽⁶²⁾

(実に正覺者多宝尊者は完全に入滅したが、これの決意をなすものの獅子吼を聞くだろう。第二番目の私も、ここに集まって来た何千万の指導者たちも、この法門を説示しようと努めるだろう勝利者の息子たちから、決意を聞くだろう。)

として、本願 prañidhāna の語を使用してはいない。しかし、法華經を聞くために入滅後でも出現しようというのが多宝如来の本願 prañidhāna であるから、妙法華經は法華經を説こうと決意 vyavasāya したものの決意を、前世において仏の前で立てた決意ととらえ、それ故にこそ多宝如来の本願をうけとめるものとして大誓願、大願の訳としたものと考えられる。すなわち、ここでの決意 vyavasāya (大誓願・大願) は本願 prañidhāna から生み出されて来るものでなければならない。それ故に、法華經を説くことは難事だとなして、妙法華經は「宜_レ發大願_二」⁽⁶³⁾となしている。梵文法華經は、善男子よ、一切の衆生を感んで、指導者たちが困難な立場を耐えていることを考えよ、⁽⁶⁴⁾となしており、大願が prañidhāna であることは示していないが、その心のあり方は前述の事情により本願 prañidhāna のあり方と妙法華經はとらえたからであろう。それに衆生を感んで出場したのは、法師品によると前世における本願

「本願を立ッ」考(望月)

「本願を立ッ」考（望月）

prañidhāna によることは明白であるので、⁽⁸⁵⁾ここにおける決意、それこそは仏が衆生に対して求めるもので、自己が前世において仏に対して立てた本願 prañidhāna 遂行の生き方を求めたものと理解することが出来るように思われる。

このようなあり方に対し、勸持品の冒頭で五百の阿羅漢が受記を得て仏に語った「我等亦自誓願」⁽⁸⁶⁾の句、及び、安樂行品冒頭の文殊師利が仏に語った「敬順仏故發三大誓願」⁽⁸⁷⁾の句における誓願は、それぞれ「vayam api bhagavān utsahāmaḥ」⁽⁸⁸⁾（世尊よ我々は耐えまじょう）「utsodham bhagavato gauraveṇa」⁽⁸⁹⁾（世尊を尊重するために耐えました）とされており、本願 prañidhāna の語が使われておられないし、この耐えるというのが本願にかかわるものとも考えられない。先のものは仏が仏の本質、仏とのつながりについて語ったものであるのに、ここでは阿羅漢、文殊師利の言としてなされたもので、耐え忍ぶという心のあり方が、仏滅後の法華經説示に肝要なあり方とは考えられないからである。

6

法華經は声聞や在世の菩薩たちの弘經の願いに対し、これを許されずに地涌の菩薩を召し出されて、これに仏の滅後においての弘經の仕事を付属せられたとなされているが、地涌の菩薩は「在比娑婆世界之下。此界虚空住」⁽⁹⁰⁾「ye 'syān mahā-prthivyaṁ adha ākāśa-dhātau viharanti sma」⁽⁹¹⁾（その時、この大地における虚空界に住していた）とされ、弥勒らの疑に対して、「汝等一心信我從久遠來教化是等衆」⁽⁹²⁾「śrūtvā sarve mama śrad-dadhadvam | evaṁ citraṁ prāpta mayā 'gra-bodhi paripācitās cāti mayāve sarve」⁽⁹³⁾（聞った一切の者は私を信ぜよ。このように私によって昔に最高の覚りは得られた。私によって一切の者は成就せられた）となされて

いる。この説示は久遠実成にかなげられるものであり、地涌の菩薩らは久遠の昔から地下の虚空 *akasa* に住するもので、その時から仏によって教化されて来ているものであることを示している。すなわち、久遠よりこの方 *citra*、教化をうけ最高の覚りを与えられ、後の世の教化のために成熟されて来ていたのが地涌の菩薩であるということは、前世から仏に縁を持ち、仏と俱に歩んで来たものであることを意味する。そして、その人々が仏の滅後の世のために成熟されたというのは、そのために準備をされていたことを意味するから、これは仏の本願 *praṇidhāna* をうけつぎ、そこに生きる人々であることを意味しているであろう。虚空 *akasa* の語は一切を包みこむ仏の心の拡がりであることを意味するから、それは見宝塔品が示す空中（妙法華経は虚空と訳出）*antarikā* とは相違していることは明白であり、⁽⁸⁾ それだけ従地涌出品に対する注意は肝要で、一切を救わんとする仏の大慈悲心が、仏と衆生との前世からのかかわりの中で果されていることを明記しておかなければならないであろう。そして、その両者のかかわり、これこそが本願 *praṇidhāna* の語であると考えられる。したがって、開目鈔における「本願を立ッ」の一句について、法華経との関連の上に立つ慎重な審議を願っておきたい。

(58・9・17)

〔註〕

- (1) 昭和定本『日蓮聖人遺文』六〇一
- (2) 清水竜山『開目鈔辨義』（『日蓮聖人遺文全集辨義』）巻九下・五五五、渡辺宝陽『三大誓願』（『日蓮宗事典』）一二九、上田本昌『日蓮聖人における法華仏教の展開』一三七等
- (3) 山川智広『開目鈔辨話』四六九～四七〇
- (4) 石川海典『開目鈔』（『日蓮聖人御遺文講義』）巻二・二六五、田中応舟『開目鈔』下・二三三
- (5) 室住一妙『開目鈔に聞く』二七〇
- (6) 『録内啓蒙』巻九（開目鈔）下之下・一〇九五

「本願を立ッ」考（望月）

「本願を立ッ」考（望月）

- (7) 清水庵山『開目鈔』（『日蓮聖人遺文全集講義』）巻九下・五五四～五五五
- (8) 山川智応・前掲書四六九
- (9) 田中芳谷『開目鈔講義』三〇〇～三〇四
- (10) 茂田井教亨『開目抄講義』二〇九
- (11) Saddharmapundarika. ed. by H. Kern, B. Nanjio, Bibliotheca Buddhica, x, Petersburg. (三ノ saddha 二五ノ)
65
- (12) 尚、praidhana は誓願と訳すべきかもしれないが、「本願を立ッ」の関係で、こと更に本願と訳出した。
大正九・一一中
- (13) 同 同・七四中
- (14) 清水庵山教授は「元来「本願」なる語はもと弥陀經の特色要語で、今經祖典には絶えて「本願」という名詞はない」「開目鈔」（『日蓮聖人遺文全集講義』）五五五、となしておられるが、祖典にはともかく、法華經には明白に「本願」の語があることは忘れてはならない。
- (15) 大正九・一一中
- (16) saddha, 64～65
- (17) 正法華經は「吾身長夜亦開導汝以三菩薩道。爾緣此故與在吾法。如来威神之所建立。亦本願行三念菩薩教。未得減度。自謂減度。舍利弗。汝因本行欲得識念無央數仏。」としている。大正九・七四上
- (18) 大正九・七下、正法華經も志求と訳している。六九・下
- (19) saddha. 43
- (20) 大正九・八中、正法華經は「志願」、七〇下
- (21) saddha. 46
- (22) 大正九・九中、正法華經は「本所願」、七二下
- (23) saddha. 53
- (24) 大正九・一一中、正法華經は「奇特願」、七四中
- (25) saddha. 65

- (26) 大正九・二九上、正法華経は「志願」、九七中
- (27) *saddha*, 211
- (28) 大正九・三〇上、正法華経は「雅願」、九八中
- (29) *saddha*, 218~219
- (30) 大正九・三〇上、正法華経は「本行願」、九八中
- (31) *saddha*, 219
- (32) 大正九・三〇下、正法華経は「立願」、一〇〇中
- (33) *saddha*, 224~225
- (34) 大正九・三〇下、正法華経は「所願」、一〇〇下
- (35) *saddha*, 226
- (36) 大正九・三一中
- (37) *saddha*, 231
- (38) 大正九・一〇一中
- (39) 同 三〇中、「是人_ニ如来共宿。」一〇一中、「在_ニ如来室等頓_ニ一處_一。」*saddha*, 231 『*traiśaṅgata-vihārāṅka-sūtra-nivāsinaś*』(如来の精舎で一緒に居住する)
- (40) 大正九・三二下、正法華経は「本行_ニ道時而自発_ス願_一」、一〇二下
- (41) *saddha*, 240
- (42) 同 240~241
- (43) 大正九・三二下、正法華経は「本亦自誓」、一〇三上
- (44) *saddha*, 242
- (45) 大正九・三三下、正法華経は「於_ニ往故世_一自興_ニ此誓_一」、一〇四中
- (46) *saddha*, 251
- (47) 大正九・三七中、正法華経は「前世所行平等之願」、一〇六下
- (48) *saddha*, 271

「本ト願を立ツ」考(望月)

「本ト願を立ツ」考（望月）

- (49) 大正九・二七中、正法華経は「我等行跡志性之所帰趣」九四下
- (50) *saddha*. 199
- (51) 大正九・三四上
- (52) *saddha*. 262
- (53) 大正九・三四上
- (54) *saddha*. 263
- (55) 註の(32)と(35)参照、大正九・三〇中、下、*saddha*. 224~225, 226
- (56) 大正九・三六上
- (57) 同 三七上
- (58) *saddha*. 267
- (59) *saddha*. 275
- (60) 大正九・四〇上
- (61) *saddha*. 298
- (62) 大正九・四一中
- (63) *saddha*. 310
- (64) 拙論「見宝珠品における *antarikṣa* と從地涌出品における *ākāśa* について」(『日本仏教学会年報』二十三)

破和合僧について

望　　月　　海　　英

破僧伽は五逆罪の一つに挙げられ、律蔵の波羅提木叉（戒経）の僧殘法第十破僧違諫戒、第十一助破僧違諫戒と破僧健度に説かれている。ここではパーリ律、四分律、五分律、十誦律、摩訶僧祇律、根本説一切有部律、毘尼母經、善見律毘婆沙、薩婆多毘尼毘婆沙、根本薩婆多部律撰、鼻奈耶の破僧健度およびそれに該当する部分を比較検討し、その原形と背景について見てみたいと思う。

破僧健度には、提婆達多が彼の眷属の所にゆき釈尊の教団を五法を以て破僧すると告げることが記されているが、これは既に田賀龍彦博士が日本仏教学会年報二十九号に「提婆達多の五法について」と題して研究発表をされてるのでここでは省略する。

一 提婆達多の破僧伽

提婆達多の破僧伽については、各律に共通して説かれているけれども、その内容については各律それぞれ少しずつ異なっている。上座部系は提婆が五法を以て破したとするのに対し、大衆部系である摩訶僧祇律は布薩羯磨、自恣羯磨を共にせず、自意に従うを以て破したとしている。提婆の破僧伽を表にしてみると次の如くである。

破和合僧について（望月）

破和合僧について（望月）

表1でみる如く、大衆部系の摩訶僧祇律は提婆が破僧伽したことは説くが簡単に取扱っている。上座部系の毘尼母經、薩婆多毘尼毘婆沙も同様簡単に説いている。このことから摩訶僧祇律においては、提婆の破僧伽は上座が大衆に用いる批難の仕方を導入したものと見られよう。¹⁾ 即ち提婆の尽形寿林住、尽形寿乞食、尽形寿糞掃衣、尽形寿樹下住、尽形寿不食魚肉などの五法からもわかるように、提婆は釈尊の現実主義の立場をとったと思われる。摩訶僧祇律は上座部が提婆の理想主義を非とするのを理解できず、前述の如くの態度を取ったと見られよう。そして上座部諸律は、提婆が五法を以て破僧伽したことを説くが、これは彼らとは修行態度を異にする一団が存在したことを思わせる。また提婆が破僧伽した時、連れ去った衆を舍利弗、目連が連れもどすことを説くが、これは提婆の理想主義に賛同した者の中についてゆけず、脱落した者がいることを示していると思われる。

二 提婆達多の墮地獄授記

提婆達多の墮地獄は、八非法に蔽われ心捉われたことを説くのであるが、摩訶僧祇律、毘尼母經などには説かれていない。非法の数はパーリ律、四分律、五分律、十誦律は八つ、根本説一切有部律は三つである。これを表にすると表2の如くである。

この表で見ると各律に共通するものは少ない。パーリ律には八非法と三非法とが説かれるけれども、三非法の中の二つは八非法と重複している。もともと八つのものが、更に三つ増えたものと思われる。八非法も各律によって異なっており、原始型において八つという数は決っていたと思われるが、未だ名称が定まっていなかったであろう。そして各律でそれぞれ八つのものがあげられるようになったと見ることができよう。

表 2

	パーリ律	四分律	五分律	十誦律	根本説一切有部律
八 非 法	1 利	1 利	1 利	1 利	
	2 衰			2 衰	
	3 称		3 称	4 称	
	4 譏			5 譏	
	5 敬	5 恭敬	5 敬		
	6 不敬	6 不恭敬	6 不敬		
	7 惡欲				
	8 惡友	8 樂惡友		8 惡伴党	
		2 無利	2 不利		
		3 替			
		4 不替		3 毀替	
		7 惡知識	8 隨惡知識	7 惡知識	
			4 無称		
			7 樂惡		
				5 苦	
				6 樂	
三 非 法	1 惡欲				1 惡樂欲
	2 惡友				2 得不善伴
	3 下劣の殊勝証得				3 得其下品証得之時
					2 近惡知識

三 比丘の破僧伽

比丘の破僧伽は、上座部と大衆部では相違があるけれども、各律とも僧諍と破僧について説いている。それを表にする表3の如くである。

表でわかるように、パーリ律、十誦律、根本説一切有部律、薩婆多毘尼毘婆沙の八人以下は僧諍で破僧ではないと、四分律、五分律の七人以下は破僧にはならないと、摩訶僧祇律の人数が幾人でもどのようなことをしても、一住処で界が同じで、同じ布薩、同じ自恣、同じ僧事をなす限りは破僧伽でないと説く三つのグループに分られる。

破僧伽は、パーリ律は一方に四人、他方に四人、第九人唱言すると破僧、十誦律、根本説一切有部律、薩婆多毘尼毘婆沙、根本薩婆多部律撰は九比丘以上で両僧伽がある時に破僧となる。四分律、五分律は一方に四人、他方に四人、計八比丘が分かれて僧事をなす時は破僧伽である。摩訶僧祇律は、いかなる場合でも一住処、共一界にして別衆布薩、別自恣、別僧事をなす時は破僧伽であると説く。

以上の破僧伽はすべて比丘のみで、パーリ律、四分律、五分律、十誦律の各律は比丘尼、式叉摩那、沙弥、沙弥尼および破僧伽を助けた一般信者は破僧伽の罪にならないと説いている。

このように破僧伽については、八比丘以上と九比丘以上の二説があるけれど、おそらく九比丘以上で最少四人の同志が集まれば破僧伽になったと思われる。そして同界内、同住処で別別に僧事をなす時破僧伽となる。

四 破僧事

比丘が何をなすと破僧になるかを、パーリ律は、十八非法を以て不共の布薩、不共の自恣、不共の僧伽羯磨をなす

パ ー リ 律	四 分 律	五 分 律	十 誦 律	根本説一切有部律	摩訶僧祇律	毘 尼 母 經	薩婆多毘尼毘婆娑	鼻 奈 耶
布 薩 時	衆 僧 集 會	布 薩 時		安 居 後	布 薩 時			食 時
五法を以て壽を取らず	五注を以て壽を取らず	五法を以て壽を取らず	五法を以て壽を取らず	四捨修道を以て壽を取らず	布薩・自恣果實を共にせず、自意に従う	五法を以て壽を取らず	五法	
新参の五百比丘	五百の新学無智の比丘	五百比丘	1 四眷屬 2 二百五十比丘 3 二百五十比丘	五百比丘	六群比丘	百比丘	年少比丘	諸比丘
摩訶山に去る	伽耶山中に去る			摩訶山に去る	伽耶城			
舍利弗・目連ゆく	舍利弗・目連ゆく	舍利弗・目連ゆく	舍利弗・目連ゆく	舍利弗・目連ゆく				舍利弗・目連ゆく
一比丘釈尊に告ぐ	比丘釈尊に告ぐ	須陀洹比丘釈尊に告ぐ	一比丘釈尊に告ぐ	舍利弗・目連釈尊に告ぐ		諸比丘釈尊に告ぐ		舍利弗・目連釈尊に告ぐ
提婆達多、舍利弗・目連の來るのを見、我法を喜ぶと告ぐ	提婆達多、舍利弗・目連の來るのを見、善しという	提婆達多、舍利弗・目連が吾が第一の弟子とならんと喜ぶと告ぐ	提婆達多、舍利弗・目連の來るを見、釈尊の第一の弟子、吾に就すと喜ぶ	提婆達多、舍利弗・目連の來るを見、我衆中に入らんとする				提婆達多、舍利弗・目連の來るを見、歡喜踴躍す
提婆、半座を分つ	舍利弗・目連一の座に坐す	提婆、舍利弗・目連を座につける	提婆、右に舍利弗、左に目連を坐せる	左右の侍從を立てせ舍利弗・目連を坐せる				左右の侍從を立てせ舍利弗・目連を坐せる
提婆、舍利弗に説法さす	提婆、舍利弗に説法さす	提婆、舍利弗・目連に説法さす	提婆、舍利弗・目連に説法さす	提婆舍利弗に説法さす				提婆、舍利弗・目連に説法さす
我背痛少しし休息せん	我背痛少しし休息せん	我背痛少しし休息せん	我背痛少しし休息せん	我背痛少しし休息せん				我背痛少しし休息せん
釈尊を食ひ、僧伽梨を四疊し右脇を下にして臥し	釈尊を食ひ、僧伽梨を四疊し右脇を下にして臥し	釈尊を食ひ、僧伽梨を四疊し右脇を下にして臥し	釈尊を食ひ、僧伽梨を四疊し右脇を下にして臥し	釈尊を食ひ、僧伽梨を四疊し右脇を下にして臥し				釈尊を食ひ、僧伽梨を四疊し右脇を下にして臥し
提婆、疲極し寢念不正知にして須臾に睡る	提婆、疲極し寢念不正知にして須臾に睡る	提婆、疲極し寢念不正知にして須臾に睡る	提婆、疲極し寢念不正知にして須臾に睡る	提婆、疲極し寢念不正知にして須臾に睡る				提婆、疲極し寢念不正知にして須臾に睡る
舍利弗、初夜變教誡を説法す	舍利弗、初夜の神通により眼瞋心生ずを知り四諦の法言集果道をとく	舍利弗種々に妙法の初中後に善・善義・善味なると梵行の相とを説く	舍利弗、種々の因縁を以て仏の僧成を讃歎し、種々阿含し、提婆の惡道分をとき、阿鼻地獄に墮し一劫万劫うべからずとく	舍利弗、神通力を以て仰臥させ覺知せず、提婆の眠るを後見の如しという		阿難、衆中に僧伽梨を説し、地に擲ちて、これ非法なりと唱言す		舍利弗、仏法及び比丘僧を教に召める
目連神通神變教誡の説法をす	目連、舍利弗に請により神通を以て虚空に昇り或時は火を出し或時は身下に火を出し、或時は身上に水を出し、或時は身上に火を出し、身下に水を出し或時は火燃え毛孔より水を出す等の形を現じて説法す	目連種々に神力を現する	目連窟定に入り東方虚空に出て、四威儀の立坐臥を見七火光・三昧に入り種々の色光・青・黄・赤・白・紫・碧・緑・紅を現じ身上より火を出し身より火を出し或は身上より水を出し身より水を出し、南西方は如くの神變を現じ本處に坐す	目連舍利弗の請により神通を以て虚空に昇り行住坐臥の四威儀を見七火光・三昧に入り、種々光明の青黄赤白なるを現じ或は身上に水を出し或は身上に火を出し、或は身上に火を出し或は身上に水を出し、或は身上に火を出し或は身上に水を出し、東西南北に四種の神通を現じて本處に坐す				目連、若干の變化をなす、東渡西山、南渡北山、坐臥虚空或は三昧に坐し、三昧中に種々の光明を放ち或は黄・青・赤・黑・藍・白、身下出火、身上出水、身上出火、身下出水、西南上下若干の變化をなす。正觀する所なく諸の光明を放ち普く照す所有り
比丘等、遼摩離庵の法眼を得、集法を有する者は悉皆比跋法し、舍利弗に誘われて仏所竹林に到る	比丘等座上で遼摩離庵に法眼淨を得舍利弗・目連に誘われて去る	五百比丘遼摩離庵し、法眼淨を得、見法を得果し互に仏所に還るといふ、舍利弗・目連と俱に仏所に到る	五百比丘神通を見説法を聞いて我等あまりて邪道に墮せんとする、舍利弗・目連と俱に仏所に還る	提婆起きて眼を拭いたる舍利弗神通力を以て路に大坑をつくると提婆等の五人坑に落ち出づる所を知らず、提婆徒衆を見つけたらず本處にもどる		五十大大座、僧伽梨を脱して地に擲つ		五百比丘、目連の諸變化を現じたのを見て相語り、我等頃何見變幻せずいか如来を信じて提婆に依侍す、此の必然を疑わず、心開け意を解し慈心を起し如来に向って悔をなさんとし、舍利弗・目連と俱に仏所に至る
拘伽梨、提婆を越こし舍利弗、目連が五百比丘を連れ去るを告げると、目より熱血を吐く	三閼達多、提婆の脚指にふれ、舍利弗・目連が五百比丘を連れ去るを告ぐと、提婆驚怖して起ち熱血鼻孔より出る	三閼達多是指で提婆を蹴り起し、舍利弗・目連の五百比丘を連れ去るを告ぐと、提婆大いに怖懼し熱血鼻孔より出し、生身を以て大地獄に墮す	迦留羅提令、右脚を以て蹴り起し、舍利弗・目連の五百比丘を連れ去るを告げ、提婆驚愕の空なるを見迷悶して床に墮す四伴冷水を注ぎ醒かす、醒悟して四伴に我今より釈尊に歸さぬといひ捨成する	舍利弗・目連、僧衆迦留羅提竹林園の仏所にゆきまゐえんとす				棄茶陀婆左脚で提婆をけり起し、舍利弗・目連の五百比丘を連れ去るを告げる提婆衆の空なるを見、地に身を投げやせ。弟子中に水をかけ醒かさせ座上に坐する
舍利弗・目連釈尊を敬礼し一面に坐して破僧衆に受具足戒を請う	舍利弗・目連釈尊を頭面礼足し一面に坐し破僧衆に受具足戒を請う	舍利弗・目連、仏所に到り頭面礼足し一面に坐し五百比丘に受具足戒を請う	舍利弗・目連仏足を礼し一面に坐す					舍利弗・目連五百比丘と釈尊の所に來詣する
釈尊拒否し伽蘭迦迦過をなす	釈尊拒否し伽蘭迦迦過をなす	釈尊拒否し伽蘭迦迦過をなす						
釈尊は舍利弗に提婆の様子を問うと、提婆は衆僧に説法し、舍利弗に説法させ背痛少し息を告ぐを告ぐ	目連釈尊に提婆衆僧中に在り舍利弗に説法させ、背痛少し息を告ぐと、右脇を下にして野干の鉢風所臥すると告ぐ			衆僧、各自非法無慚愧の事をなせるを思惟し仏前に詣る、釈尊大慈を以て憐愍し帳戸になぐさめ種々説教す諸比丘心に動ずるを止む賢明皆除去て内外清淨になる				釈尊、阿難に若し我れ語をなすべし沸湯まきに面孔より出ずべしと語り大慈悲をもつて諸比丘に十二因縁を説き阿羅漢道を得させる

表 3

パーリ律	四分律	五分律	十誦律	根本説一切有部律	摩訶僧祇律	薩婆多毘尼毘婆沙	根本薩婆多部律撰
八人以下僧靜	一方に三人以下, 他方に三人以下で破僧舎羅羯磨をなしても破僧に非ず	七人以下で僧事を行じても破僧に非ず	八人以下は破僧ならず	八人以下は破僧ならず	<ul style="list-style-type: none"> ・非法衆満じ如法衆減ず ・非法衆減じ如法衆満ず ・非法衆満じ如法衆減十減十五 ・非法衆満じ如法衆減十減十五不坐法語人不与欲, 不与見, 不欲 ・非法衆満じ如法衆減十減十五不坐法語人 ・非法衆満じ如法衆満じ減十減十五不坐法語人不与欲, 不与見, 不欲強牽未受具足人足数 ・非法衆満じ如法衆満じ減十減十五不坐法語人不与欲, 不与見, 不欲強牽未受具人, 不足数一切尽破僧でも破僧ではない 	八人以下は破僧ならず	
一方に四人, 他方に四人, 第九人唱言すると破僧, 同住, 同境界も破僧	一方に四人或は四人以上, 他方に四人或は四人以上で破僧舎羅・羯磨をなすと破僧	八比丘で四人ずつ分れて僧事をなすと破僧, 同界内も破僧	九清淨同見比丘は破僧	九比丘以上, 兩僧伽あり羯磨をなし籌を行ずる時は破僧	非法衆満じ如法衆満じ或減十減十五, 不坐法語人不与欲, 不与見, 不欲, 強牽未受具足人不足数破僧不欲の時でも, 一住処共一界にして別衆布薩, 別自恣, 別僧事をなすは破僧	九人以上は破僧男子, 俗諦僧	九清淨人一是正主余八名助 天受先領四人後破正衆四人同彼行籌羯磨
比丘尼, 式叉摩那沙弥, 沙弥尼, 優婆塞優婆夷は破僧伽ならず	式叉摩那, 沙弥, 沙弥尼は破僧に非ず	比丘尼, 式叉摩那沙弥, 沙弥尼, 優婆塞優婆夷, 大臣は破僧に非ず	比丘尼, 式叉摩那沙弥, 沙弥尼, 出家出家尼は破僧に非ず			破羯磨僧は男子女人二俱能破 俗諦僧 第一義諦僧	
			唱説 取籌				
			擯比丘は破僧ならず				
			随順擯比丘, 助随順擯比丘, 作擯比丘 随順作擯比丘, 助随順擯作擯比丘, 大長老 随順大長老比丘, 助随順大長老比丘は破僧である				
						男子は破僧	

表 4

パーリ律	四分律	五分律	十誦律	根本説一切有部律	摩訶僧祇律	毘尼母經	薩婆多毘尼毘婆沙
1 非法を法と説く			1 非法を法と説く			6 非法を法と説く	1 非法を法と説く 五法非法説是法
2 法を非法と説く			2 法を非法と説く			5 法を非法と説く	2 法を非法と説く 八聖道是法説言非法
3 非律を律と説く						7 非毘尼を毘尼と説く	3 非律を律と説く 五法非律説言是律
4 律を非律と説く						8 毘尼を非毘尼と説く	4 律を非律と説く 八聖道是律説言非律
5 非所説を所説と説く			13 非説を説と説く				13 非教を是教と説く
6 所説を非所説と説く			14 説を非説と説く				14 是教を非教と説く
7 非常所を常所と説く			12 非常所を常所と説く				12 非常所を常所と説く
8 常所を非常所と説く			11 常所を非常所と説く				11 常所を非常所と説く
9 非所制を所制と説く							
10 所制を非所制と説く							
11 無罪を罪と説く							
12 罪を無罪と説く							
13 輕罪を重罪と説く			7 輕を重と説く			11 輕を重と説く	7 輕を重と説く
14 重罪を輕罪と説く			8 重を輕と説く			15 重を輕と説く	8 重を輕と説く
15 有餘罪を無餘罪と説く							
16 無餘罪を有餘罪と説く							
17 飽罪を非飽罪と説く							
18 非飽罪を飽罪と説く							
			3 非善を善と説く				
			4 善を非善と説く				
			5 犯を非犯と説く			10 犯を非犯と説く	6 犯を非犯と説く
			6 非犯を犯と説く			9 非犯を犯と説く	5 非犯を犯と説く
			9 有残を無残と説く				9 有残を無残と説く
			10 無残を有残と説く				10 無残を有残と説く
	1 妄語						
	2 相似語						
		1 五法を説く					
		2 白ら詭を行ずる					
19 不共の布薩をなす					3 同界・同住處で別布薩をなす		
20 不共の自恣をなす					4 同界・同住處で別自恣をなす		
21 不共の僧伽羯磨をなす	3 羯磨をなす	4 界内で僧事を別行する		1 非法に非法想し別住し羯磨をなす	5 同界・同住所で別羯磨をなす	2 破僧	2 界内界外一切尽破
	4 舍羅を取る	3 壽を取る					
					1 惡法を増す		
					2 惡人を増す		
						1 破法輪	
						3 朋党破	
						4 見破	
							1 一人自称作仏
							3 破閻浮提

時と説いている。四分律、五分律はそれぞれ四事、十誦律は十四非法、毘尼母經は四事と八非法、薩婆多毘尼毘婆沙は三事と十四非法、摩訶僧祇律は五事、根本説一切有部律は一事をあげるにすぎない。これを表にすると表4の如くである。

この表からもわかるように、十誦律を除く各律に共通しているのは、同界、同住処で別の羯磨をなす時のみである。即ちこの破僧事については、枝末分裂以前には固定した形のものが存在しなかったと思われる。枝末分裂以後、各部派においてそれぞれに定まったものと見ることができよう。

次に破僧伽した比丘はどうなるかをみると根本説一切有部律はそれを説いていない。毘尼母經は和合僧のみを、薩婆多毘尼毘婆沙、鼻奈耶は破和合僧のみを説く。これを表にしてみると次頁の表の如くである。

表で見るように破和合僧の罪は、一劫地獄に墮して罪を受けることが説かれている。和合僧については、一劫天上の樂を受けると説く。このように破僧者は地獄に墮ちると厳しく破僧を誡めている。

五 僧伽諍論

仏教僧伽の僧院化がすすみ、比丘達がその土地に定着し僧院に常住するようになると、僧伽は同人的集合化され、定着した比丘尼達の感情や意見の対立は、一界内にいくつかの同志的結合を生ぜしめるようになってきた。⁽²⁾

仏教僧伽は、地域的に展開しつつある現前僧伽に横のつながりを与えることによって、教団の統制と和合をはからんとした。従って、僧伽における諍論は僧伽の和合を破壊するものとして早くから誡められている。⁽³⁾即ち、同一界内に同一住処があつて同一布薩の行なわれるのが、僧伽和合の理想的形態であつたのである。⁽⁴⁾

破和合僧について(望月)

表 5

破和合僧について（望月）

パーリ律	四分律	五分律	十誦律
和合僧を破さば一劫住する罪過を積み一劫、地獄に煮らる	破和合僧在泥梨中一劫受罪不可求 破和合僧泥梨中受罪一劫不療	若僧和合而破之者墮地獄中一劫受苦 破和合僧一劫地獄苦	破和合僧受大罪受大罪後一劫寿墮阿鼻地獄中
破僧を和合せしめば梵福を積み一劫天上に楽しむ	和合僧得梵天福一劫受楽	若僧已破能和合者其人生天一劫受楽 和合破僧一劫生天楽	和合僧、永天上受楽
根本説一切有部律	摩訶僧祇律	毘尼母經	善見律毘婆沙
	破和合僧一劫泥梨罪 当墮惡道中入泥梨中經劫受罪		破和合僧一劫在阿鼻地獄受諸苦痛
	和合僧一劫有善報	和合破僧生天楽一劫報	和合僧一劫在天上 勸喜受梵天福
薩婆多毘尼毘婆沙	鼻奈耶		
入阿鼻獄受罪一劫	無救入地獄		

現前僧伽は、原則としてその限定された住処の地域内に現に居るものが僧伽の現在の成員である。故にその地域から次の地域へ出た比丘は、次の地域の僧伽の成員となったのである。がこれは原則であって、実際はその土地に定着している比丘の集団がその土地の現前僧伽を形成するにいたった。⁽⁵⁾

そこで、僧伽の統制を維持し諍事が生じた場合には、それを円満に処理するための公の機関たる僧伽羯磨の成立が必要となった。⁽⁶⁾後に至って同一布薩、同一自恣、同一僧伽羯磨は、その住処の地域的集合の行事ではなく、その住処における同志的結合、即ち人的結合の行事となった。⁽⁷⁾

羯磨は本来「行為」を意味したが、ここでは僧伽における行事、行政、人事などすべての議事を決定し執行する機関の意味に用いられる。僧伽羯磨は非諍事と諍事の二つに分けられる。「非諍事」は、比丘の共同生活と僧伽の一般の行事に関して、僧伽の構成員の賛成を必要とする場合に行なわれる。⁽⁸⁾「諍事」は、僧伽に諍論が生じた時に僧伽の和合を維持するために諍事の当事者に対して、彼の発言または行為が正当であるか否かを決定する必要に迫られたとき行なわれた。諍事の是非の裁定は、一種の裁判の形式をとった僧伽羯磨によって決せられた。諍事は、その内容によって四種類に分類され、それを処理するための手続きの方法として七つを数える。これを七滅諍法と呼んでいる。⁽⁹⁾

七滅諍法の中で、現前毘尼法と多覓毘尼法とによって諍論諍事は処理される。現前毘尼法は、一方が法と主張し、他方が非法と主張する時に、この正否をその僧伽が判断し、他の僧伽が判断し、有識者が判断し、有識者の委員会が判断する等、種種と公正を期した判断をなして諍論者の承認を得ることにとめるもので、どの判断でも諍論者の承認を得ざる時は、最後に多覓毘尼法（多数決）を以て決定し、これは強制して諍論者に承諾せしめるものである。この最後の多数決は、最後の審判者としての教主がなく、またそれに代る最高最終の裁判機関を有しない仏教僧伽の最

破和合僧について（望月）

後の手段である。評論の終結しないことは破僧伽を意味するから、この多数決は破僧伽を防止する唯一の最後の手段であったと言える。⁽¹⁰⁾

最後の決は多数決であるが、この際この多数決に敗れた少数者が、一僧伽の最低少数定員の四人以上であればそれで一現前僧伽を成立し得た。一方が四人以下の少数で敗れた時は、別衆に止って僧伽を成立し得ず、従って比丘として僧伽として必須条件たる布薩、自恣、僧伽羯磨をなし得ないから破僧とならなかった。

そこで、比丘の総数が九人以上の場合、最少九人の僧伽であれば、最少四人のものが結束して分派独立のために故意に異見を造作して固執しても、分派独立は可能であるしそれを阻止する方法はなかった。⁽¹¹⁾即ち、四人以上の比丘が新たな僧伽を形成することは規定に抵触しない合法の行為であった。従って仏教僧伽においては、反対意見の者を一つの僧伽から追放することは可能であっても、彼らが新たに僧伽を形成して仏教徒たるを自認する限りにおいて、仏教よりの破門は成立しなかった。これらは、教団の平和の破壊を避けるとともに、自由と平等とを僧伽において実現しようとした理想の現われである。⁽¹²⁾

提婆達多は、釈尊に仏教僧伽の改革案を提出したが、これを拒否されたので提婆の方から破僧してその一統と新僧伽を設立したのである。⁽¹³⁾そして、小品の破僧譴度は、この破僧の精神は批難するが破僧行為に対する制裁はまったく無力化している。即ち、提婆を破門にする文がどこにもないのである。⁽¹⁴⁾

いわゆる提婆達多は、仏教の一つの現前僧伽を合法的に設立したのであり、仏教から別れたのではない。釈尊の現前僧伽から別れて、同一地区に不共の布薩と自恣と羯磨をなす現前僧伽を作ったのである。即ち、提婆も仏教比丘たることを捨てたのではなく、提婆の僧伽も仏教以外のものとなったのではなかったのである。⁽¹⁵⁾

仏教の破僧は、必ずしも仏教を破るものではないのであり、その取扱いは極めて特殊である。各地の現前僧伽では事実として幹部があり、幹部の意見がその現前僧伽の正統な意見としてあったことは事実であったと思われる。そして、どの僧伽でも幹部の意見が一応その現前僧伽の中心的意見、見解が多数を占めた。そこで、破僧とはその僧伽における幹部派の意見に対して、反対するものが四人以上の同志を求め分立することであるが、四人以上が現前僧伽としての機能を有し、その決議として合法制を持つ以上はその分立を認めざるを得ないのである。即ち、破僧ではなく分派であって仏教外へ出ることはない。⁽¹⁶⁾

六 結 び

根本分裂以後、社会経済の進展にともない教団内の大部分を占める比丘達が安易な修行生活をするに至って、隠遁主義を奉ずる人々を特異な存在として異端視し、彼等の修行態度を以て提婆達多の破僧伽の伝説に付加したものと見られる。しかし、この様に非難されながらも、提婆を首とする隠遁主義を奉ずる人々が七世紀以後に至るまで存在したことは『高僧法顯伝』、『大唐西域記』等に知られる如くである。また、四人以上の同意見の比丘が集まると分派が可能だったことも仏教教団の分裂を容易ならしめた。そして、提婆達多の破僧伽に見られる如く、隠遁主義を奉ずる人々が僧院主義者から分派独立したものと見られ、以後長い間存在したものと思われる。

〔註〕

- (1) 佐藤密雄博士『原始仏教教団の研究』七九三頁。
(2) 佐藤博士、同上二九八頁。

破和合僧について(望月)

破和合僧について（望月）

- (3) 塚本啓祥博士『初期仏教教団史の研究』三三九頁。
- (4) 塚本博士、同上三四〇頁。
- (5) 佐藤博士、同上二九七頁。
- (6) 佐藤博士、同上二九八頁。
- (7) 塚本博士、同上三四〇頁。
- (8) 塚本博士、同上三四五頁―三四六頁。
- (9) 塚本博士、同上三四七頁―三四八頁。
- (10) 佐藤博士、同上二九九頁。
- (11) 佐藤博士、同上二九九頁―三〇〇頁。
- (12) 塚本啓祥博士『仏陀』一九九頁。
- (13) 佐藤博士、同上三〇三頁。
- (14) 佐藤博士、同上二六三頁。
- (15) 佐藤博士、同上三〇三頁―三〇四頁。
- (16) 佐藤博士、同上三〇四頁―三〇五頁。

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(二)

若 杉 見 龍

一

草堂寺に羅什像が奉安されるに際し、同寺に羅什訳の經論を奉安しようという意見が興ったのも当然である。筆者は羅什訳といわれている經論すべてを草堂寺に奉安することがよいし、又同寺に付屬して、羅什及び羅什訳經論を對象とする研究所があつてよい程に思うのであるが、中国仏教界の現状と、草堂寺には老比丘尼がただ一人居住するのみ(昭和五十六年)で、羅什の墓所と寺を護持している実態とを考慮に入れて、せめて羅什訳の經典だけでも奉安した方がよいと主張した。しかし、そうは言つても、羅什訳の經論といへば、現在、資料として最も信頼されている『出三藏記集』卷二によつて見るに、妙法蓮華經・大智度論を初めとして、三五部・二九四卷という大部である。且つそれらの經典の大部分は大正藏經本等に見られるように羅什訳以外の經典とも合冊となつて印刷・製本され、羅什訳のみのものは僅かである。現在、日蓮宗寺院で仏前に供える卷子本の如き体裁のものがあれば好都合であるが、これも法華經を除いては殆ど望めないであろうし、折本の体裁をなしているものについても同様な状態であろう。結局はとりあえず、『妙法蓮華經』一部にしようということが、「草堂煙霧の会」の會長・玉沢妙法華寺貫主・松井大周師のご意見でまとまつた。しかし、『法華經』一部を奉納するにしても、一体どの版・どの体裁のものがよいであらう

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

うか。体裁は訳出當時を偲ぶものとして卷子本がよいとしても、現行の『妙法華經』と羅什が訳した當時の『妙法華經』との間には文字に多少の異同があると想像される。書籍が書写によって流布した時代には止むを得ないことであろう。敦煌出土の『妙法華經』が羅什訳出當時の『妙法華經』に最も近いという意見もある。あれこれと理窟を述べていたら、草堂寺に納める『妙法華經』は遂にないことになる。これは啻に『法華經』のみならず、他の羅什訳についても大同少異であろう。羅什が訳出した時の經論がどこかで発見されれば別のことであるが、現在において、一文一句、訳出當時と全く同じ文字の經典を探索することは至難の業といつてよい。

そこで学問的嚴密さには少々欠けることはあつても、兎も角、日本で流布している『妙法華經』を奉安しようという事になった。そうは言つても、『法華經』の流布本にも色々な版もあり、又、写本も多い。窮余の挙句に考えられたのは宗祖ご所持の『妙法華經』である。宗祖ご所持本は、宗祖が佐渡法難の折にも持参せられ、又ご臨終の折にも枕頭に置かれたことは既に有名である。宗祖ご所持のいわゆる『注法華經』は故兎木正亨博士が春日版である事を指摘され、又複製もあるので草堂寺に奉安するには我々日蓮宗徒にとつて最もふさわしいということになり、立正安国会のご好意により、『注法華經』の複製本を草堂寺に納めた次第である。

二

宗祖ご所持の『注法華經』が春日版であるとすれば、春日版の『法華經』の複製でよいのであつて、何もわざわざ『注法華經』と限定しなくてもよい。『注法華經』は周知の如く、經文の行間に或は裏面に宗祖が行・草体の文字を以て注記されたものである。草堂寺といへば、日・中兩國国民のみならず、欧米人等の參詣もあることであらうし、彼

等が卒爾に之を拝した時は、落書きの多い本ぐらいにしか理解しない者もあろうかというものである。しかし、特に『注法華經』と限定したのは、『注法華經』の裏面に宗祖がご聖筆で、『正法華經』の二十二の誤を指摘されていることである。これは宗祖が『妙法華經』と『正法華經』を比較されて、『正法華經』に「二十ノ二誤（欠落を含む）」のあることを明示されたものである。いうまでもなく、羅什の訳場においては先訳である竺法護の『正法華經』が参考とされた。『正法華經』を参考とした上で、『妙法華經』が訳出されたのであるから、宗祖は『妙法華經』こそが『正法華經』より勝れた翻譯であると理解されたのであろう。勿論、今日の原典批判学立場からの立言は別であつて、それは全く別な問題として考察されなければならない。

三

さて、宗祖が『正法華經』における「二十二誤」というのは何か。以下、この点を考察してみたいと思う。

『注法華經』巻第一「方便品」の十如に該当する箇所裏に「二十二誤」として次の文が述べられている。『私集要文注法華經』（以下、私集本と略称する。版權者立正安国会、発行所本満寺、昭和四十五年刊）上・一四七頁―一四五頁に

正經善權品闕十如。闕開示悟入。応時品三十六千億仏。火宅五車。信樂品 天姓。藥草喻已後一長行偈頌。五百品 初長行偈頌。又同品 迦葉汝已知五百自在者等一行半偈闕。又繫珠喻闕。阿難羅云決品 新發意菩薩八万。藥王如來品誤。宝塔品有二誤。多宝如來說法花經誤。多宝本願聞名利益誤。以提婆品入宝塔品誤。安樂行品 四安樂行闕誤。法師品有二誤。眼千二百。余五千二誤。促經功用三十三天誤。不輕生報闕日月灯明。神力品中惣

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

一種。別出九種誤。藥王品有二誤。定力缺身不言燒臂誤。十誤譬喻一闕不具誤。妙音有二誤。妙音師弟長短不准誤。三十四身多有缺減誤。觀音品三十三身多闕不滿誤。同上

とある。これを『日蓮聖人註法華經』（加藤日源・加藤文淵編 昭和七年刊）上九十一頁と比較してみるに、「促經功用三十三天誤」が「經の功用に従う三十三天の誤」と読まれていて、判読に相違があるのが分る。原文では「侖」となっているが、これが「從」「促」の兩字に読まれているのである。川澄勲編『佛教古文書字典』によると、「侖」を「從」と判読されているようである（同書五十四頁）。又、「促」とも判読されている（同書二百十四頁）。何れに読むのが正しいかは筆者の力に余ることで、何れが正しいか判断いたしかねるが、「促」の字とした方が文意に合するようである（後述）から、以下、「促」の字としておく。

次に、宗祖が挙げられた右の文を品ごとに分類すると次の通りである。括弧の中は『妙法華經』（以下什訳と略称）の品名である。

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 善權品（方便品） | 二 闕誤（以下「闕誤」の二字を略す） |
| 2 応時品（譬喻品） | 二 |
| 3 信樂品（信解品） | 一 |
| 4 藥草品（藥草喻品） | 一 |
| 5 五百弟子決品（五百弟子受記品） | 三 |
| 6 授阿難羅云決品（学無学人記品） | 一 |
| 7 藥王如來品（法師品） | 一 |

- | | | |
|----|------------------|---|
| 8 | 七宝塔品（見宝塔品） | 二 |
| 9 | 提婆品ヲ宝塔品ニ入ル誤 | 一 |
| 10 | 安行品（安樂行品） | 一 |
| 11 | 歎法師品（法師功德品） | 二 |
| 12 | 常被輕慢品（常不輕菩薩品） | 一 |
| 13 | 如來神足行品（如來神力品） | 一 |
| 14 | 藥王菩薩品（藥王菩薩本事品） | 二 |
| 15 | 妙吼菩薩品（妙音菩薩品） | 二 |
| 16 | 光世音普門品（觀世音菩薩普門品） | 一 |
- 以上、『正法華經』（以下晉訳と略称）によって品名及び闕誤を数えると、十六品に亘って、二十四の闕誤が挙げられる。宗祖は「二十二誤」と言っておられるので、数が一致しないが、「藥草品」と、「五百弟子決品」の最初の一文とは什訳と比較すれば、付加された部分ということになるので、宗祖は「誤」の中には数えられなかったかも知れない。又「已上闕四」の語の意味は不明である。

『日蓮聖人註法華經』上 九十一頁の欄外に

祖語か。但し、此説出所未だ檢せず。又惺本には一より八までの番号を付せり。

と、編者は述べ、この「二十二誤」が祖語か否か疑っておられるのであるが、

「私集本」上 二百九十二頁には

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

正經第二 応時品 堪至無上正真之道

とあり、次の行には

偈頌云 迦葉沈吟住於聖惠

とある。前者は大正・九・七三・中に見られ、後者は大正・九・七四・上（但し、以葉沈吟 住於聖慧とある）に見られる。その他晋訳を引かれた箇所が数多く見られるので、宗祖が晋訳と什訳を対照せられたのは間違いない所である。しかし、上述の「二十二誤」の中に「提婆品ヲ宝塔品ニ入ル誤」として挙げられているのに、『注法華經』の「提婆達多品」には「正云 梵志品」（「私集本」下 五百十二頁）と書かれている。随って、宗祖は「提婆品」が「宝塔品」と直ちに連続している『正法華經』（例えば高麗版）と、「梵志品第十二」等と書かれた本（例えば宋本・宮本等）の両本を見られたかどうか不審である。

宗祖は「二十二誤」と述べられているが、什訳に見られない部分まで含めて数えれば、二十四条となることは既に述べた如くである。よって以下、一条ごと晋訳と什訳を比較して述べて見たい。そして、晋訳と什訳の対照は『梵文法華經写本集成』（以下、『写本』と略称）の巻末にある『漢訳法華經』が大変に便利であるから、同書の巻・頁を挙げ、『大正藏經』における出典箇所¹の註は必要以外、なるべく省略した。『写本』を見れば、大正藏經の巻・頁・段が指摘されているからである。

一 正經 善権品闕十如。（正經 善根品二十如ヲ闕ク）

晋訳に十如のないことは周知の事で、今更述べる程のことはないが、一応挙げてみよう。

什 訳

所謂諸法。如是相。如是性。如是体。如是力。如是作。如是因。如是縁。如是果。如是報。如是本末究竟等。

(『写本』第二卷 二頁)

晋 訳

從何所來諸法自然。分別法貌衆相根本知法自然。

二 闕開示悟入。(開示悟入ヲ闕ク)

この箇所は次の通りである。

什 訳

諸仏世尊。欲令衆生開仏知見使得清淨故。出現於世。欲示衆生^{イナシ}仏之見故。出現於世。欲入衆生悟仏知見故出現於世。欲令衆生入仏知見道故。出現於世。舍利弗。是為諸仏以一大事因縁故。出現於世。

(『写本』第二卷 九頁)

晋 訳

以用衆生望想果心勸助此類出現于世。黎元望想希求仏慧出現於世。蒸庶望想如來宝決出現于世。以如來慧覺群生想出現于世。示寤民庶八正由路使除望想出現于世。以故当知。正覺所興悉為一證^{イニ}。

三 応時品 三十六千億仏(応時品ニ三十六千億仏)

什 訳

我昔曾於二万億仏所。

(『写本』第三卷 四頁)

晋 訳

三十二千億仏。

である。「三十二千億仏」が『注法華經』に「三十六千億仏」とあるのは宗祖所覽本の誤か、或は示同の趣きであろう。

四 火宅五車（火宅ノ五車）

これは火宅の中の人数と、車の種類についてであらうか。

(i) 人数については

什 訳

一百二百乃至五百人。（中略）長者諸子。若十。二十。

數百千人。（中略）長者有子。若十若二十。

晋 訳

或至三十。

（『写本』第三卷 十頁）

(ii) 車の種類については

什 訳

如此種種羊車。鹿車。牛車。今在門外。

當賜衆乘。象車。馬車。羊車。伎車。

晋 訳

（『写本』第三卷 十一頁）

とある。

五 信樂品天姓（信樂品ノ天姓）

ここでいう天姓についてはよく解らない。記してご示教を乞う。

六 藥草喩已後一長行偈頌。（藥草喩已後ニ一長行ト偈頌アリ）

これは什訳の藥草喩品の終った後、晋訳では更に「仏復告大迦葉」（大正・九・二〇・中）以下の文が続いていることをいうのである。（『写本』第四卷二十二頁——二十八頁参照）因みに『添品法華經』は什訳に「譬如日月」以下の文を付している。（大正・九・一五三・中——一五五・上）

七 五百品初長行偈頌（五百品ノ初メニ長行ト偈頌アリ）

これは晋訳の初め（大正・九・九四・下・十一行目）から偈の終り（大正九・九五・中）までを指すのであろう。（『写本』第六卷二〇四頁参照）

八 又同品迦葉汝已知五百自在者等一行半偈闕。（マタ同品ニ「迦葉汝已知五百自在者」等ノ一行半ノ偈ヲ闕ク）これは什訳にある「迦葉汝已知 五百自在者 余諸聲聞衆 亦當復如是 其不在此會 汝當為宣說」（大正・九・二八・下）の文が晋訳に闕けていることを指している。（『写本』第六卷 十頁 参照）

九 又繫珠喩闕（マタ繫珠ノ喩ヲ闕ク）

これは有名な繫珠の譬喩についてであるが、宗祖は晋訳に闕けていると述べておられるが、現行の晋訳には繫珠の譬喩は闕けていない。（大正・九・九七・中）（『写本』第六卷・十一頁参照）宗祖のご所覽本には闕けていたのであろうか。

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

十 阿難羅云決品。新發意菩薩八万。（阿難羅云決品ニ「新發意ノ菩薩八万アリ」ト）

これは什訳には「新發意菩薩八千人」とあるが晋訳には「新發意八万菩薩」とあり、この八千と八万の相違を指摘したものであらう。（『写本』第六卷 十六頁 参照）

十一 藥王如來品誤（藥王如來品ノ誤）

これは短文であつて、何の事かよく判らないが、前条において「八千」と「八万」の人数について問題とされているので、それに類同して考えれば、什訳に「於八十億劫」とあるが、晋訳には「若於十八億劫」とある数字に対する相違を述べられたものと理解してよいであらう。（『写本』第六卷 二十七頁 参照）

十二 宝塔品有二誤。多宝如來說法華經。（宝塔品ニ二ツノ誤リアリ。多宝如來『法華經』ヲ説ク）

これは晋訳に「為諸十方講說經法」（大正・九・一〇二・下）とあることを指したのであらうか。勿論、什訳には見当らない。（『写本』第七卷 三頁 参照）「二誤」については不明である。

十三 多宝本願聞名利益誤（多宝ノ本願ハ聞名利益トスル誤）

晋訳について見るに、多宝如來の本願として、釈迦仏は大弁菩薩（什訳の大樂說菩薩）に次のように告げられている。
る。

今見能仁如來正覺。本行學道為菩薩時。用衆生故不^レ惜^レ身命。精進不懈權方便。布施持戒忍辱精進一心智慧。求頭

与頭。求眼与眼。求鼻与鼻。求耳与耳。求手足支体妻子侍従。七宝乘乘象馬衣裘。国邑墟聚。恣人所求。無所愛惜。自致得仏。(大正・九・一〇三・上)

右が多宝如来の本願であるが、什訳には見られない。(『写本』第七卷 四頁 参照) 多宝如来及び多宝塔の出現については

什 訳

大衆説。今多宝如来^(イなし)塔。聞説法華経故。從地踊出。讚

言善哉善哉。

晋 訳

仏告大衆。今者多宝如来至真。在斯塔寺。遙聞説此正法華典。是以踊出。讚言善哉。

(『写本』第七卷 五頁 参照)

とあつて、両者はほぼ同一であるから、多宝仏の本願とする處は最初に掲げた即ち什訳には見られない部分を指しているであろう。

十四 以提婆品入宝塔品訳 (提婆品ヲ以ツテ宝塔品ニ入ルノ誤)

これについては、前述したので、繰返さない。

十五 安樂行品四安樂行闕誤 (安樂行品ニ四安樂行ヲ闕クノ誤)

四安樂行とは身・口・意・誓願の四安樂行を指す。什訳にはいうまでもないが、晋訳にも古拙ながらこの四安樂行が述べられているので、両経を比較した(『写本』第八卷 一頁——十三頁 参照) だけでは、聖意の存する處が測

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経(若杉)

られない。後賢を期する所以である。

十六 法師品有二誤。眼千二 八百 余五千二誤（法師品ニニツノ誤リアリ。眼ハ千二 八百。余ノ五ハ千二ノ誤リナリ）

兩訳を対照して六根の功德を挙げれば次の通りである。晋訳の数は総列、括弧内は別列の数である。

	什 訳		晋 訳
1	眼 八百		八百
2	耳 千二百		千二百
3	鼻 八百		千二百（八百）
4	舌 千二百		千二百
5	身 八百		千二百（八百）
6	意 千二百		千二百

（『写本』第十卷 一頁——十一頁 参照）

晋訳によれば、眼根の功德の数を八百、他の五根はすべて千二百（但し総列）とし、什訳では眼・鼻・身根の功德の数は八百、耳・舌・意根の功德の数を千二百としている。晋訳において、別列の数をとれば什訳と同じ数になる。

宗祖が「眼千二」といわれたのは眼根の功德の数を千二百と見られたのであろうか。とすれば宗祖の読まれた晋訳は大正藏経本とは異った經典ということになる。また「余、五ハ千二百」といわれたのは総列における数のみの比較であらう。

十七 促經功用三十三天誤（經ノ功用ヲ促クシテ三十三天トスル誤）

什訳は『法華經』を受持・読・誦・解説・書写する功德によって、肉眼による所見の範圍を「下至阿鼻地獄・上至有頂」とするが、晋訳は「三十三天」とする。即ち什訳によれば、上は色究竟天・或は無色界の悲想非非想処にまで及ぶが、晋訳では六欲天の第二・忉利天までであつて、両訳を比較してみると、功德の及ぶ範圍に遠近の差があることは明瞭であり、この点について、宗祖は晋訳を誤りとされたものであらう。（『写本』第十卷 一頁 参照）

十八 不輕生報闕日月灯明（不輕ノ生報ニ日月灯明ヲ闕ク）

両訳を対照してみると

什 訳

晋 訳

命終之後。得値二千億仏。皆号日月灯明。於其法中。

說是法華經。

時彼大士寿没之後。便値二百千億如来正真。此諸世尊皆為講說正法華經。

（『写本』第十卷 十六頁 参照）

となる。什訳は「日月灯明」と固有名詞を挙げているが、晋訳はただ「如来正真」といって固有名詞を挙げていない。これを宗祖は「日月灯明ヲ闕ク」と述べられたものであらう。

十九 神力品中惣一種。別出九種誤（神力品ニ惣ニテハ一種、別シテハ九種ヲ出ス誤）

如来の神力について、什訳は長行に十種、晋訳は五種を出す等の相違が見られるが、聖文には合致しない。その他

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

あれこれと考へても充分には理解し難い。宗祖のご所覽本は現行の晋訳と異つたものであろうか。別の機会に改めて考究してみたい。

二十 藥王品有二誤。定力缺身不言燒臂誤（藥王品ニツノ誤リアリ。定力モテ身ヲ缺キ、臂ヲ燒クヲ言ハザル誤リ）

これは什訳では「然ニ（燃）百福莊嚴臂」の言があるが、晋訳には見られないことを指すのであろうか。（『写本』第十一卷 十一頁 参照）

二十一 十誤譬喩一闕不具誤。（十誤「恐らくは喩の誤り」ノ譬喩ノ一ヲ闕キテ具セザル誤リ）
什訳によれば『法華經』の諸經中において、第一・最上等であることを示すに十喩を以てしているが、この十喩中の第五喩の

又如『諸小王中。轉輪聖最爲第一。此經亦復如是。於衆經中。最爲其尊。』

（『写本』第十一卷 十三頁 参照）

に相当する經文が、晋訳に見当たらないことを指したものであろう。

二十二 妙音有二誤。妙音師弟長短不准誤（妙音ニツノ誤リアリ。妙音ノ師弟長短准セザル誤）
「妙音品」における身長について

什 訳

而汝身四万二千由旬。我身六百八十万由旬。

晋 訳

又卿本体高四万二千踰旬。而我現身八万四千踰旬。

(『写本』第十一卷 十八頁 参照)

とある。即ち浄華宿王智仏の身長は什訳では「六百八十万由旬」であるが、晋訳では「八万四千由旬」であり、妙音菩薩の身長は両訳とも「四万二千由旬」であつて同じである。弟子たる妙音菩薩の身長は両訳とも一致しているのに、師たる浄華宿王智仏の身長は一致していないので、この点を宗祖は「不准」と述べられたのであろう。

二十三 三十四身多有欠減誤。(三十四身多ク欠減アル誤リ)

妙音菩薩(妙吼菩薩)の变化身について比較するに(但し観音品に順じて整理する)

什 訳

A 聖身……………四

1 仏形

2 菩薩形

3 辟支仏形

4 声聞形

B 天身……………六

1 梵王身

2 帝釈身

晋 訳

……………四

仏色像

菩薩身

縁覚

声聞

……………五

梵天

天帝

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經(若杉)

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

3 自在天身

4 大自在天身

5 天大將軍身

6 毘沙聞身

C 人身……………六

1 轉輪聖王身

2 小王身

3 長者身

4 居士身

5 宰官身

6 婆羅門身

D 四衆身……………四

1 比丘身

2 比丘尼身

3 優婆塞身

4 優婆夷身

E 婦女身……………四

1 長者婦女身

尊豪

將軍

息意天王（？）

……………六

轉輪聖王

散小王

長者

尊者

梵志・沙門（？）

……………四

比丘

比丘尼

清信士

清信女

……………四

長者婦人

2 居士婦女身

3 宰官婦女身

4 婆羅門婦女身

F 童子身……二

1 童男身

2 童女身

G 八部身……八

1 天身

2 龍身

3 夜叉身

4 乾闥婆身

5 阿修羅身

6 迦樓羅身

7 緊那羅身

8 摩睺羅伽身

H その他

於王後宮變為女身

宮人（？）

嫖女・貪賤女

……二

▽男女大小

……四？

阿須倫

迦留羅

真陀羅

摩休勒（人非人）

入中官化皇后形

（『写本』第十一卷 二十二頁 参照）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

となる。Hのその他を除いて計えるに、什訳は三十四身を挙げ、晋訳は二十九身（人非人を除く）を挙げている。宗祖が「多有缺減」と言われたのは両訳を対照するに出没ただならぬ状態を指したものであろう。

二十四 観音品三十三身多闕不滿誤（観音品ノ三十三身多ク闕キテ滿タザル誤リ）

觀世音菩薩（光世音菩薩）の变化身について両訳を比較すると

什 訳

A 聖身……………三

1 仏身

2 辟支仏身

3 声聞身

B 天身……………六

1 梵天身

2 帝釈身

3 自在天身

4 大自在天身

5 天大将军身

6 毗沙門身

晋 訳

……………四

仏身

菩薩形像

緣覺

声聞

……………三

梵天像
（イなし）

天帝像

將軍像

C 人身……………五

1 小王身

2 長者身

3 居士身

4 宰官身

5 婆羅門身

D 四衆身……………四

1 比丘身

2 比丘尼身

3 優婆塞身

4 優婆夷身

E 婦女身……………四

1 長者婦女身

2 居士婦女身

3 宰官婦女身

4 婆羅門婦女身

F 童子身……………二

1 童男身

……………一

梵志像

……………一

沙門像

2 童女身

G 八部身……八

1 天

2 龍

3 夜叉

4 乾闥婆

5 阿修羅

6 迦楼羅

7 緊那羅

8 摩睺羅伽（人非人）

H 金剛身……一

1 執金剛身

I その他

……………一

捷杵和像

……………一

金剛神

……………九

鬼神像

天尊像

大神妙天像

転輪聖王

殊特像

反足羅刹像

隠士

独処仙人

僮僮像

（『写本』第十二卷 四頁 参照）

となる。即ち什訳では三十三身を挙げるに、晋訳は二十身である。什訳の童男・童女身は晋訳の僮僮像に対応するかも知れないが、強いて対応を求めなければ、前掲の如く、その対応の多くは甚だ求め難いのである。この点を宗祖は「三十三身多闕不滿」と述べられたのであろう。

四

以上、晋訳と什訳を比較対照してみたが、『添品法華経』の序にいわれているように、晋訳と什訳の梵本はその伝流を異にしたものであろう。随って、什訳を主として晋訳と比較し、直ちに晋訳を誤りと極めつける訳にはいかなのであろう。現代の比較文献学の立場は伝流を異にした梵本を検討する立場において成立する。しかし、宗祖は 釈尊——天台——伝教 という外相承を主張せられ、天台教学にその教学の基盤を置かれたから、当然、什訳に拠られたのである。什訳の立場から晋訳を批判されたのもここにその根拠がある。これを文献学立場から云々することは当を得ているとはいえないのである。又、宗祖は晋訳に対し、「二十二誤」を指摘されておられるが、その一について、前述したように、什訳に対し、晋訳の増補、或は闕落、或は数字等の相違が見られる。ここに宗祖の『妙法華経』

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華経（若杉）

西安草堂寺奉安の羅什像の原画と注法華經（若杉）

に対する信賴の程が窺われるのである。我々が亦『注法華經』を草堂寺に奉安したのもそこにその意図があるのである。宗祖の指摘された「二十二誤」について、二・三究明しきれなかった処もあるが、これは後日の研究に俟つとして、一応これにて擱筆する。

ハリティとパンティカ像の背景

高 橋 堯 昭

日蓮宗大荒行堂の行者擁護の神は言わずと知れた鬼子母神、然も行僧の袈裟の紋所は柘榴（すずり）、実にユニークなとり合せである。なぜなら鬼子母神はもともと古代ベルシャの地母神・豊穡の神であり、柘榴はオワシス特有の果物であり、沙漠を旅する者にとってはなくてはならぬ、いわば水筒のようなもの。これらが一つに結びついてシルクロードを通り、はるばる日本にまで伝えられて来た所に大きな興味を感じる。然もこのハリティはパンティカと結びついてクシヤンの時代に爆発的に作り出され、各寺々に安置され信仰されていたことは、パキスタン国内の博物館はもとより全世界に散らばった像からも裏付けられる。

然らばなぜこの時期に又この地域にこれら多数の像を造り出す信仰が形成されたのであろうか。



ヒンズー教関係のインド文献や史料はこの時代、即ちインドグreekからはじまってサカ・バルタイそしてクシヤンの外来民族の支配したこの時代を「Kali-Age」（悪しき時代）⁽¹⁾と評している。即ちこの時代こそインド本来の法（Dharma） Varna, Caste に乱れが起き、カースト間に混乱の起きたゆゆしい時代だと考えられたからである。

これを単的に表現しているのはクシヤン時代に書かれたというブラクリットの法典「Angavija」⁽²⁾である。これは

ハリティとパンティカ像の背景（高橋）

今までの四つの Varna 即ち Bāmbha (Brāhmaṇa) Khatta (Kṣatriya) Vessa (Vaiśya) Sudda (sūdra) の間の混乱、社会の変容を示している。即ち法典には次のような「mixed Caste」が出来たことを示しているからだ。⁽³⁾

Bāmbha-Khatta, Khatta-bāmbha, Bāmbha-Vessa Vessa-bāmbha Bāmbha-sudda, Sudda-bāmbha Khatta-Vessa, Vessa-khatta, Khatta-sudda, Sudda-khatta, Vessa-sudda, Sudda-Vessa, Sudda-bhāmbha Bāmbha-sudda

これらは Varna の乱れを禁ずるカウティリヤ実利論などではあり得べからざることではあるが、このような雑婚が行われていたということは「マヌの理論はあるべき姿」Angavijā の記述は当時のありのままの姿」と考えられる。これを裏付けるものとして Assalāyana sūta 漢訳では梵志頻波羅延問種尊經（東晉時代西域三藏竺曇無蘭訳）が「月氏國中これありと聞く」として「若波羅門娶刹利女、刹利女為生子、刹利娶田家田家女為生子、田家娶工師女工師女為生子、工師娶波羅門女……」とこまかく階級間の通婚を記している。

又これらの社会的な混乱はあながちこの時代から起ったとは限らない。スッタニパータに「高い Varna に属する人が規定された仕事より他の職業につく」⁽⁵⁾とかスードラ出身のナンダ王朝が出来たりしているから現実社会はバラモン⁽⁶⁾の理想通りには行かなかったことが想像される。然しこの趨勢が倍化されるのは何んといっても西紀前二世紀より西紀後二・三世紀の外來民族の侵入によってであらう。「富める土隷はおちぶれたバラモンの前を行きスードラでも主人の地位につき、貧しい富のないものはクシャトリヤやバイシャでも土隷の状態に甘んじなければならなかった」⁽⁶⁾ということになる。

もともと上位の二階級、即ちバラモンとクシャトリヤは祭祀政治等と結びついて ruling aristocracy（為政貴族）

として存在して来たが、特にバラモンはやがて祭祀という本分を捨ててクシャトリアと何ら違わない権力構造をもつて下部のバイシャ・スードラに対するようになっていた。然し外来民族の侵入はこれら四階級を共に被征服民族として彼等の下に置いた。従つてそこでは上の二階級と下の二階級の区別がなくなった。たかだか外来民族の代理として村落を統治する場合のみその優位性を保持するに止まった。ヒンズー聖典に言う「Varna Caste」の乱れた悪しき時代」が到来したのだ。その例としてマヌ法典ではサカやその他の外国人を没落したクシャトリアとみなしカーストの中に入れはじめてゐる。否入れざるを得ない状況になって来たといえよう。⁽⁹⁾

その実例は Ikṣvāku 王朝は西インドを支配していた Kātrapa (外国人) と結婚し、⁽¹⁰⁾ 又 Samudragupta の Allahabad Inscription にはサカ・クシャナーの統治者が地方王家と結婚してゐる。⁽¹¹⁾ これは上位のカーストが力を失つたのみではなく、下の階級の上への社会的向上をもたらしした時代的趨勢の故である。⁽¹²⁾

かくの如き Varna より実力による社会変動もやがてグプタ以後次第にカースト制度のしめつけによつて、このような mixed Caste そのものも四姓制度の下に再び包摂矯正されて行つた。然しブラーマンとクシャトリアの結びつきと、ブラーマンとバイシャの結びつきは後の世まで続いて行つた。⁽¹³⁾ これは前述の如くバラモンが宗教をはなれて現世的世界にイニシアティブをとつて行つたこととも関連する。

更に Angavijā はカーストを Aija (Arya) と mikṣhu (mleccha) とに分け、⁽¹⁴⁾ 前者は上位の三階級、後者にはスードラと土着民や外国人を含むとし Varna による区分で上位三階級はスードラに対するものとしていた。然し注目すべきはこの Angavijā の別の所では富裕者層を Aija とし使用人を Pessa とし区分し、⁽¹⁵⁾ 上の三階級の外にスードラをも含めて Aija とし、被使用人・土隷と分けてゐる。⁽¹⁶⁾ これは所謂「Varna による分け方から」階級社会、「生れ

より富」の方が優先する社会に変わって行ったことを示している。

アルタシヤストラも Ārya と Dāsa とに分け⁽¹⁷⁾ている。即ち Ārya は Sūdra を含める四つのカーストとなり、Dāsa は slave（土隸）だけ。（勿論 slave は主として Sūdra 層から得られるのであるが、）

これと同じ分け方は前述の Assalāyana Sutta も Ārya (master) と Dāsa (slave) とに分け、又 milindaṇḍha も「ヴァイシヤとスードラのなすべきこととして耕作・商業・牧牛」とヴァイシヤとスードラを同一のカッコでくくっている⁽¹⁸⁾し、又同じ milindaṇḍha に「村長が村人を集合させる」という話の中で戸主だけが集合し、「村人はこれだけです」と言い切り、この集会に集らなかった者を「婦人・男子・下女・下男・雇人・使用人・村民・病人・牡牛・小牛・羊・山羊・犬」と動物と同一視されるような人間の存在を記している⁽¹⁹⁾。

このように上記の記録は社会が単なる生れ Varna による区別から「持つもの」と「持たざる者」とに分化して来た当時の社会の状況を示しているように思われる。⁽²⁰⁾



更にマヌ法典の「夫妻の義務四十四」に「原野は木材を伐採した者に属し……」とあるから土地を開墾した者はその土地が自己のものとなった。milindaṇḍha の「ジャングル変じて開かれた土地と成る」⁽²¹⁾の表現の如く農民はどんな木を切り開墾してその財をひろげて行くことが出来た。時恰も考古学的に見ても良質の鉄の農具への使用が進められ大木の伐採が容易になって行ったと考えられるから。⁽²²⁾

特にタキシラ⁽²³⁾、カウサンビー⁽²⁴⁾、ハスティナガールの発堀⁽²⁵⁾によつてはスキ・クワ・小スキ・鎌等の改良が進み、クワと小スキは齒の中が大きく又持ち易いように柄が曲つたり、又齒自体も切れ易いようにカーブして来て、飛躍的な生産

が想像されるような改良発達が行われていたことが分る。然もマウリヤ朝では開墾は国家的事業として行われていたが、クシヤン朝では個人の企業として行われて来たことが特徴的である。この個人の意欲によって所有出来るという方法はスードラをしばりつけていた束縛から解放し、彼等に土地を与えて生産をあげようとしたことにも連る。このような自由化の方向はマヌ法典では極力これを防ごうとし、Yajñavalkya Smṛti (西紀百年から三百年) の時代になるとこの傾向は序々に強くなって行くから、農業にとつてこの時代が一番自由な時代であつたと考えられよう。

時恰もシルクロードの通商が盛んになり、ヴィーマ・カドフィーセス王によってローマと同一の規準によって金貨を作つて通商にはげむ時代、通商にはげむバイシャ更に前述のミリンダンバーに示されるように商業に従事するスードラ等、下層賤民の実力の向上めざましく、否、下層民が容易に実力をもち得る自由な時代なればこそ、この社会の逆転がますます進んで行けた。これがクシヤンの時代の社会的趨勢であつたと考える。

従つて土地をもち、生産を上げ得るものは労働にたずさわる下部のカーストのもの、又同様に商業にたずさり巨大な富を所有出来るのもバイシャ・スードラの下部のもの。かくてこの時代の社会相は「国王大臣を枕頭によびよせる」長者の出現する時代となつた。

このように自由意志で努力すればする程大きな富が得られる可能性をもちうる時代なればこそ生産の神たるハリテイーと財宝金銭の神たるヤクシャの主神バイスラバーナへ人々の信仰が注がれるのは自然の勢いである。然もハリテイーもバイスラバーナも共にヤクシャ(夜叉)、神としては低位の神である。社会的には低位のカーストにある農民商人達とアナログス(類比的)であり、彼等がこれらの神に親近感をもつのも無理からぬことであつた。然もこれらの神々は心の修養とか教義とかむづかしい理論を必用としない。唯赤子が母の乳を慕うがごとき誠信(バクティ)さ



写真は筆者蔵ハリティとバンティカ像

えあれば現世の欲望を容易に充足させてくれるという。社会の底辺にあるものにとっては実に身近な直接的な神々である。然もこの生産と金銭の獲得によって社会的実力を得、上部の人達を圧えることが出来る。「富即社会的ステータス」というこのような状況からハリティとバンティカの像が爆発的に作り出されて行ったと考えられる。

然もこれらの神々に富を求める傾向は低位のカーストの人々に止らず、シルクロードの通商の盛んなこの地では社会全体の希望・要請となって行った。その一例はマトゥーラ⁽³⁰⁾近くの *pallikhera* 出土のハリティとバンティカ像がクシヤーナ家の人々の奉獻になるものである。かくシルクロード中継点のこの地ではこの社会的背景をぬきにしてはハリティとバンティカ像の出現は考えられない

◆
豊満な肉体をもったテラコッタの像がペルシャか

ら出土している。これがハリティの原型である。⁽³¹⁾これは多産という富を表象するためのものだ。これらが東漸してガンダーラの地で仏教にとり入れられ、大乘仏教の精神たる利他の誓願の思想に潤色されて独得な仏教説話を生み出すに至った。そこではもとの生産の神からはなれて慈悲の願行が表面に出て来る。即ち「夜叉女が人間の子を食べた贖罪から人間の子供を永代にわたって守るという誓いをたてる」という神話が作られたが、この夜叉女が千人もの自分の子を持っているという話の中にも多産という本来の意味を失っていない。それにもましてザクロの実の中の無数の種、これこそハリティの豊穡多産をシンボライズするもの、富の神の面目躍如たるものがある。しかも興味あることはアーリヤンのパンテオン（神々の体系）に他の系列の神がとり入れられる時必ず低位の神として包容される事例からも、この鬼子母神が夜叉神として神の体系にとりあげられたのはこの神が外来の神であるという証拠であらう。

一方、ギリシャの神バンティカの姿で表されるのはヤクシャの主神バイスラバーナである。即ち毘沙門天はリグベーダや他のベーダーにヤクシャとして非常に早くから出ている。本来は非アーリヤンのもの、アーリヤン民族がインド定着前にあつた土着の宗教の神だ。⁽³²⁾従つてベーダーにとり入れられても前述の如く陰とか闇とか暗い所に住む邪悪な存在として考えられていた。その為大地とか山の主とされ、又これがやがて鉱物や宝石の神として信ぜられるようになった。然してシバ神をはじめインドの在来の神々即ちアーリヤン以前のものがアーリヤンにとり入れられ、それが又やがてアーリヤン系の神々をおさえて主神の座を占めて来るに従つて、この毘沙門天も本来の陰や闇の世界の主から表の世界に変わり、金銭財宝の守護神⁽³⁴⁾として定着して行つた。

又この二神は民間の信仰ということでクシヤンのコインにはミントされていないが B. N. MUKHERJEE や B. N. S. YADAVA はクシヤンコインの pharto と Ardoshho の二神は或はハリティとバンティカを表わしたので

はないかとも言っている。もしそうならばこの信仰は通貨の流通する非常に広い範囲にひろがっていたことが想像される。又ヒンズーの二聖典ラマヤナやマハーバーラタに毘沙門天は *narayahana* のタイトルで出て来、又この *nara-vāhana* は *Angavijja* にも出て来るから当時相当信仰されていたことが分る。

更にアルタシャストラ⁽³⁵⁾には「都城の居住」という項で「主都の中央にアバラチタ・アブラティハタ・チャヤンタ・ヴィヂヤンタの神殿及びシバ・バイスラ・バーナ・アシュウィン・シュリー・マディラーの神殿を建立すべき」とあるから毘沙門天は都の守護神の一として信仰を得ていたことがわかる（点線筆者）。

又仏教ではパールフットの彫刻の中に「*kuprio yakho* (*yakṣa kupriya*-[*kubera*])⁽³⁶⁾と銘があり。又 *Diganikāya* (III 200) や *Sutta-nipata* にも *vahana* として出ている。玄奘の大唐西域記にはパールフ・カピシャそしてコータンで毘沙門信仰があったことを示しているし、*mahameyuri* はガンダーラでクベラ信仰が顕著であったと記している。⁽³⁸⁾

かく大唐西域記をはじめ諸般の資料から見られるように毘沙門信仰が主に西北インドで盛んであったことはシルクロードの通商と無関係であり得まい。特に筆者所蔵の像の如くベルシャにオリジンをもつ鬼子母神と結びついて一つの像が形成され、恰も夫婦神の如き姿を呈している。これから考えると法華経の中のダラニ品に両神が共にとりあげられたのも偶然ではないと思う。共に夜叉の神であり豊穰と財宝という現世的な欲望を充足するという庶民的な信仰、これこそ西北インドという土壤で成立するにふさわしい神々であった。



私は先号の棲神にクシヤン朝カニシカ・フヴィジカの金貨について考えてみた。それは王の肖像の裏にミントされた神々の像のうち、ギリシャ西アジア系数ケ、ベルシャ系十数ケ、インドの神々が四乃至五と広く東西の神々を網羅

していた。このことからこれらコインの使われた世界は実に普遍的な世界であつたことがわかつた。従つてこの広く開かれた世界に大乘仏教は成立した、いわば大乘仏教の故里、基盤をこれから推量して来た。

然して今、このクシャンの領域に於て横のひろがりだけでなく、縦の方向、即ち社会の構造的に、カーストの階級制度がゆるみ平等化が進んで行つた。Yanaの差という差別から富者と貧者の「階級」の世界に変わり、従つて実力のあるものが上位につき、或は自らを墮して土隸に売る（マヌ法典）ような流動的な社会にもこの地方はなつていた。これはインド史上特筆すべき事実であつた、即ちこの現象も又すぐグプタ以後にはカースト制度の強圧の中にがらめになつて行くインド社会中で非常に特異な時代であつたといえよう。

このように自由な、そして平等な環境であつたればこそ、大乘仏教という、より普遍的な思想が生れ出たといふ。いわばハリティとバンティカ像の出現の世界こそ、これを指し示すものであると私は考える。

そもそも仏教はガンジス流域に於ける米作農耕の余剰生産物の交換を契機として、経済の広域化、都市の発達、商人階級の成立。これを反映するかの如き政治的な統一化。即ち十六ヶ国から八ヶ国、そして四ヶ国・二ヶ国、最後に釈尊後マガダに統一される普遍化のプロセスに於て釈尊の思想を生み出して行つた。

これが第一期の平等化の時代というならば、今北西インドで東西交流という普遍化の波にあらわれてカースト制度がゆるみ平等化に進んで行くこの世界は所謂第二期普遍化の時代の醸成と言いえよう。これこそ大乘仏教の成立の基盤である。然もこれを裏返してみるとこの時代こそハリティとバンティカ像が無数に彫られ信仰されて行つたインド史上絶えてない下層民の潑刺たる活力の時代、自由平等の時期ではなかつたらうか。そしてその地域は東西の通商の栄えた広い意味のガンダーラではなかつたらうか。私はかく考えここに大乘仏教の故里をみるのである。

【註】

- (1) B. N. Mukheljee, Indian history Congress Presidential Address 1981
B. N. S. Yadava, Some aspect of the changing Order in India during the Saka-Kusana age
- (2) Angaujiā (Prakrit Text Series, Varanasi)
- (3) B. N. Mukheljee 上掲論文 p.7~8
B. N. S. Yadava 上掲論文 p.75—76
- (4) 大正蔵一教へんじのそ・中
聖教文庫 スミタリベータ 一二三頁
- (5) B. N. Mukheljee 上掲論文 六頁
- (6) D. C. Sircar, Indian Epigraphic glossary p. 61
R. C. Majumdar, Champa (Inscription)
- (7) Manu Smṛti, x43—44
- (8) BC. 2C. mahabhaṣya 註 yavana ヲ śaka ヲ Sudra ヲ 説くこと
- (9) Ildere' List, No. 994
- (10) Fleet, Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol 3 Insc. No1
- (11) B. N. Mukheljee 上掲論文
- (12) 註 (〜) ヲ 証す
- (13) Angavijā p.149 } 註 B. N. Mukheljee 上掲論文
- (14) Angavijā p.218 }
- (15) Angaujiā
- (16) B. N. S. Yadava 上掲論文
- (17) “くしちやふべんてゐるの歴史” 一巻の序 一四頁
- (18) Rhys Davids 註 一巻 p.247 Adoration of relic
- (19) Milindañña, Rhys Davids Voll.1 p.206

- (20) A. N. BOSE, Social and Rural Economy of Northern India (600BC—200AD) p. 63
- (21) Milindāpāṭha 4—1—41
- (22) Angavijjā p. 233, p. 258
- (23) Marshall, Taxila Vol. 2 p. 559 Pl. 169
- (24) G. R. Sharma Excavation at Kausāmbi (1957—59)
- (25) B. K. Thapar, In ancient India No 10—11 Fig 32. 33
- (26) 小石 邦子 西—1—141
- (27) Sharma, Sudra in Ancient India, chapvll.
- (28) 岩倉 英樹 西—1—141
- (29) B. N. S Yadava 前掲
- (30) Mukherjee
- (31) Rosenfield, Dynastic Art of Kushan
- (32) 小石 邦子 Musium 西—1—141
- (33) B. N. S. Yadava 前掲 p. 85
- (34) C. F. Veronica, Indian Mythology p. 84
- (35) Zimmer, Mythos and Symbol in Indian Art and Civilization p. 70
- (36) ヒンタナヤスエト 1—141
- (37) Indian Musium in Calcutta 前掲の 1—141
- (38) Heinrich Zimmer, The Art of Indian Art Vol 1 p. 44 p. 86
naravāhana なるわはな 神の乗への
- (39) A. K. Coomaraswamy, Yakṣas Parts I and II.

信教の自由

中 里 悠 光

はじめに

信教の自由は、精神的自由権の中でも特に歴史は古く、ヨーロッパ史にあつては、中世、近代を経て闊い取られた重要な権利であつた。中世ヨーロッパにおいては教会の権威が何ものにも勝り、国王さえもしばはその権威の前に屈することがあつた。しかし絶対的な教皇の権力もやがて教会の内部腐敗と外からの宗教改革によってようやく崩れ始め、次第に信教の自由が獲得されていった。

我が国においては信教の自由を獲得する為の闘いはなく、第二次大戦後憲法制定の過程において神道が国家神道として天皇制に結びついた点が考慮され、特に国家と神道の分離が図られ、二十条一項後半に見られるような規定が盛られたと考えられる。その後具体的な事件、事実を通して信教の自由、特に国家権力と特定宗教との関係が重視されるようになった。靖国神社法案、津地鎮祭事件、内閣総理大臣等閣僚の靖国神社或は伊勢神宮参拝、自衛官の護国神社参拝問題等がそれである。

一、信教とは

信教の自由（中里）

信教の自由（中里）

日本国憲法第二十條 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

- ② 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。
- ③ 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

伊藤正巳著「憲法」⁽¹⁾によると、信教、信仰、宗教、同じである……としているが、わたくしは信教とは「宗教を信ずる」ことであって、信教が信仰或は宗教と同じだとする表現は妥当でないと考える。宗教の概念については、「憲法でいう宗教とは『超自然的、超人間の本質（すなわち絶対者、造物主、至高の存在等、なかならず神、仏、霊等）の存在を確信し、畏敬崇拜する心情と行為』をいい、個人的宗教たると、集団的宗教たると、はたまた発生的に自然的宗教たると、創唱的宗教たるとを問わず、すべてこれを包含するものと解するを相当とする。従って、これを限定的に解釈し、個人的宗教のみを指すとか、特定の教祖、教義教典をもち、かつ教義の伝道、信者の教化育成等を目的とする成立宗教のみを宗教と親すべきではない。」⁽²⁾或は、「神または何らかの超越的絶対者或いは卑俗的なものから分離され、禁忌された神聖なものに関する信仰、行事またはそれらの関連体系。帰依者は精神的共同社会を営む、アニミズム、自然崇拜、トーテミズムなどの原始宗教から呪物崇拜、多神教などの低級宗教を経て、今日の世界的宗教即ち仏教、キリスト教、回教に至るまで、文化的段階、民族などの差別に従って多種多様」⁽³⁾といった定義がなされている。このような意味での宗教を信ずることの自由、信じないことの自由が信教の自由であると解する。

二、信教の自由の内容

1、内心における信仰の自由

十九条において保障されている良心の範疇に宗教が含まれると解するならば、宗教を信じ或は信しない自由、信する場合どのような宗教を信するかは専ら個人の判断に任され他から強制されないことは十九条の保障するところである。また含まれないと解するならば十九条を原則規定と看做し、二十条をその特別法的規定と看做されなければならぬ。つまり思想・良心が宗教的色彩を帯びた場合二十条の信教の自由となると解する。いずれの説をとるにせよ、人間の内面的な精神活動として作用する限り、これを外面より抑圧することは、民主主義の精神を根底より覆すものであり、思想或は良心の表現・形成が制度的に公権力の干渉から保護されなければ、思想・良心は本来の姿を保つことはできないし、精神的自由の保障の度合如何が民主主義の程度を決めるといっても過言ではない。ことに第二次大戦における戦争遂行の精神的背景が国家神道に求められ、天皇とその祖先を中心にする国家神道の信仰が明治憲法二十八条における臣民の義務の名のもとに強制されたことを考えると民主主義を標榜する日本国憲法が過去の過ちを二度と繰り返すことのないよう、特に国家権力からの信教の自由の保障をここに規定したものを見ることが出来る。

宗教は本質的に人間の苦悩からの救済を説くことをその存在要素の中に包含している。それ故その宗教によって救済された者は必然的にその教義を他に及ぼして他人をも救済せしめようとするのが宗教のもつ特質である。自分ひとり救済されればよしとする教義ならば宗教として広まることはないだろうし、永々と伝えられることもないだろう。つまり信教の自由が内心の自由にとどまるならば、これを十九条において良心の自由として保障すれば足りるのであ

宗教の自由（中里）

る。自ら悟ったところの真理を他に語り、自らはもとよりひとりでも多くの人々にこれを及ぼすことが宗教の本来の姿であるから、自ら信ずるところの宗教を外部に向って表現し、宣伝し、布教し、教育する自由が保障されなければ、宗教の自由が保障されたことにはならないのである。そしてその真理を他に伝える手段が礼拝であり、祈禱、祝典等の宗教上の儀式なのである。

2、信仰の表現

信仰が内心にとどまる限りこれを権力によって制限、処罰し得ないことは前述のとおりであるが、これがひとたび外部に向って現われた時無制限に保障されるものだろうか。これについては、加持祈禱の結果人を死に至らしめた事件で最高裁判所は、個人の生命に危害を及ぼす行為はたとえそれが宗教的行為であっても許されないとして宗教の自由にも制限のあることを示しているが、安易に「公共の福祉」等を持ち出してこれに制限を加えることには慎重でなければならぬ。

3、宗教上の結社

前述したように人が自ら信ずるところの宗教を他に広める行為は宗教に内在する必然的行為である。そのためには信仰を同じくする者が組織を作り、儀式を行い、布教活動をすることは、上記行為をより効果的に遂行する為に不可欠の手段である。結社の自由については二十一条で保障されている。多数人が宗教上の目的のために継続的に結合することは二十一条よりも二十条一項において保障されているとみるべきである。

三、政教分離

二十条一項後半は「いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。」と定めて国家が特定の宗教団体を優遇することを禁じている。これに關しては「靖国神社法案」がしばしば問題になっている。靖国神社は戦没者を英霊として祭っているが、宗教的立場からすると死は何人に対しても平等なものであり、國の為に死ぬことと他の原因で死ぬことは「死」という事実の前では特別な差異はないのであつて、戦争という事実が原因で死んだ者をすべて平等に祭るのであればまだしも、人によって差異のある現状から見ても、これを國家の管理の下に置くことは許されるべき性質のものではない。国家神道と天皇制が第二次大戦を支えて来たという歴史的事実をもういち度振り返り、靖国神社法案が真に意圖するものは何かをよく見極め、自衛隊の増強、軍事予算の膨張と相俟つて二度と再びこのような敗戦の惨事を繰り返すことがないようにと心に誓つた敗戦直後の反省が戦後三十数年の時の経過によつて色褪せてきつたことを再認識しなければならない。

「又は政治上の権力を行使してはならない」という条文については、創価学会が国政に参加し始めた頃、宗教団体が国政に直接干与する危険性をはらんでいたが、表面上は政治団体として公明党が存在するため二十条違反をまぬがれているというケースがある。

二十条二項については、毎年八月十五日に日本武道館で行われている全国戦没者追悼式が本条に違反するのではないかという疑問が出されたが、「全国戦没者追悼式の実施に關する件」⁽⁶⁾によると、「本式典は、宗教的儀式を伴わ

信教の自由（中里）

信教の自由（中里）

いものとする。」として宗教的色彩がないことを明言しているが、昭和三十九年以降の閣議決定にはこの項目が省略されている。また第四項の「式典当日は、官衙等国立の施設には半旗を掲げることとし、地方公共団体等に対しても同様の措置をとるよう勸奨する。」も翌年になると、「式典当日は、官衙等国立の施設には半旗を掲げることとし、地方公共団体等に対しても同様の措置をとることを勸奨するとともに、本式典中一定時刻において、全国民が一せいに黙とうするよう勸奨する。」と全国民的規模で戦没者追悼を勧める方向に進んでいることに注意しなければならない。政府の真意がどこにあるか今後の展開を見守る必要がある。

二十条三項については総理大臣及びその他の國務大臣の伊勢神宮、靖国神社への公式参拝が論議されているが、靖国神社の国営化を図る法案の国会提出と同時に進行の形で参拝の方法も次第にエスカレートして来ている。政府としては、大臣としての資格で参拝していかないから本条違反にはならないとしているが、大臣就任以前から靖国神社参拝の習慣があり、かつ辞任後もひき続いて参拝するならばまだしも、現状では大臣の座にある時のみ参拝するのであるから私人としてではなく公人として参拝していることは明白である。署名簿に役職名を記載するかどうかを公人、私人の資格の要件にしているがこのような形式的なことではなく、国として靖国神社、伊勢神宮に対し、他の宗教団体と異った待遇として両神社の地位に国の背景のあることを植えつけようとする意図があるように思われる。

次に国ではないが地方公共団体が宗教活動を行ったとして裁判となったものに津市の市体育館地鎮祭事件がある。この事件では地鎮祭における神官の行為が宗教上の儀式に当るか否かが問われたが、地裁⁽⁹⁾、最高裁⁽¹⁰⁾は地鎮祭を習俗的行為と看做し、二十条三項の宗教的活動にあたらないとしている。他方高裁⁽¹¹⁾は特定宗教による儀式であるとし、これ

が二十条三条の宗教活動に該当するとしている。地鎮祭において特定の宗教に属する儀式執行者が宗教的式次第のつとり、式を行うことは当然二十条三項の宗教活動にあたり、執行者自身も自ら信ずる信仰対象物に対して土地の堅牢地鎮、工事の安全を祈るのであるから習俗的行為の域を脱しているものと考ええる。このような判例を意識してかわたくしの知るところでは地方自治体の行う地鎮祭、上棟式、落成式等の儀式は形式的には地方自治体主催であるが所謂儀式の為のお礼については施工業者の負担となっている。津地鎮祭事件は二十条及び八十九条違反⁽¹²⁾を理由に神官に支払った儀式のお礼を賠償することを求めた訴訟であるから行政側はこの事件を二十条違反よりは八十九条違反に重きを置いたものと考えられる。

最後に自衛官の合祀問題に触れてみたいと思う。これは殉職した自衛官が遺族に無断で護国神社に合祀されたことに對し、遺族である故人の妻が当該合祀申請続の取消請求と合祀行為によって宗教上の人格権が侵害されたことに對する賠償請求を行ったものである。

先ずここでは合祀申請が宗教活動にあたるとどうかであるが、合祀そのものが宗教に密接に関連する事柄であるから当然その合祀を申請する行為は宗教活動にあたるとしななければならない。申請にあたっては自衛隊職員がこれに携わっているのであるからこれは国の行為と看做され、したがって当該行為は二十条三項違反となるのである。

まとめ

以上憲法二十条を中心として我が国憲法に定められている信教の自由について実際の事例をあげながら考察してきたが、国家による宗教活動、私人の宗教上の人格に對する干渉、国の為の殉死に對する特別扱い等、信教の自由に關

信教の自由（中里）

する問題がヨーロッパにおける宗教上の自由とは異つた形で様々な問題が展開されてきている。我々日本人は概して宗教に関してあまりにも寛大（無関心とも言える）であり、こだわらない国民性を有しているが、ヨーロッパ史上における宗教と政治のかかり合ひは、権力の奪ひ合ひ、政治における宗教の利用或いは宗教の自由を得る為に多大な犠牲が払われたことを知る時、これからの日本人が宗教の持つ大きな意味を、役割を考えていかなければ、あの忌わしい戦争に対し知らず知らずのうちに不感症となり、ひいては精神の退廃、文化の退廃が社会、国家の存亡の危機をも招きかねないことを充分に認識しなければならない。ここに我々宗教人に課せられた使命があると考えるのである。

〔註〕

- (1) 昭和五十七年発行「憲法」（弘文堂）二五八頁
- (2) 昭和四十六年五月十四日名古屋高裁・行政例集二二・五・六八〇
- (3) 「広辞苑」（新村 出編）
- (4) 大日本帝国憲法第二十八条 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務に背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ府ス
- (5) 昭和三十八年五月十五日 最高大法・刑集一七・四・三〇二
- (6) 昭和三八・五・一四 閣議決定
- (7) 「世界」（岩波書店）六月号七二頁
- (8) 津市が市体育館の起工に際し、神社神道の儀式にのつとる地鎮祭を挙行し、その費用として市の公金を支出したのに対して、或る市議会議員が憲法二十条、八九条違反を理由に、市長が市に対し支出金額を賠償することを求めて出訴した住民訴訟。（「憲法講義」（小林直樹著）より引用）
- (9) 本起工式はそれが外見上は神道の宗教的行事に属することは否定できないけれども、その実態をみれば神道の布教宣伝を目的とする宗教的活動ではもちろんないし、また宗教的行事というより習俗的行事と表現した方が適切であらう。（昭和四十

年三月二十六日 津地・行裁例集一八・三・二四六

(10)

本起工式は、宗教とかかわり合いをもつものであることを否定できないが、その目的は建築着工に際し土地の平安堅固、工事の無事安全を願ひ、社会の一般的習俗に従った儀礼を行うという専ら世俗的なものと認められ、その効果は神道を援助、助長、促進し又は他の宗教に圧迫、干渉を加えるものとは認められないのであるから、憲法二十条三項により禁止される宗教的活動はあたらないと解する。(昭和五十三年七月十三日 最高大法・民集三一・四・五三三)

(11)

憲法二十条三項は、「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。」と規定するが、上述の政教分離原則に照らしてこれをみれば、ここにいる宗教活動には、宗教の教義の宣布、信者の教化育成等の活動はもちろんのこと、宗教上の祝典、儀式、行事等を行うこともそれ自体で当然に含まれるものと解すべき……(昭和四十六年五月十四日 名古屋高・行裁例集二二・五・六八〇)

(12)

日本国憲法第八十九条公金その他の公の財産は、宗教上の組織若しくは団体の使用、便益若しくは維持のため、又は公の支配に属しない慈善、教育若しくは博愛の事業に対し、これを支出し、又はその利用に供してはならない。

合衆国における教育事情

奥 野 本 洋

今年八月、県よりの補助金をいただき、アメリカ、カナダの両国へ教育視察団の一員として参加した。主たる大学等を訪問したが、夏休み中ということで授業参観は出来ず、カナダのラバール大学、マギール大学の教務関係者、アメリカ合衆国私学協会主事らに会う機会を得、教育事情を聞いてきた。

(一) 教育行政制度

アメリカ合衆国は、地方分権制をたてまえとしている。したがって教育に関する事項も、憲法により、各州の責任事項となっている。各州では、その州に適した教育制度を組織し、管理する権利と義務が与えられている。

わが国においては、文部省が教育行政に関与し、権限を持ち、中央集権制をとっているが、アメリカの教育行政は根本的に異なっている。即ち教育の地方分権制が、学校制度における特色を生み出している。

アメリカ合衆国では、各州によって異なった学校制度をもっているが、その主たるものは、

○八一四制 この制度は、八年制の小学校、四年制の中学校とからなるもので一九二〇年代に支配的であった。

○六一六制 この制度は、八一四制に対する批判の一つとして生まれ、六年制の小学校に六年制の中学校と連結。

○六一三—三制 六一六制を批判して、第二次大戦後より現在に至るまでふえつつある。六年制の小学校、三年制

合衆国における教育事情（奥野）

の下級ハイスクール、三年制の上級ハイスクールからなる。

以上のうち、六―三―三制が大半を占めているということであるが、地区によっては七―五制や六―四―四制などもあり、五―三―四制、四―四―四制などの新しい制度もできているということである。

日本のように、国で六―三制の義務教育が決められているわけではなく、各州の州法のもとに規定されている。大半の州が「満七才以上十六才に達する迄」としているが、その他の学令を決めているところもある。

又、いずれの州も、公教育は無償で行なっている。その費用は連邦政府、州政府、地方教育行政単位の三者によってなされ、税金を財源としている。

カナダ、モントリオールのマギール大学において聞いたところによると、モントリオールでは、学費等はもちろんのこと、鉛筆、ノートなどの消耗品に至るまで、すべて無償というのには驚かされた。ただ父兄にとっては、その為に税金を日本人よりはるかに多く支払っているということであった。

就学前の教育機関としては、日本でも保育園、幼稚園がある。アメリカでは、Kindergarten（幼稚園）は、多くは五才児を收容し、一年間乃至二年間の教育を施すというのが主であり、その大半が公立で、小学校に付設されているというものが多いということである。Nursery School（保育学校）は幼稚園入園前の三―四才児を收容して一―二年の保育を施し、その大半は私学ということである。

モントリオールのマギール大学では、そこへ勤める教職員が、共同経営の形でアパートメントを改造し、自分達の子供をあずける保育園を持っていた。公立の保育・幼稚園は、職員の勤務時間等が決められており、何かと不便ということである。父兄がマギール大の教職員が主ということで、互助精神にて共稼ぎ等が出来るようになっていた。

(二) アメリカの直面する教育問題

五十八年七月十八日付日本経済新聞の教育欄に、アメリカの高校生の学力低下が著しいという記事が載っている。レーガン合衆国大統領が、アメリカ公立初等中等教育の程度の低さ、効率のわるさを指摘し、改革の動きが巻き起っているということである。

今回の研修旅行中、アムトラックにてニューヨークからボストンへと向う車中、一組の親子に出会ったが、その親子は、これからカナダの私立ハイスクールへ入学の手続きを取る為に出かける途中ということであった。アメリカの公立学校では充分な教育が出来ないということなのだろう。このように、今、アメリカ国内においては真剣に、教育問題が取り組まれる時期に来ていることは確かである。ニューズウィーク誌（五十八年五月九日号）には、日本の初中等教育にて教えられる内容が、アメリカのそれよりも高度であることが細かくレポートされていた。中等教育の教育課程を整備して、大学教育との接続を円滑にするための実践が部分的に始められようとしている。教育の質的向上委員会（The national commission on excellence in education）が今年四月に、「米国は危機にある」（Our nation is at risk）という報告書を提出したことが、レーガン大統領をして改革をしなければという気をおこさめたのであろう。この報告書には、高校生の学力低下のために、大学では入学後すぐには正規の授業が出来ず、高校程度ないしそれ以下の補習教育を実施するところが増えているという事と、企業や軍隊においては高卒者が中卒程度の英語力しかなく困っているという点をあげ、そして次のように指摘している。

○中等教育の最終段階でも英語は四年間、数学、社会、理科は三年間、電算機は一・五年間確実に学習する。大学

合衆国における教育事情（奥野）

進学者は二年間外国語を履修する。

㊦その教育内容をきちんと定め、所定の程度に到達したかどうかのテストを行う。補習の必要な者は早めにカリキュラムを定めて行う。飛び級も当然行う。教科書を衆知を集めて改正し、現行よりも程度が高く、全米的にばらつきの少ないものにする。

㊧一日七時間授業、年間二百二十日授業を慣行化する。

㊨教員の資格をきちんとする。実力ある教員の待遇を改善する。

㊩学校活動への地域の協力を活発化する。

㊪教育行財政の安定化を図る。

㊫の中に電算機を一・五年間学習するという項があるが、この点はまだまだ日本では考えられていない。㊫の中の飛び級ということは、英国でも今年度（五十八年）十二才の女子が名門校に合格、女子大生となった事が伝えられており、能力別指導による英才教育も盛んに行なわれつつある。㊬の一日七時間、年間二百二十日の授業の慣行化ということは、これまでの教育法から考えるとかなりハードなものである。というのは、普通七月一日に学年が開始され六月三十日に終わるということであるが、実際の授業開始は一般に九月初旬であり、祝祭日の他、土曜、日曜を休業日とし、その他に六月、八月の三ヶ月間の夏休み、クリスマス、復活祭等の休暇があり、年間最低授業日数の規定は百八十日ぐらいと決められているからである。㊭の教員の資格をきちんとする。実力ある教員の待遇云々ということは、最近特に問題になっているようであり、大学を出てすぐに教員ということが定着している中で、社会経験を何年か積んだ上で教員として採用するというなども考えられている。又、研究ということよりも上手に教えるこ

とが出来るということが重要視されてきている。⑤⑥に關しては、連邦政府、州政府、地方自治体の三者によって財政が形成されている中で、一番身近な地域の協力が大事であることを強調している。軍事予算等の比重が増えつつづけている今日、国民にかかってくる税負担は大きなものであり、深刻な問題をかかえている実情である。

しかしこれらの提案に対し、先生方の反応は、「よくわかっている問題の提起ではあるが、実行に移す為には連邦政府が本腰を入れ、金と手間をかけなければ実施できない」と考えている。又、全米教員組合（AFT）は、「授業時間、授業日数の延長は給料を引き上げなければ出来ない」としている。

（三）短期大学の役割

このように種々の問題をかかえている教育界にあって、中等教育と大学教育の中間に位置する短大はどのように考えられているのだろうか。

今回、ワシントンにおいて、私学短期大学協会の主事であるジェームズ・マホニー氏に会う機会を得、短期大学についての話をうかがった。氏は、今日アメリカにおいて教育問題がクローズアップされている中、短期大学の役割がいかに重大かを力説された。

アメリカの経済は、ここ七八年よくなく、労働者の意欲の無さが日本と比較されるが、短大は生産性をあげる為に役割をはたすのではないかとのことである。即ち地域の教育により人材を開発し、生活を向上させる目的をもっている。

ワシントンポスト紙に、短大協会のデール・バーネル会長が「短大の役割」と称してレポートを発表しているが、そ

れによると短期大学も大きく分けると三つに分けられる。地域社会の教育向上に大きく寄与している Community College（コミュニティカレッジ）、これは特に公立短大が多く、規模が大きく広範囲のカリキュラムが用意されている。次に、大学進学の教養課程の要素の強い Junior College（ジュニアカレッジ）、これは私立の短大が多く、それぞれの教育目的における特色を生かし、ユニークなカリキュラムが組まれている。又宗教関係の背景が強く、宗教教育に関するカリキュラムが多くみられるのもその特色である。第三に、生産性を向上させるのに役立っている Technical College（テクニカルカレッジ）がある。これは、歴史的にみると、一九四九年にニューヨーク州にある Nohawk Valley Community College という短大が初めて採用したカリキュラムがもとになっており、働くことと学問を一致させているプログラムにその特色がある。その後、全米の短大に普及し今日に至っている。

短大協会のジュームズ氏の話しによると、平均所得の高い地域では、子供に対する教育が高く、教養科目を中心にさらに高い教養を身につけるべく制度がなされており、高校から大学に進学させるか、さもないければ短大でも大学に編入するのに有利な短大を選択している。その場合、大学へ一年時から進学したものと、短大から三年時に編入した者との学力差などを調査した結果、大抵は大学へ一年時より入学したの方が学力が上であるが、それでも卒業時の学力には大して差がないことが判明している。大学自体の考え方は、短大で二年すごした者を三年時より編入でとるという方が、教養課程にかける費用を専門の方へまわせるということもあり、編入を受けいれる学校が増えつつあるということである。又、入学する側でも、少しでもはいりやすい短大にはいり、そこから大学へとのコースを歩む者もかなりの数になるそうである。即ち、大学など考えてもみななかった労働者階級の子弟でも、短期大学へまず進学し、四年制へ進学という道を歩む者が出ている。

又、短大の授業料についての説明を聞き、ビックリしたが、大学の年間平均授業料が一人三六〇〇ドルに対し、短大のそれは五六〇ドルで約六分の一ということである。その不足分は、州政府並びに地方自治体とでもっているわけであるが、州政府からの行政指導で地方自治体の税金を上げてはいけないということがいわれている以上、地方自治体からの援助不足は州政府でもたなければならぬ。しかし州政府としてもそれほど出し切れるものではない、というのが一つの心配だという。それを解消させる為には、短大がその地域に寄与するところが大であるということを知らしめなければならない。短大から大学へ編入学をする場合も、州内の編入は簡単で、州外へはむずかしいという事がいわれているが、これらも日本の短大とちがう大きな点であり、短大と州の大学との間にハッキリとした契約がなされ、編入を専門にあつかっている評議会があるという。

一方、ブルーカラー（中・低所得層）の地域では、教育に関心がうすい為、職業教育に重きをおき、短期大学を最終学歴として世に出る人が多い。そのような者を対象に、職業訓練を主としたテクニカルカレッジが脚光をあびてきている。この地域で短大に進学する者の約半がテクニカルカレッジへと進学している。これらの短大では、働くことと学問を一致させているプログラムを組み、学生を実際に職場で働かせて、その経験と講義によって得る理論とを両立させ、正規の単位を与えるという *Work study* を目的とするものもある。

以上のことから、アメリカの教育問題の中にあつて、短大の役割を考えると。

- 高卒程度の学力では社会に出て役立たないという面を解消する働きを持っている。
- 大学進学を夢だと思っていた人にも進学の可能性を持たせる。
- 地域社会と強く結ばれているということで、学費面の援助等も地方自治体でなされることが出来る。

合衆国における教育事情（奥野）

その結果、アメリカ国民の教養が高まり、又、生産性が高められ経済大国として維持がなされているということ。
短大関係者は政府関係者にアピールしていくのだという。

参照文献

- ニューズウィーク誌（58・5・9日号）
日本経済新聞（58・7・18日号教育欄）
全私学新聞（58・3・13日号アメリカ短期大学の現状について）
ワシントンポスト（Community Colleges: Education and Training Riches）
海外教育事情視察ガイド（アメリカ合衆国の教育概観）
アメリカにおける短大の役割と現況・島田和幸、島田燐子
1982. Community, junior, and Technical College Directory

【資料】

身延山諸堂記

身延山再建諸堂記

身延山再々建諸堂記

校註・北沢光昭

編纂・身延山短大仏教文化研究所

○身延文庫所蔵の写本「身延山諸堂記」「身延山再建諸堂記」「身延山再々建諸堂記」により、文明六年、十一世行学院日朝上人の代、西谷から現在地に移転した諸堂の、大概明治・大正時代に至る諸堂塔変遷の状況を知り得る。殊に、文政七年・明治八年の諸堂焼失の現在にあって、その時々々の荘麗なる寺観を窺うに欠かせぬ、集成された記録として唯一のものである。

○該記録は全三巻三冊よりなり、第一巻は題外「身延山諸堂記」(内「身延山諸堂塔建立記録」)、第二巻は題外「身延山再建諸堂記」(内「身延山再建立記録」)、第三巻は題外「身延山再々建諸堂記」(内「身延山再々建立記録」)である。

○該記録の体裁は、第一巻は、縦二二・三センチメートル、横一五・六センチメートル、二十行野紙の袋綴、板心の表側に丁数を記している。丁附は一四二であるが、墨付一四〇丁である。第二巻は、縦二二・六センチメートル、横一五・九センチメートル、十八行野紙の袋綴、板心に項目を記し、その表側に丁数を記している。丁附は一四九墨付は一四一丁。第三巻は、縦二二・七センチメートル、横一五・六センチメートル、二十行野紙の袋綴、板心に項目を記し、丁附は板心の表側の欄外上に記し、この巻は特に加筆を見込んだ白紙が多い。丁附は二〇一、墨付は三五丁。

○該記録は、身延山三十三世遠沾院日亨上人による正徳二年の正本(第一巻一〇六丁表)を、妙俊院日寿上人が嘉永七年に写した(第一巻一丁表)事に始まり、以後、主に日寿上人による追加記録(第一巻二丁表・一〇七丁表)である。

第一巻は、前述の嘉永七年二月の写本と、日寿上人による補足・追加の記録で、主として文政年中の火災以前の状

身延山諸堂記外（北沢）

況が知られる。第二巻は、安政四年三月に記録を編集したもので、文政年中の再建から、明治八年焼失の堂塔が中心の記録である。第三巻は、明治八年一月より記録を始めたもので、大火災後の復興状況が知られる。この為に全体に亘って記録予定を見越んだ白紙が多い。

妙俊院日寿上人の略伝は、「身延山史」三四三頁（新版「身延山史」三三二頁）にあるので詳述を避けるが、終身身延にて生活し、明治大火災後の諸堂宇再建計画の実施に参画した事は第三巻中に見える所で、「身延山史」の纂者の「現存せる祖山の古記録は……師が丹精の賜物」の言を俟つまでもなく、質・量ともにこの三巻三冊の記録は、身延山史に欠くべからざるものである。

○日享上人による正本が正徳二年に成立した事は先に述べた所であるが、改定稿本も存在した。それは宮内庁書陵部所蔵の写本「^{甲州}身延諸堂細調録」（『身延山久遠寺諸堂等建立記録』四十五丁と『身延山御歴代譜』の二部より成り、全五十一丁、一冊）に記載する原本の奥書により知られる。改定稿本は「正徳三竜集癸巳春改之書」したものである。

書陵部所蔵本は、安政六年十月、信州松本「迦葉山妙福寺日胎聖人原本」による鍊頸上人の写本である。

書陵部所蔵本の堂塔記載の順序は身延文庫所蔵本と異なるが、目次に丁数を参考として付記した。この写本の全文は「御本尊鑑 遠沾院日享上人」（藤井教雄編・昭和四十五年十一月刊・身延山久遠寺発行）の第二部に活字化されている。（但し、丁付はない。）

○諸堂の旧観を知る手掛りとして、数多くの地誌・紀行なども見逃せない。本稿ではこの点の詳述を目的としないので、書名を列記するに止めるが、一般的に地誌の類に諸堂等の記述が詳細に亘るのは、「案内」を主内容とするの

で当然であり、他方、紀行の類は「実感」が中心であれば、描写に特色を有するものが少なくない。主な著述は次の如くである。

△地誌▽「久遠寺参詣記」(延宝九年刊『日蓮上人御伝記』巻十)、「身延鑑」(貞享・元禄・宝暦・天保の各版)、「みのぶ山ひとり案内」(安永九年刊一冊、北沢光昭蔵)、金子日徳著「延嶺袖鏡順詣記」(文政二年成立、版本、他の二書と合一冊、無窮会^{文神蔵})、村上某著「甲州嘶」(享保七年成立)、鶴岡子著「裏見寒話」(宝暦二年序文)、大森快庵著「甲斐撥記」(前輯、嘉永四年刊)

△紀行▽元政上人著「身延行記」(寛文三年刊)、享弁(法住院日義上人)著「萩の名こり」(延享四年成立)、篤子刀自著「安永身延紀行」(安永五年成立)、稲懸棟隆著「身延の杖」(同年成立)、佐竹邦著「身延紀行」(寛政元年成立、写本一冊、宮内庁書陵部蔵)、加賀屋善蔵?著「おさな車」(寛政九年成立)、吉沢某著「道記」(文政元年成立、原本?一冊、最首雅晴氏蔵)、清水浜臣著「甲斐日記」(文化年中成立)、日擬上人著「延山紀行」(文政十三年成立)、小林文五郎・同保蔵著「身延山久遠寺詣日記」(弘化二年成立、写本一冊、東北大学^{文神蔵})、黒川春村著「並山日記」(嘉永三年成立)、松亭金水著「松亭身延紀行」(万延元年成立、写本一冊、国立国会図書館蔵)、霞江庵翠風著「甲州道中記」(慶応二年成立)

右著作中、その刊本・写本等の所蔵先を明示しないものは、先人の紹介が既にあったものである。地誌・紀行は他にもあり、文芸作品・絵図・錦絵など加えると、五十点を越えるものがみられる。

各所蔵先より資料の御提供を受け、鶴岡節雄氏よりは種々御教示を受けました。厚く感謝の意を表します。

○全文の翻刻にあたって、次の様にした。

身延山諸堂記外（北沢）

- ・丁付を示す数字と、その丁の「表」を「オ」と、「裏」を「ウ」として本文の上に示した。
- ・頁と丁の終りにあたる部分は』により示し、行末は「で示した。
- ・漢字は、旧字・異体字など、ほぼ通行のものに直した。
- ・明らかな誤字は直したものもある。宛字・送り仮名など、通行でないものに（ママ）と付した。
- ・項目毎に「註」として記したものは、頭註・脚註・押紙であるが、本文中の該当箇所、又は近い箇所を以て(1)(2)等と示した。朱字の記載はその旨を示し、頭註・脚註・押紙の別は最後に示した。
- ・該記録原本で使用されている特殊な送り仮名「ㇿ」・「ㇾ」・「ㇽ」・「ㇼ」は、夫々に「コト」・「シテ」・「ナリ」・「トモ」のように改めた。

○今回は第一巻「身延山諸堂記」の全文を翻刻する。

目次

。堂塔の下の漢数字は“巻数”を洋数字は“丁数”を示す。
 。() 内の数字は、書陵部本の丁数を示す。

惣門	一 2	二 201	(12)
逢島ノ祖師堂	一 2	二 134	(12)
太平橋	一 3	二 141	(13)
稻荷大明神社・拜殿	一 3	二 50	(9)
三門・廊門	一 4	二 50	(12)
三門常唱堂・頭寮・香積・結衆寮	一 8	二 8	(12)
同常作事長屋	一 8	二 8	(12)
(重栄梅) 天神宮・雨屋	一 9	二 9	(11)
(聖徳) 太子堂	一 9	二 9	(13)
浴室	一 9	二 127	(9)
石壇	一 10	二 54	(2)
二天門 <small>石灯籠</small>	一 11	二 31	(2)
本堂 <small>灯籠</small>	一 12	二 24	(2)
祖師堂 <small>水鉢・宝塔・灯籠・出仕ノ廊下・本堂へノ廊下</small>	一 24	二 25	(2)
	一 94	二 96	(3)
	一 97	二 98	(3)
	一 98	二 98	(3)

身延山諸堂記外 (北沢)

位牌堂 <small>祖師堂へ廊下</small>	一 15	二 44	二 46	二 97	(5)
本地塔 (堂)	一 15	二 90			(5)
二重宝塔	一 16	二 66			(1)
灯主堂・万灯室	一 19	二 70			(5)
鼓楼 (堂) <small>灯籠</small>	一 19	二 78	二 103		(8)
円師堂	一 20	二 63			(7)
椎鐘堂・番部屋 (大鐘楼)	一 21	二 84	二 25		(7)
舞台	一 23	二 74			(6)
同菜屋・廊下	一 23	二 74			(6)
普請所長小屋	一 23	二 74			(7)
供厨 (御供所)	一 24	二 101			(9)
通本橋・回廊 <small>位牌堂へ廊下</small>	一 26	二 97	二 106		(13)
十二時鐘・番寮	一 27	二 23			(7)
釈迦堂	一 27	二 23			(7)
奥位牌堂	一 32	二 32			(16)
納骨堂土蔵	一 32	二 32			(16)
本院之分▽	一 29	二 139			(16)
中門 (附門)・長屋	一 29	二 171			(16)
東大門	一 29	二 171			(16)
西門下馬札	一 30	二 171			(16)

身延山諸堂記外（北沢）

塩沢口（札）	一	30	（16）
会合所・玄関式台	一	31 二 150	（14）
厨子（司）	一	34 二 164	（16）
対面所・次間	一	34	（16）
小方丈	一	35 二 143	（17）
大方丈・唐門・浴所	一	36 二 146	（17）
藏經堂（一切経藏） <small>唐本一切経 唐小鎮</small>	一	37 二 139 二 185	（17）
（真骨）宝藏	一	40 二 109 三 14	（19）
宝藏中央・廊下	一	44 二 114 三 19	（21）
同拝殿	一	45 二 114 三 19	（21）
奥位牌堂	一	47 二 134	（22）
古仏堂	一	48 二 128	（22）
靈宝藏・拝殿	一	51	（23）
東土藏	一	52	（24）
経堂前ノ庭泉水等	一	53	（24）
廊下七ヶ所	一	53	（24）
（奥）書院・学問所・休息所	一	53 二 160	（24）
料理所	一	54	（25）
湯浴所	一	54	（25）
金支配部屋	一	54	（25）
新土藏	二	172	（25）

△從上之山通至奥之院之部▽

永守稻荷社・雨屋	二	174	
奥書院・山主ノ居間	三	35	
大書院	三	36	
小書院	三	37	
講究所・玄関式台	三	38	
生徒寮・廊下	三	38	
飯厨司	三	39	
受附所・内玄関式台	三	39	
物置長屋	三	39	
普請会所等	三	40	
法喜堂（厨司・庫裏）	三	53	
大客殿	三	56	
祈禱堂・番寮・廊下	一	55	（25）
願主堂	一	58	（26）
鐘楼堂	一	59	（27）
影現七面大明神・幣殿・拝殿・鳥居	一	60	（27）
番神社（八幡宮）・拝殿	一	61 二 129	（27）
五重（宝）塔	一	62 二 175	（28）
刹堂（十如房）	一	64 二 131	（28）

兒文殊宮・児水

宝塔

蓮師ノ廟堂

一切経蔵

経蔵側廟塔(願性院
八条宮)

丈六釈迦堂

相輪塔

大黒堂

三光堂・拝殿・番僧寮・大光坊

金仏釈尊像

常題目堂(堂唱堂・法久庵)・衆寮

東照大権現宮・雨屋

妙見大菩薩ノ宮(中谷
松井房)

水屋庵(堀水庵
法明坊)

奥院祖師堂・拝殿

二王門(二天門)

椎鐘堂

別当寮(孝東院)

籠屋

御供所

井水

△西谷通七面山詣▽

朝師堂(東林房
箕林房)

西谷檀林善学院諸堂

常経堂・衆寮・食堂

廟番僧寮(妙福庵)

収骨堂

犬ノ塔

釈迦堂

祖師廟堂・拝殿

阿仏房日得聖人ノ塔

御草庵旧跡

田代祖師堂・庵(妙石庵
高屋石)

松之息ミノ寮(松樹庵)

追分ノ寮(感井坊)

十万部

赤妙福寺

神力房

蓮華房

鳥居

身延山諸堂記外(北沢)

身延山諸堂記外（北沢）

北神通坊	一	94	(40)	寿量院社（別當 円自坊）	二	197
社和安住房	一	95		地神宮（南谷 常樂坊）	二	199
肝心房	一	95		清正堂（通泉坊）	二	200
中ノ茶屋（中適房）	一	95	(40)	清吟寺	三	63
晴雲房	一	96		宝物館	三	69 に入紙
赤坂万年橋	一	96		小檀林教場	三	76
宗悦房	一	96		祖山学院	三	76
七面山諸堂等	一	96	(40)			
甲州七面山鐘銘并叙	一	101	(41)			
七面山神祠修營疏	一	102	(42)			
七面山神祠記	一	103	(43)			
池大神宮	一	105	(44)			
影向石ノ社	一	106	(44)			
波木井日円之古地・廟所	一	106	(45)			
帝釈堂（西谷 本行坊）	二	183				
辰師堂（東谷 妙仙坊）	二	187				
興師堂（醍醐谷 林蔵坊）	二	189				
尊賀堂（西谷 常住坊）	二	193				
二十三夜堂（片岡沢 山本坊）	二	194				
松尾大明神社（西谷 法盛坊）	二	195				

(1オ)

嘉永七^{甲寅}年二月写之「明治八年焼失」^(押紙、朱字)

第一之巻

身延山諸堂塔建立記録

一久遠寺西谷塔頭ヨリ今ノ地ニ移スハ文明六年甲午
歲朝師入山已後十五年開闢ヨリ二百一年ナリ

印印

(1ウ)

安永五^{丙申}年十月十一日ノ夜回祿七面山堂宇不殘^(臨身門ノコル)

延享四^{丁卯}年七月七日朝師堂并十一ヶ坊下之房ヨリ出

火

文政四^{辛巳}年八月九日夜九ツ時八角堂焼失^(願堂并二)

文政七^{甲申}年八月廿七日申ノ下刻三堂并諸堂十三棟焼

失^(供所ノコル)

文政十二^{己丑}年九月六日戌中刻方丈向不殘焼失^(五重塔焼失)

慶応元^{乙丑}年十二月十四日ヒル四ツ時仙台坊ヨリ出火三

身延山諸堂記外(北沢)

(2オ)

門類焼寺中十七ヶ坊小堂」ハヶ所町百六軒類焼失」
明治八^{乙亥}年一月十日午後六時西谷本種坊ヨリ出火諸
堂向方丈向不殘」延焼祈禱堂脫師堂影現社夏鐘堂五
重塔鐘師廟堂寺中拾二ヶ坊」町三軒焼失^(但シ本地塔表門并裏門當所)

裏門ノコル時ノ鐘堂焼失」
西東新三寶藏ノコル

身延山諸堂塔建立記録

三十三世日亨師ノ筆又加筆ノ写レ之

一惣門 三間半二間半^(棟札ニ寛文第五乙巳年九月吉日日食料理形 与子孫繁榮家門安全也)

第廿八世奠師代三浦志摩守明敬ノ母

寿応院妙相日覚大姉^{寛文二壬寅八月四日卒}依レ之毎月四日於三

宝藏「自我偈誦レ之」

石灯笼一基 為三寿応院妙相日覚大姉并二

施主仙寿院妙良日長^{三浦智城守姉本多弥兵衛ノ母}

石灯笼一基 為三寿応院妙相日覚大姉并二

施主長徳院松岩妙寿寛文九己酉十二月日」

開会関ノ額者三十六代潮師ノ筆^{寛明ニ寛院ニ}

經板一枚^{飯島村} 飯島村^{市川太右衛門} 飯島村^{本郷村}

同米^{有野村} 何某^{額文字共} 下町^{下町} 下町^{下町}

十使^{取次} 市川太右衛門^{一式細工} 池上丹下^一 繪師^{平兵衛}

(2ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

孫兵衛 時元文三戊午年四月廿八日
下大工 孤町 御治ヤ 御右衛門 時院代談路日審誌
十右衛門 佐五右衛門
以上
要書

〔註〕

（一）二ノ二百一〈押紙・朱字〉

（一）逢島ノ祖師堂三間唐尺四方

相伝フ宗祖於此如^{初途}大且那波木井殿^{寄進精舎地}「
故ニ号逢島云云

第廿六世遍師ノ代建立 棟札ニ慶安三^{庚寅}八月吉

日」当庵開基安住院日城^{六十七歳之節書納} 当堂」発願

知見院日退上人也本願新屋六右衛門」^{法号}常友

村井久左衛門^{法名}日相 屋敷寄進主」^{船岡村与兵衛}

法名長清 梅平村縫右衛門^{法名}立理」仏壇ノ施主同村忠

左衛門^{法号}法仙 大工池上左門」天蓋ノ本願主村

井久左衛門了性日相慶安五酉」五月十三日」

祖師ノ像^{本在、奥院ニ移此堂} 書付ニ破壊ノ尊像奉ニ再興ニ

之^ニ意趣者祈下于学問不退而契^当仏意正智」息災

延命上矣寛永十三年^{丙子}二月日願主爲峰院」日詳^形

所化名唯達於^{飯高}修学後ニ中村化主京都妙顯寺」

台座 井宮殿

池上日登ト改院号改^{御那院}

（3ウ）

之扉日遠形 慶長十三^{戊申}年初秋人日」修畢ス造営

施主^{甲州河内 飯高ノ住}志左衛門」

発軫ノ額者日亨代^{本戸中納言}綱条卿ノ筆」

逢島祖師像^{新刻 明和七庚寅仲夏迄師代} 同御厨子三ツ具

足^{施主大坂河内屋敷兵衛 明和八辛卯仲夏迄師代}」

〔註〕

（一）或作会〈頭註〉

（二）下ノ百卅四〈押紙・朱字〉

（三）此ノツムキ下ニアリ〈頭註〉

一^{（一）}太平橋^{中二間 四十五世迄師代明和七庚寅十二月成就}「張初ニ付志

九十三歳翁小倉縫左衛門」^{師ヨリ本尊被下今般太平橋渡初依之}「帶刀免許行年

五十三世奏師代再建文化三丙寅年十月」

文化十三^{丙子}年秋八月大風ニテ破損依^之之五十四世審師代

同年ノ冬成就

掛替」

文政十一^{戊子}年 大水ニテ流レ之依テ五十八世環師代掛レ

之」

六十九世環師代文久三癸亥年掛替金之七十世環師代元治三乙丑五月十七日

水盛風強リ同年飯橋ヲ」掛之世話方丹誠置月尊左衛門」

太平橋永代爲修復料金百兩寄附主福土村戸沢恒藏世話人池上重兵衛置」

月尊左衛門環師代文久二戊辰年五月納之

健師代三枚ッギ本尊明治六西二月遷之(2)

〔註〕

(1) 下ノ百四十一(押紙・朱字)

(2) 此ツビキ下ニアリ(頭註・朱字)

一稻荷大明神二間并拜殿在風町・四間二間半

社并拜殿元禄十三庚戌年十二月朔日 日省判

再興発願主学禅院日達 社并宮殿再興「実道房日

修正徳元 辛卯年五月成就就其ノ年」八月廿三日ノ大

風ニ皆破損ス」

神像ノ座并宮殿正徳二壬辰年再建」

別当ノ房四間ニ六間 元禄十四 辛巳年成就日省師ヨリ」

学禅院日達江授与之本尊有レ之」

門石門稻荷社 吾祖当山開闢之初社前之一石ニニ彫影現シ高祖ヲ一尊
敬シ奉ル義夫若遊里之鎮守是ナリ 文殊精舎一安政六
己未七月立之文殊房旭門院日行代」

(1)(2) 廊門 左右各五間二間半宛」

第廿六世退師代新建立寛永十九壬午六月十二日建立成就供養」本

願者甲府松木氏ノ母受源院妙徳日行正保二乙酉年八月十日卒

依レ之毎月十日於ニ宝蔵ニ自我偈誦レ之諸国」勸化

有レ之奉加保土蔵有之

身延山諸堂記外(北沢)

(4オ)

(4ウ)

(5オ)

(5ウ)

三門ノ位牌表受源院妙徳日行大姉表三門大願主」

大久保彦兵衛息女法名受源院妙徳日行遷」正保二

乙酉八月十日寂ス 寛永十九壬午六月十二日」当

門建立成就供養

密迹金剛神ハ從中門遷座于所之時・誌之」第廿六嗣法知見院日

遷判形

位牌朝野遠近緇素貴賤士女」

位牌当三門建立日遷聖人表日奠立之」

棟札同ニ位牌裏書ニ脇書御助成第廿二世心性」院日

遠上人 日遷判形 大工池上新之丞宗高同子息藏宗高

奉加帳金子二百兩日遠上人 日遷判形」

初ハ瓦葺也屋根重ク又寒氣破壊故第二十七世」境

師代改テ為ニ檜皮ノ慶安二己丑六月良日 奉行」唯

識房蓮成房 施主当町國駿府勸化」

宝曆三癸酉年九月十九日以ニ銅枚ニ葺更企之輪師御代

二王ノ像者相州六浦荒尾城主荒尾掃部守平次郎入道妙」法禅

門從ニ相州ニ自ラ荷担シ来ル長七尺六寸依レ之」沙

弥妙法禅門ノ像安ニ置之坐像長ケ一尺六分大仏師増

貞和四九月四日 此書付像ニ有之妙法禅門者人王九十九

代」後光嚴院御宇文和二癸巳年六月十三日寂至正徳二壬辰年三百六十年ナ

身延山諸堂記外（北沢）

リ「貞和四戊子年ハ至正徳二壬辰年ニナリ三百六十五年ナリ妙法ノ像

ハ存日ニ」造レ之」

閣ノ上釈尊ハ日遠師開光」

祖師者延宝七未十二月廿八日脱判形 施主恵応院日法」

十六羅漢」

一窟度羅跋囉脩閑尊者住西州身自修風

施主受源院妙徳日行」

二託迦蹉尊者住迦蹉那羅國

為三父了底菩提（6）施主松本七左衛門」

三迦諾迦跋釐墮閣尊者住東州

為三母妙空菩提（6）施主松本七左衛門」

四蘇頻陀尊者住北州

為了心院妙忍施主松本七左衛門」

五諾矩羅尊者住南州

施主穗坂弥右衛門法長松院法寿日増」

信女法長相院妙寿日悦」

六跋陀羅尊者住北投通州

施主亀崎又兵衛」

（6ウ）

七迦理迦尊者住前加奈州

施主為三喜多村彦右衛門信昆二世」

八伐闍羅弗多羅尊者住鉢闍奴千州

為三妙泉日涌一施主須田市十郎妻妙了」

九伐博迦尊者住香蘭山中

施主出口彦兵衛法道祐同婆妙寿」

十半託迦尊者住三十三天

施主松田昌悦」

十一囉怛羅尊者多分在畢利耶國

為三祖父池妙聚逆修

十二那伽犀那尊者住半波波山

施主小河内太郎左衛門」

十三因揭陀尊者住北山

施主小沢久左衛門」

十四伐那婆斯尊者住可住山

施主佐野兵左衛門法道喜」

十五阿伐多尊者住龍山

施主山田庄兵衛」

十六注茶半託迦尊者住持龍山

（7オ）

(7ウ)

施主 望月館左衛門法号淨琳
延山稿中九人

天蓋本願主村井久左衛門了性日相慶安五西五月十三日

石灯籠二基願主 勢州桑名城主
從五位下松平撰津守源定良 為三

除災延命武運長久子孫繁昌 明曆二丙申極月吉辰

石灯籠二基本願是其日諦覓文入辛未十月十三日

金灯籠二基施主 武立安河内屋喜右衛門 五十四世家師代新ニ
建之 永代油料金三十兩寄付之

石ノ水鉢

三門大屋根檜皮葺更

同下屋根銅瓦葺更

同廊門檜皮葺更

二王尊ノ花天井

同御供所新建立

別当ノ房再建立

身延山ノ額ハ三十六世日潮師ノ筆ナリ

〔註〕

(1) 二ノ五十ノ押紙・朱字

(2) 慶応元乙丑十二月十四日巳ノ中刻仙台坊ヨリ出火

之節類焼失ナリ(頭註)

(3) 宝曆三癸酉年古仏堂祖師江戸開帳勤之浄心寺ヨリ

銀五十枚銅瓦五施入(頭註)

(4) 妙法禪門文和二年ハ五世台師ノ頃 別統ニハ十三

身延山諸堂記外(北沢)

(8ウ)

世伝師ノ時トアリ不詳(頭註・朱字)

(5) 返り点未記入。

(6) 宮内庁書陵部本には「松本」とある。

(7) 返り点未記入。

一三門前常唱堂并頭寮香積厨子結衆ノ寮

第三十三世日亨代新造立 奉行僧 願静房日録
宗信日敬 大工

棟梁 池上藤兵衛宗道
仁兵衛宗茂 施主本願 武州住人
三河屋吉左衛門

釈尊三河屋吉左衛門親父所持之尊像奉納之

立像宗旨建立祖師像打它如法攝

頭寮 文政十一年戊子年
六月三十日ノ 大水ニテ流失

常唱堂ノ額ハ五十八世日環師ノ筆ナリ

一三門前ノ常作事長屋 第三十三世日亨代新造立 奉行

僧 願静房日録
宗信日敬 大工池上藤兵衛宗道

前ハ於三門ニ營作ス見分不宣又三門損ル故正徳元辛卯年冬新ニ
造之

一重栄梅天神宮 三
二尺八寸 尺銅瓦葺 同雨屋 二間
二間半 家根銅瓦葺

宝曆四甲戌二月廿五日四十世輪師代新造立

一聖徳太子堂 九尺四方
二階 銅瓦家根 文政三年時師本尊江戸勅化ノ際
全繪図

(8オ)

身延山諸堂記外（北沢）

文政年間 大工中建立之

慶応元年十二月十四日延四ツ時仙台坊ヨリ出火焼失
明治四十五年 月 日再建（一）

〔註〕

（一） 月日を欠く。

一浴室七間八間

第廿六世遍師代棟札正保三丙戌十月廿七日 大工

池上新之盛宗尚 同 藤宗尚 前々会所并 三門等皆依此指搦者

後代諸如レ是 奉行証智院日用 山本房日造

祠堂金式拾兩為悲寿光院殿昌栄日慈大姉

金式拾兩為姉了智院殿妙堯日清菩提

施主京極丹後守高国

浴室ノ額者

一石壇（イ）三百八十七段 休息所六ヶ所

廿九世鑑師三十世通師兩代ニ成就

奠師銅瓦勸化殘金五拾兩用レ之余ハ通師代ニ足レ之成就ス

宝永四年丁亥 十月四日ノ大地震ニ大ニ破損ス日亨代「悉補ニ復之」

其後二天門再興之節石段五段増シ之嘉永五年新師代

（10ウ）

一 道灯笼

一（一）二天門六間ニ三間半棟札無レ之

往古ノ二天門ハ六浦平次郎入道妙法禪門建ニ立

之二 播磨守也 此門改造ノ時奥ノ院ニ移レ之

今ノ門ハ松平隠岐守「定長ノ母堂養仙院了榮妙護

日立大姉（天和三）癸亥十一月十六日辛 建立也

上ノ山ノ宝塔并時ノ鐘モ此ノ大姉ノ「建立也」

二天像

石灯笼二基（寛文十庚戌）

施主甲州小河原村内藤氏（法忍）

道栄日行（地盤ニ破損再興施主内藤金右衛門）

〔註〕

（一） 二ノ五十四（押紙・朱字）

（二） 文政七年焼失（押紙・朱字）

（三） 三十一世脱師代再建立（頭註）

石壇惣修復施主東京下谷登住町藤井啓助同妻今女
金百七十円也明治十八年九月初ノ同二十年亥十二月成就ス
鉄ノクサリ遠州寺院信徒

(11オ)

一本堂（1）（2）
往古ノ本堂者豆州伊東ノ大行等江邊ノ十一間四方也
拾遺閣半四方棟九尺宛

第十八世日賢師代建立也未レ満遷化第十九世「日

道師代ニ成就ス日道師ノ棟札ニ云」

慶長四己亥年八月廿五日日本堂者第十八世日賢「聖

人慶長四年己亥三月十三日遷化施主者関白殿ノ母瑞竜院日秀ナリ」

三年ニノ而終ル賢師上葺未レ満遷化日道（3）文月」五

日入院上葺成就抄大工棟梁池上新之丞宗重」当町

大工已上十二人下山ノ大工三人奉行妙行房日修」

棟札

本堂ノ施主瑞竜院者大関秀吉公ノ姉建」性院前三

位法印一路カウチ露斉日海ノ妻慶長十七年八月廿五日卒関白秀次公

井岐阜宰相秀勝卿ノ母堂ナリ」寛永二乙丑四月廿四日九十三歳逝去

当山ノ本堂并諸尊今ハ在リ会舍所」

大方丈皆テナ瑞竜院日秀ノ建立也」

洛東善正寺談林一式建立也

上京村雲ノ瑞竜院」又号ス其ノ旧跡也」

中尊両仏四菩薩四天王ノ施主ハ松林院殿」榮寿日

仙大姉寛永三丙寅十月十二日七十五歳卒為ニ離苦得樂并」仏法広布」

寛永第九竜集壬申中夏如意日」心性院日遠形

身延山諸堂記外（北沢）

(11ウ)

(12オ)

中尊ノ内妙経一部為父願了庵齋湖廿三回忌日還判形」

文殊普賢ノ二像万曆三年庚子六月十八日日奠判形」施主榮名城主松平坂

日法」

久遠寺ノ額者近衛三藐院殿筆也今ハ二門門江移ス法

名三藐院同徹太初慶長十九甲寅年十月廿五日四十九歳歿ス

後門釈迦文殊普賢ノ絵狩野重人佐筆」

宝蓋天地長久 国土安全 四海泰平 万民快楽施主原氏留宮（1）

氏」

天蓋」

三具足日字代為武運長久施主防州岩田城主吉川勝之助広達

久成殿ノ額者四十五世日応師ノ筆安永二癸巳九月施主面々

諸堂并向拜惣修復彩色塗地惣施主配州御殿僧院殿小石川御殿僧院殿

淡谷御殿僧院殿 安永二癸巳九月四十五世日応判形

總齋君女中各々御祈禱 板札有之

〔註〕

（1）二ノ卅一 三ノ四十三 二ノ九十七ノ押紙・朱

字

（2）文政七年焼失ノ押紙・朱字

（3）七月五日入山ノ上ノ脚註

（4）世殿部本は「雷宮氏」と。

身延山諸堂記外 (北沢)

〔1〕(2)(3) 祖師堂拾七間四方ニ縁各二間宛

第十三世日伝師建立初云日憲日伝同代建立

第二十四世日要師代元和七辛酉同八壬戌 兩年諸國

勸化華_レ檀懸_三破風_一以_三檜皮_一葺_レ之元和八年壬戌棟

札有之造營奉行ノ僧要行院日統 惠性房日彦 隆之房日受棟

藏房日頭 觀房日涼 唯運房日達 延寿房日清 長久房日宗 東之房

成房日得 法雲房日詮 南延房日達 榮範日解 長順日滿 玉清

日殿 松井房日通 大工棟梁池上新之丞宗信 惣大工 賀右衛門

日芳 玄澄日生 協 棟梁池上丹後守宗次 宿太良島田戸右衛門 太佐

兵衛 武右衛門 素兵衛 李之助 勘右衛門 町人足奉行池上与兵衛

新治郎 勘十郎 長五郎 木引頭 勘右衛門 六千代

第廿八世日奠代欲_レ改_三銅瓦_一雖_モ有_ニ諸国勸化_一

有_レ故不_レ成_ニ其集金_一処々修營殘金五十兩ハ後

代石檀料ノ内ニ用_レ之寛文三癸卯年正月奉加帳ノ序ニ又分限

一_ノ分_二五_一リ_二ソ_一ト瓦 又既ニ所_レ作銅瓦者日脱代祈禱

堂建立ノ時用_レ之葺_レ之其ノ余瓦或_レ潰_レ為_ニ水鉢等_一

又日亨代藏經堂建立ノ時用_レ之其殘瓦不足ハ於_ニ

大坂_一求_レ之本_二地塔ノ銅瓦ハ全ク於_ニ大坂_一新_二作_一

之

宮殿往古ノ宮殿ハ第十三世日伝師代 施主西之房日祐

(13ウ)

大工ハ池上縫殿允正重宮殿ニ此ノ母付有之此宮殿ハ高座石

新宮殿ハ第三十三世日亨代宝永五戊午年九月於_ニ

京都_一作_レ之作者大仏師山田式部金子五百兩余施主本

願分ハ宮殿ノ内ニ立_ニ共牌_一惣施主ハ委細別帳

記_レ之

祖師御持経者神力品第十五世日叙師ノ筆ナリ與

書ニ自余ノ檀越一結為_レ無今後兩際所願成就寄_ニ

進之永祿第九丙寅年十月十三日叙判形至_ニ正

徳二壬辰二百四十七年表紙ニ寛永十九壬午十月十三

日修補之_ニ日退判形堯淑日教修營之_一

宮殿内ノ御脇息ハ祖師御存日波木井殿寄進

宮殿内ノ金天蓋寛永十八辛巳三月施主養珠院妙

紹日心

開帳時供養金小香炉日亨代施主玄理院日義關了院日盛

戸張 水戸前黃門光圀卿

御袈裟衣并衣服

御小袖 帶 露頭 紀伊君御殿中瑞林院天眞院宝徳院 毎年奉上下 其後

水戸君御殿中李君奉上 御拾 露頭 本多 伯邊守養母蓮経院奉上 御拾

季君ヨリモ奉上 夏衣者洛陽 布袋屋奉上

三具足 并前机

祖師堂過去帳三十冊者第十一世日朝師筆

(14オ)

(14ウ)

(15才)

金柱ニ元亀三壬申十月十三日 日叙判形 一百四十一
年^年」勸進沙門一乘房日増^{日増}」

永代報恩^{報恩}搦十三日搦本願人掛札位牌^{日字代}」

同位牌壇三具足四通^{日字代}」

半鐘^{半鐘}」

菊紋天井 延享元年甲子正月始之九月迄畢 第三十六世日嗣代^{日嗣代}」施主江戶京橋

大津氏新兵衛 妻美崎成正院日福聖人^{日福聖人}」

祖堂卷經卅部机蓋共^{安永七戊戌六月} 施主教榮石村河西藏人 取次世話人 蓮侶坊智成院日勝^{日勝}」

同開帳場半鐘^{指渡一尺三寸} 安永二癸巳九月納之 右同人^{右同人}」

〔註〕

(1) ニノ二三ノ二〈押紙・朱字〉

(2) 文政七年焼失〈押紙・朱字〉

(3) 金百両 永代常経料妙伝寺塔中 妙釈院日悟十一日命日 毎日四巻読誦施主

〈頭註〉

一位牌堂^{十三間半二十一間四方棟各七尺宛}」

往古ノ位牌堂ハ三島本覺寺江邊之邊然河端ニテ大水ニ流失ス^{流失ス}」

第廿七世日境師代建立慶安四年辛卯年ナリ 棟札無^レ」之故

ニ奠師覺文四年八月日ノ棟札有^レ之^レ」

身延山諸堂記外(北沢)

(15ウ)

釈尊丈六坐像者^{住人}受心房日用自刻^レ之^レ」安置ス為^三

此法味^{從天和二年戊午 至元禄七年戊午}」回國三百万部^レ」勸三行^レ之^レ」奉^レ

收^レ之^レ」生國丹州宗久^{此札蓋前長押ノ上ニ有^レ之^レ}」

三具足并前机^{三具足并前机}」

日月牌過去帳^{毎冊施主書有^レ之^レ}」

〔註〕

(1) ニノ四十四 三ノ卅二 ニノ九十七〈押紙・朱字〉

(2) 文政七年焼失〈押紙・朱字〉

一本地塔^{寺丈四方外四方縁}」

三十三世日亨代宝永七庚寅年新建立^レ」為^レ令^レ諸人^レ

知^レ」蓮祖本地上行菩薩^レ」故建^レ立^レ之^レ」余宗有^レ此^レ

例^一」

上行菩薩ノ像者本阿弥空中齊光甫法眼^レ」存日奉^レ

造^レ立^レ之^レ」没後ニ歟沢閑居ノ日現一家相^レ議^レノ当山^レ

ニ奉^レ收^レ之^レ」座光宮殿ハ安置ノ後造之^レ」(享保二西四月 日現上人)

十二日^{十二日}」

塔者武江ノ住人植木助三郎^{法号}常有院宗閑日合^一」^{宝永 四丁亥年 觀靜房日勝 奉行僧宗信日勝}

大工棟梁池上^一」藤兵衛宗道^{四丁亥年 觀靜房日勝 奉行僧宗信日勝}

身延山諸堂記外（北沢）

喜拾金子三百兩、没後立之、依之毎月於宝蔵、自我偈誦之、銅瓦ハ助三郎、養子助五郎、法常味院宗軒日意施主ナリ、三具足并前机（日年代）

〔註〕

（一）二ノ九十（押紙・朱字）

一二重宝塔（三四四方）

第十一世日朝師代」

安置ノ大漫茶羅者日命授与ノ本尊写レ之以（三）真

鍬彫刻之其裏書ニ云ク

甲州巨摩郡飯三牧」波木井郷身延山久遠寺塔中御

本尊柱」立ハ文明六（甲午）八月十日御本尊入塔ハ同

十（戊戌）三月十六日御本尊願并塔勸進沙門行仙」

房日用証明房日徳同佐野弥次郎朝義」御本尊ノ工

巧弥太郎朝宗 日朝（判形）「朱添ニテ書之（從文明六甲午年至正徳二壬辰年二百四十年ナリ）中尊両仏」

塔内天井ノ竜等四方ノ緑色絵ハ相伝フ古法眼ノ

筆」云云 亨私云古法眼ハ文明九丁酉年ニ生レ永

禄二己未年」十月六日八十三歳ニノ死号ニ越前守

古法眼元信、從此塔建立ニ經年後ニ生ル若シ爾ラハ緑色者建立、已後遙ニ後ニ加レ之歟（更詳）往古者古法眼ノ筆釈迦、文殊普賢有レ之後取レ之為三福対、金五拾枚ノ札有レ之

桑名寿量寺ノ檀那中古修補ノ書付上ノ重ニ有レ之

朝師ノ作勸化帳之写（朝師ノ真筆在身延山土蔵）

勸進ノ沙門日徳敬白（朝師殊雲三清信士女弟、身延山中建立ノ字宝塔成就ニ世大利）

山者末法有緑之導師日蓮上人ノ章創也爰一元祖上

人為地涌之上首、忝伝要法於月氏、更非迹化

所レ及也為弘經之法將親撮枢柄、日域全非

余聖之所能也、是以小権之四依暫離息（化）上行

之慈雲遍、霖潤仏種於心田、迹化之大土、亦雖

掃レ寂本時之慧日重照、転法輪於昏衢、矣自爾以

降順者知三正法之貴、早蹈成仏之路、逆者瓶邪

教之賤、弥沈苦海之底、情以有信謗之別者、只

是由先業之所惑、静願利順逆之縁、偏是在本

化之勝利、歟方今、以荷負大法、則知法中之竜

象也、若非此師、二者誰謂上行之降誕乎、然元祖

既為三本化之正棟、開花界於身延山、設雖為

迹「化」之聖跡、猶以不レ可比レ之之況小檀之地、平良、以「楓棘」非「鳳鸞」之所、抛「矣」今以「上聖」之開闢、遍知レ為「靈地」者也、殊其地形亦無レ比乎然則「山堆鷺峯山」之粧、在目前、水、潔、玉泉之流浮、二、慧月、也、誠希代之勝地、無雙之靈場也、故繼「素運」步、尊、卓、婦、命、但於「此寺院」之中、未レ見「宝塔」、寺僧歎、涉、日、愁、而送、年、凡「宝塔」者在「經中」二、惣、二、經之雙美、顯、三、說之超過、二、円經之希奇、豈如レ之乎、況塔中付属之玄旨、獨「在」地涌、若「拜」此「宝塔」、亦可レ知「宗元」之貴、二、者歟、不レ可レ不レ修、不レ可レ不レ勸、比丘日德受、三方、袍、円頂、之形、適、雖、列、三、釈子之數、智、目、行、足、闕、無、何、以、一、到、三、清涼池、二、乎、兼、思、三、將來之苦域、愁、淚、余、一、袂、悲、色、銘、肝、今、不、耐、三、懇、歎、一、相、語、善、友、勸、一、三、進、信、者、新、起、三、立、一、字、之、宝、塔、將、遂、三、世、之、二、大、願、者、也、凡、厥、泰、山、不、讓、三、土、壤、故、成、三、其、一、高、二、河、海、不、厭、三、細、流、故、能、成、三、其、深、一、矣、一、誰、分、三、涓、塵、之、資、二、不、レ、期、三、海、岳、之、果、二、乎、鹿、幾、一、貴、賤、莫、レ、論、三、多、少、二、力、之、所、レ、任、雖、二、一、位、一、錢、不、一、レ、可、レ、輕、レ、之、志、之、所、レ、分、雖、二、寸、鉄、尺、木、二、所、レ、不、嫌、レ、之、也、一、只、以、レ、志、為、レ、足、集、三、輕、錢、於、同、心、一、招、三、厚、福、

身延山諸堂記外(北沢)

於「合力」者也、今記「事由」二、所、レ、唱、如、レ、右、敬、白、
文明第二年十一月日 勸進日德敬白、
三具足、

一、⁽¹⁾⁽²⁾灯主堂三間半三間万灯室三間十二間、

兩堂ノ額ハ玄理院日儀ノ筆、^(寛保三癸巳九月廿一日化)

第卅二世日省代諸国勸化会式十一十二二十三日万

灯供養始レ之 施主ノ名灯主堂ニ記レ之万灯室」本

有、三、字、二、鼓、樓、堂、ノ、南、一、字、宝、永、四、丁、亥、十、月、四、日、大

地震ニ破壊スル故ニ厭、地、狹、二、不、レ、立、レ、之、此、ノ、兩、堂、

修復料祠堂金有レ之、
其後明和九壬辰年四十五世」応師代再興惣葺更委

別帳ニ有レ之、

〔註〕

(1) 二ノ七十ノ押紙・朱字

(2) 文政七年焼失ノ押紙・朱字

一、⁽¹⁾⁽²⁾鼓樓堂三間半四方、

第三十一世脱師代新建立、

太鼓大筒者永正年中日意師ノ書付有レ之、

身延山諸堂記外（北沢）

（20才）

鼓樓者為三緣了院宗円日倚^{延至七未年三月十八日教誓}「十月十日妙常承庇三申午^{延至七未年三月十八日教誓}菩提二也元禄五^{壬申}年十月」八日 日脱判形 施主ハ武江神田ノ住信女榮寿^{現安奉行松井後母}坊日遙大工棟梁^{坂上宮内池上人}太鼓張更^{宝曆六子ノ妙師代}釈迦尊者 発心者清閑日殊奉^{宝永七年庚寅二月三十日死ス}安置之

〔註〕

- （1）二ノ七十八（押紙・朱字）
（2）文政七年焼失（押紙・朱字）

〔1〕一円師堂三間四方行通縁三尺

像作并開眼不^レ知書付無^レ之長一尺五寸

波木井影堂ノ額者^{本戸宰相宗給御筆}

四十世輪師代宝曆四^{甲戌}年雖^三発起不^レ成化現依^テ

之施主^二得^三談合^一成就 金百兩^{武江役師住人坂倉清兵衛}

衛^一松屋四郎兵衛寄附 金三十五兩輪師御寄附^一

奉行僧示教院日喜^一

円師影像者從古來御宝蔵ニ有^レ之^{宝曆七年丁丑遷座四月廿五日}宮殿前机磐台等ハ大工池上新之丞作之^一棟梁坂上

（21ウ）

宮内宗高^一

〔註〕

- （1）二ノ六十三（押紙・朱字）

〔1〕一椎鐘堂三間四方番部屋九尺二間

大鐘者第廿二世遠師代企^二之第廿五世深師^一代鐫^レ之遠師代ノ奉加銀土蔵ニ有^レ之

銘者第廿一世乾師ノ作^一

身延山久遠寺^一

娑婆世界一須弥内南閻浮提大日本国甲州「波木井

郷身延山久遠寺者吾法華宗元祖^一開闢勝地九年安

棲靈崛也誠是法水流布^一濫觴宗門興建本基也普天

之支流流^二於此^一卒土之緇田生^三於此^二矣^一當^三于始

日遠住持之時^二有^一西谷山城禪門道順者^五適詣^三

当降^二一見^一鍵祖^二微少^一忽発^三弘願^一言乞巡^三検^一諸

邦^二遍^一奨^二賁^一賤^二新^一銘^三巨^一鐘^二以充^一法^三器^一矣貫主

大衆尤悦諾焉從^レ是已來踰^三城々^一岨峻^二渡^一漫々巨

海^二敵^一官舍^二衡門^一イニ庶民^一柴扉^二不^レ折^一寸鉄^二求^一

良助^二不^レ讓^一三片壤^二乞^一芳^一緑^二積勞多歳也存命之間

未^レ遂^三所願^一其^二躬已逝^一之贈^二善願房日行^一矣

爰「東照大権現御息源、黃門頼宣同宰相頼房」兩卿
 母公蓮華院妙紹日心者經王信力超レ他當「時稀有
 善女也故從レ初已來加三志力、然患、于」久有三其名
 未、得、其、実、至、人、今、時、大、勵、三、檀、功、督、速、治、鑄、矣、依、
 之、日、深、太、得、便、其、期、方、熟、果、以、命、良、治、造、三、巨、鐘、
 掛、住、持、三、宝、尊、前、累、年、大、願、今、者、已、滿、足、也、伏、冀、
 妙音周遍鉄岡山界、祖教永伝、棲至如来、之時、四
 衆八部同得、常樂、而巳即作、銘曰、
 奇哉妙韻 横響三大千、下達三阿鼻、
 上至三頂天、六時普告、覺三塵勞、眠、
 集、僧、勸、俗、念誦安禪、百八微耳、
 情識寂然 説、法、聽、法、互、開、心、蓮、
 貴賤老少 結縁無辺、金鐘盛徳、
 幾千万年 南無妙法蓮華經、
 寛永元年竜集^{甲子}八月如意殊日、

前住 寂照院日乾謹誌、

奉行沙門 南延房日遼、

治工棟梁駿州江尻住藤原山田若狭守種秀、
 堂者第三十世通師代建立、寛文十三年^{癸丑}十月八
 日、施主甲州古市場大久保助左衛門^{法号}詠秋日春、

身延山諸堂記外(北沢)

〔註〕

(1) 二ノ八十四 三ノ廿五(押紙・朱字)

(2) 鉦鐘勸進^{七月十二日} 善願坊日行(頭註)

本願

※大鐘銘文等については、「身延教報」第六十九
 卷二号(昭和五十三年二月号)に記事あり。

〔1〕(2)
 一舞台三間四方外縁有之、

初テ建立ノ年代未レ詳、三朝意伝三代内、

葺更者第十七世新師ノ代、天正十一^{癸未}八月廿六日

ノ書付有レ之、奉行蓮住房大工池上新之丞、

往古ノ舞台歴年朽故見分不レ宜^{六本柱亦不_{改爲}宜}、故ニ日

亨代正徳二^{壬辰}年再建立奉行僧^{觀音日勝}、大工棟梁

池上藤兵衛宗道^{阿仁兵衛宗貞}、施主武江深川ノ住人冬木屋、田中源四

郎^{法号}、壽命院浄久日量ナリ依三施主望、瓜ノ紋著、

之金物者諸人志有之、

〔註〕

(1) 二ノ七十四(押紙・朱字)

(2) 文政七年焼失(押紙・朱字)

身延山諸堂記外（北沢）

一同衆屋并廊下」

宝永四丁亥年十月四日未ノ刻 大地震ニ顛落スル故ニ日亨代改三造之、
奉行僧親野房日歸 大工棟梁池上藤兵衛宗定
宗侶日敬 仁兵衛宗貞」

一普請所長小屋」

一供厨二間半四間半」

往古二天門ノ脇ニ有レ之中古ノ西谷ノ道ノ辺リニ有レ之俗ニ云レ」
御供屋」

往古ヨリ雖レ有レ之遠所又破損スル故ニ日亨代堂」

前ニ移レ之改建ス

擬ニ高祖御供料ニ寄ニ附田」地ニ又新建ニ立供厨、為
慈父 妙成院法源日正 施主」甲州住人 大木四郎兵衛 法号 國恩院了
悲母 法泉院妙有日善 泉村ノ（同）佐太夫 法号 國心院法
慶日徳」宝永三丙戌年十月十三日 奉行僧親野房日歸
大工棟梁池上兵右衛門宗定」

〔註〕

（一）二ノ一〇一（押紙・朱字）

一祖師堂江出仕ノ廊下」

日亨代宝永七庚寅年六月十五十六十七已上三日」
報恩修造講大法会執行之時作レ之
但シ常ニハ
登座ニハ

（25才）

文永十一年甲戌年六月十七日当山建立ノ日ナル故
興起ノ」祖書当山ニ有レ之最可レ營ニ報恩、日也又諸
國并ニ」國中參詣容易之時節ナル故ニ張レ之、
法事之僧法衣五十通り 同年一様ニ裁レ之施入ノ」
諸人別記ニ有レ之」

堂前起立ノ檐三十流 井竜頭正徳元年辛卯年六月作レ之

舞台并廊下之幔世俗ニ云水引 正徳二壬辰年於三京都ニ

新織レ之大輪宝ノ金紋紅地一様ニ作レ之施主別記

有レ之」

十種供養之具并薪供之具及香炉造花小童」天冠貫

主之天蓋等悉於三洛陽ニ新造レ之」

報恩修造講本願并惣施主ノ大帳」

〔註〕

（一）二ノ九十六（押紙・朱字）

一堂前金灯籠二基」

奉寄進金灯籠身延山久遠寺」

与ニ紀伊大納言頼宣公病患平愈立願成就也」寛文

第六丙午五月吉祥日 願主同北ノ方法号瑤林院」淨

秀日芳治工武州江戸住宇多川甚右衛門藤原為房」

(25ウ)

同金灯籠二基」

銘云 大願為_レ炷大悲油 大捨為_レ火三法聚」

善提心灯照_三法界_一 照_三諸衆生願_二仏道_一」

明暦万年第二竜集_{丙申}十月十二日」

為_三阿親兄弟姉妻頓証菩提_一也 願主茶屋」中島長
右衛門重能入道_{法門}応院長意日是」

治工_{宗本} 野村助右衛門如中」

同金灯籠二基」

銘文同前 本堂不尽灯明」

正保万年第二竜集_{乙酉}十月十二日」

施主茶屋中島長右衛門重能_{法門}応日は是」

作者 銚子屋源四郎_{法名}茶味」

同金灯籠二基」

施主尾州名古屋_{永代金百兩納之}搦中_{取次} 笹屋佐兵衛」

堂前蓮葉金水鉢」

日亨代施主 隆源房第二世覺樹院日宝」聖人_{宝永三}

丙戌年八月三日卒 又千部料金子百兩収之」

沙門覺樹院日宝懷_{至誠心}為_三自他罪滅_一 鉢三銅

蓮葉盥盤_安置_{堂前}永施_{參拝}細素」

銘曰 湛_{功徳水} 湯_{滌心座}」

法流無_レ竭 惠沢日新」

身延山諸堂記外(北沢)

(27オ)

宝永第三_{丙戌}年八月三日 日亨誌ス」

銚匠撰州大坂住人」

〔註〕

〔一〕 二ノ一〇三 二ノ九十八 二ノ九十四(押紙・朱
字)

〔一〕 通本橋二間廿一間 回廊八尺廿三間」

第廿四世要師代建立」

額ハ通本_{本阿勢大廣庵光悦筆}」

通本橋ノ下ヲ号_ス篤谷_ト」

西行ノ歌_{雨シノグミノフノ沢ノカキシバニ}
スタチソソムル鶯ノ声」

〔註〕

〔一〕 二ノ一〇六(押紙・朱字)

〔一〕〔二〕 十二時鐘 井堂九尺四方番寮_{表間三間}」

第卅一世脱師代新建立」

施主子州松山ノ城主松平隠岐守定長」

勢州桑名ノ城主松平越中守定重」

兩卿母堂養仙院了榮妙護日立大姉」

鳴_ス鐘役人資料又寄_ニ附_一之_二 大姉ノ建立ナリ俗ニ云_ニ阿伽鉢堂_一」

身延山諸堂記外（北沢）

依之毎月十六日於三寶藏。自我偈誦之回向ス。天
和三庚年十一月十六日卒」

鐘ノ銘之享」

飯高ノ学徒慈忍日孝代ニ脱師ニ作レ之」後ニ飯高化
主 東部瑞輪寺 歷代号ニ大中院ニ宝永五戊子十月十八
小波誕生等

日 日孝聖人」

延山十二辰鐘并叙」

京極氏女落飾号ニ養仙院。其弟信「牧之女又落飾
号ニ長松院。二信女篤奉三三」宝無レ不下以三外護三
仏法ニ而為レ任也。近況山」中不レ知。時乃鑄ニ大鐘ニ
而寄焉又ト三宝」樓于方丈之南某。処ニ而簾焉鳴レ鐘
行者」無三衣食資。夫人又給焉於レ是乎延山十二辰」
之候。備矣昔。廬山。遠公造ニ蓮華漏。定ニ十二時。以
為三行道之節。信女此舉自然。契」矣。寧只行道之節
而已。哉。一聲梵之鳥知ニ以婦人知ニ以。憩ニ臥
者以起起者以。臥天魔。忽伏外道。忽納。忽碎。一
地獄。忽空。以至三九界衆生。無レ不三各受三。其賜。若
以三仏眼ニ觀レ之一音教是也。法身廬。遮那。說法是也。
唯一鐘声具ニ足無量。功德。如レ是何況十二時時々
鳴レ之永不退。転」者哉。不可思議不レ可レ得レ名。

遂為三之」銘曰、

第一義天 本離代謝、

誰問ニ春夏、 但有ニ因縁、 三界已非、

卯辰己午、 及与ニ丑寅、 亦說ニ晝夜、

更互推移、 惟人之性、 相統レ不住、

鳴ニ此法器、 報ニ二十支、 煩情且癡、

莫三空過レ時、 凡百聽者、

皆延宝八年歲次庚申中秋穀旦」

延山蘭若沙門日脱謨」

檀越

養仙院了榮妙護日立」

長松院妙樹日榮」後ニ号ニ春光院、

治工 田中丹波守藤原重正」

〔註〕

(1) 三ノ廿三ノ押紙・朱字

(2) 文政七年焼失ノ押紙・朱字

（2） 文政十二年焼失（押紙・朱字）

一合所拾七間半ニ拾間

第廿六世遍師代寛永十三丙子年勸ニ化諸国、建立ス往古ハ今ノ大方丈在此処、為ニ合所ニ甚、狹キ故北ノ地ニ引之、今ノ地ニ大ニ改造ス棟札寛永十三丙子年極月十九日 日暹判形、本願主三十二世日遠上人 奉加助力大檀那養珠、院殿 今村伝四郎正長法号了知院日義 大工同 池上新之丞宗信 藏宗尚

奉加帳之序亨」

夫身延山久遠寺者松栢有、心之地本法隆、興之場也、曩祖云仏菩薩栖功德聚之砌、也而今此、処伽藍宛足唯所闕者集衆、一合之精舎也抑此、殿者寺中院內之衆僧、春秋寒暑二六時中来臨聚集誦經誦咒、論談決択之五種法師所在也、処所之最要、莫過焉法妙ナルカ故ニ人貴シ人貴キカ故ニ処口貴トハ蓋、謂レ斯歟然、是処若暫廢、則僧中行事、無所勤レ之雖、僅有ニ旧殿、柱根摧朽悉皆、零落不レ可、不ニ修治、不レ可、不ニ嚴飾、故今推ニ再興之志、此望非、適、今也歷代、先師亦所願也、以、故孳々

（33オ）

自作亦勸、他自、非、借、衆力、安能、果、其、興造、嗚呼、不、聞、蚊、聲、成、雷、不、見、狐、腋、作、裘、一、莫、辭、官、無、二、俸、禄、三、莫、二、普、家、甚、貧、窶、一、唯、是、力、之、所、任、志、之、所、欲、雖、一、錢、一、位、不、可、輕、之、一、志、之、所、分、離、三、寸、鉄、尺、木、二、所、不、三、亦、嫌、一、也、經、云、一、見、他、旧、寺、塔、廟、不、能、修、治、一、便、作、是、言、一、非、我、先、所、造、何、用、治、為、我、寧、更、自、造、立、一、新、者、善、男、子、造、立、新、者、不、如、修、故、其、福、甚、一、多、又、曰、莫、問、己、許、他、許、隨、其、力、能、一、切、皆、治、一、其、人、功、德、不、可、思、議、矣、古、今、有、造、高、堂、大、館、一、寧、非、效、乎、有、下、堆、一、黃、金、美、玉、者、只、是、一、浮、雲、也、幸、哉、我、等、適、起、此、殿、永、修、白、善、一、也、世、々、生、々、見、仏、世、尊、在、々、処、々、聽、法、華、一、經、是、大、因、縁、也、是、大、善、根、也、是、故、縑、素、貴、一、賤、同、心、合、力、之、徒、今、世、攘、災、殃、於、旧、里、之、外、一、將、來、得、法、樂、於、二、転、之、果、一、如、反、掌、今、一、記、三、事、由、所、唱、如、件、各、勤、之、勿、以、忽、諸、一、

寛永十三歲在、丙子、正月廿日、至、正徳二壬辰、七十七年ナリ

諸尊者」

古在、本堂、日遠師代改造後奉、安置、此、一、

(33ウ)

中尊」

慶長十乙巳年仲夏後八日 日暹判形
諸尊施主瑞竜院日秀尼殿兩公有通判判再造ノ時味

四菩薩 日暹判形」

施主瑞竜院殿日秀比丘尼」

大黒天神 日暹判形」

施主洛陽七条大仏師

形部即康与作レ之奉レ安シ合所一

祖師像 願主寂照院日乾大仏師 形部卿」

慶長十七壬子仲夏如登殊日

奉レ安シ置宝殿」

向師像 日暹判形

嘉永六癸丑年六十六世日新師代更衣」
右同時ニ更衣 仏師東都電鼓」

寛永十五戊寅年七月廿八日
施主富士郡前ノ東漸寺法受院日教」

仏檀天井等一式莊嚴彩色之施主」

東照宮御息紀伊大納言領宜御像中加藤肥後守清正法号」 淨池院日樂ノ
息女瑞林院淨秀日考大姉正月廿四日卒」 毎月二十四日於玉殿ニ自我他
師レ之同向ス」

三ツ具足」

日辛代正徳二壬辰年以古銅片残ニ於申府ニ作レ之」

〔註〕

(1) 二ノ百五十ノ押紙・朱字

一厨子^①

十二間十五間 香積也又ハ云助助又ハ云庫裏或ハ云三
庫裡 世俗ニ云ニ台所ニ

身延山諸堂記外(北沢)

(34ウ)

第廿二世遠師代建立也」

遠師棟札云奉三寄進 黄金百両身延山本院」庫裡造
營之助成爲ニ現世安穩後生善処乃」至法界拔苦与
樂ニ慶長万年第十三歲次戊申^{七月ナリ}夷夷則良辰^{至正徳二壬辰}
年二百五年」施主武州住人加治左馬助丹治家信円惺院日
信敬白」

〔註〕

(1) 二ノ百六十四ノ押紙・朱字

①

一対面所六間ニ八間次間四間ニ五間」

第廿六世暹師代建立」棟札寛永十五^{戊寅}六月廿四

日 日暹判形^{至正徳二壬辰}七十五年」施主松木受源院妙徳日

行」大工池上新之丞宗信 同源蔵宗尚」

金箔施主 駿州富士郡佐野庄兵衛法号了藏日恒
寛文四甲辰年五月七日卒」

〔註〕

(1) 三ノ卅六ノ押紙・朱字

①②

一小方丈六間四方 又ハ古法眼ノ間ト云フ又ハ云三ノ座トモ

初建立時代不レ知棟札無レ之本院ノ中ニハ第一古

身延山諸堂記外（北沢）

キ殿也

修治ノ時棟札寛永十四丁丑年七月良日 日暹判形

上座上葺地形修治之時染筆上

古法眼越前守元信筆ノ絵座敷也

第廿九世延師代恐有盗損難取之表補為三大

小三拾二軸土蔵収之

相伝床脇白鷺絵能似故謂真鷺應来囀之其

爪跡顯然云

初方丈勝手不_レ_レ宜_レ今故日亭代開_三北方_二又北床

縮移_三西方_二又_三地床_二一尺余_一襖障子等新造釘

隠改造冀欲_レ令_三画_二工_一摸_三古法眼_二絵_一未果

水鳴樓額三十六代潮師筆

〔註〕

（1）二ノ百四十三 三ノ卅七（押紙・朱字）

（2）後ノ水鳴樓ナリ（頭註・朱字）

一¹大方丈并唐門十二間ニ三間浴所九尺ニ三間半

第十八世賢師代建立

賢師棟札云岐阜宰相殿於高麗国他界御母堂瑞

（36ウ）

竜院殿建立_三立_二之_一擬_三追善_二客殿也_一瑞竜寺殿者殿下

秀吉公姉関白秀次公母儀也自三月二木取六月十

一日柱立十二月廿八日令_三周備_二畢_一文禄二年

十二月吉日至正徳三壬辰年大工池上新之丞

岐阜宰相秀勝者法号光徳院殿前參議清殿大居士

天正廿年改元壬辰九月九日於高麗国逝去此

父者羽柴武藏守一路也号三位法印日海秀次公

并秀勝公皆一路子也

此方丈者岐阜宰相逝去明年文禄二年為_三此_二追

善建立故每年九月九日一座回向不_レ可_三退転_二

又本堂并此方丈前ノ本堂ノ諸尊皆瑞竜院日秀尊

儀建立也依_レ之每月廿四日於_三宝蔵_二自我偈誦_一之

回向

繪者

此方丈本在_三今_二会合所_一日暹師会合所建立ノ時

北ノ方高キ地引_レ之

〔註〕

（1）二ノ百四十六（押紙・朱字）

(37オ)

一藏經堂四間四方ニ外縁各五尺宛

奉行僧觀靜房日誦 大工棟梁池上宮内宗次 卅三世日亨代
新建立

施主本願 伏見宮之御息女紀伊大納言光貞卿「御簾
中安宮法天真院妙仁日雅大姉 宝永四丁亥年二月廿六日逝去」金子三

百兩沒後施入有之依之毎月廿六日於「宝藏」自
我偈誦之回向其余入用以「藏」本施入余分補成

宝永四丁亥年冬東ノ岸ニ建モ立ス之 同年十月四日大地震ニ崩損スル故
ニ同「五年戊子年引移シ今地ニ再建成就ス」

法華經ノ宝塔者

施主 松平閣政守定直之養母又同定直ノ室京極氏高勝ノ女「春光院初ハ
号三松院」現室妙樹日榮法尼「京都大仏師山田式部作之」

大藏經ノ宝殿者

施主 武江ノ住人相磯茂左衛門法号 深宿院「門日冥」
同妻 重宿院「妙門日冥」

同宝殿天井ノ竜者 狩野永叔筆

檀ノ後ノ壁ノ繪者

竊内竊外并饒岡山ノ外結集并保土仏法伝来明帝ノ夢「感」僧ノ来漢仏道
經ノ精力道士ノ煥伏願諸經及檀什「於」追造園「翻」取僧大士本願輪成ノ
圖

日亨於三洛陽「藏經周覽之節考」之新命三画「工」令
圖之在「洛東滿願寺」又於「洛都」令三画「工」三宅揚
心写之押于此「天井ノ繪并天人蓮」華等ノ繪

身延山諸堂記外（北沢）

(37ウ)

(39オ)

(38ウ)

亦於「京都」令「書」之

三具足并前机「施主 奥州会津ノ城主松平肥後守正容ノ子息松平
後ニ大膳大夫正甫為ニ壽命長遠武運長久祈
十五郎」

第「寄造」

妙經十二部「施主武江三宅平右衛門法号 淨心善敬」

机十二脚「日亨新造 此机饑法執行時可用之」

賈主ノ机「施主下總飯高村高橋市郎左衛門」

唐本一切經

卅三世日亨代新奉三請之「日亨宝永元甲申」年十一

月九日入院時発願当山雖有「藏」經「在」上ノ山
故不「便」急用「又倭藏有「闕本」」欲求「唐本」安

置本院上宝永三「丙戌」年五月「延山常紫衣勅許為「御
礼」上都参 内之節」於「京都押小路唐本書林」幸

有「新渡好本」欣躍請之「本藏二百一十一函之外統
藏九十函又統」藏卅八函目錄一函合三百四十函

有「之飯高檀」林唐本藏經但「本藏二百一十一函也黃
壁藏」亦然延山此藏百廿九函多之幹錄分限五百

「卷已上」施主為「本願」立「別位牌」自余施入「悉具
錄」簿帳五百卷ヘ金子拾二兩二步後代「賈主」每日惣別施

主現当願満「願不レ可ニ退転」唐「本絹地、秩各々有

レ

レ

レ

レ

身延山諸堂記外（北沢）

（39ウ）

之然易^{ムカ}蝕^{カシヘ}故正徳二^ニ壬辰年^ニ除^レ之各々桐板黃壁^{（ヤシ）}
染^レ之糊加^{（ハ）}三章礪^{（ハ）}以^{（ハ）}三板^{（ハ）}二枚^{（ハ）}一來^{（ハ）}之^{（ハ）}以^{（ハ）}糸結^{（ハ）}之
又虫囓^{（ハ）}時等^{（ハ）}爲^{（ハ）}令^{（ハ）}無^{（ハ）}三乱雜^{（ハ）}表紙^{（ハ）}一^{（ハ）}記^{（ハ）}其^{（ハ）}秩卷^{（ハ）}
數次^{（ハ）}第一^{（ハ）}板又^{（ハ）}記^{（ハ）}函名卷數^{（ハ）}此藏經每年虫囓可^{（ハ）}
爲^{（ハ）}三鄭重^{（ハ）}爲^{（ハ）}令^{（ハ）}法久住^{（ハ）}後代^{（ハ）}實主須^{（ハ）}別功^{（ハ）}三教令^{（ハ）}
南西北三方ノ中ニ西ノ方ハ風難^{（ハ）}入^{（ハ）}故蟲別^{（ハ）}易^{（ハ）}
蝕^{（ハ）}西方ノ函ノ分ハ年中西三度^{（ハ）}払^{（ハ）}之^{（ハ）}ヘキナリ又
晴天ニハ窓ノ障子可^{（ハ）}明^{（ハ）}置^{（ハ）}之^{（ハ）}爲^{（ハ）}入^{（ハ）}風也又^{（ハ）}風
雨之節ハ六処ノ火灯口窓ニ可^{（ハ）}掛^{（ハ）}三雨戸^{（ハ）}其^{（ハ）}雨^{（ハ）}戸
者爲^{（ハ）}急掛^{（ハ）}之^{（ハ）}經堂^{（ハ）}之後常置^{（ハ）}之^{（ハ）}耳^{（ハ）}

〔註〕

（1） 二ノ百卅九（押紙・朱字）

（2） 二ノ百八十五、百卅九（押紙・朱字）

一唐小鐘^{（ハ）}

開帳^{（ハ）}之節鳴^{（ハ）}之^{（ハ）}廊下鈎^{（ハ）}之^{（ハ）}施主^{（ハ）}茶^{（ハ）}屋^{（ハ）}門^{（ハ）}庇^{（ハ）}院^{（ハ）}長意^{（ハ）}日
是^{（ハ）}

一宝藏^{（ハ）}三間半四方^{（ハ）}

第廿二世日遠師ノ代慶長年中^{（ハ）} 紀伊大納言頼宣卿 母堂
本戸中納言頼房卿

（40ウ）

養珠院妙紹日心大姉立^{（ハ）}之^{（ハ）}初号^{（ハ）}三蓮華院^{（ハ）}此養珠院
者^{（ハ）}宗再興ノ大願越也^{（ハ）}
年八月二十一日卒

甲州大野本遠寺紀州和歌山ノ養珠寺水戸太田ノ
蓮華寺皆爲^{（ハ）}此菩提^{（ハ）}建立也於^{（ハ）}三山^{（ハ）}靈宝^{（ハ）}井^{（ハ）}一^{（ハ）}処
々建立大有^{（ハ）}三勲功^{（ハ）}每月廿一日於^{（ハ）}三寶藏^{（ハ）}自我偈^{（ハ）}
誦^{（ハ）}之^{（ハ）}回向^{（ハ）}不^{（ハ）}可^{（ハ）}退転^{（ハ）}八月廿一日別可^{（ハ）}勤^{（ハ）}之^{（ハ）}

此宝藏中古在^{（ハ）}三昔^{（ハ）}拜殿中央^{（ハ）}今ノ宝藏ノ地ハ^{（ハ）}皆山
也廿八世奠師代從^{（ハ）}寛文二^{（ハ）}壬寅年^{（ハ）}堯達^{（ハ）}号^{（ハ）}三内正院
日精^{（ハ）}相議^{（ハ）}後山^{（ハ）}大分切^{（ハ）}三開^{（ハ）}之^{（ハ）}埋^{（ハ）}三東方^{（ハ）}谷^{（ハ）}御靈
骨^{（ハ）}土藏^{（ハ）}引^{（ハ）}之^{（ハ）}再建^{（ハ）}△廊下^{（ハ）}長十五間作^{（ハ）}之^{（ハ）}此^{（ハ）}外武井房
上迄切^{（ハ）}開^{（ハ）}之^{（ハ）}爲^{（ハ）}三火ノ用心^{（ハ）}古法眼画有^{（ハ）}之^{（ハ）}小方
丈引^{（ハ）}從^{（ハ）}此所^{（ハ）}可^{（ハ）}然^{（ハ）}之^{（ハ）}旨從^{（ハ）}京都^{（ハ）}天下^{（ハ）}聞人^{（ハ）}茶人
佐野紹益法橋參^{（ハ）}詣^{（ハ）}勸^{（ハ）}之^{（ハ）}依^{（ハ）}之^{（ハ）}奠師雖^{（ハ）}有^{（ハ）}此^{（ハ）}催^{（ハ）}修
營繁多不^{（ハ）}果^{（ハ）}此^{（ハ）}望^{（ハ）}云

卅三世日亨代宝永四^{（ハ）}丁亥年十月四日未ノ刻ノ大
地震ニ拜殿等大ニ破損ノ故ニ又後口ノ山近フ
危^{（ハ）}キ故ニ引^{（ハ）}三出南方^{（ハ）}少寄^{（ハ）}三西方^{（ハ）}宝藏再興^{（ハ）}爲^{（ハ）}三宝
形^{（ハ）}屋根^{（ハ）}置^{（ハ）}三金表利^{（ハ）}四角懸^{（ハ）}三宝鈴^{（ハ）}四辺作^{（ハ）}三玉垣^{（ハ）}
以^{（ハ）}石築^{（ハ）}之^{（ハ）}金張付戸扉塗莊飾^{（ハ）}新^{（ハ）}之^{（ハ）}

(41ウ)

又中央拜所并廊下拝殿悉再興、繪天井「金物兩方、位牌檀内外金地絵等新營此ノ」再興ノ本願者紀伊大納言領宣如息女芳心院妙英ノ日春大姉也宝永五戊子年十一月二十八日卒、依之毎月二十八日於宝藏、自我佛師之回向ス、芳心院者發珠院ノ孫也、宝藏木ノ發珠院ノ建立ナル故日乎、迹其由緒、抄之

宝藏ノ内ノ張付」

往古宗祖一代、図有レ之、朽故破壊難レ見、故日亨代」

為ニ金張付、絵ハ狩野永叔筆」

御靈骨ノ宝塔者」

廿五世深師代、寛永元甲子年十一月入用三百五十目」

此内二百四十目八分ハ、勸物百九匁二分ハ中富次良

右衛門「金物ハ中河藤四郎同父妙仁寄進番衆寮ノ」

古帳ノ中ノ深師筆記ニ有之」

高祖御靈骨ノ宝瓶ノ書付ケ

天正十八年庚寅九月日ト有之、天正十八年ハ十七代

新師代ナリ

身延山舍利塔施主越中東郡生緣越後府内住侶後藤

兵庫藤原貞秀作

（宝瓶書付ト深師ノ記録ト相違、可考テ師ハ宝藏ノ内付不見）

水精玉塔八角」

身延山諸堂記外（北沢）

（再曰、宝瓶ハ天正十八年ナリ、可考テ師ハ宝藏ノ内付不見、宝塔ハ寛永元年ナリト）

(42オ)

幅三寸長六寸宛此ノ幅長ノ水精希有也」
柱之彫四天王後藤祐乘」

宝塔ノ内斗帳」

南無日蓮大士織付白地金鋼輪宝ノ紋」

二王」

長一尺四寸五分運慶作今ハ古仏堂ニ安置」

枝珊瑚」

長三寸横五寸三分枝四ツ有リ」

唐陶線香立一對今ハ東ノ宝藏ニ納在之」

阿蘭陀金ノ作花一對」

三具足」

一尊四菩薩尊子入」

蓮祖大士開光四条金吾殿号法日頼ノ持仏堂ノ」五

尊也、釈尊長一尺四寸四分四ササノ立像長七寸四分」

舍利塔」

惣長八寸五分、中ニ舍利八位有レ之」

中尊兩仏四菩薩坐像、大尊子入、今ハ古仏堂ニ安置ナリ」

正中山第三世日祐聖人開光」

中尊座共ニ惣長二尺余、日祐師筆」

兩仏坐像長八寸八分」

身延山諸堂記外（北沢）

四菩薩坐像六寸宛」

内体ニ各妙経納レ之今此ノ妙経者取出シ靈宝蔵ニ在レ之

大黒天神像男入

長一尺四寸内ニ妙経有レ之由蓮祖大土作」

右ノ三厨子日亭代作レ之」

施主江戸神田銀治町山田吉平号理広院常祐日富

同 神田塗師町山田太郎兵衛号法円修院淨信日

行」

板本尊今ハ東宝蔵ニ有之

本尊写ニ蓮祖筆ニ歟彫刻有レ之下漆書第二「祖日向

上人筆也幅一尺八分長二尺七寸厚サ一寸一分」珍

奇ノ本尊也」

本尊ハ題目両仏四ササ鬼子母十女梵天帝釈日月」

四天王ナリ梵字無レ之下漆書云正安二年庚子十二

月日右為ニ日蓮幽靈成仏得道乃至法界衆生」平等

利益「敬造立之一日上」正安二年庚子年ハ宗祖入寂第十九年也向師

二年ヨリ至正徳二年壬辰二百四十三年也」

板本尊今ハ東ノ宝蔵ニ在レ之

第十五世日叙上人筆長四尺二寸幅二尺四寸」

六老僧并当山歴代列レ之」

身延山久遠寺宝蔵安泰」

(44才)

天正元癸酉七月廿五月初建立之巨上從大正元癸酉年ニ至正徳二年壬辰ニ百四十也

犬之塔婆」

栢木余残二切一片ハ長五尺二寸三分

此ノ塔婆往古ハ大木也切取為ニ仏像等ニ諸人請」

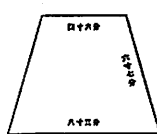
求珍敬近年禁而不レ分ニ与之此塔婆因縁者」小

室妙法寺日伝上人帰伏之元由詳ニ諸人、口碑」

初号ニ肥前公惠朝房ニ志摩房ハ日伝ノ俗弟」朝学

院日義ノ開基也」

御硯



房州清澄山ニテ」御所持ト申
伝フ」

御履一足 雪駄也」

磬台」

甲斐僧玄寄附机同時ニ寄進今ハ在御蔵ニ也又高麗本七軸」

斗帳」

宝永元年甲申年南昌吉成日省代「寄進主本台等相類」御糸御

四夜叉神ノ像 定朝作」

茶屋中島長意日足納レ之」

(45才)

〔註〕

(1) 二ノ一〇九、三ノ十四〈押紙・朱字〉

(2) 三ノ十六〈押紙・朱字〉

(3) この一項41ウ・42オの欄外上部に追加記入の爲に行末を示さない。

(4) 書陵部本には「八粒」とある。

〔1〕宝蔵中央三間半四方并所并廊下

日亨代改造之由如ニ上記ニ云云

中央卓台并疊台亦造レ之

掛簡板二枚

東方へ宗祖当山開闢文永十一申戌年六月十七日

西ノ方へ宗祖入滅弘安五午年十月十三日

金字妙経全帙

日亨代紀州嚴証寺ノ願居檀律師通同院日蓮自筆書写取レ之

〔註〕

(1) 二ノ百十四〈押紙・朱字〉

〔1〕一同拜殿六間ニ四間外縁

中古七間半四方ニ四面各ノ三尺縁拜殿也又掛物一床有レ之脱師代構ニ位牌壇ニ大名位牌置レ之然ニ宝

身延山諸堂記外(北沢)

(45ウ)

永四丁亥年十月四日ノ大地震ニ拜殿并地盤大ニ

破損ス又拜殿位牌同所見分不レ宜故日亨代拜殿

縮レ之替レ之再興位牌堂別新建ニ立之奉行僧

親野日歸大工棟梁池上藤兵衛宗道

三具足水戸宰相後ニ中納言朝朱卿御寄通日省師代

前机日亨代下山邑飯野惣兵衛法号法了院宗受日行寄進

訓読妙経三十部

施主武江住齊藤帶刀利照法号利長院円成宗榮日我

代請レ之日中経真読也夏中訓読ノ聲レ之

経机三十四脚

并疊台以上七床并香盤ノ台日亨代新造

貫首机應應時給施主養珠院妙紹日心

啓台日亨代施主幸阿弥与兵衛

過去帳台時給輪宝

父可成道施主蔭絵師上領三右衛門

母茂成妙施主蔭師川西久左衛門

母明成施主蔭師川西久左衛門

廊下拜殿ノ間金地ノ幔

金灯籠并台共一对日亨代後レ之金物莊助ス

(46オ)

(46ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

宝蔵井中央廊下拝殿」宝暦三癸酉年九月十七日以^ナ銅板^ニ葺更成^ス

就ス」

常灯明一对唐其輪 日奏師代」

施主 尾州住人土屋庄兵衛笹屋伝兵衛安田屋彦兵衛」

同一对中央 今ハ古仏堂ニ一基 奥位牌堂ニ一基在^ル之」

施主江戸新吉原鶴屋市三郎妻」

金灯籠一基常夜灯」

施主尾州國口内明院尼^{（マ）} 聖殿金屏風一対同時寄進」
永代油料金七十兩納之」

宝塔一基妙趣八軸安置」施主加州金沢住富田屋長兵衛」

中央疊永代毎年表替金貳拾兩納之」施主加州の沢綿屋源助」

御真骨前永代不易常經誦誦ノ施主」

美濃安八郎今居庄 同父庄右衛門

足立庄六 納金有^レ之依テ」文化十二年乙亥四月二十五日ヨリ祖師堂開帳番之」老僧一人宛無^ニ懈怠^ニ勤^レ之」

天蓋細川清心院殿寄進」

唐金灯籠一对 安永二癸巳六月 安永八己亥六月納之永代日夜常灯油料也」

同油料金貳拾兩 豐師代 施主大坂本間氏

〔註〕

（1）三ノ十九ハ押紙・朱字

（48才）

一奥位牌堂^{三間}」

三十三世日亨代宝永五戊子年新建立、由^ル如^ク三」上記^ニ

安置^ス大名位牌^ニ委^ル如^ク三目録^{（2）（3）}」云云」奉行僧^{（2）（3）}宗伯^{（2）（3）}日教^{（2）（3）}大

工棟梁 池上藤兵衛宗道」

内陣」

東照宮始メ御内縁ヨリ納牌御本丸之御位牌ヲ」

安置也」

外陣」

大男方之御位牌安置也」

外陣ハ文化十三丙子ノ秋再興有^レ之也 五十四代審師代」

〔註〕

（1）二ノ百卅四、三ノ卅二ハ押紙・朱字

（2）書院部本に「目録」とある。

一古仏堂四間ニ四間半外縁四方各三尺五寸宛」

三十一世脱師代新造立古仏収^メ之新仏又有^レ之」

悉如^{（2）（3）}三目録^{（2）（3）}」云云」

金ノ位牌元禄九 丙子 曆四月日 日脱^{（2）（3）}判^{（2）（3）}形」

施主本願五人ノ名有^レ之位牌ノ裏ニ有三十四人

法号二

日亨代修補前方内縁入三内陣上長梁ヲ用テ柱ヲ
二本除之釘隠打レ之為レ去三雨湿一以三油丹一塗レ之
以レ石築レ之

右ノ修補兩人施入スル故ニ重テ立三位牌後代此
ノ一兩家ノ子孫繁栄ニノ可レ致此堂修營也

江戸神田區清町 法号理広院常祐日富
山田吉平

武立神田區即町 法号円修院淨信日行
山田太郎兵衛

位牌古仏堂建檀立主ナリ

宝塔惣丈二尺三寸 日亨代

武立瑞輪寺懸遠院日遙聖人納之 宝永六己丑年十月十日
六十五歳卒

一部妙経一卷 日遙筆

遺言収レ之可レ為三懺法執行本尊

青貝ノ机 唐物櫃二尺八寸四分 奥入一尺九寸二分

施主甲斐信玄晴信 高麗七巻圓卷ノ妙經
唐物ノ舞台宝蔵ノ内ニ有之又寄進之

如意一柄長一尺九寸

書棚櫃六尺一寸二分 高四尺九寸

東照大権現御道具也 養珠院妙紹日心収レ之

灯笼
從御本丸ニ獻ニ東叡山御靈屋ニ之灯笼也給ヘ狩野探信筆 御本丸

身延山諸堂記外(北沢)

侍女右衛門佐収レ之一
書写摺写ノ妙経数部

悉如三別録ニ好本置古仏堂中下ノ本ハ東蔵ノ
二階ノ棚ニ有レ之毎年附レ意可レ私三藏魚也
三具足

金灯笼二基

身延山久遠寺古仏堂御宝前

奉三寄進一金灯笼二基

為三妻秋月院樹榮妙円日信靈菩提提

元禄十丁丑年五月三日甲州下大鳥居村内田

市郎左衛門法信了院松樹常円日受

鑄物師江戸宇田川甚右衛門信重

〔註〕

(1) 二ノ百廿八(押紙・朱字)

一靈宝蔵三間四方拝殿三間半

廿八世奠師代建レ之

卅一世脱師代ニ山崩破損スル故ニ改ニ造之

卅三世日亨代宝永四丁亥十月四日ノ地震ニ又損
スル故南ノ地江少引レ之造ニ宝形屋根作レ覆

(朱) 印 (朱) 印

(朱) 印 (朱) 印

身延山諸堂記外（北沢）

新三窓戸、以レ石築之造、玉垣、又引、昔、廊下、一拝殿
トス為レ避、雨濕、以、三油丹、塗レ之、宝永七庚寅十月十二日、靈宝藏上築之札、
奉行僧宗侶、日敬、大工棟梁、池上藤兵衛宗道、
靈宝櫃二棹、時、給井術橋ノ故、

日亨代、武州住人、中村七右衛門寄進」

西之靈宝藏者、珍希靈宝、取レ之朝意伝等筆、記亦有レ
之從、古来、二方丈貫主、封印也、日亨代、老僧評定中相
議、為、二方丈老僧相封、是恐、慮、紛失、一故也、貫首在山
之節者、藏ノ外戸貫首方、一丈ノ院主五老僧ノ内、当番
日、上三判印封貫首在、江、節者、方丈院主五老僧、内、当
番、兩印封永、代、不、可、違、之者也、東土藏者、通途
書籍及、世具、納レ之故、方丈ノ院主役人ノ封ニテ可、
開閉、之、

靈宝ノ目錄等ハ委如、別記、云云、

靈宝ノ額ハ日亨師ノ筆、

靈宝長持一棹、時、給養ノ御教、後川形部卿息女松平礎、摩守重榮室、為、慈、
院、院、門、庇、位、珠、大、姉、ナリ、明和七庚寅年九月納之、四、
十五代日、迄、代、取次、滝山八重崎、

同一棹、時、給養ノ御教、

御朱印長持一棹、桐ノ白木ワク入ナリ、

御繪旨長持一棹、桐ノ白木ワク入ナリ、

(52ウ)

嘉永七、甲寅、正月新作レ之、六十六世、日新代、是迄御繪旨同シ長持、
入ル、

靈宝藏、家根者、雖、本、為、二檜皮葺、享和三年、癸亥、之夏
五十一世日全代、以、有合之銅板、而葺、更於、二銅屋
根、二者也、時、執事、門台、坊、工匠、坂上宮内宗純、屋根、工匠、小倉岡右衛門、
木挽工匠、望月安右衛門、以上全師板本尊ニ有之、

西靈宝藏塗替施主、当国台ヶ原北原伊兵衛、文政十三庚寅、
五十八代日、

一東土藏、三間ニ四間半、

脫師代ニ後ノ山崩テ潰レ之、此時陶器等損失多レ之、
依レ之改造、

日亨代、宝永四、丁亥、年十月四日ノ、大地震ニ又損ス
ル故ニ、為、三後代、南ノ方江引ニ從、之、又、二階、卑故登
者、苦、撲、三頭、依、之、統、柱、拳、レ之、窓、綱、金戸、屋根、新レ
之、以、レ、石、築、レ之、奉行僧、宗侶、日敬、大工棟梁、池上藤兵衛宗、
道、

東宝藏塗替施主、当国台ヶ原北原伊兵衛、文政十三庚寅年、
同時ニ塗替日、

西、東、

(53オ)

一經堂前ノ庭 泉水等 堂前ノ橋 石灯笼并上之山」
 滝ノ下ノ橋 塔形ノ石灯笼 茶亭二箇所 拜石
 位牌」堂前ノ花壇 書院東ノ方ノ小庭 靈宝藏前
 藤」棚 古仏堂辺ノ井并ニ蓮ノ盆地 日亭作レ之
 作り松」從ニ駿州ニ寄進 諸木從ニ地中ニ多ク來ル
 池ノ西ノ大石ハ」從ニ上ノ山利堂、辺ニ引レ之 西ノ方
 ノ中門新ニ造ル 花」檀ノ門 藏ノ門等 亦新造
 宝永五^{戊子}年夏也」
 庭ノ作者ハ本妙院京都妙顯寺ノ住僧也遠光寺ノ」
 住持日能ノ法類也閑^ニ居^ニ甲州^ニ」

〔註〕

(1) 駿州大宮羽根伴助ヨリ寄進歟 大泉寺江申含遺ス
 ト亭師ノ書狀アリ此書狀今岸ノ房ノ常什ナリヘ頭
 註

一廊下七箇所」

日亭代立レ之 從ニ小書院ニ至ニ經堂ニ 從ニ經堂ニ」
 至ニ宝藏拜殿ニ 從ニ書院ニ至ニ宝藏拜殿ニ 從ニ」宝藏
 拜殿ニ至ニ位牌堂ニ 從ニ位牌堂ニ至ニ古仏堂ニ 從ニ古
 仏堂ニ至ニ靈宝藏ニ 從ニ靈宝藏ニ至ニ東土」藏ニ」

身延山諸堂記外(北沢)

(54オ)

一書院并學問所休息所^{十六間半}
 日亭代合^ニ三^所、一棟ニ新造ス」奉行僧^{觀智日歸}
 工棟梁池上藤兵衛宗道^{宗信日教}」

往古別々有レ之中古ノ書院ハ八間半ニ九間廿九世
 鑑師」代新ニ造ル此ノ地築地ナル故ニ毎度地形損
 シ順又檐卑ク」短キ故雨濕ニ外縁ニ暴雨時水入ニ疊
 上ニ日亭代」欲立ニ藏經堂於東方引ニ徙右書院於北
 方ニ」事兩度新造學問所作ニ休息所、所々修」營
 然ルニ宝永四^{丁亥}十月四日未ノ刻ノ大地震築地ノ」
 所々大ニ損壞ス經堂ハ既ニ立テ未ニ滿作一時ニ
 類」毀ス費用頗ル多シ是ノ故ニ經堂ハ徙ニ西方、堅
 剛地ニ」重立レ之又為ニ後代ニ合ニ於書院學問所休息
 所ニ」為ニ一字ニ新建ニ立之ニ宝永五^{戊子}年也」
 書院、繪者武江狩野春笑筆為ニ華夷參詣」人、感信
 為ニ金地極彩色」」
 學問所休息所書院次ノ間ノ繪モ同筆也」

〔註〕

(1) 二ノ百六十ハ抑紙・朱字

身延山諸堂記外（北沢）

一料理所四間ニ八間 御膳所ナリ

一湯浴所二間ニ三間

一金支配部屋御児部屋ナリ

右三箇所日亭代悉再建

〔註〕

（1）二ノ百七十二へ押紙・朱字

從上之山通

之部

至奥之院

奥院道行程五十丁之間有レ之諸堂

一祈禱堂六間半四方外縁五尺宛

此ノ地ハ本ト番神社ノ古跡也

番寮二間半ニ廊下九尺ニ今ハ無之所以在テ誤レ之

第三十一世脱師代貞享年中新建立為ニ天下安全

妙法広布ニ定ニ三十六人僧ニ昼夜ニ不斷読誦妙經

日本國中雖レ多御祈禱所ニ不斷読誦經王ニ恐但

限ニ当山ニ

本尊者 釈尊 五番神 祖師ノ像也

釈尊并宗祖ノ尊像者

（56ウ）

貞享三丙寅年施主甲州長沢村等学院日淨
十二月十六日
五番神者

施主佐渡塚原根本寺日行

漫茶羅

貞享四丁卯年十二月廿四日 日脱半形

斗帳

御本丸侍女右衛門佐寄進

妙經三十六部并机

中ノ間天井ノ丸竜ノ画狩野永叔十五歳筆

祈禱堂三十六房結束

脱師代各勸ニ施主ニ新建立金子方丈預ニ借与ニ利

足ニ各遣ニ扶持ニ又加ニ修覆ニ此外ニ祠堂金有レ之房

有レ之委如ニ別記

又其房無レ水或場所不レ宜故撰ニ入余房ニ亦ニ有レ之

雖レ然読誦結番永々無レ減

三十六房ノ名

上ノ山瑞光房

正徳三癸巳年東谷
上ノ山瑞光房
テ字立坊ヲ改メテ
号瑞光坊

南 谷觀松房

本在田代
南谷連成房ニ撰ス
之

同 芳心房

櫻岡谷高雲房
櫻岡谷秀悅坊ニ撰ス

同	慶雲房	稻荷	実道房	南谷敬神坊ニ撰ス
同	長安房	西谷	宗幸房	
同	妙応房	田代	長松房	
同	法蘭房	同	清耀房	
同	清玉房	同	宗林房	
同	忍脱房	名忍脱坊成道庵ニ撰ス 正徳三癸巳年シホ 之ノ成道坊ニ撰入	見塔房	
同	貞俊房	同	真善房	本在ニ惣門ニ春光 坊代ニ引移ス西
同	春光房	同	松玄房	天保年中東谷江移 ト改名 厨師代
東谷	春窓房	本在上ノ山麓失 故ニ東谷南林坊ニ撰ス	仁淨房	
南谷	淨蓮房	正徳元辛卯年字忠 坊代ニ南谷忠光坊ニ撰ス	長寿房	
田代	中山房	西谷	妙善房	明治三庚午十二月 合併ノ慶林坊ヲ妙善坊ニ撰ス
田代	宗賢房	中谷	仙台房	慶応元乙丑十二月 十四日三門焼失ノ 時火元ナリ夫コリ 再建無之明治七 年十二月門台坊江 合併ス
				明治三庚午十二月 合併ノ慶林坊ヲ妙善坊ニ撰ス
				治七甲戌十二月 五日又慶林坊ヲ門 救坊江合併又明治 十乙亥七月門教坊 ヲ林蔵坊江合併

身延山諸堂記外(北沢)

西谷	芳春房	明治七年法皇坊へ 合併本在上ノ山ニ 撰成坊代ニ移ニ西 谷ニ改造ル	淨栄房	丁内代ニ南谷玉蔵 坊ニ撰之又タ再 建ノ改ニ常樂坊明 治七年東ノ坊江合 併
同	信了庵	明治七戌十二月國 改ルハ合併ノ源坊 ト改ル	清閑房	本在上ノ山ニ後 買ニ了坊屋敷ニ 移レ之明治七 一月庵寺
同	本学房	明治七一月庵寺被 申付	顯成房	東谷敬神坊ニ撰 之至永七庚寅年
同	洪谷房	明治七戌一月泉 寺	院江合併	
同	祈禱堂前金灯籠二基			
銘云				
右灯	喻ニ經王	当体義均	善哉此器	法供養具
左	弘救ニ卑諦	護ニ然灯供	善哉此器	得ニ尼品
宗				
元禄癸酉初秋				
沙門同広銘	正住院正巳日中ナリ			
施主	甲州小河原清心院清閑日忍立			
同石灯籠二基				
銘云				
右灯	火入ニ石籠	能免ニ風雨災	信心依ニ經王	
厄償	不得来			

身延山諸堂記外（北沢）

（朱子）
堅頑古首肯 今又見三放光^{（4）} 共是仏種作能^{（4）}
成三吉祥^{（2）}

元禄五^{（5）} 正月吉辰 沙門正己子銘

施主甲州山神村住三井織右衛門

祈禱ノ額者 光悦日允師ノ筆

祈禱堂半鐘

〔註〕

（1）「長沢」の左註に「青柳」とあり。

（2）「等学院」の左註に「昌福寺十三世」とあり。

（3）この一行欄外上にあり、本文への入挿には書陵部本を参考にした。

（4）「性」を「種」と訂正。

一願主堂三間四方外縁三尺

一円院日脱聖人ノ影堂也」祠堂金附三置之、毎日読

誦全部勤之

願主堂前金灯籠二基^{（6）}今ハ無^{（7）}之

銘曰 理即究竟 真俗洞明」^{（8）} 薦^{（9）}三六靈魄^{（10）} 供^{（11）}双

金案^{（12）}

元禄乙亥季秋中旬

（58ウ）

（59ウ）

施主甲州小^{（1）}河内藤金右衛門

鑄匠江戸神田住宇田川甚右衛門政信

六靈者

父清心院清閑日忍 宗林日寿

母心澄院妙閑日恵^{（2）} 妙閑日応

正善院宗円日住 覚幻

石灯籠二基^{（3）}享和三亥天^{（4）} 全師代宮焉

前机并三ツ具足^{（5）} 文政十亥年 五十七世日舜判形

〔註〕

（1）「笠」を「河」と訂正。

（2）「意」を「恵」と訂正。

一鐘楼堂九尺四方

一夏之間日中^{（6）} 推^{（7）}之故云夏鐘^{（8）}本此国大井庄^{（9）}村

真言宗最勝寺之鐘也乱世時此鐘并領主^{（10）}墨印預^{（11）}

当山^{（12）}遍師代從^{（13）}最勝寺二訴^{（14）}公所^{（15）}欲^{（16）}返^{（17）}寺延山

円理院出^{（18）}公所^{（19）}最勝寺鐘可^{（20）}返^{（21）}之若爾富士有^{（22）}

之板本尊者本延山重宝也^{（23）}可^{（24）}返^{（25）}賜之旨訴^{（26）}之公

評果歲有来者互^{（27）}不^{（28）}可^{（29）}返^{（30）}依^{（31）}之于今延山有^{（32）}之

銘曰 諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為樂

甲斐國大井庄最勝寺之供鐘

弘安六癸未八月日時正

当寺住持長老比丘空円

大工沙弥十念

夏鐘堂葺替施主 甲州巨摩郡西郡長村内田利右衛門 (時) 替

露院 (時) 替 本行坊 (取次代官 与兵衛

同葺替 嘉永元戊申十二月日 (時院代役 妙侶院日法) (替 大蔭院日等 (替

諸方 南向坊 新御手替所也 (耳 師 兩右衛門 板本尊有之

〔註〕

(1) 書院部本には「黒印」とあり。

(2) 退師ノ 山本房十六世門理坊開基

弟子 円理院日逾贈聖人

天和二壬戌三月八日八十五歳化 (頭註)

(1)(2) 一影現七面大明神三間四方外縁三尺五寸

井幣殿一間半二間 拜殿二間半三間半

本小社也三十二世省師代勸化諸方、新建立、本願

身延山諸堂記外 (北沢)

人簡板掛之毎月有三祈禱

棟札元禄十四年辛巳十一月廿九日 日省判形」ウラ書

ニ大工棟梁 池上和人宗重 桑起主孝樹院日達 以上

七面像両体 退師開光

小 座像 寛永十七庚辰九月吉日

七面像山内竹之房ヨリ取之 御厨子共ニ此ノ厨子ハ円師堂江移之

同厨子 文政十二己丑年十月甲州金河原村横森七納之之本ト祖師ノ

鳥居」施主江戸住杉本長左衛門

同再建施主当所狐町田中徳兵衛島屋修督ト掛札有之

隨身之像二鉢 井師子狛犬ニ獸

同二体 杭岩戸神 三十二世日省判形

神鏡 嘉永二己酉年七月於江戸深川開帳之初 日新師代

五具足 同年ニ取ル 燭台ニハ 神田池上取持燭中 香炉ニハ 卯ノ御威御

女性外ニ連名有之 花瓶ニハ 京橋北橋中

御膳具 同年ニ取ル

斗帳 同時ニ取ル

七面大明神 續願 在拜殿 華形監舟拜書 明和七庚寅 応師代

施主 江戸 (吉見屋平 八 久松町 伊勢屋治兵衛 同所

三十六歌撰之額 三十六枚 近衛左大臣殿御筆歌ナリ (三鏡院同敷 西ハ狩野今化筆 慶長十九甲

身延山諸堂記外（北沢）

大初
十月廿五日辛「施主武州住人加治左馬助丹治家信
法号円徳院日僧慶長十八癸丑二月廿五日去
慶長十
四庵集己酉季秋良日
守御室前久遠寺常住 日遠判形」

〔註〕

(1) 下ノ百十五〈押紙・朱字〉

(2) 此統キ下ニアリ〈頭註〉

(3) 「司」を「子」と訂正。

(4) 以下三項目は、記載煩瑣に付、行末を示さない。

(1)(2) 一番神社九尺四方 拜殿五間ニ三間外縁四方

雖レ云ニ番神ニ但天照八幡ノ二像也往古此社在ニ波木
井ニ南部六郎実長鎮守八幡金像也若人不下馬ニ
過社前又服ニ新衣ニ者有ニ現討ニ故恐懼願レ奉レ
從ニ当山ニ

其後片隈沢立レ社十五世日叙師令レ刻ニ「天照像」内
納ニ書写妙經ニ為ニ一像社ニ
其後又「移ニ今祈禱堂地ニ
廿八世眞師代開レ山平地移ニ今地所ニ從ニ往古ニ鎮
守賞罰現驗故眞俗恐敬」深重

十八世日賢師棟札ニ枚有レ之共ニ是レ拜殿ノ「札
文言同也慶長三戊戌七月二日柱立至三十三日」令ニ

(62オ)

(62ウ)

〔註〕

(1) 下ノ百廿九〈押紙・朱字〉

(2) 此ノツミキ下ニアリ〈頭註〉

(3) 金像ニ 天文十三甲辰 霜月吉日願主敬白伊羅原藤
兵衛五十嵐産九郎吉信 ト有之〈頭註〉

(1)(2) 一五重塔三間四方
高サ二十間半

第廿四世要師代元和四戊午五月三日新初七月」七

鳥居 從ニ身延山内氏子中ニ立レ之
八幡宮ノ額ハ三十六世日潮師ノ筆此額面赤鉄ノ八幡
社江モ穿レ之遺ス
十八世日賢師代忠吉建立之拜殿歷年朽故見分
不レ宜六十六世日新師代再建嘉永六癸丑年十二月
吉辰上棟施主ハ山内地中井門前惣氏子中「世話方
名主惣年寄中三町惣代也」大工棟梁池上図書宗員
池上伊織宗治」武田頼母宗武」

周備ニ了大檀越淺野右近大輔忠吉建立之「忠吉ノ
法号大通院殿南叔道英七十五才」元和七五月七日卒法葬宗也」

大工棟梁池上新之丞上」

每年正月八日 齊奠法事有レ之」
石壇 三日講酒料積レ之作レ之」

(63オ)

日繩張同五_{己未}十月成就十一月十三十四十五日塔_{」供養有_レ之_」}

高サ廿一間但シ九輪共一丈八尺六寸四面_」

池上五重塔ハ十九間ニ一丈六尺四方_」

滝谷妙成寺ノ塔ハ高サ十八間也_」

施主ハ加賀能登越中三国ノ太守松平肥前守_」從三位中納言源利常ノ母堂寿福院花岳日_」栄大姉建立

也寛永八辛未年三月六日卒池上ニ於テ火葬ス_」

_{依_レ之毎月六日於_二宝藏_一自我佛調_レ之同向ス}

{奥院前ノ祖師堂モ亦此寿福院ノ建立也」}

本ハ位牌堂ノ前有_レ之廿八世眞師代今ノ所_{正移_レ}

之_」寛文三_{癸卯}年也施主日栄大姉之_{彦_」}松平加賀

守綱利_{後_ニ号_ス}此ノ料金子八百兩也_」奉行ハ清水八郎

{綱紀」}

右衛門也_{此ノ仁切番神地ノ木又鐵ノ故ニ神間ニテ_」其ノ子多ク死ス}

_{依_レ之天ニ畏_レ道其_」料物_」令_レ植木云云_」}

要師棟札 大日本国甲斐国巨麻郡波木井_」郷身延

山久遠寺五重宝塔棟札謹染毫之_」広宣妙法済渡衆

生之本基豈如_レ之乎_」信心願主加能越太守諫議朝

臣母公寿福_」院日栄抽_」於_二淨信_一建_」於_二靈廟_一三宝威

力_」縱横無窮二世祐利寧不_」莫太_」耶_」

身延山諸堂記外(北沢)

(64ウ)

(64オ)

天下御大工遠州住人鈴木近江守藤原長次宗味日

{義」}

三鬼島長門守吉次蓮真日実_」

半田半右衛門尉正定法正_」

真下惣右衛門尉吉治_」

鈴木弥治郎忠重_」

池上源藏宗重_」

樋垣吉左衛門吉久_」

山崎嘉兵衛久次_」

岩瀬多兵衛正次_」

長辺茂太夫久定_」

雲野伊兵衛正次_」

高木彦左衛門吉定_」

惣執権山本房日彦_」

普請奉行東之房日讚 法雲房日詮_」

大工奉行唯雲房日達 雲超日通_」久成房日宗 長

順日満_」

元和万年第五竜集_{己未}九月如意珠日_」

眞師棟札_{是ハ上ノ山江引移ノ時ノ札也_」} 寛文三_{癸卯}年六月

吉祥日 日寛_{判形_」}

身延山諸堂記外（北沢）

〔註〕

- (1) 二ノ百七十五〈押紙・朱字〉
- (2) 文政十二年焼失〈押紙・朱字〉
- (3) 「六百五十両」を「八百両」と訂正。

一利堂三間四方外縁

本トハ祖師堂ノ上ニ有之尊師代寛文二歳壬寅年移之

第十一世朝師ノ建立棟札有之横板也

大日本国甲斐国波木井郷身延山久遠寺 十羅刹堂
建立勧進沙門加賀国住人 浄蓮房日源 甲州住人
宗林房日増

明応三年 甲寅 七月日 至正徳三壬辰年二百十九年也

大工藤原五郎左衛門久吉

奠師代引移ス時ノ棟札

寛文二 壬寅 年十月吉祥日 日奠 御形

葺替日亭代 宝永二 乙酉 年正月廿二日

施主甲州浅原村五味半弥 法号 盛信院経怡宗隆日

紹

別当法達日久当山地内門前近村ヲ奉加ノ御拝ノ之

柱ヲ二本入レ以ニ檜皮ノ家根替成就ス天保

鬼子母神ノ額者四十五世日応師ノ筆也

(65オ)

(65ウ)

〔註〕

- (1) 下ノ百卅一〈押紙・朱字〉
- (2) 此ノツミキ下ニアリ〈頭註〉

位牌廿五日児文殊清境院豁朗日遍靈位 明和六壬戌六月再興
天保三辰六月又再興

宝師代
緒師代

一児文殊宮三尺六寸ニ 児水

相伝十二世意師児鶴若丸 意師ノ代御頭殿ニ永正十四年丁丑
年南延房勧若丸ト有之此ノ児

ノ事歟

有レ故於此処ニ自殺其後此処水涌出雖レ為ニ細流
大旱魃ニ無レ乾尤益諸人ニ云ニ児涙 水ニ其後有ニ怪
事ニ児有レ崇故立ニ文殊宮ニ祭レ之

日亨代ニ又再建ス

宝曆三癸酉年六月
又再更ス 輪師代

△年フル松ノ岩根ノ苔ムシテ溜キ流レノヲツル児水
△当山歴代ノ歌ト云未詳

祥師代再建立 元治二乙丑年五月廿五日棟札有之
施主駿州富士郡星山村深沢安兵衛為心願成就也

〔註〕

- (1) 下ノ百廿六〈押紙・朱字〉
- (2) 此ノツミキ下ニ有〈頭註〉

一 宝塔 一丈六尺四方外縁

為「悲母養仙院」了榮妙護日立大師菩提、^ス「建^ス立^ス之^ス」
第廿九世蓮師代新建立^ス

棟札寛文十^{庚戌}年十一月中旬吉辰宝塔起^ス立願主

予州松山城主四品兼隱岐守松平氏源朝臣定長^ス

大工泉三郎右衛門正次棟梁羽根多右衛門同桐原

宗右衛門被官宮内喜左衛門正重^ス奉行木本彦右衛

門尉藤原重直^ス

此塔永代從^ス松平隱岐守家^ス修補有^ス之^ス

六十二代扇師代右御屋敷江頼^ス家根更致^ス之^ス天

保十三^{壬寅}年御屋鋪江頼^ス見分ヲ請ケ同十五^{甲辰}

年家根^ス檜皮葺替并外縁張替成就^ス

此ノ塔修復ヲ明治十四年松山法花寺住持名目明ヲ以頼入候也^ス明治一新ノ際
家探事起故ニ永世ノ修理無竟來依^ス一^{此塔ノミ}座跡江石牌ヲ立永
世不朽保鋪ニテ明治十六年六月久松定廣縣家令池田久親登山右格間ス發
仙院殿御發格石牌ノ下ニ埋也

〔註〕

①「此塔」以下欄外上に記入の爲行末は示さない。

一 蓮師ノ廟堂二間ニ一丈二尺外縁二尺宛三方

○明治乙亥年一月十日夜本福房ヨリ出火燄然燒失飛火而類火^ス
○同九年丙子十二月再建成就上棟当山七十四世日隱判形棟札^ス因日隱上人

身延山諸堂記外（北沢）

霞廟堂落成並因之明治九年十一月廿四日開張^ス時刻当門光延二十一世
修明院日僧龜起世話人完造坊願成日光^ス殿州星山村深沢茂作母大工棟梁
波木井小笠原清右衛門同相内角兵衛^ス仙木桃新留月親太郎世臨^ス波木
井近藤市兵衛相又市川伝兵衛^ス塩浜望月吉五郎茂富惣世話人中現安後替
以上表也

①一切経藏六間四方

往昔本堂ノ上ノ山ニ有之廿八世尊師代寛文七丁未年引移此地^ス

第廿六世暹師代建立也棟札有^ス之^ス正保二乙酉年

閏五月廿五日^{（2）}建立奉行^{（2）}總管院日用大工棟梁^{（2）}池上新之丞
阿長右衛門宗信^ス門家久^ス

宗信

藏経倭本東叡山板也藏経^ス一々書付板木也^ス

法灯永耀未來際 教網普濟諸群萌^ス

淨心施主各願滿 同証仏慧順次生^ス

告明曆第二年竜集丙申二月上浣六日^ス

当嶺二十七世通心院日境^ス

一切藏経甲州身延山久遠寺輪堂^ス

施主武州江城募^ス当山帰依大檀越懇志奉^ス納之^ス

傳大師 日暹師判形 施主^{（3）}玉泉律師日泉^{（3）}
本通院日普^{（3）}

普成普建 施主蓮信房日達^ス

惣位牌当山大藏経奉加一結諸檀明曆第二^{（丙申）}惠

身延山諸堂記外（北沢）

風上院六日当山廿七世通心院日境」

省師代葺更施主位牌甲州泉村大木佐太夫」老母法

泉院妙有日善逆修」

経蔵ノ額者四十五世日応師ノ筆也」

〔註〕

（1）二ノ百卅九（押紙・朱）

（2）（日用）杉之房代、万治四年四月三日化（左註）

（3）三牀衣更 慶応二丙寅年九月 祥師御代

施主駿州星山村深沢安兵衛母 仏工当町茂作 世

話方志摩房日寿 取次利堂春教日恵（頭註）

（4）「日」を「世」と訂正。書院部本による。

一経蔵側廟塔者」

甲府宰相綱重卿母堂」順性院殿妙喜日円大姉廟塔也」

天和三癸亥年七月廿九日逝去依「御遺言」当山御

参詣儀式諸堂巡拝全骨第百箇日」忌納当山其節

從三綱重公御子甲府」宰相綱重卿 御石廟位牌御建

立也綱重卿御」没後正徳元年九月十四日三十三年忌贈官

列「將軍」歷代二号清揚院殿贈正二位内府公綱重

（69ウ）

卿」成三代常憲院殿御養子改三代家宣公治」世

三十四年正徳二年辰年十月十四日五十一歳薨御シ

玉ヲ号文昭院院殿贈正一位大相国公二

八条宮様御廟」

天香院殿中務卿智忠親王天真尊儀寛文二年七月七日

一丈六釈迦堂六間四方」

往古堂前二天門側有之日奠師代移今地一番

僧ノ寮日奠師代新造ノ番僧ヲ置ク」

番僧寮二間三間半」

釈尊 洛西鳴滝三宝寺ノ開基中正院日護」律師ノ

作 廿六世暹師ノ開光也」

奠師ノ棟札 是ハ引移上ノ山時ノ棟札ナリ」寛文四甲辰年

九月廿五日 日奠形」

四天王像 日暹師開光中正日護ノ作 天保十二丑三月心

原江戶屋榮蔵母」

妙経一部 日暹 判形 施主中正院日護判形」

廿ノ千仏堂者今ノ三光堂是也然三光堂故ニ千仏移此ノ堂」

千仏堂棟札 千仏造立大施主養珠院妙紹」日心

比丘尼 当堂建立願主日心并遠藤庄兵衛等」奉加

有之 寛永廿^{癸未}年臘月十六日 日廻判形 工
巧棟梁池上新之丞宗信 造營奉行 鏡智院日用
要行院日達 延寿房日教

三具足 寛永廿一甲申四月八日 施主發珠院妙相日心

石灯笼二基 施主甲州河内湯平村住願月五郎左衛門
法号法祐日性

灯明施主 甲州河内南部本郷村邊五郎右衛門
法号盛永宗心日性

独尊ノ額者 四十五世日心師ノ筆 嘉永六癸丑年影替
別当碩哉自ラ彫刻

千仏ノ像再興 嘉永二己酉年江戸於三深川東院開帳之南 諸人ヲ勸メ
院代妙信院日法聖人本行房是感院日行并ニ別当碩哉江戸下谷恵性丹情
ノ成就ス

丈六釈尊ノ像御衣更同遊華坐石ノ坐等新ニ造リ
釈尊二千八百御遠忌奉ニ報恩謝徳者也 六十

六代新師代嘉永四 辛亥二月十五日 施主東都信者中
板本尊有之之日新判

形 大仏師東都宮田竜雲 法号秋山院竜雲日僧住士
明治四未九月十三日去

〔註〕

(1) 大僧都法印 慶安二己丑四月十五日化へ左註

一 相輪塔高ヤ 発起本願優婆塞即如院一相

天明元辛丑年十月十三日四十七世日豊師代新ニ建立也
高祖大士五百遠忌御報恩於三祖師堂ニ妙經成衆供養ノ宝塔也

皇師代新建立ノ塔嘉永七甲寅十一月四日ノ大地震而破壊故ニ檀師代今ノ地江
引移シ(1)一再建修復スル者也施主看堀之内妙法寺前住日勝金
五十兩奉納其金者本院ニ而諸堂再建金ヲ加へ成就令者也 安政三丙辰年

身延山諸堂記外(北沢)

〔註〕

(1) 元トハ三光堂ノ下ノ曲リニ有之替地スルへ頭註

一 大黒堂三間半四方

往古祖師堂ノ上ノ山ニ在リ爰師代開レ山引ニ移
今、地ニ建立ノ時節未レ詳往古ハ

宗祖御作大黒天此堂有レ之中古為ニ諸尊修營ニ
呼ニ仏工其仏工或夜盜ニ此像ニ担負自謂レ過ニ數

里ニ然但巡ニ堂縁ニ至天命ニ而臥番ニ僧見レ之糺明
其言如レ右依レ之追ニ却其盜ニ古像置レ之ニ方丈ニ

今宝藏安置像是也

今ノ大黒ノ像者慈眼視衆生日乾判形

大黒堂ノ額者日心師御筆

当山上ノ山大黒堂檜皮屋根替嘉永六 癸丑 九月廿六

日別当大光庵 十九世志誠日照抽丹情者也薪師棟

札有レ之

御宮殿施主

同戸帳 敎有之内藤院忠山日進居士 明和五戊子十月廿四日

大黒堂ノ屋根檜皮ニモ此ノ敎有之

身延山諸堂記外（北沢）

① 三光堂三間半四方外縁

往古在下祖師堂与三位牌堂間上ノ山ノ上安置千
仏、奠師代寛文五乙巳年從甲府宰相綱重卿、
三光尊像造立時千仏撰入丈六堂此堂号三
光堂引移今地、

三光天子ノ尊像者寛文五乙巳年十月十五日為御

子孫繁栄一從甲府宰相綱重卿御造立也、

綱重卿者大猷院殿御次男征夷將軍家宣公、御実父

也三十三年忌為征夷將軍歷代贈官号清揚院

殿贈正二位内府公、

綱重卿御奉納妙経全部箱綴入

三光七面宝前卓圓條三打敷御寄進有之、

② 奠師棟札 寛文五乙巳年九月吉日 日奠形

〔註〕

① 下ノ百廿四、百卅八〈押紙・朱字〉

② 棟札〈頭註〉

一拝殿者二間半三間

第廿一世日乾師建立号三水屋茶屋本屋ノ辺ニ迎參

詣衆所也

① 第廿六世日退師ノ棟札

正保三丙戌年五月十九日峯古殿摧朽故徙此処、

② 第廿八世日奠師ノ棟札

寛文三癸卯年九月如意珠日拝殿朽摧故新令、再

興者也、已上又経年損壞故又別有番僧寮故

日亨代潰之今無之、

金灯籠 施主加藤肥後守後室又ハ九ニ永楽通宝

石灯籠一基 施主甲州河内小田村住 志村伝右衛門

石灯籠一基 為父 僧悦 妙盛施主岩間庄初鹿島住 望月七兵衛内方

番僧寮三間半二間

奠師代新造置番僧、

三光堂ノ額者明和第三乙酉七月吉日 施主江戸後陣御中

③ 御宮殿宝曆十二壬午五月十五日四十二世日辰師板本尊有之御身延山三光堂三光御宮殿再與新建立藤中一結所願成弁大工 池上八左衛門宗久 保科重郎左衛門重智

三光堂別当道支坊日職

〔註〕

① ② ③ 棟札〈頭註〉

① ② 一金仏釈尊像

第三十世通師代延宝五丁巳年十月十五日

施主從五位下京極信濃守高勝法号高勝院道監日照居士
治工江戸住田中丹波守藤原重政

為「昊天院道閑日明菩提」

明和九壬辰六月良辰再建 再興施主河西氏

三光堂別当志保日照代嘉永七甲寅年大地震而大破故ニ僧師ノ院代智禪院日
願以目身志ノ金 其余者本院再建勸化ノ集金ヲ以修復スル者也

〔註〕

(1) 三光堂ノ「下ニアリ」〈頭註〉

(2) 以下二行は記入煩瑣の爲行末を示さない。

(3) 以下二項は記入煩瑣の爲行末を示さない。

〔1〕(2)
「常題目堂三間・三間半 井衆寮五間四方」

廿九世慈師代棟札

本願無安日養

寛文十二壬子年三月廿八日大工坂上善兵衛正次

葺屋小倉佐左衛門

中尊両仏祖師

漫茶羅 日蓮師 寛文八申孟夏下旬晦日「授与

之身延山法久庵常題目堂常住本尊」

常題目堂田地施主 慈父妙成院法源日正「悲母法

泉院妙有日善子修 浄室院法晴日明「妙清幻浄各

身延山諸堂記外(北沢)

靈 一家現当二世安樂」 施主甲州泉村大木四郎兵衛

嘉永七甲寅二月吉祥辰当山上ノ山法久庵常唱堂家

根」更行道縁張替砌別当智道日受依丹情蒸功
者也」日薪判形 板本尊有レ之

法久庵ノ額別当智道日受代

〔註〕

(1) 下ノ百卅二〈押紙・朱字〉

(2) 此ツビキ下ニアリ〈頭註〉

(3) 「池上善兵衛正次」と書陵部本にあり。

(4) 位牌〈頭註〉

(5) 元禄十六癸未七月七日省師本尊脇書

長沢村田地六拾石除常題目堂道心者扶持料寄附主
大木四郎兵衛成妙院法経日勤与之〈頭註〉

〔1〕(2)
「東照大権現宮三反五寸四方再建五尺六寸四方 文政年中再

十二子十一月成就

大権現御位牌從三從珠院殿「当山起立シテ之」大分

境地御鄭重御朱印拜受故為「報恩」日奠代立之

〔註〕

(1) 下ノ百卅八〈押紙・朱字〉

(2) 此ノツビキ下ニアリ〈頭註〉

身延山諸堂記外（北沢）

(74才)

〔註〕
① 妙見大菩薩、宮三間半

本七面、宮廿六世退師代建立」

遍師棟札「七面大明神施主当山細末等大野御平且那等当社建立勸化僧南延房日蓮本姓男

録日「寛永十三丙子八月二十五日造立大工池上新之丞宗信」

廿八世奠師本願三移西谷檀林於上ノ山者立三

妙見宮云云

日亨代改為三妙見宮一奠師本願也二七面宮所有之妙見宮無之故也為レ宜三參詣前地引レ之」

妙見像、奠師開光」

宮殿、施主方丈院頭瑞光院日貞 日亨代」

石灯笼一基、施主甲州小田村志村伝右衛門」

〔註〕

① 二ノ百九十一〈押紙・朱字〉

〔註〕
② 水屋庵水庵法明坊」

貞享年中正山始レ之」

次ニ庵造立ハ宗甫 次ニ修復道意」五代報命坊日

長享保八癸卯九月八日 裕師板本尊有」
改造住持水庵報命坊日長

(75才)

〔註〕

① 下ノ百卅三〈押紙・朱字〉

② 此ツビキ下ニ〈頭註〉

〔註〕
① 奥院祖師堂六間四方外縁同拝殿七間半

第廿四世要師代加賀母堂」寿福院花岳日榮大姉建

立也 五、重塔亦此大姉之」建立也 依レ之毎月六

日於三宝蔵自我偈誦之回向」

第廿九世莚師代」征夷大將軍家綱公有院殿御台

所伏見院御恩女」

法号 此方 円明院殿天真日孝尊儀 再建立也」

上野 高嚴院殿月潤円真尊儀

位牌有レ之依レ之毎月五日於三宝蔵自我偈誦之」

回向有レ之」

祖師ノ像中老法師ノ作

寛永十三次丙子五月十三日衣更衣大仏師康亨ト御持經ニ有之 日蓮師鑑」

享保五子九月衣更衣大仏師法眼康慈子伊藤師之丞廿五才ノ時」河原町本応

坊ニ而相勤六老僧妙日妙蓮尊儀以上九鉢 日裕判形」

妙日妙蓮ノ両尊像天和二壬戌四月十九日 日脱判形施主甲州曲輪田内藤七郎右衛門法号法林」

六老僧ノ像延宝八庚申九月十三日 日脱判形施主妙覺律師日淨
勸化諸檀那位牌」

(75ウ)

三具足寛文八年戊申十月日 施主文院近祐日莊

天蓋貞享二年九月十三日脱判形 功德主藤原氏安信同守信

法号長寿院妙延日久 肝煎還性院妙開日歸 蓮久院長悦日存

金灯籠元禄十六年七月二十八日 施主武州江戸坂木三丁ノ橋左衛門

久兵衛
浅右衛門

金香盤

寿量院常香盤

右別鑄ニ一銅盤、写ニ其銘、以寄ニ進於身延山ニ

寛文十年庚戌四月日 施主沢

寿量院者所、祭亡妻建部氏之室而其地在、浅草」幸

竜寺中覚林院、建部氏名胤丹州牧政長妻」女也生

而敏敏十有四嫁、於我ニ其在我家ニ貞静」不レ怠、舅

姑之奉養日侍、其側ニ助ニ我定省、常」使ニ舅姑悦ニ其

婦寧、則孝ニ于其父母ニ仁慈温孝」能愛レ人、婢妾皆

懷ニ其德、乎日好レ学博覽ニ経」史ニ時、習ニ言行、凡家

事之仮偶、有ニ風月之興ニ賦詩、詠レ歌或彈レ箏成レ

趣、操レ毫学レ昔皆得ニ自然之」妙、其性強記而過レ目

不レ忘謙然而不レ問敢不レ答」故外内無レ知ニ其多芸ニ

我常私惜」不ニ生、為ニ丈夫ニ也」然我自恃ニ生レ子似

身延山諸堂記外（北沢）

(77才)

母則聰明一矣不幸而未レ有」子嗚呼寛文八年戊申、

冬臥レ病我驚怖招レ医治療ニ一万方不レ驗、及ニ玄臘十有

一日ニ忽焉、棄レ家而逝」年二十二嗚呼哀哉此日何

日乎我不レ堪ニ哭慟ニ心胸」如レ裂其葬祭欲レ以ニ我

礼、時俗難レ變遂葬ニ」於幸竜寺之西南隅、嗚呼哀哉

不幸短命也呼」可レ後レ我者而先レ我乎彼不幸レ

可レ得レ言矣我不」幸亦不レ可レ得レ言矣嗚呼天命也

我惜ニ其才德之不レ溥」而欲レ刻レ石又有ニ時俗、之

難レ為者、故作ニ一銅盤」為ニ常香盤ニ作ニ之銘、以

溥ニ不朽ニ銘曰

嗚呼亡妻 其性温良 慈仁有レ孝 貞順常有」

典籍稽レ古 風雅成レ章 哀哉痛哉 白雲隔レ郷」

花落ニ空慢 月入ニ孤牀 雙鶴為レ雙 鴟鴞失レ行」

吁何先レ我 使ニ我悲傷 寐則迷レ夢 寤則斷レ腸」

一爐揚、蕪 千歲流レ芳 縱然短生 永名無レ疆」

石灯籠ニ基寛文五乙巳年九月十三日

為ニ法界ニ造ニ立之、願主武州小石川新藤匠町

此灯籠地震破損今、灯籠者」施主大塩村佐藤十郎兵

衛再興」

(77ウ)

身延山諸堂記外（北沢）

〔註〕

- (1) 下ノ百廿一、同百卅七（押紙・朱字）
- (2) 「潤」を「淵」と訂正あり。
- (3) 「聡敏」と書陵部本にあり。
- (4) 「暇」と書陵部本にあり。

〔1〕 二王門 一丈六尺・五間半

是往古本堂前有之^レ二王像^ス安置此門^ニ相州六
浦平次郎入道妙法禪門寄進也^ニ遍師代三門建立
時此二王移三門^ス執金^ス剛神也本堂前二天門改
造時古門移三^ス奥院^ニ

今ノ二王ノ像者 脱師開光^②施主妙覚院律師日淨
背御昌福寺十三世

思親閣ノ額者 四十五世日応師ノ筆

〔註〕

- (1) 「天」を「王」と訂正。
- (2) 「妙覚律師」と書陵部本にあり。

一 椎鐘堂 二間一尺四方

鐘首題 廿九世日延判形

甲州身延山奥院捷推

洪鐘震^レ鄉音^{ハナシ}覺^{ハナシ}三群迷^ニ声遍^{ハナシ}十方無量土^ニ

(78ウ)

含識群生普聞知^{ハナシ} 拔^ス除衆生長夜苦^ニ
六識常昏終夜苦^ニ 無明被^レ覆久迷情^ニ
晝夜聞^レ鐘開覺悟^ニ 恰^{ハナシ}三淨利得^{ハナシ}神通^ニ
寛文第八竜集^{ハナシ}中^ニ應鐘如意日^ニ
治工甲州府中住沼上四郎右衛門吉加^{ハナシ}
施主勸受院日順 渋谷又右衛門淨林日清^{ハナシ}
同平兵衛真乘日正 横関与兵衛蓮盛日覺^{ハナシ}
五味四郎右衛門了達日是^{ハナシ}

鐘堂板本尊

延宝五丁巳年十月上旬九日 日通判形

智証院淨林日清

本願 実教院真乘日正

玄地院蓮盛日覺

河内福主村望月佐左衛門法善日億

助願主 中部淺原五味七左衛門宗隆日恰

河内加島庄望月与右衛門妻妙秀日心

身延大工棟梁坂上善兵衛宗次

一 別当寮四間七間

本番僧無^レ之廿八世日眞師代新立^{ハナシ}寮置^ニ番僧^ニ
三十二世日省師代ニ悉ク改造ス^{ハナシ}元禄十六^{癸未}年

(78オ)

(79オ)

也」

「籠屋二間四間」

古別當寮也元禄十六癸未年引レ之修復」

①御供所二間半 五十八代環師代建立」

施主下山村中」

御供所ノ額者五十八代環師代右環師ノ筆」

唐金宝塔一基高サ五尺五寸
天明二癸亥十月
施主大坂本間野兵衛

〔註〕

① ツバキ下ニアリへ頭註

② 「木」を「樹」と訂正。

奥院祖師堂家根土瓦葺替嘉永六癸丑九月薪師代時別」当智玄院日是 施主結衆満山中国内信者中瓦師伊沼村住人」望月作兵衛 普請奉行智報院日是願智院日勢 棟札有レ之」別當所孝東院嘉永七年或大地震而崩潰故續師代別當智報院日如
丹精ノ再建成立 安政二乙卯年十月吉辰

(80ウ)

西谷通

七面山 詣」

①朝師堂二間半 宝永元甲申十一月廿五日」
省師棟札」

朝師御本尊者五十八歳之給像之御影ヲ奉レテ明応第四乙卯五月日」作者備中監撰一条丸頭主日恒春遠訪日額ト御像ニ有レ之明応」四年乙卯者御存生七十四歳之御時也」明応九庚申六月廿五日七十九歳遷化也」

東谷覺林房朝師開基隱居入滅地故」卅二世日省師代十七世玄理院日儀在任之節勸化建立」祈」眼病」有」三靈驗」諸國聞レ之信敬日篤」

日朝尊者三百五十遠忌報恩修行
嘉永二己酉六月廿五日薪師代覺林房」朝師堂家根檜皮葺更成就之砌 三十
一世智妙院日臥板本尊有レ之」
延享四丁卯七月七日下ノ厨ロリ出火之節
玄理院日儀建立ノ朝師堂和焼致ス

(80オ)

往古者奥院諸堂在ニ本堂祖師堂近処ニ狹隘」羅列見分不レ宜又奥院道險難ニ難レ通」廿八世奠師代執事僧堯達日精号ニ内正院」西谷内正房開基也於レ山大勲功有又有ニ學徳」故日亨代贈ニ聖人号ニ与ニ貫首相議大開」諸」所ニ平ニ嶮地移ニ諸堂又開ニ奥院路ニ広レ之」平レ之令レ易」往還」又從ニ三光堂辺」至ニ水」屋上ニ多是他領也水屋上山是下山領也」計策為ニ此山所領ニ植レ樹立レ社莫太勲功也」毎月廿九日於ニ宝藏」自我偈誦レ之回向」

身延山諸堂記外(北沢)

身延山諸堂記外（北沢）

又再建立普賢院日發代」

〔註〕

- (1) ニノ百九十（押紙・朱字）
 (2) 朝師堂額ハ潮師ノ筆 焼失（頭註）
 (3) 此ノツゞキニノ卷ニアリ（頭註）

一西谷檀林善学院』

第十四世善学院日鏡師、居所也永禄二（己未）年四月廿五日五十三歳遷化至正徳二壬辰（百五十四年）

第廿二世日遠師慶長九（甲辰）年改為「学校」講ニ文句、是故以ニ遠師、為ニ檀林開祖ニ至ニ正徳二（壬辰）年、一百九十年也談林、七世智性院日遠寛永廿（癸未）年十月廿四日遷化後絶講二十余年也
 第廿「六世日通師隱居此院」遷化

第廿八世日奠師「雖レ有ニ談林再興、願ニ未レ果遷化」

第廿九世日「延師、時再興興源院日遠為ニ第八世、講ニ文句、」寛文八（戊申）年也至三四十五年（一也）」

講堂者寛文九（己酉）年興源院代「江府安藤菴」岐守重常為ニ慈父伊賀守 普考 進行院道「円日寛居士追薦、喜捨黄金一千両、建ニ立之」

(81オ)

(81ウ)

(82オ)

往古、方丈講堂有レ之歟天文十四年乙巳歲伝「師代御頭帳講堂令レ修ニ理之」云云」

第三十二世省師代談林化主廿五世觀如院日透「代元禄十五（壬午）年十月廿三日、為ニ永聖跡、」

一講堂九間七間半 廿九世應圓懷札」

一化主寮七間半ニ五間」

一廊下四間ニ三間」

一庫裏八間六間 再建立四十一世妙師懷札庫裏ノ懷札ナリ」

一廊下四間ニ二間」

一食堂四間ニ五間」

一鎮守社三間四方 鎮守三社三間半（慶応元乙丑五月吉辰上棟、弁天社）七十世祥師懷札再建立」

一妙女庵 十二間半ニ五間半 卅三世亨師懷札、文鏡謀訳ノ寮授、庵号」

日亨代借ニ戒善房屋敷、再ニ建之」

上中座寮井所化寮長屋寮或在談林地内或境内
狭故借地中地所々造之

一惣門二間二尺同額 （納世林 潮師ノ筆）

同通路 遠師百回忌供養開之

日潮師代 寛保元 辛酉年也

一一切経藏二間四方

一椎鐘堂二間四方

辰師模札 辰師鑑銘 安永九庚子十一月吉日施主甲州鏡
中条村 正行院日教上人同御免大工職物師 初天住

沼上源藏藤原吉秀子息源治郎作 一室模札日求筆青柳昌福寺長遠院門弟
中

〔註〕

（一）此ノ鐘堂明治廿年焼失故ニ鐘ハ内船内船寺江送之
同年ナリヘ頭註・朱字

一土藏三間

一浴室三間

檀林歴代

初祖心性院日遠 二祖慧眼院日祝

身延山諸堂記外（北沢）

三祖智寂院日豪 四祖禪那院日忠

五祖禪智院日立 六祖僧那院日豊

七祖智性院日遷 八祖興源院日遼

九 本源院日然 十 隆善院日慶

十一 養真院日住 十二 情存院日妙

十三 本如院日順 十四 大中院日孝

十五 宝聚院日城 十六 智光院日逯

十七 乘妙院日遑 十八 中道院日秀

十九 大慧院日解 廿 隆性院日永

廿一 常唱院日迅 廿二 本妙院日亮

廿三 觀理院日義 廿四 本成院日有

廿五 觀如院日透 廿六 承円院日念

廿七 十如院日諦 廿八 相応院日実

廿九 太寿院日量 三十 空如院日信

卅一 玄収院日義 卅二 隆存院日迨

卅三 本禅院日述 卅四 遑漸院日正

卅五 修学院日道 卅六 即真院日在

善学院永聖跡御免元禄十五年十月廿三日 日省師代

善学院永紋白着用文政四年巳年十一月日 日通師代

同院講釈中緋紋白御免天保八丁酉年六月日 日酒師代

身延山諸堂記外（北沢）

妙玄庵永聖免許享保二丁酉五月二十二日 日裕師代

明治維新ニ付西谷檀林ヲ改テ身延檀林トス明治七

年甲戌十一月廿二日

明治八乙亥年一月檀林ヲ廢シテ久遠寺屬善學院ト

スル

〔註〕

（一）終（頭註・朱字）

（84オ）

一常經堂五間四方外縁四尺衆寮二間ニ六間半廊下二間四方食堂

四間半五間

棟札諸尊開限等無レ之

過去帳 日蓮師判形寛文十庚戌四月廿四日本願主

太心院日悟「真通院日解」深信日慧

一廟番僧寮妙福庵 通師ノ代ニ改テ妙福房トス

奉行僧親勝房日歸 宗伯日敬大工棟梁池上藤兵衛宗道

往古雖有レ之巧壊故

日亭自分志宝永八辛卯「春開レ地為レ避ニ河水ニ以レ

石築レ之」一式新建ニ立之

仏壇間并座敷 庫裏并番僧部屋ニ所門井造レ之

（85ウ）

（85オ）

此側為ニ日亭廟所ニ逆修石塔祠堂金」収レ之永代此
番僧掃除回向不レ可ニ疎略之旨可ニ申渡也」
半鐘」

一収骨堂四間ニ三間

棟札無レ之大工坂上宮内立レ之

祖師像武州江戸幸庵寺正光院日敬判形 慶長十七壬子三月日 日敬判形

釈尊ノ像坐像也

一犬ノ塔

小室日伝聖人帰伏ノ因縁詳ニ諸人口碑ニ其塔婆」之
殘木在ニ宝藏」

一（一）（二）（三）釈迎堂方九尺 通師代 見師代

此ノ処ハ祖師当山最初御建立十間四面ノ堂地也」

九箇年説誦說法書寫本尊著述諸書ノ靈」地也亭師

ノ云ク從ニ往古ニ為ニ真俗葬送場」山地狹少」別」無ニ

広地ニ故歟仰願後代貫主此処為ニ清淨」ノ靈地ニ立ニ

四方境ニ葬場別可レ設レ之

釈尊 裏書高祖大菩薩已来大檀越太」田新六郎号法

覺林院日宗、息女井上筑後守妻（注）「法浩妙院法真奉、造三立之、寄進以祈三世勝利二矣」寛永十七庚辰三月十九日誌 日暹（形）

棟札 通師 延宝四丙辰十月吉祥日龜前堂常住「造立施主当町九日講中 大工池上九郎兵衛宗次」板本尊 見師 宝曆十三癸未十二月十五日釈迦堂再「營寄附之面々当寺中門前真俗貴賤現安後善」

〔註〕

- (1) 下ノ百卅六〈押紙・朱字〉
 (2) 此ツゞキ下ニ有リ〈頭註〉
 (3) 「二間四方」を「方九尺」と訂正。
 (4) 御卿庵ノ旧跡ノ玉垣造立ハ第三ノ卷ニ有之〈頭註〉

一祖師廟堂（二間半）同拜殿（三間半）廊下」

第十七世日新師代建立」

棟札（天平三）日新（判形）裏書ニ右八角堂建立ハ「

去年仲冬也料從三大坊「材木少く助成番匠之俵」子悉奉加也 大工池上新之丞上蓮」

又日遠師ノ棟札ニ慶長十一丙午三月日祖師聖人石

身延山諸堂記外（北沢）

廟「從三堂地上奉移此塔頭靈地」以次修三理八「角堂」者也（已上）
 日亨為「防二雨濕」悉為「油丹塗」

石廟ノ妙法蓮華經ハ相伝フ向師ノ筆ト」

古来以「凡人骨」收此所「汗穢不淨也日亨代」禁之「凡人骨可送」收骨堂「永代不レ可破此式」
 覺林房、歷代一行院日俊為「令法久住祖恩報」謝「收無尽財」永代毎日於「廟前」令「誦誦妙典」一部、其志深重也永々簡「鄭重誦誦人」令「勤レ之不レ可退転」

拜殿 廿二世日遠師ノ棟札 疊祖御廟之拜殿為「

円惺院日信台靈出離得脱「新造三立之」者也「慶長

十八癸丑南呂八月ナリ如意殊日為「安泰守護」奉「圖」

写之畢 功德主前住沙門心性院日遠（判形）

円惺院日信者厨子建立本願加治左馬助也」

御廟一式立替 松木祖像移レ之「延享元甲子正月

三十六世日潮師代」

祖師尊像ハ九老日像菩薩御作」

本化上行日蓮大菩薩身延八角堂本尊是影者」花落

日像ササ作（寛保四年甲子之春 三十九世 日潮判形）

身延山諸堂記外（北沢）

〔註〕

（1）此ノ統キニノ卷ニアリ（頭註）

※ 87・88丁の丁付をとばしている。

（89ウ）

一阿仏房日得聖人ノ塔」

佐渡阿仏房妙泉寺開基俗名藤左衛門尉為盛順德院北面侍也順德院於佐州崩御後出家一申之千日尼御前此妻女也其子藤九郎盛綱出家云佐渡阿闍梨日滿妙泉寺第二世也阿仏房并千日尼婦伏宗祖如祖書一得弘安二己卯年三月廿一日卒此年七月二日其子盛綱詣身延山収日得骨弘安三庚辰年七月一日又登身延山拜父墓録内三十一卅丁分明也又録内十八廿二中興入道消息云去ヌル幻子ノ娘ノ御前ノ十三年ニ六丈ニ卒都婆立テ其ノ面テニ南無妙法蓮華經ノ七字ヲ顯ス是亦身延山歟文ニ分明云

一田代高座石ノ祖師堂三間半ニ三間庵三間半ニ八間号妙石

日亨代宝永三丙戌年十月十三日江戸講中新建立棟札有之奉行僧觀

静房日諦大工棟梁池上宮内宗次

金像ノ祖師ハ初ハ安國興院後ニ移此堂

（90ウ）

宮殿ハ本在祖師堂十三世伝師代天文四乙巳年西ノ厨日祐日亨代大遷房日守寄造大工池上正正正

宝永五戊子年宮殿改造後古宮殿移此堂從江

戸講中ニ出金十兩一成古宮殿施主

六老僧塔在此所

窮年学禅院日達勸道俗与三錢窮民令捨石

書与妙經収此処起石塔

卅二世日省師元禄十三庚辰年正月十三日夫高座石發願使諸人帰敬

開基者山本坊十八世学禅院日達妙石庵造立主法蓮

求令捨世財当房永代相統願主了達予感心

之授与本尊者也

字師身延山高座石祖師堂新建立施主江戸結納中本願主学禅院日達聖棟札人存生殆起宮殿者在古大室ニ有之改造之後移此堂時宝永三丙戌年十月十三日奉行僧觀静房日諦大工棟梁身延門前池上宮内宗次

〔註〕

（1）下ノ百十五（押紙・朱字）

（2）此ノ統下ニアリ（頭註）

一松之木息ミノ寮号松樹庵

宝永元甲申年建立

（90オ）

厨子者同五^戊子年建立 日亭棟札授与之^二

宗祖像者從^ニ越後^ノ本覺寺^ノ奉^レ寫^レ之^ハ 光門日照

祖師堂 正徳二^{壬辰}四月建立^二別^一

江戸芝田町八丁目 森久右衛門
近所七右衛門

一追分ノ寮 号^ハ盛井坊^ト

脱師棟札 元禄六癸酉
十一月七日道智庵日立智円日惠授与之^二

井水者貞享四^{丁卯}年三月十九日午刻依^ニ祖師明神

夢相^ニ涌出^ス歟^ニ此^ニ処^ニ無^レ水^ノ數年^ノ願求^ハ靈感也^一

半鐘 江戸講中 宗信代^一

祖師像 宝永六己丑年八月本願 江戸紙屋治兵衛
并講中 宗信代

此統キ下ニ有リ

〔註〕

(1) 下ノ百〇七^ハ抑紙・朱字^一

(2) ツビキ下ニアリ^ハ頭註^一

一十万部 日亭棟札授与之陽山日正^一

本堂 元禄十^{丁丑}年陽山建立之寶卓祖師ノ像 安置^シ故是ヲ^一
為^ス本堂^ト別^ニ祖師堂^ヲ建立^ス

祖師堂 宝永六己丑年陽山建立之^一

身延山諸堂記外(北沢)

宗旨建立ノ祖師立像 江古^ハ綱中^ハ建立^ス人家間^ハ振^レ之^一

小繩村万部寺^ノ寛文四甲辰年寺再建立^ス五代法利代^一 法利建立此

ノ建立ノ前凡ソ六十年小庵有^レ之正徳年^一 中ニ至

ルマテ凡ソ百年余始メ造立^スハ慶長元和ノ頃也^一

一法久日塔 二久応日休 三久 四法久日安^一 五

法利日明 六円長日榮 七宗遊房日祐 八陽山日

正^一

一赤沢ノ妙福寺^一

巨麻郡西河内領長徳山妙福寺建立ヨリ至^ス正徳^一年

中^ニ凡ソ三百余年^ト云^云

開基西之房 ニ山之房^一 三本明房 四正学律師

五法藏房日照 六善行房^一 七本性房 八性善房

九円融房 十寂仙房 十一瑞泉房日寿^一

古堂建立 長禄二年戊寅年
六月二十九日 日学判形山之房代^一 正徳二壬辰年
ヲ二百五十五年

古寺建立 慶長十八癸丑年
八月二十二日 施主妙円 要師本尊有^レ之^一

堂建立 正保四丁亥年
九月十九日 日遍判形造 立本願榮伝日如井^一 赤

沢村諸旦那中高住村望月八郎右衛門了甫大工池

上^一 五左衛門^一

半鐘 江戸本郷久志田氏 法号不樂院宗祐日淨
第十一世瑞泉房日寿代^一

(93オ)

身延山諸堂記外（北沢）

庫裏 五間二八間 正徳三癸巳年
堀泉坊日尊代立之

〔註〕

- (1) 「本」を「之」と訂正。
 (2) 「妙」を「明」と訂正。

一 神力房

境内四畝廿七步除地正徳二壬辰年迄百廿七年也」
 開基法意十三年在住一間二小立之」二代徳
 順^{十五六年五盛}三^{世之今有之}代法榮卅五年作三間四間庵故」
 為三開山」四代法源日流廿七年代学禪院日逢以三七
 面社古材木造三間四間堂奉安置三三神明神」
 通師ノ棟札有之五代妙法房十五年 六代宗順五年
 七代法玄六年半鐘施主西郡南胡村安藤三右衛門」八代
 浄円六年 九代宗信三年 十代神力房立三三間」七間
 寺宝永三^{丙戌}年日亨授三与板本尊一名三神」力坊
 材木ノ施主ハ赤沢村中扶持方等ノ施主西郡」筋西
 南胡村安藤十郎兵衛同苗佐五右衛門」

一 蓮華房

(94オ)

一 麓ノ一ノ鳥居 赤沢村中立之 破壊ニ付キ又タ」
 唐金ノ鳥居」

木ノ鳥居」

摩尼珠嶺ノ額」

一ノ鳥居ヨリ御本社迄道程五十丁登リ登丁メ々々
 正石灯」籠立之丁目々々ヲ記ル施主之姓名モ皆
 灯籠ニ有之」

(94ウ)

一 北麓ノ神通坊

從開基至正徳年中二百十余年
 開基慈性坊」廿八年住立三三間四間庵」二代宗榮卅八
 年 三代」蓮光卅五年山中立三三間四方休所」通師板
 本尊」脱師本尊有之 四代法榮七年作四間六間
 寺」 五代神通房^{正徳二壬辰年マテ}此代宝永三^{丙戌年}
 日亨授三与板本尊一名三神通房」

從麓上山中町石井從麓至山中一本土知^{ノキト云}処二二
 十町余所兩脇一間通作場之内從高住村一買取」
 植三並木一令易^レ登山此ノ施主飯富村古屋弥治右
 衛門」

麓ノ鳥居 施主河内大塩村中永代可立之約諾也」

(93ウ)

一土知之木安住房」

一肝心房

天明七丁未六月廿一日
開基肝心院日行聖人」

一中ノ茶屋^{号ニ中廻房}」

從、開基^ニ至^ニ正徳^二壬辰年^一七十年余也

開基慈」心房八年住立^ニ休所^一作^ニ山道^一」二代法善房

從^ニ北^一」方^ニ取^ニ繩水^一」三代法善 八年 作^ニ三間^一三間

庵^一」四代宗久十五年 五代蓮久十二年 六代蓮心六年

從^ニ西方^一取^ニ繩水^一」七代立心作^ニ三間^一五間庵^一授^ニ三

棟札^一」八代法久至^ニ正徳^二壬辰年^一八年住ス」九代蓮信日

回^{享保十三戊申}
三月十九日去」

一晴雲房 開基善心日修^{文化元年甲子九月十九日}
盛師ヨリ本尊ヲ授ク」

一赤沢村春氣川ノ万年橋^{文政三庚辰年十一月新ニ万年}
橋ヲ掛ル」

一同峙ノ宗説房<sup>七面山道橋普請
為ニ金所ニ建ス</sup> 本願発起唯宣宗説日経靈

当庵發願主
文化七庚午九月四日去」

初祖妙宣日輝信尼<sup>天保十一庚子 父ニ親依心願初八面成尼当坊建
五月十九日去 在坊三十余年四十一歳天神中衆</sup>

立^{長沢氏産}」蓮華坊日信法師<sup>道橋普請発起人
文化十二乙亥六月廿八日去</sup>」

身延山諸堂記外(北沢)

(96ウ)

①
七面山

一明神本宮^{三間半ニ四間} 再建^{四間}」

一幣^{殿ニ間半ニ二間} 同^{四間}」

一拝^{殿六間ニ四間} 同^{七間半}」

一廊<sup>下ニ二間ニ四間
二通り有レ之同</sup>」

一御供屋^{三間四方} 同^{三間}」

一庫^{裏六間半ニ八間半} 再建^{九間半}」

一池太神宮^{七尺ニ一間} 同^{三間半}」

一随門^{身二間半ニ三間半}」

一鐘^{堂九尺四方}」

一客^寮 再建^{十間}」

一籠^{屋二字} 同^{二間半}」

右一式第三十世通師代建立通師本尊宮殿」之内張、
有レ之七面社造宮遷座之時収^レ之延宝」三乙卯年八
月上旬八日 日通^{判形} 此時執事^{山本房} 學禪院日逢
巡^{甲駿兩國} 一勅^{ニ化道俗}」
卅三世日亨代ニ七面山別当修善院日得勸化ノ金」
柱惣^{緑色}金張附給天井金物惣^{雨覆}雨戸」玉垣池之
端井門水溜之井惣門等或建^{ニ立}之」或修^{ニ飾}之

(97オ)

身延山諸堂記外（北沢）

為^{ムニシカシ}防^シ雨^シ濕^シ悉^シ以^シ油^シ丹^シ塗^シ之^シ

七面ノ尊像 万治三年十月吉日 身延山廿八世日覺判形 施主 京布袋屋世田市左深田院妙願日成

衛門

四天王 日通判形 施主本阿弥市郎兵衛

宮殿内宝蓋 延宝二甲寅年卯月九日 施主惣題目構中

天蓋 施主不知

花瓶一对 元禄乙亥年二月十九日 施主奥州南部和賀郡出瀬久左衛門尉房種

金地大水引 施主水戸黃門光國

幡一雙 并鏡一面 宝永四丁亥八月日亭判形 施主江戸了蔵

院妙乘日運取次最教寺

小幡一雙 為三六郎子之助政久九歲祈禱 宝永七庚寅六月吉日

小幡一雙 為松平二十郎祈禱 宝永七庚寅六月吉日

幡一雙 宝永三 丙戌年四月 日亭判形

幡一雙 宝永二 乙酉九月十九日 与石順安

幡一雙 施主不知

鐘 仙石越前守政明室法号清耀院円珠日淨

同堂富主郡大宮村渋谷又左衛門同平兵衛横関与兵衛

隨身像二体 日通判形 施主中川佐渡守久恒奥方

法号長寿院妙応日慶

隨身門 甲州小川原住人内藤氏 道榮 妙証院法忍日行

(98ウ)

(98オ)

(97ウ)

惣門 赤沢講中

三具足 江戸浅草御蔵前大坂屋与兵衛

金灯笼 同御蔵前万利女

机十一脚 願主尊通院日忍 江戸芝金杉三丁目大坂屋次郎兵衛

鑿泉州高瀬忠左衛門

金柱ノ箔 本願古市場 大久保助右衛門已上十二人

常灯明灯笼 并台 江戸牛込修行院

半鐘 尾州名古屋 榎井 小田

金鉢 泉州高瀬忠右衛門

時計 トケイ 本願江戸日本橋万町大坂屋茂兵衛半兵衛久次郎 二十三人

大鏡 本願江戸金子新左衛門宗門 一結崎(一)中

玉垣 長崎大之町宮崎清助

石灯笼 一基 飯沢并加子治右衛門 身延置月杵之助

水屋 北山筋西八幡村久兵衛

鳥居 永代施主西花輪村飯村兵藏

船 黒沢村中 船初陸島村中

神前柱十四本 赤沢村中

籠屋 二間 二四間 飯沢村中

籠屋 二間 二七間 黒沢村中

供養物

(99ウ)

(99オ)

蠟燭每年百挺京都府綾屋町篠田次郎左衛門」

金子卅両蠟燭料収之江戸講中」

灯明油 岩間村竹川金左衛門」

抹香 粟倉村遠藤与左衛門」

御供料毎年金子壹両 泉村大木佐太夫」

御供米毎年金壹步 赤沢村

祭ノ餅米一俵 浅原村五味七郎右衛門

煎茶一本 長貫村佐野藤兵衛

同 西山村野月半太夫

同 佐野源右衛門同市郎左衛門」

御供料金三十両 身延門前金左衛門」

九月祭礼酒之施主後原村五味四郎右衛門五俵」

同 加藤平右衛門 四俵」

同 五味源五右衛門壹俵」

会式酒之施主 四俵鏡中糸村又右衛門三人」

極月酒之施主 二俵吉市場村大久保助市」

同 壹俵大久保六右衛門

同 壹俵大久保仁右衛門」

同 壹俵半十郎

同 二俵黒沢井上吉之丞」

七面大明神御額押紙

身延山諸堂記外（北沢）

前宝鏡寺宮様御筆本堂院宮内池田監物様有之享保二十年范在

世話城州山羽栗相寺日教師之ナリ」

七面大明神御額隨身門ノ額ナリ

奉納甲州身延山七面大明神額

撰政岡白屋司房錦公衆額

伏願

信心檀越善願満足」

檀越中川佐渡守政明内室察法号清耀院円珠日淨信女敬造

鑄工武州江戸住田中丹波守藤原重政作」

宝珠殿ノ額賜紫日禪師ノ筆別當智性院日蓮代額面願主安政六己

未九月十九日実師代別當殿厚院日容代彫刻ノ奉掛拜

殿」

（註）

（一）下ノ一〇八ノ押紙・朱字

七面山鐘銘等之写

甲州七面山鐘銘并叙

延峰西隣乎深秀者七面山也山之東面平坦」之処

自然湖水湛然者七面池也池竜曾化」人來聽受

吾祖之法矣所謂七面之神也神吾擁護延峰之伽

藍防于火災一福于人民一抵今」四百載湖水不

涸無三回祿之災一其靈蹟昭昭焉」寧曰神之非正

身延山諸堂記外（北沢）

（101ウ）

直^ニ乎嗚呼古老之言筆墨之^一伝不^レ誣而已矣自^レ古
神^ノ之廟堂狹隘而浸及^ニ三^ノ毀廢^ニ矣甲寅之歲以^ニ十^ノ方
樂施^ニ再^ニ興^ニ修營^ニ則神廟拜殿樓門等凡所^レ宜^ニ有^ニ
咸皆新^ニ成焉朝散太夫久恒女捨^ニ若干貲^ニ修^ニ造樓
鐘^ニ於^レ是乎七面之山輪奐^ニ矣^ニ美矣神其無^レ享^ニ
乎以勤^ニ神^ノ之德於鐘^ニ而為^ニ之銘^ニ銘曰^ニ

日東延嶽

月支鷲峰

本光呈端

発^ニ揮^ニ妙宗^ニ

竜池之山

隣^ニ于^ニ靈蹤^ニ

嵯峨七面

青螺万重

澄潭一碧

神之幽宮

水接^ニ阿耨^ニ

德^ニ聖^ニ善竜^ニ

初祖揮^レ塵

靈物景^ニ從^ニ

倏^ニ運^ニ弘願^ニ

巨^ニ顯^ニ奸兇^ニ

翼々^ニ靈宇^ニ

維德所^レ鍾^ニ

修^ニ造^ニ瓊殿^ニ

鑄^ニ鎔^ニ金鐘^ニ

無明^ニ銅鉄^ニ

妙觀冶融

時成^ニ宝器^ニ

円満玲瓏

聖応如^レ響

機感如^レ撞

天堂忽現

幽府俄空

一音徧滿

十界雷同

願^ニ言^ニ檀信^ニ

爵祿無^レ窮

子孫繁衍

神理交通

遠^ニ結^ニ妙道^ニ

普^ニ扇^ニ祖風^ニ

真俗竝盛

文武四充

天長地久

國泰民豊

延宝三載乙卯中春吉辰

總州法輪講寺比丘慈忍誌

檀越朝散太夫越州刺史政明内室法号清耀

院円珠日淨信女

(103オ)

甲州巨麻郡 七面山神祠修營、跡神也立誓者、三焉所謂防三于火、福三于民、避于甲兵、而今既、四百載其靈蹟昭昭焉、若其神之本迹之爲三、緣起者墨痕所載、口碑所伝、草草焉、今並不記自レ古神殿朴質且狹隘、亦及三、乎毀廢也、頃者縑素一レ心、勤三因修營、三矣蓋、神德不思議、所レ費雖多而工價纔存焉、有一檀信、語レ余曰、蓋三寡緣之言、顯三揚神、德三敢傳、天下之人、植其善利、乎余然、斯言三於此乎書、
延宝三年乙卯孟春

(103ウ)

七面山神祠記(カミノホコラノキ)
七面神侍三祖之側、一聽、講等之事、古老所伝也、未見古記、唯六老僧記祖師口伝之中、曰及レ、講三提婆品、蛇来、聽聞云、雖然誰知是七、面之竜也、故但以、曰、古老所伝、可レ為レ允、耳中古雨畑土人到、七面山之隣、峰三狹焉、偶一憩、一処、有物似三佛像、甚古、長二寸余持、還、家至、晚一舍、皆受、疫疾、其村有、
身延山諸堂記外(北沢)

(104オ)

一信、土一奉、像安、置吾家、二家又受、三疫疾、唯家主、無レ故、白、像言、吾常以三潔淨、一修、身、齊、家、神何故、為、崇、像、託、夢、曰、吾不、喜、在、俗、家、但、欲、還、三、旧、栖、唯、爲、神、告、曰、至、三、九、月、十、九、日、登、三、涉、七、面、山、其、東、面、有、池、池、畔、建、祠、一、安、置、吾、像、吾、但、為、欲、三、此、事、而、已、覺、則、八、月、廿、六、夜、也、而、此、山、峻、險、自、レ、古、未、有、三、登、陟、者、待、レ、至、三、九、月、十、九、日、乃、攀、三、蒙、茸、上、三、山、頂、果、有、三、池、遂、於、三、池、畔、立、三、小、祠、稱、三、池、大、神、一、威、靈、日、新、至、レ、今、天、下、九、月、十、九、日、以、為、三、七、面、祭、者、一、以、三、此、因、緣、故、也、於、レ、一、宗、真、俗、潔、身、禱、爾、無、レ、不、應、レ、求、人、登、陟、賽、三、于、神、者、不、可、三、勝、數、一、以、故、錢、物、日、為、三、積、聚、于、時、雨、畑、土、人、受、三、用、神、錢、一、赤、沢、村、在、三、七、面、山、麓、一、土、人、曰、七、面、者、赤、沢、之、山、也、一、宜、下、以、三、錢、物、自、三、赤、沢、一、受、用、三、焉、雨、畑、土、人、不、可、三、爭、執、一、不、レ、息、者、十、九、年、時、有、三、雨、畑、僧、仙、林、房、高、住、僧、一、心、房、者、二、人、相、識、曰、所、謂、七、面、受、三、法、於、一、吾、祖、一、焉、然、則、神、者、吾、家、之、檀、越、也、宜、下、以、三、神、一、錢、一、為、三、延、山、之、物、一、雨、畑、可、而、聽、焉、然、且、雨、村、一、猶、爭、三、山、未、止、遂、及、三、公、評、一、平、岡、勘、三、郎、一、者、為、三、甲、州、吏、判、斷、曰、自、三、山、上、

(104ウ)

池大神宮七尺ニ間」
 初勸請時未_レ知_ニ七面号_一池_ハ畔_{ホトリニ}勸請故_一称_ニ池大神_一
 実_ハ是_レ七面大明神也今_ハ如意輪_ハ觀音像安_ニ置之_一雨畑
 望月武兵衛欲_ニ至_一駿_一府城_ハ獻_セ鷹_上時宿_ニ保村_一禪
 寺_ニ此住持_一竊_ニ取_一池大神像_ハ武兵衛伝_ニ聞_一之_ニ心念_ハ
 恨_レ神_一于_レ時此僧大熱狂乱告_ニ曰_一形雖_ニ在_一斯神靈_一
 山住何_ニ以_一凡情_一為_レ恨乎武兵衛懺_ニ罪_一祈_ニ僧_一正念_一
 果僧疾忽愈武兵衛又念_ニ神靈_一雖_ニ住_一山若無_レ像則
 無_レ便_ニ愚人生信_一其時保_一村_ハ適_ニ仏工來_一武兵衛請_ニ
 作_ニ与_一宜像_ニ于_一時_一与_ニ如意輪像_一武兵衛奉_レ之_一登_レ

身延山諸堂記外〔北沢〕
 七分可_レ為_ニ神_一之地_一始既_ニ以_一神錢_一為_ニ延峰_一物_一以_レ
 故山亦_一自然_ニ為_ニ延峰之所領_一云初神賞_ニ尉_一甚_ニ烈_一國_一
 人受_ニ尉_一者多矣延峰_ハ要師造_ニ立_一釈迦坐_一像_ハ神_ニ於_一華
 台中_ニ藏_一白_ニ神言_一濁末利生_一唯可_ニ下_一以_ニ柔和_一為_ニ本_一
 何_ニ以_一烈威_一之_ニ為_一於_ニ是_一神崇_ハ頗息焉近歲受_ニ其
 利沢_一者_ハ不_レ計_ニ其數_一七面事迹世_ハ稀_ニ識者_一余錄_ニ
 本_一說_一留贈_ニ後人_一云_レ爾_一

〔註〕

(1) 第廿四世〈頭註〉

山安_ニ置_一池_一畔_{ホトリニ}社_一禪寺僧恐懼_ニ還_一初像_ニ此初像_一要
 師藏_ニ釈迦像_一中_ニ如意輪像_一在_ニ池大神_一社_一是武兵衛
 及_ニ仏工未_一知_ニ神像_一故也_一
 池大神ノ額_ハ六十七世律師_ノ筆_{別當靜慈院日勝代}
 安政三丙辰九月

〔註〕

(1) ツビキ下ニアリ〈頭註〉

(1) 一影向石ノ社

(2) 学禪院日達立_ニ小社_一

影向石社并別當所宝曆年間四十二世辰師代再建
 立_ニ辰師碑銘石有_一之八代郡宮原村中再建丹誠有
 之_一

〔註〕

(1) 下ノ百四十、七面社ナセウ〈押紙・朱字〉

(2) ツビキ下ニ有リ〈頭註〉

一 波木井日円之古地

波木井郷教円房上有_レ之

同廟所

波木井郷教田房近所^ニ有^ニ火葬場[、]地^ニ「石塔近年
立レ之」

(巻)
印 印

以上正徳二壬辰年三十三世亨師ノ御筆跡奉写之

羽衣橋(赤沢ヨリ七面山表本道ニ通スル橋也)「
明治初年木造朱塗欄干附(身延太平橋ニ相似タ
リ)」「経費ハ七面山ノ負担ニシテ来詣者ノ応分ノ
喜捨」ヲ以テ修繕ニ充ツルモ明治四十年出水ノタ
メ橋柱不殘「流失セリ時ニ大正十年聖誕七百年記
念事業」トシテ架設ヲ企ツニ忽チニ響應スル者ア
リテ完成ス左」ノ如シ発願者東京森岡平右衛門大
阪岩本吉右衛門「時ノ別当小松海浄費額」⁽¹⁾ 万円
ニシテ鉄骨金土」ヲ以テ大正十年五月八日エヲ起
シ全十一年十一月四日竣工長サ三十四間「五尺六
寸幅員十一尺四寸高サ十四間三尺ニシテ英国ナイ
アガラ式ニ法レリト」

〔註〕

(1) 金額未記入。

身延山諸堂記外(北沢)

亨師⁽¹⁾後はヨリ追加之部 妙俊日壽集之

〔註〕

(1) この一行、欄外上にあり。

△追分感井坊」

裕師板本尊

辛保七壬寅
二月十六日

身延山内街道追分交」接庵祖

師堂

江戸浅草新寺町
造建本願施主六人

現住桑門了玄日収」大工身延

池上民部宗家」

寛師三枚鏡本尊

寛延元辰辰
十一月中旬

身延山境内感井」坊常住本

尊当坊再建立主時之住持祐信坊」日受」

寛師一枚本尊

延享五辰辰
六月廿五日

身延山追分妙泉庵」再建立時

之住持祐信坊」

辰師一枚本尊

宝曆十二辛巳
九月二十日

身延山追分祖師堂」再建立

之願主感井坊十八世良貞日感」

奏師一枚本尊

文化四丁卯春
正月

祖師堂再建立之砌」追分感

井坊常住」

晴師三枚鏡本尊

文政九年
丙戌秋七月

当山境内追分感井」坊常住

本尊也先住善了日定時之住持道」順日恵」

仲師二枚鏡本尊

弘化三丙午
三月

文政十三寅歲感井」坊再建

依丹情者也道順日恵太忍日勇」井世話人連名有

之」

身延山諸堂記外（北沢）

(108ウ)

△七面山諸堂宇三十世通師代建立
安永五丙申十月十一日ノ夜回祿致ス其時残者鐘堂隨身門二字也

明神本宮四方 安永九庚子八月十九日 普請奉行
四十七世登師御代棟札 龜之房住内院（改内如院
日過）脇 棟梁身延池上勘解由 山田武三郎

幣殿三間

拜殿七間半 天明四甲辰六月ヨリ同五乙巳六月廿五日 普請奉行殿州
四十七世登師御代棟札 拜殿成就 十世繼法妙房

岩瀬光榮寺
院淨恩日餘

御宮殿 天明元辛丑年閏五月十三日（延州者中ヨリ納ル）
四十七世登師ノ時也 時ノ当別大行院日添

御戸張 長三尺六寸
巾二尺六寸

(109オ)

七面大明神拜殿、向拜檜皮葺家根替成就之御納之
維時慶応元乙丑年九月十九日（身延山日祥判棟札有
七十世）之「家根更施入之面々現当願満祈者也」

当山院代妙衣院日忍聖人 世居人大島村葉山喜兵衛

八三世是誦院日研聖人 大工棟梁小倉源八良常延

世諸方是感院日行聖人 仕 手幸吉 豊太郎

同摩房妙俊院日寿聖人 檜皮屋根師池上平兵衛

同之房智運院日顯聖人 仕 手文蔵万兵衛常吉

西時之房（俣嶋）顯樹院日彦 柚木挽頭深沢半七郎

(109ウ)

世話人中 二世安楽 仕 手民右衛門
本願人中 木挽仕 手角兵衛兼蔵吉兵衛
雨畑村

以上ウラカキ

永代常経金拾兩（尾州藩中永平六太夫
慶応三卯十一月納之） 拜師代

本殿并幣殿銅瓦葺

身延山七面大天女本殿并幣殿家根古来「檜皮葺也
今回銅瓦葺改明治十四年企之」同十八年九月十八
日落成吉辰上棟

七十四世日鑑師棟札 同裏書云

七面山八十八世鑰取大善坊三十七世住職

同担当葺更免願主竹之坊三十四世前住 妙賢院日禎聖

同担当大林坊卅三世住職 智逗院日照聖

同募集周旋（花之厨三十世
前住） 智光院日彦聖

同 研島村正徳寺住職 智松院日音聖

同 大本願人 增穂村春米 光通院日龜聖

同 世話方 本建村赤沢 小林小太郎

同 大工棟梁 身延中町 望月 義広

同 池上伊織宗治 望月 康喜

(110オ)

(110ウ)

同亀之丞宗正」
 杣木挽頭 本建村赤沢 望月 八平」
 銅瓦師 東京神田岩本町 鈴木 兼吉」

有志面々 本願人中 現当二世安楽」
 世話人中

以上ウラカキ 入費金三千六百円」

一七面山^{十七日}北杉植木一千本余金井^{（朱字）}擗中」信濃國小

県郡尾野山村講元金井延五郎」慶応元年丑年世

話人赤沢村大坂屋伝右衛門」

一七面山杉植附一千本施主野州栃木妙法連」統擗太^{（朱字）}

田弥左衛門発願中適坊住観妙日詠法師」^{（朱字）}明治十二年
 七月十九日死去 明治十二年七月」
 廟有之」

廟有之」

△影現七面社」

拜殿葺更四十七世日豊師御代棟札無之」

安永八^{己亥}八月廿二日始」

奉行松林坊順正坊大工定右衛門定之丞^{外ニ武人}」木

挽安右衛門善右衛門^{外ニ武人}屋根屋両右衛門長右衛門

外ニ八人」手伝武人 以上板ニ此書附有之」

実師板本尊」

安政六^{己未}年八月十九日」

身延山諸堂記外（北沢）

(113才上・中段)

当山影現七面宮本社幣殿拜殿檜皮葺更并惣修復」
 成就之刻」^①

同裏書ニ

院代永寿院日等聖人普請奉行南延房日禎

是感院日行聖人 武井房日東

妙俊院日寿聖人 法雲房日徳

妙定院日翁聖人 南向坊日周

常住坊日甚

以上裏書

大工棟梁 池上伊織宗治」

池上主税玄吉」

檜皮家根師 小倉久右衛門」

佐野恒兵衛」

池上徳之助」

同 佐野友蔵」

同 遠藤喜瀬蔵」

〔註〕

（一）この一行、欄外上にあり。

(同下段)

身延山諸堂記外（北沢）

(115オ)

△高座石ノ祖師堂三間半

再建立ハ文政五年年十二月、別當淨勇日清代企之廿世淨

詣「日德廿一世順德日光代ニ上拜成就ス」

祖師ノ像御宮殿者前有之亭師ノ記録ノ如シ」

緋紋御七条紫御衣ハ大堂ノ祖師ノ古ヲ送ル」

卷経一部

斗張ケマン ニツ」

御宮殿ノ額者御摸本尊ヲ写ス」

大立像ノ釈迦牟尼仏順德代表更

妙見大土像寫子入 江州岩倉村妙感寺日定師本尊添納

清澄稻荷大明神ノ像別當順德代彫刻

清澄稻荷板本尊 暹師判文政五年十月

御鏡施主江戸藏前代地大塚屋金左衛門

同 施主不知」

前机享和元年辛酉九月 唯完日忠營之

鎮鑰三ツ具足文政十亥五月施主江戸 淨勇代

同 花瓶二ツ寛政九丁巳閏七月 唯心日友

焼物香炉一ツ寛政十年三月 施主肥前 焼付有之

常香盤」

(116オ)

御経机同箱朱塗 嘉永四亥十月 施主顯沢世話人 順德代

打鳴シ同台明和六巳丑六月 施主尾州名古屋田中新六 智達日近代

半鐘施主名半鐘ニ有之 敬福日地代

太鼓台共

唐金茶湯茶碗一通リ」

唐金灯籠二基文化乙丑八月 順德代 施主江戸

鯛ロ一ツ」

賽銭箱」

〔註〕

① 亭師記録之後へ頭註

② 亭師代建立祖堂三間半林藏坊興師堂雖レ送、朽故不レ

用須弥付左右柱耳用レ之ト云フ 〔頭註〕

△妙法社再建立弘化三丙午十月吉良上願成願依 三間三間半

仲師棟札有之別當順德日光并棟梁世話人姓名裏

書」

立像ノ祖師妙法兩大善神ノ尊像三体」施主江戸池

之端蓮寿亭平七」

御宮殿施主顯沢河津船方中世話人茂右衛門尊威

斗帳」

- 妙法大善神板本尊五十五世 禪師判形 文政五壬午十月 淨明代
 妙法両大善神板本尊五十九世 詔師判形 天保四巳五月
 法華經守護之善神板本尊二枚有之 詔師判形
 同尊像二体御宮殿二字末社棟ト云フ妙法社ノ左右ニ有之 宮殿者本院ヨリ下ル
 御経并机箱小形 梨地塗外有之二 願代
 神鏡」
 金ノ幣四本」
 神酒瓶子二ツ三方共 施主後村黒船町魚吉 八王子
 燭台真鍮二基」
 香炉真鍮一ツ
 花瓶真鍮」
 茶湯茶鏡二基 共 施主吉原三浦屋 組
 前机朱塗狹沢村橋中
 五具足真鍮 文久二壬戌四月 願代 施主江戸
 小前机二ツ 朱塗
 常香盤二ツ 小形 朱塗
 神酒瓶子二ツ施主長谷川庄之助
 金ノ灯籠両基 万延元年申四月 施主大野村松田屋惣左衛門
 常香盤朱塗 施主江戸吉原
 打鳴シ台共 施主日光道中杉戸宿松島屋猪之治

身延山諸堂記外（北沢）

- 御経机同箱共嘉永四亥十月 施主顯於世話人
 鑿同台施主江戸谷中土方政右衛門
 開帳太鼓施主塚原林兵衛
 題目太鼓二ツ施主殿州内本野村新左衛門 東南胡牌（中）
 水引白地唐木錦」
 半鐘安政二卯八月 施主名半鐘ニ有之
 罽口」
 賽銭箱」
 乘閣同判木同箆二卓引出六十四穴 施主江戸小網町
 伊勢屋吉右衛門」
 幕二張祖師堂施主 妙法社施主
 幟」
- 〔註〕
 (1) 妙法両尊者ト改ハ明治元戊辰十二月十七日七十世 祥師代別当貞順代〈頭註〉
 (2) 以下三項「末社前」〈頭註〉
- △妙石庵再建立」
 棟札豊師判形天明元壬辰四月十九日 身延山田代高座石妙石庵再建立主有日妙
 板本尊判形 是ハ妙法社ノ先社ノ本尊ナリ 文化十癸酉年三月廿辰日 高座石十五世宣旭日生 大工當下町新七

身延山諸堂記外（北沢）

唐金灯籠高座石即ニアリ
元禄十四辛巳九月二日 省郡判形」

鑑甲石ノ宝塔并三ツ凡足
聖德太子師ノ銘文有之
高祖五百五十遺恩之廟文政十一戊子春建

立之」

禪激俗ニ水鉢ト云フ
ヲシメテ
年七月新建立施主江戶銀座内平野氏
世話方智心院日定聖人 同雨屋 共一式疎師棟札有之
文久二壬戌

六十九世疎師代庵号改三妙石坊三枚統本尊」

妙法兩大善神安置維時文久二壬戌年閏八月十五

日奉圖「高祖大菩薩当山初転法輪之旧跡妙石庵

今般改坊号」授与西谷塔中妙石坊三十二世坊号初代順
順日光者也

永代寄附田畑四反七畝廿六歩委細位牌ノ裏ニ有之
九世疎長坊日如代 為真

浄法閑信士菩提宝曆二申二月廿八日去」施主当

国西郡寺部村萩野弥市右衛門」

庫裏再建七十世祥師棟札檼版巾一尺四寸五分厚サ一寸
長二尺四寸七分

高祖大菩薩於当山最初転法輪之旧跡 維時元治元」

年甲子十月十三日施入之面々二世安樂祈者也」

当山西谷塔中妙石坊庫裏六間半
三間再建成就安泰」守護

之棟札也第廿二世弟子要明院日敬授与之」

同裏書 祖師高座石別当妙石坊者当山三十二世日

省「上人代開基学禪院日逢聖人四世法蓮造立之坊

(118ウ)

(119オ)

(119ウ)

(120オ)

破壊故」天明元丑歲当山四十七世日豊上人棟札十

一世了有日妙代」再建立石坊經年摧朽故文久三癸亥

歲之秋当山」奥院祖師江戶深川於浄心寺開帳之刻

妙法二神」添開帳ヲ願一錢半紙ヲ集而令般再建立

企之同年」十二月十八日新初同四年元治甲子三月廿

一日立柱同六月」廿八日上葺入仏供養令周備了」

再建立世話方本行房
三十七世是感院日行聖人志摩房
二十五世妙俊院

日寿聖人」再建立主当房廿二世
現要明院日敬
房号初代

順德日光」再建施入江戶於深川浄心寺境内
妙法二神添開帳之願 参詣之面々江

戸信者中」浅艸二神二神
二神搦中本石町妙法搦中当国信者

中」發起世話人江戶於深川
吉界屋古藤源次郎
同所山形屋

荒井喜三郎」本館町
同和泉屋伊兵衛当国世話人西郡
田島村望

月三右衛門河内村
井出村佐野藤左衛門」村々世話人中当所

世話人上町遠藤佐左衛門上町池上友兵衛」上町池上新

五兵衛大工棟梁池上友兵衛房清同添棟梁」望月孫

右衛門杣木挽頭遠藤金次郎同父繁藏」茅家根屋塩

沢村浅兵衛重左衛門日雇建方頭下町」惣左衛門洗

足村茂右衛門諸職人中 以上裏書」

廊下」一式之施主江戶浅艸御馬屋河岸福島屋茂

兵衛」

(120ウ)

石灯笼兩基」施主江戸本所表町淡路屋惣吉」

高座石ノ玉垣慶応二丙寅年」施主」

慶応二丙寅八月七日夜大風ニテ六間半ニ新庫裏皆

潰再建ヨリ
三年目ナリ

奉納田畑四反七畝廿八分高祖御報恩并真淨法閑信

士」為仏供料宝曆二壬申二月廿八日奉納施主寺

部村伊兵衛」納之永代毎年米五俵宛納之右ノ年

貢也天保八四二月」書附改之田地施主伊兵衛世

話人作兵衛親類政助妙石庵」当住順徳日光様ト

書附有之」

庫裏再建祥師御代棟札日寿認之松坂長

高祖大菩薩当山最初転法輪旧跡西谷妙石坊庫裏

六間半再建」成就安泰守護棟札也第廿二世弟子要

明院字要徳日殿授与之」維時慶応四戊辰四月八日

吉辰上棟并入仏供養令周備者也」施入面々二世安

樂祈而已已上

裏書 元治元甲子年成就之房」慶応二丙寅八月七

日八日大風雨故皆潰依之同年九月廿七日再新」初

同十一月十七日建方同四年戊辰四月八日上棟入仏

令周備畢」廿二世要明院日殿廿一世前住順徳院日

身延山諸堂記外(北沢)

(121ウ)

光延二神搦^(二)本右町妙法」搦^(二)當信者中^(世)望月三右衛

門佐野藤左衛門^(村)世話人中^(大工棟梁)池上友兵衛房

清望月孫右衛門^(棟木)遠藤金次郎同苗繁藏」家根三河

屋友右衛門^(建方)本郷二神搦中^(已上)

祖師堂棟札七十世祥師^(筆)

其^(三)当山高座石祖師堂者^(宝永三丙戌年)三間半建立右堂

及破壊^(文政五壬午年)時別当淨勇日清代再建企之」^(天)

保^(年)中^(八世禪師代)廿世淨詣日德代建方成就廿一世順徳日光

代造作入仏」其節上棟梁札不納今般庫裏再建上棟

ニ付納之^(慶応四戊辰年)

四月八日

〔註〕

(1) 坊号本尊へ頭註

(2) 棟札へ頭註

△奥院」

吾祖九年裡幾回陟此嶺松杉根石老」堂閣架崖全^(關)

遺像神如在望郷跡可憐誰知無垢聖」尚孝順為先口

遺像神如在望郷跡可憐誰知無垢聖」尚孝順為先口

口

身延山諸堂記外（北沢）

二王門惣修復家根替柿板葺 六十九世塚師代企之七十世
 祥師代」成就 棟札 慶応二丙寅年 施入面々世話人中 塚師御代別
 当齋得房頭立院日順代」 祥師御代別

一鐘堂 嘉永七年四月一日四日ノ大地震而皆潰後之元治二乙丑年五月九日新
 一鐘堂初一再建金之祥師御代施主御本九本立院尼西院南条組大題目授て之

中）
 一別当寮孝東院庫裏再建 嘉永七庚子十一月地震皆潰後之一再建協師
 工池上伊織宗治」 御代別当替静院代一安政二乙卯年十月大

二王門修復之砌棟札七十世日祥判形」
 慶応二丙寅年三月廿七日二王門修復丹誠題目」千
 部世話人中 裏書云」

時掛り役僧窪之房智運院日頭樋沢坊智章院」日鑑
 南向房頭立院日勢 普請方林蔵房詮寿院」日周清
 水坊事遠院日甲鏡円房励明院日染」奥院時之別当
 職端場坊誠寿院日順」

当房大工棟梁

池上伊織宗治 下山村大工棟梁 神原丈左衛門郡直」

池上主税玄吉 葛籠沢村大工同 塩沢半之丞知矩」

小倉源八常延 梅崎里村大工同 堀水瀬兵衛」

家根屋棟梁

当所杣頭

初鹿島村木挽頭」

池上平兵衛 望月忠兵衛 望月長兵衛」

当所日風方

深沢半七郎 佐野勘兵衛」

(123オ)

以上棟札裏書」

一鐘堂 四方棟札再建成就

発起願主本立院殿量遠妙修行行法尼 文久三癸亥年
 五月十八日去 御本

京大奥勤」助願主当国西郡南条組題目構一結 世話方

日選 大工棟梁池上伊織」杣木挽望月忠兵衛 家
 根師佐野恒兵衛 瓦師望月作兵衛以上」

明治三庚午年十月十三日安泰守護之棟札也施入面
 く」二世安樂之攸勤野上十日祥在判 以上棟札」

一祖師御宮殿再建 文政十三庚寅年」

施主江戸芝中門前中村屋平兵衛母幾女 二天像二体此幾
 女ノ施主ナリ」法号智光院妙泉日行信女 嘉永六癸丑正月廿二
 日七十四歳去」

一唐金ノ水盤 同雨屋」

同雨屋再建施主 当國桃園村長沢寺左衛門施主金二十円別当門明院
 明治六癸酉十一月手新初同十月成就

一奥院題目千部永代執行 文化十二甲戌六月十七日奏師代企之」

一再発起執行 文政十三庚寅年三月塚師代本尊有之
 外ニ村ノ門盛開」中本尊同時年号有之」

一当山奥院祖師堂并廊下拝殿 共惣修復 并家根更成就

之砌」納之安泰守護之棟札謹染毫之 七十二代大教正

日健判形』維時明治六年癸酉十一月八日甲子吉辰上棟施主昨申年東京」開帳中施入面々現当二世安樂祈者也

同裏書。当山奥院」祖師堂惣修復并土瓦家根更并廊下拝殿共惣建テ修復柱入」替又ハ根継中柱并紅梁新ニ入レ長押ヲ四方共内外二重ニ打廻シ」土台惣入替ノ殿ヲ固メ為レ防ニ雨湿」以ニ油丹、塗替之家根桼板」葺土瓦下地迄成就也施主昨申歲於ニ東京深川淨心寺」三十」五日ノ間開帳施入之集金ヲ以テ令ニ造營ニ者也。時院代檀訓導日珠」執事檀訓導日寿同日賀日勢日修日勤日康。別当門明院日感代」普請方日理小林八右衛門楠田右平次八搦取持世話人中。大工棟梁」池上伊織同子息亀之丞家根師池上平兵衛日願頭望月作十郎以上」

〔註〕

- (1) 東ノ方〈頭註〉
- (2) 西ノ方〈頭註〉
- (3) 下ニアリ〈頭註〉
- (4) 五間半〈頭註〉
- (5) 棟札〈頭註〉
- (6) 「鐘堂」以下の一行、欄外上にあり。

身延山諸堂記外(北沢)

(125オ)

(124ウ)

(124オ)

- (7) 棟札二枚共同文〈頭註〉
- (8) 此ツビキ又下ニアリ〈頭註〉

一三光堂棟札四十七世豊師棟札

奉再建三光堂維時安永九庚子四月廿日」大工棟梁下町平林貞右衛門宗当脇棟梁上町笠井定之丞」木挽下町望月安右衛門仙狐町望月重左衛門家根屋棟」梁中町小倉両右衛門以上棟札」

一三光堂別当大光庵六間半之庫裏再建成就之御納之」安泰守護之棟札也謹染毫之維時文久三亥」十一月十五日吉辰入仏供養再建施入之僧俗男」女二世安樂祈而」大光庵第十九世志誠日照」授与之延六十六世日琢師棟札有之

同裏書」三光堂別当大光庵庫裏者寛文三癸卯年第廿」八世日龔上人代新建立也經年摧朽故嘉永七甲寅」年十一月四日之大地震而皆潰依山切谷埋広地」地平而再建企之文久二壬戌年五月十五日新初」同年十一月八日立柱同三年癸亥十月二日上棟」同十一月十五日入仏供養令周備了」再建世話方は感院日行聖妙俊院日寿聖」世話人葉山十之丞古谷善右衛門深沢友兵衛深沢」喜七大

身延山諸堂記外（北沢）

工棟梁池上伊織宗治小倉源八常延 杣「木挽望月菊之丞 家根屋佐野恒兵衛以上棟札」

祥師坊号本尊維時明治三^{庚午}年閏十月吉辰」

当山三光大天子别当大光庵今般改坊号授与之塔中「上之山大光坊第十九世坊号初代志誠日照第二十世同弟子」信明日定者也」

三光天子影堂土瓦葺惣修復明治五^{壬申}歲「企之大光坊^{十九世}志誠院日照聖人未滿而遷化ス同」六年^{癸酉}

七月八日成就吉辰上棟遷座也」

棟札健師当山三光大天子影堂惣修復并土瓦家根更「成就之御納之安泰守護之棟札也維時明治六^{癸酉}七月」八日上棟并遷座之御施入之面々二世安樂祈者也」

同裏書「三光大天子影堂先ハ檜皮家根也多年経曆而摧朽故ニ」今般惣修復新ニ四方^五霧除造立土瓦葺成就令周備了」時院代権訓導日珠上人 世話方権訓導日寿上人「同日修上人 普請方玉泉房普請日理 别当大光坊十九世前住」志誠院日照聖人同廿世現住持信明日定 志願主宮本力之進世話人中諸職人中 土瓦師伊沼村望月作兵衛以上」

〔註〕

（1）「三光堂棟札」は欄外上にあり。

（2）此ノツミキ又下ニアリ「頭註」

（3）棟札「頭註」

（4）本尊「頭註・朱字」

（5）「祥」を「誠」と訂正。

（6）棟札「頭註・朱字」

△児文殊宮^{三六六}再建 七十世祥師棟札」

当山上之山児文殊宮再建成就之御維時元治二^{乙丑}

五月廿五日「再建施主駿州富士郡星山村深沢安兵衛為心願成就也」

同裏書「時院代妙衣院日忍聖人世話方志摩房二十

五世」妙俊院日寿聖人同上ノ山利堂别当七世春教

日恵」普請奉行詮寿院日周事遠院日甲助明院日

染」大工棟梁池上伊織宗治池上主税玄吉小倉源

八郎常延」家根屋池上平兵衛佐野恒兵衛 以上棟

札」

△門院法遊日樂僧土菩提為ナリ 星山村深沢安兵衛母本尊遣

ス」上ノ山経堂普成普建傳大士像三体衣更同人

施主ナリ」

当山二十六代遍師一枚本尊ニ寛永九壬申七月良日授与之信土仁藏 本尊ハ首題兩尊四ササ三光四大天王大黒ハ天神愛染不動鬼子母十女天照八幡等日蓮大士日遍形

右轍諱ノ内ハ仁藏法諱蓮心宗門無類信士其先但州之一人也佐州金銀山之開基味方但馬守家政之父也寬永九一壬申春三月初吾山壇階之切石擗宮重疊之砌投置一一石者附与銅錢一百穴焉故以郡鄉雲如來役夫山如集一不日成功早況復塚原中興之大壇度也凡高祖佐渡一已後之化意余聞之吾祖也十三卷身延抄塚原之処一四箇年今又此山五箇年矣可知高祖樓神之旧蹤一突出世之本懷本事所顯之靈場也故宗祖大一菩薩御骨一片分之而令奉持塚原山信士蓮心之一満足深信本願者也一

慶応三^ノ卯年十二月^{七^ノ日}世祥師代隨身觀樹院日明写
シ来ル依而」記シ置ク三門裏ノ石壇逕通兩代ニ
成就凡有之此ノ本尊ニ寄ル時ハ」佐州仁藏蓮心
ノ丹精歟古記可レ改也」

石檀修復明治十八年乙酉九月初之鑿師代同二十年丁亥歲成就修師代施主東京下谷豊住町藤井啓助同妻今女金百七十円寄附

身延山諸堂記外（北沢）

東照宮ノ社五尺四寸六分同雨屋三間四方古社ハ三尺五寸四分三門内ノ妙正大明神ノ社トスル
五十八世環師代再建立發願主重厚院日実聖人文政十三年己丑
正月六日日化

環師棟札 文政十一年戊子十一月大吉日
同裏書云「

当社再建造營奉行僧
三忠房世房觀心院日運嘉永七年六月十八日七十六歳
畢之房
三智寂房世房本寿院日光潮運院日恵」
十三世

松林房太林院日建
蓮坊太堂院日棟

光精坊 善察日永
当社大工魁主

永樂梁池上主計致昆
清樞藏矩懷
嘉永七甲寅二月廿二日
壽山向陽僑士六十九歲

同 池上織衛玄明 以上裏書

東照宮雨屋家根更并惣修復成就棟札七十一世祥師』維

時明治元戊辰年十二月吉辰為安泰守護凶以納之。

施主春米村小林仁藏喜莊改小太郎為心願
法号善行院法喜日莊居士

滿足修復之者也

同裏書二
普請方俊明院日選

時院代順明院日惠聖人
一勵明院日染

執事 妙俊院日壽聖人 大工棟梁池上伊織宗治

觀樹院日明聖人
杣木挽望月忠兵衛」

詮壽院日周聖人 日雇頭 勘兵衛」

事遠院日甲聖人 会所下役 源右衛門』

身延山諸堂記外（北沢）

〔註〕

（1）「三庚午」を「元成辰」と訂正。

△八幡宮本社」

鏡師板本尊 永禄元^{戊午} 六月中旬「鎮護国家之宝殿上葺成就之砌」

裕師板本尊 享保四^{己亥} 春三月廿八日「番神社拜殿為安鎮後鑑拜書此棟札也云爾」

ガウ^ウ番神拜殿葺更惣六十兩^{金甲也} 内甲廿五兩門前氏子中 甲三十五兩方丈自納戸補「奉行樋沢坊亨

紹院日隆 大工棟梁池上重良右衛門」宗次同池上平兵衛宗家 屋根師頭小倉五良兵衛家次^{己上}

輪師板本尊 宝曆四^{甲戌} 三月十八日「坂上宮内宗高欽修 是ハ御經部數ノ札也」

豊師板本尊 天明三^{癸卯} 年番神拜殿葺更」ウラ惣五十六兩一步^{内甲十六兩二分門前氏子中ニ 甲三十九兩三分方丈自納戸補} 奉行本

行房本持院日理 大工棟梁池上伊織「屋弥師頭小倉両右衛門^{己上}」

奉師板本尊 文化万年第八月十五日「時世話役麓房本解院日到 普請方潮応院」同南之

房^{以上}是ハ金像ノ台座造立ノ時ナリ」

（130オ）

鑑師代明治十五年八月十五日番神本殿「惣修復并家根替 施主山内支院并当村」惣氏子中 本院自納戸補落成ス」大工棟梁池上伊織宗治同子息亀之丞宗正「樋口勘十郎義高」

（131オ）

△利堂御供所庵ナリ相父村武田栄助頼顯人也」

豊師本尊 天明二年^{壬寅}十月十三日当山上之山「鬼子母神御供所建立主鉢具院淨珠日光法師^{手ノ仁ナリ}村ノ七ナリ」

天明年中初而別当所為御供所「造レ之是迄ハ御堂番持也」

祥師本尊 明治三^{庚午}年閏十月吉辰当山鬼子母」神十羅利女堂別当所今般坊号授与^与本尊一名二十如房「授与之塔中上ノ山」十如坊第七世坊号初代春

教院日惠第八世同弟子春要「日運者也」鑑師本尊 明治十七年五月廿七日上之山鬼子母神

堂香厨「茅葺換落成祈有志喜捨信徒中現安後善者也」書此与之十如坊九世要秀日規」

也」書此与之十如坊九世要秀日規」

（131ウ）

〔註〕

（1）初造立（頭註）

(132オ)

- (2) 坊号(本尊)〈頭註〉
 (3) 「第八世」より「日蓮」は抹消している。
 (4) 庫裏茅替〈頭註〉

△上ノ山常唱堂并法久庵惣修復家根替成就砌」明治三^{庚午}十月十三日七十世勅許上人日祥御判」板本尊有之」

右者田地年貢作徳ヲ以テ修復日祥師代手普請ナリ」世話方と泉村大木四良兵衛」

法久庵ノ建具戸障子疊等大光庵主志祥日照丹情也」

常題目堂并庫裏家根替明治十七年^{甲申}六月吉辰

施主大坂府下日妙^(註)擲中世話人難波村」赤松孫七

法久庵主蓮定日観代」

常題目堂メイラ戸不残新規^{明治十}施主大坂赤松孫七蓮定代」

一常題目堂土瓦新規葺之明治廿一年^{戊子}五月八日」

旧ノ三月上棟施主和泉村大木四郎兵衛法久庵蓮定日

観代」世話方永田祐爾瓦師^{伊瀬}望月作兵衛」

〔註〕

(1) 七十四世鑑師本尊有之〈頭註〉

身延山諸堂記外(北沢)

(133オ)

(2) 七十五世修師代〈頭註〉

(水谷法明坊)

再建棟札 祥師 明治三^{庚午}十月十三日」

奥院高祖大士水谷法明坊^{三開}再建成就砌」法明

坊現住誠順日理授与之」

同裏書 発願主^{時奥院別当}誠壽院日順」

助願主 当国巨摩郡上高下村大森柳左衛門」

相州高座郡大谷村池田五兵衛ツマ宮女」

大工棟梁池上伊織宗治 杣木挽忠兵衛喜右衛門」

施入之面々二世安楽 以上棟札」

△発軫ノ祖師堂再建^{家根替皮葺}

身延山逢島祖師堂再建立之砌納之」元文四^{己未}年

三月廿八日右棟札ハ日盛ノ筆」棟札從^{高祖}上ノ

殿^{五ノ}家札奉^レ写^シ之」

武井房十七世亨玄院日盛^形三十六代日潮師御代」

天蓋 御施主善智院受法院」

当山発軫之靈場祖師堂家根茅葺更并惣修」復成就

之節奉図之維時明治六年^{癸酉}三月十七日」吉辰上

棟從^{三開}闢文永十一^{甲戌}六月十七日」今歲当^三六百

(134オ)

身延山諸堂記外（北沢）

（134ウ）

年」之嘉会。施入之面々、信力増進現当二世安樂祈者也。板本尊檜板巾一尺二寸五分大教正七十二世日健判形同裏書云、当番役執事妙俊院日寿聖人、智章院日鑑聖人願隆院日勢聖人、円柳房二十四世旭湊院日満聖人、発起本願人浄学日永、茅之施主小田船原村中」

当風町
世話人

葉山十之丞臣晨

世話人

樋口勘右衛門義守

樋口久保田熊吉

若尾栄助信国

同 村久保田兵右衛門

望月善左衛門宗光

同 村稻葉佐兵衛

阪上万七徳知

永代世話人当風町
若者世話役

大工棟梁橋根村久保田喜右衛門

秋山権十郎

杣 棟 梁 同 村佐野丈兵衛

樋口勘十郎

茅家根師本郷村佐野金左衛門

遠藤新三郎

世 話 人 同 村望月丈左衛門

葉山与之助

同 村望月久左衛門

田中見済

勸化世話人梅平村佐野治郎兵衛

望月元兵衛

同 村望月直平

佐野堀吉

以上裏書

田中万右衛門

（136オ）

△大塔中釈迦宝殿

文化二乙丑十二月良辰家根更成就之砌、寄附之面々、当山結衆満山大衆加用人惣町中、世話人竹之房本如院日定ノ筆板本尊有之」

天保十三手寅五月柿板家根更成就、寄附結衆中満

山大衆中惣町中、世話人太鼓院日玄
慈延院日肝妙福坊海運院日

瑞清水房啓延院日修ノ筆
板本尊有之

高祖御草庵旧地釈迦堂柿板葺屋家更井、惣修復成

就之節納之維時明治六癸酉年二月、吉辰成弁今歳

從二開闢、当二六百年之嘉会、矣、当山七十二世大教

正日健判形板本尊有之、施入面々、当山寺中、惣町

中真俗貴賤後世

同裏書ニ 時院代東京青山
仙寿院十二世体遠院日珠聖人、執事当番

役妙俊院日寿願妙院日修願隆院日勢、普請方玉泉

房日理本種房日三、廟守妙福坊智浄、日開、大工

池上伊織宗治、杣木挽望月忠兵衛、家根師、池上

平兵衛佐野恒兵衛以上裏書也」

（135オ）

〔註〕
（1）此ノツキ第三ノ卷ニ有之（頭註）

(137オ)

△奥院井水発願主尾州名古屋白木屋勘七敬白

余往年祖山奥院ニ参籠ス香厨井華無ク縋素水」ヲ
溪底ニ汲ムコ半里程其ノ艱難言フ可ラス因テ思
フ」井ヲ穿テ數尋水ヲ得ル時ハ其ノ勞ヲ省キ上ハ
以テ」仏祖ニ奉リ下ハ以テ参詣ニ及セハ其ノ功亦
大ナリ然ト雖」凡絶壁數仞得水甚難故ヲ以テ功ヲ
施スニ暇アラス」郷ニ帰ル明治七年穿工伝七者
ヲ携エ山ニ登功ヲ施」ス既ニ九旬猶水路ヲ得ス空
ク郷ニ帰ル翌年復穿」工同ク登山前功ノ空キヲ憂
エ井ヲ浚テ不止六旬ヲ」経テ遂ニ水脈ヲ得清水涌
出ツ且ツ七面山ノ池水感井」法明両坊ノ井水ヲ汲
来リ灑キ入ル清水愈涌ク」余喜曰我願既滿衆望亦
足ノ金言亦不虛」乃覆之以屋楳之以欄凡其費六百
円以充善」提無窮資糧云」

明治八年乙亥十月吉辰

薩師代理日鑑師代 時ノ別当本鏡院日行代成就ナ
リ」

宗祖御宮殿塗更 明治十八年乙酉秋 鑑師代 別当 要妙代

御両親同塗替 右同時

△三光堂大光坊土瓦葺棟札 檼板 七十四世 日鑑判形

因支院上ノ山三光堂別当大光坊庫裏土瓦葺更」落

身延山諸堂記外(北沢)

(138ウ)

成之功祈喜捨面々二世安樂 明治十二年十月十三日

裏書云 三光堂別当大光坊庫裏土瓦葺更」去文久三年

癸亥十一月第十九世志誠院日照」代再建立 今般

明治十二年己卯十月土瓦」葺更成就砌納之安泰守

護之本尊也」有志喜捨面々現当二世祈者也」

普請幹事下総飯高村飯高寺住職權少」講義里見日

珠聖人 寛永三十四世之住職 權少講義鈴木日寿代判形

大光坊執事」鈴木日澄 世話人 南巨摩郡 井上五左

衛門村」井上宗四郎 当町池上与兵衛 瓦師 伊沼村望

月」作兵衛同葺師 東京 小川常吉 世話人 青柳米長利

兵衛」同井上藤吉 同内田九十郎 同内田藤右衛門 葺米

土屋七郎右衛門 本郷 武田定右衛門」同青木重右衛

門 瀧戸峯兵衛久成組擲中以上

△表門 一尺六尺 井門番所九尺三間腰掛」

文久元年 辛酉十月落成 琢師代

△影向石ノ社 宝曆年間辰師代再建立社經」年」破

壞依之再建企之」

本殿裏行 土瓦屋根」

身延山諸堂記外（北沢）

明治廿年 丁亥 旧四月十日落成吉辰上棟式」七十
五世日修師代 影向坊火守義仁 世話方」西八
代郡宮原村 』

△太平橋市長 』

元治二年乙丑年祥師代假橋破壊ニ付今般」

明治廿年 丁亥 年 七十五世 修師代本橋落成」十二月廿
五日即十一月十一日 吉辰上棟渡初并交際町中」近村丹誠
ス 執事久保田日遙 普請幹事前本坊廿五世」玄雅日
受』

（最末丁オ）

△（一）当山不易千部本願世話人（祖師遠外奥）

銀沢宿 海野伝之丞 荆沢村市川太右衛門」
同 海野忠左衛門 落合村新津唯右衛門」
同 中込清左衛門 同西ノ窪新津又兵衛」
同 青御村井上太郎八 和泉村大木新太郎」
同 磯野新太郎 同 大木四郎兵衛」
長沢村齊藤栄次郎 西南胡村安藤三五右衛門」
同新町齊藤半左衛門 甲府町石原幸十郎」
春米村小林五郎作 浅利村（朱子）休」小沢利兵衛」
同 小林八右衛門 木原村（朱子）休」萩原清左衛門」

（最末丁ウ）

当所中町（朱子）休」米山民右衛門 同中町松尾弥市右衛門」
同 池上与兵衛 同下町（朱子）休」日吉平右衛門」
同（朱子）休」橋爪市左衛門 同 佐野金左衛門」
同 望月藤右衛門 狐 町秋山半之丞」
同（朱子）休」遠藤三郎右衛門 計二十七名」

△当山永代毎年正月御年頭辨本願世話人」

長沢村大森権之助 当上町池上重兵衛」
同 所齊藤伊右衛門 同狐町葉山十之丈」
大久保村杉田小右衛門 同 所阪上万七」
長沢村佐久間与市左衛門 同 所望月佐兵衛」
計八名」

ON THE VOWS AND SPIRITUAL (Machida)

日…神力品「如日月光明・能除諸幽冥・斯人行世間・能滅衆生闇」
Nichi Nichi

蓮…涌出品「善学菩薩道・不染世間法・如蓮華在水」
Ren Ren

(2) Kaimoku-sho, one of Nichiren's theses.

(3) Ibid.

ON THE VOWS AND SPIRITUAL (Machida)

a martyr for the teaching of Buddha, when he actually left his parents, left his home, Nichiren was distressed by anxiety about welfare of his parents in home, and sorrow of leaving. Nichiren wrote about his anxious feelings in his two significant books, Kaimoku-sho, and Hoon-sho, whether to go ahead or back, whether to say or not to say. He confessed spiritual complication at the point of alternative selection.

Nichiren, however, made a vow decisively. He vowed that "he must expand the Truth (Dharma) for he bore obligation of people, native land, parents and Buddha"⁽²⁾, and that "he would sacrifice himself for the Truth (Dharma) and save all the people at the sacrifice of his own life"⁽³⁾.

Now, we can find, so to speak, self-consciousness of the successor of the Truth (Dharma) who directly succeed the teaching of Buddha, no concern with time, in the consciousness of the convert to devote himself to the Lotus of the Truth.

As mentioned above, we can see that Nichiren's vow was the declaration to read the spirit of the Lotus of the Truth and the teaching of Buddha, by his body. To read the teaching of Buddha by one's body means to practice it and the Buddha's spirit of mercy at the risk of one's life. We must understand the question between Nichiren's vow and spiritual in concerning with his life to secure people by practicing the spirit of the Scripture mercy.

[註]

- (1) The source of the name 'Nichiren' is the following sentences in the Lotus of the Truth.

ON THE VOWS AND SPIRITUAL (Machida)

When sixteen, he converted, named himself Rencho, and made a vow to become a true Buddhist, the best Buddhist in Japan, to Kokuzo Bodhisattva, the principal idol of worship of the temple.

To perform his vow, he had been studying at many temples, of Kamakura, Kyoto, Koya, and Hiei for 16 years, from his 16 to 32 years old. In spring, when he was 32, he arrived at religious conversion.

He made a vow to become a believer in The Lotus of the Truth, Saddharmapundarika-sutra, the highest dharma in the teaching of Buddha. As a proof of it, he changed his name to Nichiren from Rencho. In his name Nichiren, his life and religious idea was included. So, 'Nichi' of Nichiren means the sun shining brightly in the sky. As the sun gives blessing and warm light to all the people, he himself hoped to shine and to live a life of the Lotus of the Truth in the latter days of the Buddhism. 'Ren' of Nichiren means a lotus flower coming purely from a bog. It means his hope to be a pure religionist, not to be polluted by dirt of the final darkness. He made a vow to live a religious life symbolized by the sun and a lotus flower.⁽¹⁾ In fact, that his life was suitable for them is proved by his religious activity expanding the Lotus of the Truth (the highest dharma), getting over frequent persecution and crises.

Nichiren made a religious proclamation when he was 32 years old. He took a vow to become a believer in the Lotus of the Truth, Saddharma-pundarika-sutra, the highest dharma of the teaching of Buddha.

But even Nichiren was a man. Although he was prepared for dying

ON THE VOWS AND SPIRITUAL (Machida)

They sacrifice themselves for Jesus, throwing off their all worldly connections, such as honor, social status, and pleasure. They learn and deepen their faith. They sometimes go on the remote region with the Cross on their back, and they are always ready to die a martyr. They swear honest poverty, modesty, and submission to God, and vow to be servants of God.

But, the very day of the ceremony is just the day of their eternal leaving from their parents, brothers, and sisters. It is symbolized by the words of a ten-year-old boy, a younger brother of the monk. He said, "He was summoned by God and will not come back to us." Monks to vow are absorbed in Christian world and veiled in religious exultation to live in faith. But, for the left families, it meant to lose their sons. They have religious exultation to sacrifice their son to Jesus on one hand, but on the other hand, they are in great sorrow for losing their sons. It teaches us that feeling sorrow for leaving is in the different level from their faith. On the day of the ceremony, a silence of the cathedral of Saint Ottilien was broken by their moaning and full of sorrowful tears. At this scene, I found the question of vows must be referred to concerning in a human nature, such as sorrow of farewell or pains of separation. And it must be thought not only logically but also in relation to spiritual backed by a firm faith.

While I was staring two young monks full of joy and their families on the contrary with sorrow, I myself could not keep back my tears for a great impression. It made me consider Nichiren's vows I believe.

When he was twelve years old, Nichiren (1222-1282) became a disciple of a famous temple of Japanese Tendai Sect, Kiyosumi, to learn.

ON THE VOWS AND SPIRITUAL (Machida)

From the view point of the history of Japanese Buddhism thought, 13th century is called "the Age of Religious Reformation" and so called Kamakura New Buddhism was formed by reformist and creative buddhists at this age. Namely, the New Buddhism was developed by St. Honen and St. Eisai and after that St. Shinran and St. Dogen completed the Buddhist doctrine and thought. And at last Nichiren put the New Buddhism spirit —mercy— into practice.

We have some important questions of the vows, for example, about practice activities, personalities, and existence of religionists. In any case, all of them are concerned with how religionists should be.

I'm going to state my opinion based on my experience of "an East-west Exchange on Spiritual Level" in 1979, mainly about Nichiren's vows that I believe.

I was permitted to live together in Monastery, for the first time to a Buddhist of Nichiren Sect, Japanese Buddhism. In autumn of 1979, I luckily had a chance to make sure of a spiritual exchange with more than hundred monks for three months at Saint Ottilien Monastery in West Germany. Monks there devote themselves to strict religious life and make it a rule to pray, work, and learn, read, as their creeds. They confirm themselves in love devoted to others and faith by living in honest poverty, obedience and chastity of three great vows, to accomplish their religious life. To vow also means to pray firmly to practice affection and to have mercy on others supported by firm faith.

On Sunday, September 23, 1979, I was given a chance to take part in the ceremony of vows of religion of two monks at Saint Ottilien.

ON THE VOWS AND SPIRITUAL

Zesho Machida

The word, the Spiritual is not used so often, in our Nichiren Sect. It is originally the Christian language. In Japan, The first man who studied the question of the Spiritual is Professor Daisetsu Suzuki (1870—1966).

First, I'm going to explain the outline of the word. In Germany, for example, the word 'der Geist' is usually used for both meanings, spirit and the Spiritual. But if it is demanded the special meaning as a technical term, 'die Göttelichkeit' is used to emphasize the religious element. It is understood from the example of the Germany that the Spiritual, die Göttelichkeit, doesn't mean moral patterns but the source of human livings or a principle to run intelligence, emotion, and intention in the deep mind. It means a sublime religious consciousness.

Second, the word, the vow, is included the intention such as a prayer or a wish. In fact, the will to perform by all means operates powerfully upon the vow. To perform great things, one sometimes feels mental pain or undergoes it physically. To surmount them, however, is really what the vow should essentially be. To do so makes him feel religious exultation as a Buddhist.

In this meaning, the vow must be a significant opportunity to deepen the Spiritual of a Buddhist, which may drive his anxiety away and make him advance to a gateway to a firm vower.

On Saint Nichiren at Minobusan (Ueda)

Nichiren was suitable for a leader to realize the common ideal of mankind.

On Saint Nichiren at Minobusan (Ueda)

great favor. Nichiren always longed for his parents and master, and he prayed their blessing for nine years at Minobusan.

He climbed up on the top of Minobusan and bowed toward his native place devoting a deep prayer. Now the top of Minobusan has been said to be "The peak longing for the parents."

Though Nichiren was in Minobusan, his mind was on his disciples acting the movement for saving people and he gave them the suitable instructions and advices. So he devoted himself to save even one more people. Nichiren always devoted himself to save people as Buddha did. Nichiren didn't desire only his happiness throughout his life, and he continued to fight against the wickedness devoting himself for others. Therefore, he suffered from persecution many times and his life was often in danger. Nichiren said, "Saving people in this world full of troubles with spreading Hokekyo even a day is much better than practicing asceticism in a paradise of Gokuraku for hundred years. As he said so, he devoted himself to save people with lots of troubles and to make the disordered country comfortable to live in. Nichiren never propagated the faith merely to pursue Heaven or future ages. His faith was to make the life meaningful and useful. We hoped to be Buddha working in this present world with chanting a sutra of Hokekyo.

Our aim was to be Buddha living in this world and helping, encouraging each other. If Buddhas face each other in this world, the world can be said "Buddha's country" as it is. The thought throughout Nichiren's life was to make the peaceful country of Buddha without war. He desired everybody to become Buddha. It can be said that

dhism.

For example, a favor in the general world has been said to follow the orders of parents and master, but Buddhism shows that Buddhist favor stands on the higher point of view giving up the worldly favor. That is to say, it is said that living in a greater favor is to give up the worldly favor. For example, I want to explain Shakyamuni, a founder of Buddhism. Shakyamuni was born as a prince of Jobonno, but he became Buddha getting the enlightenment as a result of ascetic practices, revolting against his king's order and giving up the following throne. But, as he became Buddhist priest revolting the order of a king, his father, his act is said to be unhappy, thinking from the general worldly ethics and morals. But, as he could save his father of the king and many other people getting the enlightenment by becoming a Buddhist priest, this is the greater absolute ethics being over the general morals, merely being not personal morals.

The Buddhist favor stands on such higher point of view, Nichiren stood on such point of view, too.

The most important favor among lots of favors is to return the favor for Buddha, doctrine, and Buddhist priest. Above all, a Buddha's favor is said to be especially a great, deep and supreme one. Kuon-honbutu, that is eternal Buddha, written in Juryo-bon of the sixteen chapter in Hokekyo has constantly continued to save and enlighten lots of people since by far the old days. Changing a form and a pose differently, Honbutu has saved by far many people with the various methods and a great benevolent mind.

It is said to be important that people should return for Honbutu's

be worse. Therefore, Buddha preached Hokekyo for people living after 2000 years and he said only this teachings could save people.

The aim of Hokekyo was to save people living in Buddha's days, and its aim was said to be a greater aim in saving people at later days. Nichiren felt the great meanings in his birth at the days of 2000 years after Buddha died and he believed Hokekyo like Buddha's teachings. Moreover he had consciousness as a Buddha's messenger and propagated Hokekyo in place of Buddha.

Nichiren's opinion of the ages took Buddha's opinion itself and he recognized the great meanings at saving many people of later days, and had consciousness as a man of practice of Hokekyo among the life of Buddha's messenger. Besides, he wanted to get a direct connection with Buddha through the Buddhist Books.

"Hoonsho" was written in July after "Senjisho" was written.

It was written by Nichiren at the age of 55, and its original books have been kept at Honmonji-temple, Ikegami, Tokyo, and at other places. Minobusan had it once.

He wrote this book in returning for his master's kindness in March, 1276, when he got a report of the death of Dozenbo at Seichozan.

Dozenbo was his master of his childhood. This book is especially famous for all Nichiren's thought of his kindness for his master.

He discussed that a fundamental morals as a man was in returning for other man's kindness, and he preached the importance in returning for a kindness of the parents, the master and the lord. Next, he showed clearly how the true returning for other kindness should be, compared with a favor in the general world and a favor in Bud-

On Saint Nichiren at Minobusan (Ueda)

he died calmly at the age of 61 on 13th in Oct. He lived throughout his life as a man of practice of Hokekyo, and lived a model life for people.

At last he sent Rokuro Sanenaga Nanbu his note left behind, saying, "Thank you for your kindness for nine years, even if I would die anywhere, please erect my tomb at Minobusan."

We can understand how Nichiren loved Minobusan. Now, Minobusan, with his last words, enshrined his relics and became a supreme base of Hoke Buddhism in Japan. And now, Minobusan keeps the tradition of 710 years and has been lighting up the glory of Hoke Buddhism. The superscription of Hokekyo, "Namumyohorengekyo" saves many people, and gives them a living force. So, it becomes the mighty resources to give a peace for the country and people. The representative books that Nichiren wrote among a lot of his books are "Senjisho" and "Hoonsho". The books are the important ones among the best 5, and show clearly Nichiren's doctrine and thought.

First, Senjisho was written in June, 1275 and its original book has been kept at Myohokeji temple, Tamazawa district.

As it says first, "The man who wants to study Buddhism must understand the time well," it shows that people should know the time and the days to spread Buddhism. That is to say, the men who want to spread Buddhism have to recognize the days well and save people with the teachings suitable for the days. It is said that the first terms to spread the right Buddhism are to know the days. According to tradition, after Buddha's death, the world will get confused and after two thousand years, it will get lots of troubles, so the world will

night.

Some theories have been said on Nichiren's entering to Minobusan. I think Nichiren had some complex reasons of his entering to Minobusan. His first reason of entering Minobusan was due to the next sayings: "When one advises the country and is refused by her, one enters into the forest." Therefore, after he advised the government three times, he left Kamakura resolutely. But this reason was external, and the internal reason had some complexity and thickness.

The second reason was making the foundation of the teachings of Hokekyo to convey them suitably. For the purpose it was important to educate his successors, and moreover, to decide the base of Hokekyo.

Minobusan is the basic training place of Hokekyo and is called "Ryozenjodo," that is, the Paradise where Buddha lives.

As Nichiren said, "My soul will be at Minobusan forever," Minobusan has very intimate relations with Nichiren.

In Sept, 1282, Nichiren's illness became worse, so on the recommendation of his disciples and followers, he went down Minobusan where is inconvenient geographically and started for Ikegami, Tokyo where Munenaka Ikegami and Munenaga Ikegami of his followers lived. On the contrary for a direction entering to Minobusan, he took a course going up River Fuji and arrived at Ikegami taking the twelve days. It was not the easy trip for the weak body. he took a rest to recover his health, but he couldn't play an active part in speaking his teachings and making people's life happy. Realizing that his death would be near, Nichiren left his future things to his main six disciples, and

On Saint Nichiren at Minobusan (Ueda)

splendid as Ryojusan in India and Tendaisan in China. So, he thought Minobusan was supreme.

On Sept. 1279, Nichiren's followers at Atuhara were persecuted, so that three men were killed and seventeen men were imprisoned.

Nichiren sent his disciple to settle the event, Nichiren advised a feudal lord to correct his faith for the right faith three times, but the rulers blamed the advice and often persecuted Nichiren and his sect.

For the last three years, he rebuilt his hermitage and wrote 76 books, but he became sick. Though he once recovered his health later, his illness became chronic. So, Sept. 1282, he got down Mt. Minobu and went to Ikegami in Tokyo by his followers' recommendation. The books he wrote at Minobusan for nine years were over a half in number among the books he wrote throughout all his life. And those books have been conveyed as the valuable books since then. As much as his health could permit, Nichiren devoted himself to write the books and to educate his followers and his disciples. He lectured Hokekyo many times and often explained the meanings of Hokekyo.

Many followers and disciples, about from 50 to 100 in number, gathered there to listen to his lectures for some days. And he personally gave his instructions and advices to his followers' troubles and disciples. And he approached them with the feeling of unity. Therefore, Nichiren's entering to Minobusan was, as it was said, not merely retirement from the active life, but it seemed to be the hard and busy days. And it was not the free and calm life, but it was the life of writing the books and reading the sutras throughout the day and

On Saint Nichiren at Minobusan (Ueda)

teaching as a messenger of Buddha at the days of 2200 after Buddha's death.

Hokekyo has many fine teachings, and Hokekyo's main subjects are that Buddha's life is eternal and that our life is eternal, too.

Nichiren accepted the Buddha's vows as the truth and tried to realize it. The vows mean what the 16th chapter of Hokekyo says, "Let everyone become Buddha." Nichiren aimed that people would become Buddha in this world before they would become Buddha in the dead world. So he tried this world to be Utopia. It was his aim that the country would be peaceful and that people would be restful. He thought his aim was very near Buddha's ideal. What Hokekyo means was that people would be Buddha in this world working livelily and helping each other and that this world would be Buddha's country as it was.

Nichiren devoted his life to realize the ideal country. Therefore, Nichiren's life was a practice of Hokekyo and its personal experience.

Nine years on Nichiren at Minobusan are largely divided into next three terms.

The first term is from 1274 to 1277.

The second term is from 1277 to 1280.

The last term is from 1280 to 1282. (the year of his death)

For the first three years, he wrote his representative books that was named "Senjisho, Hoonsho," and 93 books. Senjisho was written on a time and Hoonsho was written on a faver. The term entered to a completed period of thought and faith. For the middle three years, he wrote 122 books, and he began to think that Minobusan was as

On Saint Nichiren at Minobusan (Ueda)

settle down there, because Minobusan had a splendid natural beauty and was suitable for his liking.

The geography of Minobusan is surrounded with the four rivers—River Fuji, River Haya, River Ōjiro and River Minobu. And its scenery was very beautiful, but the climate was very severe with the grasses growing thick in summer and with much snow in winter. So the life was very hard.

The life in the mountain that was far away from the village lacked the traffic facilities clothes and food. So, he passed the hard lives materially. Especially, it having heavy snow in winter, few people visited there.

Therefore, the isolated days continued. But Nichiren had mentally the very blessed rich days. It was a supreme state as a religionist.

Because he attained to the supreme position that was far away from worldly sphere. Even though people were rich materially, they wouldn't be happy only with it.

Nichiren proved that people being materially poor but mentally rich could get the true happiness.

Nichiren's religious standpoint depends upon Hokekyo, Lotus Sutra. It is the teachings of Buddha that preached the truth.

Hokekyo is the most important, supreme sutra among lots of Buddhist sutras.

Buddha preached the most supreme Hokekyo at Ryojusen in India for last eight years controlling his teachings preached through life. And then he showed everyone the teachings to be Buddhahood.

Nichiren inherited the teachings of Hokekyo and propagated the

On Saint Nichiren at Minobusan

Honsho Ueda

St. Nichiren (1222—1282), who is ranked as one of members of representatives of Buddhism at middle ages in Japan, settled his closing years with nine years at Minobusan, Yamanashi Prefecture.

His life at Minobusan is the most significant period for Nichiren's life. Finishing his thought, faith and teachings, he made up the foundation there to convey them for future generations. Therefore, it is important to study his life of nine years at Minobusan to understand his doctrines throughout his life.

St. Nichiren left Kamakura, Kanagawa Prefecture for Minobusan on the twelfth of May, 1274, at the age of 53. Then he arrived at Minobusan on the seventh of May and entered to the residence of Lord Rokuro Sanenaga Nanbu with his several disciples. Lord Sanenaga contributed Minobusan to Nichiren and still built a hermitage on the seventh of June.

Since then, he had lived there just before his death at the age of 61. Minobusan has commemorated that day as the age of its commencement.

When Nichiren went into Minobusan at first, he didn't intend to live for a long time, but he gradually began to love the place and think as a splendid, sacred one.

He wanted to walk around the country at first, but he decided to

言語小論⑦（大森）

notes:

- (1) Bergen Evans — ノースウエスタン大学の英語学教授，巾広い執筆活動が続ける。‘ことば’についての研究者
- (2) 山本五十六—第2次世界大戦中，日本海軍の総指揮官であり，人格高潔，非常に人望があった。第二次大戦には批判的であったと云われる。戦場視察の為飛行機で現地に行く途中，日本の暗号電報をアメリカ側が正確に解読していた為に，アメリカ戦闘機に迎撃され長官の乗った飛行機は南太平洋方面で撃墜され，戦死した。
- (3) 相互整理—1つの語から次々に同意語を思い出す事。
- (4) S. I. Hayakawa—日系アメリカ人であり，言語学者，元ハワイ大学々長

bibliography :

- Bergen Evans : The word-a day vocabulary builder, 1963 Random House New York America
words : our most important tools 1979 Asahi Press, Tokyo
S. I. Hayakawa : Through the communication barrier, 1979 America

以上の様に述べているが、然し我々の願いが、どうしても通じない場合は、言葉の力に代って、物理的力が置き代えられる可能性が強いと云う事である。しかし、この物理的力は論理的に矛盾をもたらす可能性がある。この事について、彼は具体例を示しながら次の様に述べている。

Force, in other words, is regarded by most people as a technique of communication, a method of education. As the stern parent says, sparing neither rod nor child, "That will teach you a lesson."

But when the purpose of communication is to bring about peace, a certain logical contradiction enters into such forceful methods of communication, persuasion-or education. It is the kind of contradiction the detached observer might point out on seeing a father spanking his son while saying to him, "This will teach you not to hit your little sister!"

即ち、「力は云いかえれば、大部分の人々によって、コミュニケーションのテクニックや教育の手段として考えられている。むちを惜しむ事も、子供を容赦することもしない厳格な父が、それで思い知るだろうと云うが如くである。しかしコミュニケーションの目的は平和をもたらす事である。ある論理的矛盾が、この様なコミュニケーションや、説得や、教育の力の手段の中に入って来る。それは第三者的立場の人が、父が彼の息子に、"お前が妹を打たないように、こうして教えるのだ"と云いながら彼の息子を打っているのを見て、指摘する1種の矛盾である。」

以上の様に彼は述べているが、結局、我々が不合意を示す時の行動型は、初めは静かな言葉、次により強い言葉、最後に物理的力となるようである。然し、物理的力は出来るだけ避ける様にしなければならない。この為にも、言葉のツールとしての重要性が存在すると云えよう。

次に語のツール性の強い表われであるコミュニケーションを考えた場合、その主なる作用をするのは、他動詞と云える。この事に関し、言語学者 S. I. Hayakawa は次の様に述べている。
(4)

The words we use to describe a successful act of communication are transitive verbs which are verbs with direct objects, as in the boy hit the ball. The shoemaker mended the shoe.

The missionary converted the heathen.

In each of these statements the subject of the sentence remains unchanged. But great change are produced in the object; The ball has traveled, the shoe has been modified and improved, the heathen are no longer heathen.

即ち、「我々がコミュニケーションのすばらしい行為を述べるのに用いる語は、直接目的語をともなう他動詞である。例えば、少年はボールを打った。くつ屋はくつを修理した。宣教師は異教徒を改宗させた。此等のそれぞれの文で、文の主語は変わらずに残る。しかし大きい変化が目的語に生じる。即ち、ボールは飛ぶ。くつは立派になおされる。異教徒はもはや異教徒ではない。」

以上の様に述べているが、では他動詞が働く文に於てコミュニケーションとして作用する場合、他動詞はどんなに変わって行くのであろうか。この事について考えてみる時、彼は次の様に述べている。

The commonest example of the transitive verb assumption in communication is that everyday occurrence of speech in which, having failed to communicate our wishes the first time, we raise our voice with each succeeding repetition.

即ち、「コミュニケーションに於ける他動詞的仮説の最も普通の例は、毎日の話の中で、最初に我々の希望を伝える事が出来ないと、それぞれの言葉を次々に繰り返して、我々の声の調子を上げるようになると云う事である。」

ない。」

更に続けて次の様に述べている。

Speech is the means of relating our separate experiences and emotions, of combining them, relating them and, as far as we can, understanding them.

即ち、「スピーチは我々の別々の経験や感情を関係づけたり、結びつけたり、鮮明にさせたり、出来る限り理解させたりする手段である。」

尚、ヴォキャブラリーと知性との関係について、彼は次の様に述べている。

Many studies have established the fact that there is a high correlation between vocabulary and intelligence and that the ability to increase one's vocabulary throughout life is a sure reflection of intellectual progress.

即ち、「多くの研究は用語範囲と知性との間には高い相関々係があると云う事実を、そして、人の生活を通じてヴォキャブラリーを増す能力は、知的進歩の確かな反映であると云う事実を作り上げた。」

彼は以上の様に述べて居り、更にワードについては、次の様に述べている。

Words are one of our chief means of adjusting to all the situations of life. The better control we have over words, the more successful our adjustment is likely to be.

即ち、「語は我々の凡ての生活状況に対する調整の主な手段の1つである。我々が語をより上手にコントロールすればする程、我々の調整はうまく出来るようである。」

以上の様に述べているが、結局、語は、我々の生活をより良く維持して行く為には、欠く事の出来ない手段の1つであると云える。それは、個人の間は勿論、国と国との間に於てもそうである。ここに、語の重大なツール性が存在すると云えよう。

sions we make.

即ち、「単語と云うものは、人が人生の重要な問題を成文化する時に用いる1つのツールである。広い意味では、単語は我々がつくる凡ての決定を形成する。」では決定については、彼は次の様に述べている。

Most decisions, of course, are shaped by our emotions, by circumstances, and by the forces which may hold us back or urge us on.

即ち、「勿論大部分の決定（解釈）は、我々の感情や、境遇や、我々を前進させたり、後退させたりする力によって形成される。」

彼は以上の様に述べているが、この力を彼は韻と云うものに結びつけて居り、次の様に述べている。

It's the witchery of rhythm, one of the most subtle and dangerous of unseen forces that move and muddle our minds.

即ち、「我々の心を動かしたり、まごつかさせたりするのは、目に見えない力の最も微妙な危険なものの1つである韻の魔法である。」

この韻を含んだ力は、種々のスローガンやコマーシャルにも、我々は日常見たり感じたりするところであり、彼の言葉の妥当性を強く認める次第です。次に語の集まりと云えるスピーチについて、彼は次の様に述べている。

Our speech is a sort of searchlight that helps us to see these things more clearly and to see ourselves in relation to them. At least it helps us call things by their right names. To a great extent our speech affects our judgments. We don't always distinguish between words and things.

即ち、「我々の言葉は、我々が境遇等をはっきりと見たり、それ等に関係している我々自身を見るのを助けるサーチライトの1種である。少なくとも其れは、我々が物事を正しい名前で呼ぶのを助ける。広い範囲で我々の言葉は、我々の判断に影響する。我々はいつも語と物事との間を区別しているわけでは

出来ない語と、同じ音を持って居り、又は同じ文字で始めると云う事を知る。そして我々が、終に我々の求めている語を思い出す時、我々は此の語がその通りである事を知る。其れは丁度、我々の精神的整理の仕方が、アルファベット順に準備されて居り、そして類音によって、別の言葉が見つけ出される様になっているかの様に思われる。もし我々が精通しているならば多くの言葉に対して、多数の同意語を思い出す事が出来る。そしてそうした事は、より多くの相互整理を示すのである。」

(3)
又、事故や病氣等で頭に損傷のある人は、言葉を思い出す場合、或る者は凡ての固有名詞を、或る者は凡ての形容詞を忘れてしまうと云われている。この事は我々の心の中で語の組み合わせが、如何に複雑に出来ているかを示すと云えよう。そして我々が、新しい1つの語を知ると、その1つの語は、次から次へ、他の語との関連に及ぶのである。この事に関し、彼は次の様に述べている。

Once we master a word, it is connected in our mind with scores of other words in what appears to be an infinite number of relationships and shade of meaning. A new word does not drop as a single addition into our word stock. Each new word learned enlarges a whole complex of thinking and is itself enlarged in meaning and significance.

即ち、「我々が1度1つの語をマスターすると、それは我々の心の中に、殆んど無限と思える程数多くの意味の類似や、微妙な相違を示しながら、多くの他の語と関連して来る。1つの新しい語は、我々の語のストックの中に、ただ1つの増加として終りはしない。覚えたそれぞれの新しい語は、複雑な全思考体系を拡め、そして語自身が意味や意義を拡められるのである。」

以上の様に述べているが、尚、ヴォキャブラリーについては、彼は次の様に述べている。

A vocabulary is a tool which one uses in formulating the important questions of life. To a large extent, vocabulary shapes all the deci

に対する知識が増す程、又我々の新しい世界が拡がるのを知り、そこに新しい喜びも見出す事が出来ると思われる。

この様にして、語のツール性は益々増大して行くものと思われる。

次に語とアイデアとの関係を考えてみると、彼は次の様に述べている。

Words cannot be separated from ideas. They interact. The words we use are so associated with our experiences and what the experiences mean to us that they cannot be separated.

The idea comes up from our subconscious clothed in words. It can't come any other way.

即ち、「語はアイデア（概念）と分離する事は出来ない。其れ等は交互に作用している。我々の用いる語は、我々の経験や、又其の経験が我々に意味する事に非常に関係しているので、其れ等は分離出来ない。その概念は言葉によって表面に表われた潜在意識から出て来る。其れはどんな他の方法でも出て来ない。」

次に我々は、1つの語を思い出そうとする時、中々思い出せない場合がある、しかし、たまたま思い出そうとする語に、非常に似ている語を思い出す事がある。こうした事は如何にして起るのであろうか。この事について、彼は次の様に述べている。

Often we know that the unacceptable word has the same sound or begins with the same letters as the word we can't remember.

And when we finally recall the word we wanted, we find this is so. It seems as though our mental filing systems were arranged alphabetically and cross-indexed for similarity of internal sound.

If we are well read, we can call up a host of synonyms for many word, which suggests more crossfiling.

即ち、「しばしば我々は、求めているのとは別の語が、我々が思い出す事の

が、キューバから取り除かれる事を望んだ。そして其れ等を取り除く為には、核戦争も避けない覚悟をした。しかし我々は確かに其れ等を平和の中に取り除かせる事を望んだ。我々は暴力による外は避けられない窮地に、ソ連を追い込む事を望まなかった。」

以上の様に述べているが、では微妙な意味をもつクワランチンとブロックードについて、更に詳しく彼は次の様に述べている。

It is commonly associated with a restriction imposed by all civilized nations on people with certain communicable diseases to prevent them from spreading their disease through-out the community. It is a public health measure which, for all the inconvenience that it may impose on the afflicted individual, serves the public welfare. Thus, whereas a blockade would have been an announcement that we were proceeding aggressively to further our own interests, regardless of the rights of others, quarantine suggested a concern for the general welfare.

In addition, it suggested that what was going on in Cuba was a dangerous disease which might spread.

即ち、「其の語（クワランチン）は、あらゆる文明国家が、特定の伝染病にかかっている人々に負わせる制約に関連している。其れは苦しんでいる個人に課する不便にもかかわらず、大衆の幸福に役立つ公けの保健措置である。これに反してブロックードは、他人の権利等には無関心に、我々自身の利益を増す為に積極的に進めている告知であったであろう。クワランチンは一般の幸福に関する関心を示した。其の上に其の語は、キューバに起りつつあるものは、拡がるかも知れない危険な病気である事を示した。」

以上の事より、我々是如何に1つの語について広い知識を有する事が、現在起りつつある事柄に対応するのに役立つ事を知るのである。そして、我々の語

自分自身の知識が増したよろこびである。人は技術として表現する事を鑑賞しはじめ、又言葉の上手な使い方から生じる利点のみならず、その満足感を感じ始めるであろう。」

以上の様に述べているが、尚彼は良く選ばれた言葉の正しい使用は、喜びの源であるばかりでなく、非常に重大な結果をもたらし、又は大きい危険を避ける事が出来る、と述べて居り、その具体的例として、1962年のキューバ危機について次の様に述べている。

When America and Russia confronted each other during the Cuban Crisis in 1962, and the world hovered for a few days on the brink of disaster, the use of the word quarantine instead of blockade was extremely important. A blockade is an act of war. No one knew quite what a quarantine meant, under the circumstances. But the very use of the word indicated that, while we were determined to protect ourselves, we wanted to avoid war. It was all a part of giving Russia some possibility of saving face. We wanted her missiles and planes out of Cuba and were prepared to fight even a nuclear war to get them out. But we certainly preferred to have them removed peacefully. We did not want to back Russia into a corner from which there could have been no escape except by violence.

即ち、「アメリカとロシアが1962年キューバ危機の間、面と向い合い、世界が数日間惨事の縁をさまよった時、ブロックード（封鎖）の代りにクワランテン（隔離）と云う語の使用が、極めて重要であった。ブロックードと云う語は戦争の行為である。あの状況下でクワランテンと云う語が、何を意味するか誰も知らなかった。しかしその語の使用は、我々が我々自身を守る事を決心した反面、戦争を避けたいと思う事を示した。其の語はソビエットに面子を保てる可能性を与えようとする戦略の1部であった。我々はソ連のミサイルや航空機

言語小論⑦（大森）

礎となる。その上に広範囲の意味を持つ多様性のある単語は、話す者や書く者に、一層の興味を起させる。其れは、人に繰り返しのつまらなさを避けるようにさせたり、注意を起させたりする。」

以上の様に彼は述べているが、更に単語の上手な使用者と、下手な使用者を比較して、次の様に述べている。

The interesting man is much more likely to be persuasive than the dull one. Dull people bore us. We don't listen to them. We hear them, but with a secret distaste. Instead of listening to them, we think only about getting away from them. Therefore a varied vocabulary is very useful for winning others to our point of view.

即ち、「興味ある人は、退屈させる人より説得力が、はるかにある様である。退屈させる人は我々をあきさせる。我々は彼の言う事を聞こうとしない。我々は彼の言葉を聞いても、内心嫌悪を感じる。それ等の言葉を聞く代りに、我々は彼等から遠ざかる事だけを考える。それ故多様の意味をもつ単語は、他人を、自分の考え方へと引きつけるのに非常に役に立つのである。」

以上の様に彼は述べているが、こうした事柄は、我々が日常新聞を読んだり、テレビを見たりする時に感じる事柄である。更に単語の量が増す事は精神的にも訴える所が非常に大きいものと思われるが、この事について彼は更に次の様に述べている。

The pleasure you will feel as you develop your vocabulary is not solely the pleasure that comes with increased power ; it is also the greater pleasure that comes with increased knowledge, especially of yourself. You will begin to appreciate expression as an art and to feel not only the advantage of commanding words but the satisfaction.

即ち、「人が自分の単語を拓げる時感じるよろこびは、単に語の力が増したと云う喜び丈でわなく、知識が増したと云うより大きいよろこびである。殊に

わずかに盛土があった為に、谷の中に居る兵士達には見えなかった。兵士達が見る事の出来た唯一の砲座は、谷のはるか端にある一番大きいロシアの砲座であった。それ故に兵士達は、砲座は、彼等が見た砲列に関係していると想定した。命令は狂気のように思われた。しかし、命令は命令であった。その軽騎兵旅団の指揮官は、抗議を提出した後、其れを実行した。」

以上の結果は、大失敗となるのであるが、伝達される言語の理解との誤りが、非常に悪い結果をもたらした例と云える。

戦争の場合、1つの言語の意味の誤りが、大変な結果をもたらす事は、暗号電報の解説等の場合に、特に見られる。筆者も第二次世界大戦中、暗号電報の解説に従事した経験⁽²⁾を有しているが、非常な神経を使ったものである。実例として、山本連合艦隊司令長官の戦死がある。この場合、もし日本の暗号電報が、誤ってアメリカ側に解説されていたならば、長官の戦死も避けられたであろう。もしそうなったならば、其の後の戦局の展開は、随分と変わっていたものと思われる。

戦争は別にしても、言葉の誤解によって、引き起される悲劇は、大へんな数に上ると思われる。しかしながら、1つの単語には、種々の意味が含まれて居り、そのシチュエーションに応じて、其の単語からどんな意味を選ぶかと云う事は、極めて大切になって来る。この事について、彼は次の様に述べている。

A large vocabulary provides variety. And that is useful ; it is the basis for discrimination, since it provides a large number of tools to choose from. Furthermore a large and varied vocabulary makes the speaker or writer more interesting.

It allows him to avoid the dullness of repetition and to provoke attention.

即ち、「広範囲に用いられる単語は、意味も多様性を有して居り、それは有用である。又、選ぶ為の多数のツールを与える為に、其れは区別する場合の基

以上の様に彼は述べて、人間の存在は凡て言語の使用に関係している事を強調している。

この事は万人が認めると思われる。更に、言語が多様性を有する事の重要さについて、彼は次の様に述べている。

The number and variety of the words we know should meet all our needs. Not that any man has ever had a vocabulary exactly fitted to his every need at all times. But we can approach our needs. The more words we know, the closer we can come to expressing precisely what we want to.

即ち、「我々の知っている言語の多様性は、凡ての我々の必要に応じる事になる。どんな人でも凡ての時に、そのあらゆる必要に正確に適合する単語を持っているとは云えない。しかし我々は、我々の必要に接近する事は出来る。我々が言葉を知れば知る程、我々が望む所を正確に表現する事に、一層近づく事が出来る。」以上の様に彼は述べているが、では言語のツールが誤って伝達された時、如何に大きな害を与えるかについて、彼は次の様な具体的例として、クリミヤ戦争の例を上げている。

The brigade was ordered to Charge "the guns". The man who gave the order was on a hilltop and had in mind a small battery which was very plain to him but was concealed from the soldiers in the valley by a slight rise. The only guns they could see were the main Russian batteries at the far end of the valley. Therefore, they assumed that "the guns" referred to the batteries they saw. The Command Seemed utter madness, but it was a command and the leader of the brigade, after filing a protest, carried it out.

即ち、「軽騎兵統兵旅団は砲座を攻撃する様に命ぜられた。命令を与えた人は、岡の上に居た。彼には、はっきりと小さい砲座が見えていた。しかし、

言語小論 ⑦

大 森 孝

About language with a nature of tools

◎言語のツール性について (tool)

人は自分の意見を述べる場合その手段として言語を用いる。所謂、言語は、1つのツール (tool) となるのである。この事につき、外国の文献を参照しながら述べてみたいと思う次第です。

~~~~~  
先ずバーゲン・エバレス (Bergen Evans) ノースウエスタン大学教授の説  
(1)  
について考えてみたい。

彼は言語のツール性について、次の様に述べている。

What you want to say are your thoughts and feelings, your desires and your dislikes, your hopes and your fears, your business and your pleasure-almost everything, indeed, that makes up you. Almost all that we are is related to our use of words. Man has been defined as a tool-using animal, but his most important tool, the one that distinguishes him from all other animals, is his speech.

即ち和訳すると、「あなたが云いたいと思う事は、あなたの思想や、感情、願望、嫌悪や、希望、恐れや、仕事、楽しみや、即ち、殆んど人を作り上げている凡てである。我々の存在の凡ては、殆んど言語の使用に関係している。人はツールを用いる動物として、定められて来ている。しかし、その最も重要なツールは、その言葉であり、これが凡ての他の動物から人を区別しているのである。」



# ◇学 園 彙 報 (昭和五十八年度)

## 学会活動報告

### ○日本印度学仏教学会

第三十四回学術大会は、六月十一日(土)・十二日(日)の両日、高野山大学(和歌山県高野町)において開催され、本学より左の四氏が研究発表された。

|                     |         |
|---------------------|---------|
| 身延山晩年の日蓮聖人          | 上 田 本 昌 |
| 智願と灌頂 — 各別義通をめぐって — | 若 杉 見 龍 |
| 朝師御書見聞の一考察          | 中 條 暁 秀 |
| — 本尊抄私記・見聞について —    |         |
| 破僧伽について             | 望 月 海 英 |

### ○国際東洋会議

第三十一回国際東洋会議は、八月三十一日(水)より九月六日(火)まで東京と京都で開催された。本学から九月四日(日)に町田是正教授が、九月五日(月)に上田本昌教授が、国立京都国際会館において研究発表された。

|                  |         |
|------------------|---------|
| 哲願と靈性 (英文)       | 町 田 是 正 |
| 身延山における日蓮聖人 (英文) | 上 田 本 昌 |

### ○日本仏教学会

昭和五十八年度学術大会は、十月二十二日(土)・二十三日(日)の両日にわたり、「仏教における時機観」を共同研究テーマとして、早稲田大学七号館(東京都新宿区)で開催され、本学の町田是正教授が研究発表された。

日蓮における時機観

町 田 是 正

### ○日蓮宗教学研究発表大会

第三十六回日蓮宗教学研究発表大会は、十月二十八日(金)・二十九日(土)の両日、立正大学において開催された。本学からの研究発表者は左の四氏であった。

|                  |         |
|------------------|---------|
| 天台教学における超越証      | 若 杉 見 龍 |
| 鬼子母神の背景          | 高 橋 堯 昭 |
| 朝師御書見聞考          | 中 條 暁 秀 |
| — 本尊抄私記・見聞について — |         |
| 身延山西谷堂字考         | 上 田 本 昌 |

### ○山梨県一般教育研究協議会

山梨県一般教育研究協議会が、十二月三日(土)に山梨学院大学で開催され、本学の町田是正教授が研究発表された。

修道哲願と靈性

町 田 是 正

## 図書館だより

同窓会の東京支部を始め、全国各地の支部や、同窓生の各聖より、本年度も又数多くの献本がありました。厚くお礼を申し上げます。大学図書館として、次第に蔵書も増え、充実しつつある状態ですので、今後もしよろしくお願い申し上げます。

前号のこの欄でもご紹介いたしました通り、理事会でも近い将来に新図書館を建設することが議せられ、建設の場所や規模について話し合われています。

また、昨年十一月廿九日に開かれた同窓会本部役員会の席上山梨県支部の岩田日成支部長から、図書館建設資金にと、地元山梨県の支部会員に呼びかけ、寄附金募集を開始した旨の発表がありました。同支部の寄附金目標額は壹千万円とし、五十九年の春までに、この目標を達成したいとのことでありました。出席された松井大周会長を始め、各役員も、この計画に呼応して各支部ごとに図書館建設資金を拠出して下さることになりました。

とりあえず、同窓生の任意の会員によって組織されている「和身会」(小崎龍雄代表)では、百万円の建設資金が寄せられました。現在、同窓生からの建設資金は、学校を通して久遠寺の経理部に届けられ、積立てられています。

立派な図書館が建設され、宗門の子弟が行学二道に精進でき

ますよう、皆様方のご協力を切望いたします。

### 図書寄贈者芳名(年月日現在)

- 1、灘上恵教師「日本名僧論集第4巻源信」等五冊  
神奈川山横浜市 善行寺
- 2、新川日見師「哲学入門」等一七九冊、パンフレット23冊  
東京都墨田区大平
- 3、実相寺佐久間智周師「啓蒙」等二八八冊  
静岡県富士市岩本
- 4、久本信明師「大日本仏教全書」等四六八冊  
東京都葛飾区青戸二一三一 護国立正教会
- 5、大平智恩師「茶の湯全書」等八六冊  
甲府市武田四一―四三 要法寺
- 6、鎌田行学師「仏のあゆみ」等三一冊  
愛知県西尾市今川町馬捨場 妙恩寺
- 7、林 円修師「日本人の意識構造」等9冊  
愛知県海部郡 地福寺
- 8、上岡信子様「法華経講義全八巻」等三三冊  
富士市吉原四一―三二一
- 9、町田紀子様「文学概論」等十一冊 他雑誌「国文学」30冊  
山梨県身延町 延寿坊内
- 10、本納寺「法華写経の研究」一冊  
東京都豊島区 本納寺

11、坂輪宣教師「悠久のいのち（法華経）」一冊

東京都港区白金台3-17-5

12、高橋堯慈師「社会病理学」等二冊

富士市今泉五十七-1 妙延寺

13、谷川寛徳師の紹介により、富山県魚津市の金三津三郎氏より、英米文学に關する洋書「NATHANIEL HAWTHORNE JOURNAL」等七〇〇冊の献本（時価約二〇〇万円相当）がありました。

14、上田本昌師「身延路」（句集）二冊

身延町下山 上沢寺

## 【出版紹介】

### 身延山短期大学学会編

里見泰穂先生著作論文集 A五判・三七〇頁。

身延山短期大学々頭・里見泰穂先生の四十余年に亘る研究業績の集大成とも云える論文集である。先生はカント・ヘーゲル等の研究にも没頭され、その西洋近世哲学思想を研究の基盤に据えて、仏教時間論の研究をライフワークとされ、そこから派生する諸問題に思索の歩をすすめられてきた。此論文集には二十五篇収録され、それを仏教時間論・仏教存在論・法華経の哲学・中観論の論理・原典翻訳の五分類にされている。いずれも日本仏教学会・日本印度学仏教学会・文部省科学助成共同研究

・棲神等々に既発表されたものであるが、学会から高い評価を得ている珠玉の論文集である。

尚此論文の発刊に当っては、本学園の昭和二十四年度卒業生「鶴群会」諸氏の尽力のあったことを特記し、学園当局として深甚の謝意を表します。

申込先：身延山短期大学々会宛

頒布価格：五千元（送共五千五百円）

## ◇同窓会（本部）だより◇

身延山教学の振興の爲にも、法器養成のためにも、学園図書館を新建築すること、図書の充実をはかることは、学園が積年かかえてきた課題であります。同窓諸賢の深いご理解を得て、図書館図書の献本運動が、東京支部の運動が核となって、いやや全国的規模にまで高まりを見せております。一方、図書を格護する図書館の新築についても、身延山御当局から熱意が示され、大堂建築落慶の後には学園の施設整備、教育体制整備に尽力したいとの朗報もあつて図書館建設こそいまや同窓会の課題となつて参りました。こうした大勢のなかで、同窓会本部役員会（五十八年一月・十月）に於ても、建設に向つて運動を展開することが議決され、また山梨支部では十一月一日、目標額一千万を旨し勸募が展開されている。何卒、同窓諸賢には、学園の発展と充実のために、御尽力を賜われますようお願いする次第です。尚、本誌の「図書館だより」併せ御覧ください。

## 本誌56号執筆者紹介(論文掲載順)

|       |       |            |
|-------|-------|------------|
| 上田 本昌 | 本学教授  | 日蓮教学・祖書学   |
| 中條 曉秀 | 本学助教授 | 日蓮教学・祖書学   |
| 町田 是正 | 本学教授  | 中世日本仏教思想史  |
| 望月 海淑 | 本学教授  | 仏教学・梵文学    |
| 望月 海英 | 本学講師  | 仏教学・梵文学    |
| 若杉 見龍 | 本学教授  | 中国仏教史・天台学  |
| 中里 悠光 | 本学講師  | 法学         |
| 高橋 堯昭 | 本学教授  | 哲学・東西比較思想史 |
| 奥野 本洋 | 本学講師  | 天台学        |
| 大森 孝  | 本学教授  | 英語学・英文学    |

## 竹下日康法主猊下御遷化

身延山第八十九世法主・身延山短期大学々長・真乗院竹下日康猊下には、昭和五十九年四月十六日午後四時五十二分御遷化された。法主様は四十余年に亘り、文字通り常在給仕・採薪給水の後法勞でありました。八十三世一乗院日謙上人・八十六世一乗院日静上人・八十七世一妙院日雄上人・八十八世太玄院日滋上人の歴代法主の膝下に在って、久遠寺庶務部長・総務を勤め、併せ身延山学園の理事長学監など、身延山の枢要の場にあつて敏腕をふるい、身延山興隆の原動力となり、堂塔宇の整備

莊嚴輪奐の美を現出されました。昭和五十七年四月三日桜花爛漫のなか、第八十九世の猊座(守塔沙門)に晋童以来、宗祖七百遠忌報恩の大事業として、大本堂の建立に精力を傾けられ、大伽藍の建立を見ましたが、内陣莊嚴の竣工を未だし、その完成をみないで、突然、化を他界に移されたことは、日康猊下の御丹誠を知る者として、痛哭の涙を襟じえません。悲痛の寂さ極みなし、謹んで学園教職員一同、心より増円妙道をお祈り申しあげます。

(町田・文責)

## 岩間日勇猊下・身延山第九十世に晋童

昭和五十九年四月二十日身延山久遠寺祖山会は、万場一致を以って、現久遠寺総務・岩間日勇猊下(山梨県増穂町青柳昌福寺山主)を第九十世守塔沙門に推挙いたしました。岩間猊下には、昭和三十四年一乗院藤井日静猊下以来、布教部長の要職に在り、身延山街頭布教隊を組織し、陣頭に法旗を掲げ、身延山の宣揚に尽粹され、昭和五十七年総務の重責を負うや、竹下日康猊下と両輪となって身延山発展のため、日夜の常在御精進は言外の法功でありました。宗門に新設された財団賞布教部門の第一回受賞者となられた事は、身延山のみならず、宗門興学に寄与された法功の大きさを示しています。

宗祖七百遠忌の記念事業の掉尾を飾る大本堂の完遂こそまたれる所であります。新法主猊下には法体弥々健かに、為宗護山に御尽力あらんことを、併せ身延山教学の発展の為に一臂の御

助力を賜わらんことをお願い申し上げます。

(町田・文責)

## ◇ 編集後記 ◇

◇ 本学の学会活動は年々活性化され、着実に稔り大きい成果をあげてきている。本年度も、日本仏教学会・日本印度学仏教学会・日蓮宗教学研究大会等に研究発表者を送り、更に第卅一回アジア・アフリカ人文科学研究会（国際東洋学術会議）・山梨県大学一般教育研究協議会にも研究発表の機会を得、また高等学校の教諭方も、山梨県私学教育研究修会・中部私学教育研究大会等に参加して、夫々に研鑽精進されている。身延山教学の発展に資する所が大きく、同慶に堪えない所である。

◇ 本号には、日蓮教学・仏教学・中国仏教史・印度仏教史・文明評論等十篇の労作論稿と、特に上田本昌教授と町田是正教授に依頼して、国際東洋学術会議に於ける英文発表論文を転載しました。また、身延山史関係の基本資料として、先に「身延山略譜」の紹介を終り、改めて「身延山諸堂建立記」の紹介を試みるべく、北沢光昭師（札幌市光徳寺）に翻刻原稿化を依頼し、その前篇部を

掲載することにしました。北沢師の労苦に甚深の謝意を表します。（後篇部は次号に収録予定）

◇ 仏教文化研究所の事業の一つである「身延山年表」の作成も、山史関係の原稿が一応まとまり、これからは宗門・仏教界・文化動向との関係事項の原稿作成の段階に入り、何としても昭和六十年五月・身延山大本堂竣工慶讃法要には、本学園の研究活動の一つとして、仏祖三宝の宝前に奉納したく思っている。

◇ 法主親下竹下日康学長・総務親下岩間湛良学監におかれては、殊のほか身延山教学の発展と充実に関して、深い御理解を示され、大学図書館の建設にも綿密なる計画立案をされるよう指示があり、併せ学園の在り方・研究体制の整備に意欲を燃して欲しいと熱望されている。学園教職員は、この御指示を本分として聊か行学二道の祖訓を奉じ、微力を傾けている所である。

◇ 本号を会員諸賢の許にお届けできるよろこびを噛みしめつつ、筆をおきます。

（編集子・町田）

「棲神」五十六号

昭和五十九年三月二十五日 印刷

昭和五十九年三月三十日 発行

編集者 町田 是正

発行者 里見 泰穂

印刷者 宮田 如龍

甲府市中央二丁目十二―三十一

印刷所 大宣堂印刷

山梨県身延山東谷

(☎NO、四〇九―二五)

発行所 身延山短期大学学会

振替(甲府) 一二七五番  
電話身延(五五七) 二一〇一〇七

# THE SEISHIN

The Journal of Nichiren and Buddhist Studies

No. 5 6

## CONTENTS

|                                                                                                                                            |                          |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|
| Saint Nichiren's life of late years at Minobusan.....                                                                                      | Honsho Ueda... 1         |
| An essay of "The study of Nichiren's Books by Nitcho".....                                                                                 | Gyoshu Nakajyo... 19     |
| Saint Nichiren's view in time and human capacity.....                                                                                      | Zesho Machida... 29      |
| An essay of "The making of primary vows".....                                                                                              | Kaishuku Mochizuki... 45 |
| An essay of "The breaking at rule of Shanga (僧伽)".....                                                                                     | Kaiei Mochizuki... 69    |
| The original Picture of Kumarajiva's wooden statue and Annotated Saddharma-pundarika-Sūtra by Nichiren at Sōdōji Temple in Xian China..... | Kenryu Wakasugi... 79    |
| Social background of Hārīti and Pāṇṭika.....                                                                                               | Gyoshu Takahashi... 101  |
| Freedom of the religion.....                                                                                                               | Yūkō Nakazato... 113     |
| On the educational matters in U. S. A.....                                                                                                 | Honyo Okuno... 123       |
| A Built memorandum in Minobusan.....                                                                                                       | Kosho Kitazawa... 131    |
| On language in a nature of tools.....                                                                                                      | Takashi Ōmori... 1       |

---

|                                  |                     |
|----------------------------------|---------------------|
| Saint Nichiren at Minobusan..... | Honsho Ueda... 15   |
| The vows and Spiritual.....      | Zesho Machida... 25 |

---

## Report of campus

---

Edited by  
Minobusan College  
Minobu Yamanashi, Japan.